
幼馴染みと約束を

スラフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染みと約束を

【Nコード】

N4834J

【作者名】

スラフィア

【あらすじ】

僕の幼馴染みは古館美奈。茶髪で見た目は可愛いんだけど、なんてったって無愛想。それに僕ははつきり言っただけ美奈のことが恐くて仕方がない。だって痛いんだもん。

別に嫌いだとか、関わりたくないとか、そういう意味じゃないけどさ……はあ、小学生の頃はこんなんじゃない無かったはずんだけどな……。

プロローグ

「ねえ聞いた？ 美奈^{みな}、捨てられたんだって」

小学4年生の時のことだ。

クラスが、ざわざわとした雰囲気にも包まれる。

「え、嘘お。誰に？」

「誰って、そりゃあ親にじゃないの？」

ざわざわとした空気はクラス中に伝播していく。

「古館^{ふるだて}か。何かあいつの家ってやばそうな感じがしてたんだよな」

「嘘つけ、ロクに話したこともねえくせに」

「いや給食費払わなかったり遠足の集金を渋ったり平気で教科書と

か忘れてたりしたら、さすがに誰でもやばいって感づくだろ」

さっそく、それをネタにした話題があちこちで持ち上がる。

その話題の中心となっている少女は、実は僕の幼馴染み。

「まあ古館^{あじつ}って雰囲気も危ない感じするしな。茶髪だし」

いろいろと言われたい放題だが、僕から見れば美奈は悪い奴じゃない。

危ない感じがするのは……認めるけど。

でも、美奈は茶髪なのだって天然だし、幼馴染みの視点から考えても、美奈はそんなよくある不良キャラ像には当てはまらない。

いけないのは、その親だ。

「でもあんな家で育ったら、仕方ない気もするよね」

幼馴染みだし、何度か僕は美奈の親に会った事がある。だけど、

僕は毎回自分の見たものを疑ったものだ。

平気で美奈の分の食事を忘れて、ほったらかしで、たとえ美奈が熱を出そうが無関心の、そんな人間が美奈の両親なのだ。

美奈が捨てられたというニュース。

現実味はないし、あまり信じたくないけど、あの親からするとありそうな気がした。

「どうするのかな、美奈」

「学校来れるのかなあ」

「まさか孤児院に引越すので退学とか？」

それにみんなもみんなだ、と思う。

人の不幸な噂をネタにしているくせに、口調に現れているのは好奇心だ。

心配する気持ちはないのだろうか。

非情な美奈の両親やクラスメイトに微かに苛立ちを覚えながら、僕は隣の席に目をやる。

そこは空席。

美奈は今日、休みだった。

1 - 1 始業式の朝（前書き）

毎度ながら好き勝手作です。その上、読んでるうちに途中で疲れることになるんじゃないかなと思います。

完成までにもものすごい時間を要すると思いますけど、どうか適当に見守ってやってください。

あと、登場人物のネーミングが気に入ったとかいう些細な感想でも残して頂けると、それだけで1週間の原動力に出来るくらい喜びます。嘘じゃないです。保護掛けたいくらい。

1 - 1 始業式の朝

> i 1 1 4 7 5 | 8 7 3 <

4月1日。

世間一般的には、この日が何の日かと聞かれれば、『エイプリル
フール』が模範回答だろう。

ほら、あの1回だけ嘘ついていいよ的な風習のある日だ。多くの
人は、この日を想像する気がする。

そこに、始業式です！ と答える人は結構珍しいと思う。だって
ちょっと早いよね。

でも。

ある街に住む中学2年生の稲橋悠揮いなはし ゆうきにとっては、この日は、愉快
な学校生活が始まる日に他ならない。

その日の朝は、普通の朝だった。

「……………うるせ」

目覚まし時計が大音量で叫んでる。叫んでるといふよりかは喚いでる。たぶん目覚まし時計は「起きろ！」とか言ってるつもりだろう。だけど何せ3年前から使っている録音タイプの目覚まし時計だから、音質と調子が悪くて、何を言ってるのかさっぱり分からない。普通にジリリリリとか鳴ればいいのに。

手を伸ばしても届かない位置にあるから、僕は少し目を擦りつつ、本棚から適当に雑誌を一つ抜き取る。そしてそれを、目覚まし時計の上部の停止ボタン目がけて投げつける。

騒がしい音がピタリと止み、目覚まし時計は停止した。これは最近になってコツを掴んだ必殺技だ。もつとも、これをやるとだんだん雑誌が傷んでくるから毎日いろいろな雑誌を選ぶことも必要なんだけども。

そして、僕はまた眠りの世界へ旅立とうと目をつぶる。

ここまでは春休みのいつも通り。

で、ここからがいつも通りじゃなくなる。

「起きる」

目覚まし時計より低くて小さく、それでいてはつきり聞き取れる誰かの声が聞こえた瞬間。

ドゴ。

という重たい衝撃が、腹の辺りに落ちてきた。

例えるなら、クレーンで20mの高さまで上げていた鉄骨を、腹に突き落とされたって感じ。鉄骨じゃなくてもいいや。何か20mの高さ分の威力を持って僕の腹に降ってきたのだ。

馬鹿にはできないんだ、人体に当てて「ドゴ」なんだからね。普通、そんなに鳴らないよ。人間の腹は太鼓じゃないんだから。

案の定、僕は息もできず、ベッドの上で悶え苦しむ。

「ごろごろ遊んでないで早く起きろ」

遊んでないけど！ と言いつ返したいところだが、息ができないんだから言葉なんて発せるわけがない。

そんなわけで、涙目で空を見つめる僕の視線の先には、よく見慣れた少女の顔があった。

ふるだて みな
古館美奈。

妹じゃない。姉でもない。もちろんお母さんでもない。

ただの幼馴染み。

小学生の頃からの。

「……、朝から、その、高威力なスキンシップは、何なわけ」

やっと絶え絶えに言ってみた。

朝だから起こしに来てくれたってのはありがたい。目覚ましを止めてから二度寝しようとした僕が悪いのも分かってる。でもだからって拳骨を振り下ろして良いなんてそんな決まりはあるわけないですよね。

「……ないですよね？」

「……」

美奈は睨んでるだけで何も言っはくれない。

だけど、美奈の睨みは雄弁だ。「早くしないと殺す」という合図をビンビン放っている。つまり睨まれると死刑台へのカウントダウンだ。

僕は慌てて上半身を起こした。一緒に過ごすうち、そういう無駄な知識と無駄な防衛反応を体が覚えてしまっている。

「もう少し優しい起こし方があるよね」

「無い」

遠慮がちな不満は、即答という形で却下された。

とはいえ、ここでぐずぐずしていると2発目は顔に来る。新学期早々、痣とか腫れた顔で学校に行くのはまっぴらだ。これでも体分は気になる中学生ですから。

僕はベッドから降りると、学生服を手に取った。可哀想に、この学生服はところどころが擦り切れている。美奈による無差別攻撃の爪跡だ。前に一度、ちゃんと直せと突きつけたことがあったけど、危うく半分に裂かれるところだった。

僕は美奈の方を見る。睨みはまだ続いていた。

「出てってくれませんか」

「……あ？」

「ここは僕の部屋なんで、そろそろ出てい」

「断る」

言い終わらないうちに断ると言われた。というか、ここは僕の部屋なんだから出て行けと強制する権利は僕にあるはずんだけど。なんかいつの間にか支配権が弱くなってる。

なのでここはちょっと攻め口を変えてみよう。

「……、えー、美奈って男子の着替えを見る趣味があるんだ変態

」

ズドゴ。

またしても言い終える前に横腹を思いっきり蹴られた。それも見事なハイキック。

絶対肋骨折れたかヒビ入った。内蔵が潰れたって。

痛みにうずくまる僕を一瞥し、美奈は片手で長めの茶髪を掻きあげると鞆を持ち直して部屋を出て行く。

僕の鞆とは対照的に、美奈の鞆は綺麗なものだ。いつもあれで人をぶっ飛ばすとか取扱説明書に怒られそうな乱暴な使い方をしていくくせに、どうして壊れるどころか傷すらつかないんだろう。ひよっとして僕はかなり性能の良いクッション

……鞆？

美奈のやつ、もう鞆持ってたよ。学生服姿でもあったし、もしかや……。

とても嫌な予感に襲われた僕は、無様に雑誌を被って転倒している目覚まし時計の方を見てみた。

雑誌をどけてみれば、そこに。

……だつてさ。8時過ぎてる。

時計はとても正直だ。

始業式の開始まで、あと8分。

汗、というものは暑くなくても出るんだなあってことが今また分かった。

「やっぱーっ！ー！！」

「あら、今日始業式だったの。ああそうか、それで美奈ちゃんは早く起きてきたのね」

「兄ちゃん遅いよ、おれ達もう行くよ？」

「お兄ちゃんお寝坊さんだねー」

乱れた学生服で1階に駆け下りてきた僕を見て、母さん、弟、妹が次々に3連続コメントを飛ばした。父さんはもうこの時間には出

勤しているからいけないけど、いたら「はっはー、父さんは始業式の日に9時まで寝ていたこともあったぞ」なんてよく分からん武勇伝を語ってくるに違いない。

だけど、答えている余裕は無いんです。

疾風のような勢いで洗面所に駆け込み、怒濤の如く顔を洗っている僕へ、母さんは台所から出ないまま声を掛けてくる。

「悠揮、お弁当ここにあるからねー？」

「今日は始業式だけだから弁当は要らないって！」

反射的に叫び返すと、台所から「あら」と聞こえた。

「そうなの。じゃあなんだか早起き損ね。新学期初のお弁当だから張り切ってみただけど」

「っていつか美奈にも同じことと言って同じこと言われたんじゃないの！」

「えー、そうだったかしら。あらまあ、本当に美奈ちゃんのお弁当もここにあるわね。どうしてかしら」

だから弁当は要らないからだよ！ と叫び返したかったがやめた。

無駄なタイムロスは避けたい。

廊下脇のサイドテーブルに無造作に置いてあった、昨日学校で配られた『2年 クラス表』と題されたプリント（これと新学期の注

注意事項のプリントだけ配って解散だった）を鞆に突っ込みつつ、僕は時計をちらりと見る。そして、焦る。

僕は牛乳をコップ一杯だけ飲んで、それを流し台に叩きつけるようにしてリビングに戻ると、テーブルに置いてあった皿の上の食パン（ジャム塗り済み）を口に咥えて玄関に突っ込んだ。

「てか、美奈は!？」

「美奈ちゃんはもう家を出たわよー」

言われてみれば、玄関口にはもう美奈の靴は無い。

「……友達甲斐のない奴」

食パン咥えてふがふが言いながら、僕は靴紐を結び終えて立ち上がる。

「行つてきます!！」

爆発するように叫ぶと、僕は玄関ドアを突き破った。あ、もちろん比喻だよ。ドアを壊したりしたら弁償金で小遣い止まるだろうし、何より僕にはそんな馬力は無い。

「……兄ちゃん行っちゃったよ。こつという時だけいつも早いね」

「まあそれにしても食パン咥えたままなんて。今時珍しいわね。あの子ちゃんと噛んでるかしら。　　あら、悠揮ったらお弁当忘れ

ていったわ」

「……お母さん。お兄ちゃんは食パンがあるから大丈夫」

「あと3分！ どうしよ間に合うか！？ 初日から遅刻なんて問題すぎる！」

全力疾走をしつつ、そんな言葉を叫んでみた。

辺りには学生服姿の人なんていない。というより、人すらもあんまりいない。やっぱり遅いか。

みんな始業式に出てるのに、体育館の外で1人終わるのを待つている様子なんて、想像しただけで身が竦む。

あー、今時始業式を寝坊するなんて僕だけかなあ……なんて、どこかの家のお爺ちゃんが庭の手入れをしていたりする住宅街を走り抜けながら考えていたら、そうでもなかった。

「ちつくしようぜってー間に合わねえ！ だから昨日は早く寝ようとしたのにあのヤロウ人を散々起こしやがってーっ！」

脇道から飛び出してきた、同じく爆走中の同級生と出会ってしまった。何だか寝不足で不機嫌そうで、思いつきり不満を叫んでいる。ていうか、あのヤロウ、っていうのは誰のことだろう。

「トシじゃないか！」

「悠揮か！ 珍しいなお前が遅刻とは、というより古館は？」

「先に行っちゃったよあの冷酷人間！」

伊藤敏典、呼び名はトシ。

特徴を一言で言うスポーツマン。見た目はサッカー少年って感じで、髪は短めに刈り上げてある。頭の中も……まあ、その。一般的なスポーツタイプの少年って感じ。

中学1年の頃に初めて知り合い、友達となり、そして今年2年も同じクラスになることが決まった級友だ。

「なんだ。お前が走ってるの見た瞬間、てっきり古館に追いかけてるのかと思った」

……なわけあるか。

「何が悲しくてこの時間に追いかけてこしなくちゃいけないんだよ。始業式ギリギリ滑り込み目指して全速力ダッシュです！」

「じゃあ校門が閉まってたらぶち破るといふ方向で」

道路の真ん中をマナー的速度を無視して突っ走る僕らは道路交通法違反とかにもなりそうだが、今の僕らにとって一番怖いのは始業

式から閉め出されることなのだ。知らないなら教えるけど、うちの学校では、時間切れで閉め出された後の気まずさほど怖いものはないんだよ。途中では絶対入れてくれないしね。

まあ、僕の場合ワースト1位には美奈がいるけど。

「あといつぷーん！」

校門が見えた。よっしゃ何が何でも間に合わせてみせる！

そろそろ門を閉めようかと腕時計をちらちら見ていた先生の横を、僕らはすごいスピードで駆け抜けた。あまりの風圧に、門が不自然に軋む。ごめんよ門。いつも僕らを不審者から守ってくれているというのに。こんど落書き消してあげるからさ。

スタンダードな日除け帽子が飛びそうになり、慌てて押さえた先生はやっと僕らに気付く。

「おまつ、お前らあ！　せめて挨拶くらいはしろ！」

「おはようございまーすー！！！！」

片手で門を閉めつつ振り返って怒鳴ってきた先生に、僕らは精一杯の大声で返した。後々先生に話を聞いたところ、なんかドップラー効果が出ていたらしい。

「あと少しだぞ！」

体育館の入り口は開いていた。

普通は上履きを履いて、渡り廊下を通過して体育館に入るべきなの

だが、僕らにはそんな余裕は無い。というわけで昇降口の前を素通りし、そのまま体育館へと突っ込む。

「いいか、飛び込む寸前に靴を脱ぎ捨ててキヤッチだ！」

「あい！」

トシの作戦は一見無茶っぱいが実はそうでもない。普段から靴の踵を踏み潰してベコベコにしている僕らにとっては……まあさすがに今はしつかり履いているけども。

それと、返事が「はい」じゃなかったのは息切れでHの発音ができなかったからだよ。

いや、どうでもいいと言わないでよ。

「ゴールイン！！！！」

開けっぴろげな体育館にダイブする形で飛び込むと、すっ飛んだ靴を空中でキャッチ。床に叩きつけられたのはきつかったけど我慢して、それすらも前に滑ろうという運動エネルギーに変え、そのままするするした体育館の床をクラスのゾーンまで滑り、列の最後尾に辿り着く。

自分で言うのも何だけど、凄い技だろ。

「セーフか！」

「どうだ！」

2体のホバークラフトみたいに床を滑ってきた僕らを、新クラス

メイト達はそれぞれに驚いたような奇怪に思っているような複雑な視線を投げてくる。黙ったまま見つめてきた彼らの中で、最初に口を開いたのは。

「……この馬鹿が。空気読め」

超不機嫌そうな顔の美奈だった。

というか「ども」「も」「も」「達」も付けないところを見ると、トシは置いといて僕だけピンポイントで馬鹿扱いされているみたいだ。せめて、言うなら始業式の後にして欲しかった。

さらに、僕らを痛いような視線で見ているのはクラスメイトだけではなかった。新入生諸君、先輩の方々、さらには体育館脇の先生達や壇上の先生まで。

僕は校長先生のお話の最中に、とてつもなく衝撃的な乱入をしてしまったらしい。

「……」

言葉が出ない。場の空気が痛い。トシも同じような顔してるし。

どつちら、セーフではなかったようだ。

1 - 2 何か用でも

2年1組の教室。

今この教室は、新学期特有の浮ついた雰囲気きふいに包まれている。

……のだが、それどころではないのが一人。誰でしょうね。誰だと思っおもつ？

はい、そうです僕です。

「うあああゝ。なんかすっごい疲れたゝ」

とても痛い始業式を耐え抜いた僕は、急に緊張の糸が切れて机にへたれ込んだ。

本来ならこの時間は、中1からの友達と集まったり、新しい友達が出来るかという不安と期待にドキドキしながら、どんな人がいるのか確認する……そんな時間のはずだ。

だが、僕は席だけ確認するとこうして机にへばりついている。

トシはさっさと立ち直って別のクラスの友達に会いに行っていたが、僕は直接的なシヨックは直っても、そのシヨックから立ち直った事への安堵が直らないのである。ややこしいかな。

隣の席の女の子が、まるで逆立ちをするネコでも見るかのような目で僕のことを見ていたけど、安堵の方が大きい僕はそんな些末なことは気にならない。

「眠ねむ……」ここで寝よっかな……」

今このクラスは出席番号順の自分の席に着き、新しい担任の先生が来るのを待っている状態だ。だから多少ここで机に突っ伏して寝てても問題はないよね、と思った僕は誰も聞いてないと思って呟いてみた、けど。

「起きろ」

いつの間にか目の前に美奈が立っていた。

「ッ!?!」

「わっ!?!」

恐怖心からか、それとただの驚きからか、思わず仰け反ってしまった僕はそのまま後ろへ椅子ごとバツタン。ゴツンと硬いコンクリートの床に頭を打ち付けて、僕の目の裏に火花が散った。

そういえば、美奈も同じクラスだったね。

「……いつて〜」

後頭部を片手で押さえながら何とか起き上がった僕の前には、さつきと全く変わらず立っている美奈が。

というか目の前で人が頭打ったんだから、ちょっとは心配してくれてもよくない？

全く動かないのもそれはそれですごいと思いますけど。

「……で、何ですか？」

「……」

「何ですか」

「……」

「なんだよー用もないのにいきなり現れるってどういうこと？ それに美奈のせいで頭ズキズキするんだけどさ、この痛みどうにかして」

「黙れ」

黙れと来ましたか。

美奈の反応なんていつもこんなものだ。いったい僕が何をしたと
いうのか。小学生の頃にやたらと美奈をからかったことは覚えてい
るけど、さすがにまだ根に持っているとは思えない。

だいたい、からかった後はいつつ僕もボコボコにされてたんだ
し。

「黙れと言われて黙るわけがないですね。ていうか美奈が最初に来
たんだろ。何か言うことあったんじゃないの」

「ない」

「また、その歳になっていったい何を緊張しているという」

「黙れ」

2回目の黙れが飛んできたとあっては、僕はもう口を閉ざすしかない。あと1回美奈に黙れと言わせたなら、僕はその場で13年の人生を終えることになる。

「ていうか美奈は何怒ってんのさあ」

「悠揮が余計なこと言うから」

「じゃあ言わないから。言わないようにするから機嫌直してよ」

「遅い」

。そうですか、間に合わなかったんですね！ もういいよ（逆ギレ）

「……じゃあいい。寝る」

ふて腐れた僕はさっさと机に突っ伏したのだが。

「起きろって言うてんの」

ガクン！ といきなり机が激しく揺れ、僕は額をしょこたま机にぶつけた。さらに机の縁が腹に食い込んできたし、机の脚に足を踏まれた。

「痛っ！ 机蹴るな！」

怒りつつ顔を上げ、目の前の美奈をまじまじと睨んでみる。

よく思い出して考えると、昔はもう少し柔らかい性格だった……

ような気がする。そうだ、小学校1年生の時に初めてクラスが同じになって、自己紹介を交わした時は美奈も笑顔をを見せていたのに。今じゃ望むのも馬鹿馬鹿しい。

「何」

「いやそれはこっちの台詞。話しかけておいて言うことナシってどういうことなんだよ」

「……」

「ほらまたあ。会話が苦手なら最初から黙ってようか」

美奈の拳が握られ、その目が果てしなく怖い色に光ったけど、僕は表情を力チコチに固めることでなんとかやり過ごす。

いつも思うけど、とても女の子には見えない。タイマンならこちらの高校生より強いと思う。

ほんといつも思うけど、容姿だけは普通に女の子なのだ。外見を説明すると、天然茶髪で肩より少し長いほどの髪に、クラスの中でベスト3に入る程度の綺麗な顔立ち。去年、顔で選ぶ派の男子の何人かから告白を受けてたこともある。全部バツサリ断ってたけど。

というか中学生で告白をさせてしまうという、美奈の………なんというか、引きつける力はすごいのかもしれない。でも性格を知っている人（僕も含めて）は既に幻滅しているよ。

「あっそうだ美奈。午後は学校無いから空いてるよね？ あのさ」

「しるわい」

「しるわいって……」

「私が先に話したんだけど」

最初の一言だけ言って続きを言わないお前に言われたくはない！
話すなら責任持って最後まで言い切って欲しい。それすらできないのであればもう話しかけてくんない！

……と、思ったけど我慢する。

「じゃあお先にどうぞ」

「……」

美奈は黙った。結局黙るのかい。ならやっぱ最初から黙っていてくれますかね。

「先に言うよ？」

「……」

黙っているということは肯定の返事なんだなって解釈して僕は続ける。

「今日からさあ、『ファースト』の2章編が映画公開されるんだけど」

ここで解説を入れよう。ファーストは正確には『ファンタジーワールドストーリー空想世界の物語』

といい、今人気爆発中で社会現象にもなっている映画だ。元は小説が原作で、その頃から誰が言い始めたのか分からないが「ファースト」という略語で出回っている。

この物語が本当に面白くて僕ら兄妹も全員でかなりハマっていて、1章のDVDはラックの奥に大事に大事にしまっている。美奈はどうなのかはつきり知らないけど、この前文庫版の小説を貸したら全部読み終えていたから、何気に気に入っていると思う。

ついでに僕は最新刊（25巻）まで文庫版と普通版を両方きっちり揃えた。　　自慢ですはい。

脱線しちゃったけど話を戻そう。

「今日は始業式だけだから丁度いいし、これから

「断る

「……。まだ言い終わってもいないんですが」

「悠揮とは行かない」

断固とした表情で言う美奈。誰が二人で行くって言ったよ！ 僕だっておまえと二人で行くなんて絶対嫌です！

……本当はね、そこまで露骨に嫌だっって言われてちょっと傷付いたけど、いいのさ。映画つてのは1人で観ても面白いし、それに僕は1人で観るのではないのだ。さあ反撃。

「ふーん。じゃいいや。悠介と悠奈と行こうかって話をしたから、美奈も誘ってみただけなんだけどね。嫌ならいいよ」

「……、……」

「てつきり興味あるのかと思ってたけど、別にいいんだ。そっか」

「……」

言い終えても、美奈は何も言い返してこなかった。その上暴力的な手段でやり返してもこない。

これは効いたかな、と思っ僕は美奈の顔を覗いてみる。

表情は変わってない。さつきから不機嫌さをずっとずっと前面に押し出している美奈は、さらに不機嫌がプラスされたみたいなものだ。

でも、なんだか。

小刻みに体が震えているように見えるのは目の錯覚だろうか。

握られたその拳がガタガタと震えているように見えるのはただの勘違いだろうか。……はつきりとは分からない、だけど、雰囲気歯を食い縛ってるような感じがするのは気のせいだろうか。イヤ気のせいじゃないよこれ！

「……、あの、美奈？」

「……」

「……あの、」

「……」

「……、あの」

「……」

「……あ」

「……」

「……」

「……」

「うっ、わわわ！ ごめん美奈謝る、謝るから！ 調子に乗ってほんっとうにごめんなさい！！ 許してっというか許してくれないのは分かるけどでもごめん頼む本気の一撃だけは勘弁して！ そんなの喰らったら死んじゃうからあ！ お願いもう映画観に行こう観に行きませんか！！」

「うるっさい！」

ズドゴン。

容赦のない蹴りを喰らって机ごと壁に叩きつけられた僕は、意識を失う直前、美奈が教室のドアを勢いよく開けてどこかへ出て行くのを辛うじて見た。

1 - 3 保健室でも寝坊

まず初めに、つん、という鼻を刺す匂いがした。

この匂いは前も嗅いだことあると思うなあ。

この独特で、清潔っぽいイメージがあつて、やたら薬味の多いこの匂いは。

「……保健室？」

目を覚ますと、僕は学校の保健室にいた。

なんだかまるで病人みたいにベッドの上に寝かされている。

僕は別に美奈に蹴っ飛ばされただけで保健室のお世話になる必要はないと思うけど……とか考えながら身を起こすと、ちょうど事務机に座っていた保健の先生と目が合った。

「あら起きた？」

「へ？ ……あ、え、はい」

我ながら間抜けな返事をしてしまった。

「えっと、僕っていつからここにいましたか？」

「そうねえ……、始業式が終わってすぐ後かな。二人がかりで男子に運ばれてきたから何事かと思ったわ」

「うわあ」

気絶して、さらに意識がないうちに友達に運んできてもらったのだ。重くなかっただろうか。新クラスメイトを前にして、一目からとんだ恥ずかしい体験をしてしまった。うーなんだか顔が熱くなってくる。

「気分は悪くない？ どこか痛いところとか、変な感じがするところとか」

「え？ ……あー、まあ……大丈夫です」

「そう。なら教室に帰った方がいいと思うわ。自己紹介とかするんでしょう？ 大事な話もあると思うから」

「そう……ですね。えーと……失礼しました」

おだいじにー、なんていう返事を背中に受けながら、僕は保健室を出た。情けない反応しかできなくてまたまた恥ずかしい。だけど仕方ないじゃんか、綺麗な先生なんだから。

気まずいなあどうやって教室に入ろうかなあなんて考えながら、廊下を歩き、階段を上っていると、あっという間に教室の前まで着いてしまった。

2 - 1と書かれた札を見上げ、短く息を吐く。

笑われてもそれはそれでいいではないか悠揮君、と自分を奮い立たせ、とても大きく見える教室の扉をさっきの美奈みたいに勢いよ

く開けてみた。

ガラガラガラガラ

そして、僕はぴたりと動きを止めた。

予想外の光景に。

これはないよねっていう状態に。

教室は無人だった。

ゆっくり、ゆっくりと首を回して、黒板の上の時計をしてみる。

木製の丸くて古いアナログの時計は、長針を12に、短針を1に、それぞれぴったり合わせている。

午後1時ジャスト。

今日の完全下校の時刻から、20分も過ぎていた。

「な……何が自己紹介だ、思いつきり時間切れじゃんか」

通りで学校の中がやけに静かだったわけだ。あの先生はわざと意地悪でもしたのだろうか。……いや、単に時計を見ていなかっただけだろう。そうだと信じたい。

でもまあ、教室に鍵がかかっていなくて良かった。

そのことにはほっと息をつくくと、僕は自分の鞆を指して机をかき分けていく。

「……あれ？」

そこで気がついた。さっき教室で座っていた席に、僕の鞆が無い。ぐるんと一回転するように教室を見回してみても、全く見当違いの窓際の席に僕の鞆が置いてあるのを発見した。

なんであんなところに？ と首を傾げながらもそっちへ向かおうとしたところで

「遅い」

……え？

聞き覚えがあるような声でした、気がした。だけど空耳だと願いつつ、だれどこんな静かな教室で空耳もあるかと頭の中で反論しつつ、ゆっくりと振り返ってみれば。

「みっ！？」

……また、美奈だった。

しかも何故か、鞆片手にロッカーの上に座っている。すごい目立つところにいたのに全然気付かなかったよ。

蔑むように見下ろしてくるその目は、高圧的の他に表しようがなかった。

「遅い」

「な、何でここに？」

「黙れ」

「……」

驚いて訊ねたけど一蹴され、僕はとぼとぼと自分の鞆が置いてある席まで行き、鞆を取った。鞆は間違いなく僕のだ。そうなんだけど……。

「ねえ美奈、どうして席が替わってるか知ってる？」

「席替えしたから」

「はあ！？」

「ひるたつ」

「でもだって、何で初日からいきなり席替え！？ おかしいだろ！」

「知るか」

「ごもつともです。先生が決めたことを美奈が知ってるわけないよね、ごめんね。」

「……って何で謝ってるんだか。僕は別に悪いこと言ってないはずだ。」

僕は1時1分に移行した時計を眺めてから、美奈に視線を戻して言った。

「もしかして美奈は待っていてくれたの？」

一瞬の静寂。

「……別に」

「うわあ本当にそうなの？ 分つかりやす」

ドフツ。

電光のような速度でロツカーから飛び降りた美奈は、そのままの勢いでぶん殴ってきた。当然そんな人間離れしたスピードについて行けるはずもなく、モロに直撃した僕は腹を押さえてうずくまる。

そんな僕をちらりとだけ見て、美奈はさっさと教室を出て行った。

……。

……やっぱ追いかけるか。

「ねえ行こうって」

「行かない」

「行こう」

「行きたくない」

「行こう!」

「うるさい!」

先程から、こんなやり取りが数十回くらい繰り返されています。

校門を出た辺りから映画観に行こうって一生懸命誘ってるんだけど、美奈は頑固な奴で、全然うんと言わない。本当は行きたいんだろって言えたらどんなに楽か。でもね、そんなこと言ったら美奈は絶対行かなくなる。

ホント、素直じゃないよこの人は。

こんな風になったのは小学4年生くらいの時だったか。意地っ張りで恐いのは昔からそうだったけど、ここまでじゃなかった。それに冷たくもなかったし。思春期ってそんなに影響するもんなのかな。

「どうしても嫌ですか」

「どうしても」

「……うう、あのさ、じゃあこの際だからばらすけど、もう前売り券は買ったんだ4人分。だから美奈が来てくれないと無駄になるんだよ」

「無駄にしる」

「言っとくけど買ったの僕じゃないよ。母さん」

「……」

よし決まったあ！ さすがに僕の両親に楯突きはしないだろ！
というかできないだろ！

美奈は少しだけ何かを悩むような素振りを見せる。

「……はあ」

何で溜息だよ。

母さんに言いつけるぞ。

「行くよね？」

「……」

「行くよね」

「……………行く」

ようやく了承を得た僕は、思わず隠れてよっしゃあとガッツポーズを繰り出した。あー本当に疲れた。

実は美奈をしっかりと説得することが前売り券を買ってもらう第一条件なのだ。母さんによれば、「美奈ちゃん1人だけ残すなんて有り得ないでしょ」とのこと。だから悠介と悠奈が映画を見られるかどうかも実は僕にかかっていた。

プレッシャーに耐えてよく頑張ったよ僕、と自分で自分を褒めていたのだが、何を思ったのか美奈はいきなり蹴りを放ってきた。

膝カックン。

「痛あ！いきなり蹴んなよ何なんだよ！」

「なんとなく」

「なんとなくで済ますな！こちとらもう少しで電信柱に顔面から激突するところだったぞ！」

「うるさい」

「何がうるさいだと！」

怒る僕だが、美奈は全く相手にしないでずんずん歩いていく。

……でも心なしか、美奈の背中もなんだかイライラしているように見えるのだけど、……気のせいだろうか。

1 - 4 前売り券（前書き）

ちよつとここで設定の確認。

悠介は悠揮の弟です。悠奈は悠揮の妹です。

1 - 4 前売り券

家に着き、「ただいまー」と玄関ドアを開けた途端、悠介が出迎えてくれた。そして開口一番に「兄ちゃん説得できた!？」だそう
だ。気になるのは分かるが弟よ、そこはまず「おかえり」だよ。後
から出てきて「お兄ちゃんおかえり」と言ってくれた悠奈の方がず
っと大人っぽい。

まあその悠奈にしても、美奈には「映画行こうね!」と、「おか
えり」ではない別の単語が飛び出していたけど。

どうもこの人達は映画がよほど楽しみみたいだ。……僕も人のこ
とは言えないか。

「あらおかえり、悠揮、美奈ちゃん。お弁当作っちゃったからお昼
はそれ食べてくれる?」

最後に出てきた母さんのまともなコメントを聞いて、ああやっぱ
り大人って違うなあと思ったよ。

「ただいま」

「そうそう美奈ちゃん、それに悠揮も。映画行ってる間に部屋に掃
除機かけておくから、見られたくないものとかあるならしまってお
いてね」

「りょうかい」

「はい」

ああ、ちなみに何故美奈も返事をしたのかというと、美奈はこの家に住んでいる、つまり居候状態だからだ。何故居候なのかという

……ちよつと長くなるけどね。

ずいぶん前の話。

美奈の前の家庭は、散々なものだった。両親とも無職で、収入が無いのに酒も煙草も買うもんだから借金だらけ。そしてある時病気で美奈の母親が亡くなった。それを機だとも思ったのか、元から美奈を何とも思っていなかった父親はあっさりと美奈を捨てたのだ。まだ娘に対する愛情を持っていたと見えた母親に比べて、父親の方は本当に面倒なモノだと思っていなかったのだろう。

それを知った僕の両親は、昔からのクラスメイトだからという理由で、身寄りが無かった美奈を引き取ってしまった。美奈の実の両親はあんな人間だから、その家族からも縁を切られても不思議はない。もともと引き取り手はいなかったみたいだし、養子縁組もしていないけど、それでも美奈を引き取っちゃ僕両親はすごいと僕は思う。……どこかの無責任な親とは違つてさ。

つまり美奈は気分上の家族。それも4年生の時の話だから、家族としては数年過ぎている。

……それでも、美奈はまだ完全にこの家に慣れてはいないように見えるけど。

と、動きが止まっていた僕は、ぐいつと美奈に横へ押しつけられた。

「邪魔」

「ああ、ごめんごめん」

てか僕はなんで謝ってんだろう、でも邪魔だったんだから謝って当然か、なんて思いながら美奈を見ると、ふと顔を上げた美奈と目が合った。

「何で見てるの」

「え？ ……いや別に」

「見るな」

言い捨てて自分の部屋へ歩いていく美奈の後ろ姿は、やっぱり怒っているように見える。僕が何かしたのか本当に気になる。でも別に機嫌を悪くさせるようなことを言った覚えはないんだけど……。

「ねえ兄ちゃん、美奈ちゃん怒ってる？」

お、悠介もそう思うか。

「そう見える。お兄ちゃんが変なことを言ったからだよ」

悠奈、お前も思うか……ちょっと待ってください。

「まあ。悠揮、いったい美奈ちゃんに何を言ったの」

母さん、だから……つづか全員待て。

「何で僕が悪いみたいな自然な流れができてんの！ 別に何も言っていないし、こっちは美奈を説得するために頑張ったんだよ！」

「……じゃあなんか余計なこと言っただ」

「なんでそういう確定思考なんだよ！」

「そつだね怒らせること言っただ」

「違っつたら！ ……いや、あれ、違……？ でもとにかく僕は

」

「うるっさい！」

廊下沿いの一部屋の戸が開き、怒鳴り声が飛んできた。美奈のだ。

絶対ピンポイントで僕を狙ってる一言だよね、あれ。

「そつだ美奈ちゃんに直接聞いてみよう」

思いつきで悠奈は美奈の部屋へトコトコ歩いていく。警戒心ゼロな子供だからこそできることだ。僕にはできない。だってドアと一緒に吹っ飛ばされるから。

「ねーねー美奈ちゃん、お兄ちゃんに何言われたのー？」

美奈の部屋の中から悠奈の質問の声が聞こえてくる。僕と悠介は、別に何か大きなことをしているわけでもないのに耳を澄ませてじっとしていた。やっぱり兄弟だ。

「え？ ……いや別に」

それさっきの僕と同じ台詞ですけど！ と心の中で突っ込んでみる。

「何か言われたんでしょ？」

「う、ううん、何も言われてないよ」

そう言ってくれた美奈に（直接ではないけど）ちよつと感謝する僕。一方、悠介と悠奈は、それぞれ玄関と部屋の中という別々の場所にいるにも関わらず。

「「……えー」」

「おいそこでハモるの失礼だろ！ だから僕は何も言っていないって言ったのに」

「うるさい悠揮は黙ってる！」

バスコン。

美奈の部屋から、器用に横に弧を描いて飛んできた雑誌が僕の顔を直撃した。

「あれ、前売り券が1枚足りない」

その事実気がついたのは、映画が始まる3時の45分前だった。前売り券をしまっていた紙ケースを開いた母さんが、不意にそんな言葉を口にした。

「ふーん足りないんだー　　っておい。それかなり大きい問題ですけど？」

「あれ？　おかしいわね、確かに4枚しまつてたと思うんだけど…
…あら、羽でも生えて逃げたのかしら」

「母さんってメルヘンチックだねー、…じゃねーよ！　ちよつとそれ大きな問題です！　映画館で直接買えるわけないじゃん！」

ファーストは前にも言ったけど、社会現象になるほど人気な映画だ。45分前にてくてく歩いて行ってチケットくださいと言ったところで在庫があるとは思えない。

「えーどうするのお母さん。みんなで家具ひっくり返して探す？」

「所詮悠奈って悠奈だね。家具は倒せばいいんだよ、ひっくり返さ

なくてもいいんだし」

「うるさい！」

レベルの低い兄妹ゲンカを始めた二人を引き剥がしつつ、僕は時計を見ながら母さんに話しかける。

「でもどうする？ 半までに見つからなかったら諦めて別の日にしようか」

「でもね、前売り券を買うのもなかなか大変だったのよ。もしかしたらもう売ってないかもしれないわね」

どうしよう？ と顔を見合わせ合う僕ら3兄妹と母親。

誰か1人が観なければいいんだけど、……なんか、なんとなくその役は僕になる気がする。当然とっっちゃ当然だけどやだなあ。人から聞いただけなんて面白くないし。

「……あの」

とその時、今まで黙っていた美奈が口を開いた。

「私前売り券持ってます。2枚」

言いながらチケットを取り出した美奈を、僕は思わず見つめてしまった。

「ごめん、君はあの美奈だよね？」

「あらそうなの。じゃあ良かったわね」

ほつとした表情を見せた家族の中に、怪訝な顔が1人。僕です。

「……何で2枚？」

「……は？」

さっきまでの口調はどこへやら、僕を相手にした途端に美奈はだ
いぶ不機嫌になる。

「2枚　　あ分かった！　美奈は2回観たかったんだな！　そこ
まで美奈がファーストを好きだとは思わなかつ」

「黙れ馬鹿」

美奈は遮るように言ってボディブローを繰り出してきた。ゴフ、
という鈍い音。一応僕の家族の前だから威力は減ってるけど、それ
でも痛いものは痛い。

　　というかみんな、僕らはじゃれてんじゃないんだから助け船を出
してください。

「……はい」

拳骨が止んだと思ったら、美奈は持っていたチケットの片方を僕
の目の前に突きつけていた。なんか見せびらかしてるようにも見え
るけど、でも「はい」と言っただからくれようとしているんだよ
ね？　そう思っ僕は手を伸ばしてみたが、美奈に即座に引っ込め
られた。

「あれ？」

「1200円」

「……え」

「これ1枚1200円」

……言いたいことは分かるよ。

1200円したんだからお前払えつてことでしょ。分かるけどさあ、もし渡す相手が悠介か悠奈だったら迷わず無料^{ただ}であげてたたる。ありがたいけどなんか複雑だなあ。

「ちえ、ケチ……でも1200円っていったらやつは高いか……」

ぶつぶつ言いながら財布を取り出して中を開いてみた。

そして愕然。

財布の中には、紙幣が1枚もない。

「あ、あれ？ 千円札があと2枚は残ってたような気がしたんだけどあれ？」

小銭入れを探ってみて、またまた愕然。

ひっくり返してみれば、財布の中には総額952円しかなかった。

「……」

「……」

無言が僕を貫く。

「……か後ろのメンバー！ 見てるだけじゃなくて300円、いや248円貸して！」

「……」

「……、あの、全部出すからまけてくれませんか？」

「……」

「……」

「……いいいい」

「え？」

「……やっぱりいい」

美奈はポツリと言うと、前売り券を僕の財布に叩きつけた。

「それもものすごい速度で、パン！ どころではなく、ズバァン！ と財布を持っていて腕全体がビリビリするような威力だ。」

危なく財布落としそうだったよやめてくれ。

美奈は顔を上げると、呆れたような馬鹿にしているような哀れんでいるような不思議な視線で僕を見る。

「また今度何か奢れ」

「いって、そっちのいいかよー」

1・5 ポップコーンは食べるもの

さて、ギリギリだったけど、僕らはあと33分を残して映画館に到着した。まあこれからポップコーンとかジュースとか買わなくちゃいけないしというか買いたいから、そんなに余裕があるわけではないけど。

「あ！ これ欲しい！」

唐突に悠奈が何かを見て叫んだ。

僕はそつちを見もせず、悠奈の服の首根っこあたりを掴んで引っ張る。これくらいしないと勝手は収まらない。

「映画観てからでいいだろ」

「えー。じゃあこれ」

「だから映画観てから。しかも何だじゃあって妥協しましたみたいな言い方するな」

「兄ちゃん僕もこれ欲しい」

「母さん！ ちょっとこの二人どうにかしてよ！」

遠くでこれまた楽しそうにアイテムを見て回ってる母さんに、僕は精一杯の声を出す。ねえみんな、ここに何しに来たか分かってる？ それと弟妹きみたち、僕がさっき952円しか持っていなかったのを忘れたのか。

「ねえ悠揮、これって珍しくな」

「母さんまで！ 後でといったら後で！」

えー、と不満げな三人の背中を押しつつ、そういえば美奈は？と振り返ってみれば、意外にもちゃんとしてきてくれていた。

じーっと見つめてくる僕に、美奈は不審そうな表情で言う。

「……何」

「ありがとう。ちゃんと空気が読める人でいてくれて」

「……気持ち悪」

お礼を言ったのにあまりにもひどい言われようで、普段の僕ならへこんでいるところだけど、今は感謝の気持ちの方が強いので気にならない。それに、美奈が何故か2枚の前売り券を買っていてくれたおかげで、こうして母さんまで映画を観れる。ありがとうと母さんの代わりに言うておくよ。

「何で見んの」

「何でもないです」

「……それと。」

今の美奈は確かに不機嫌だけど、それはいつもの不機嫌であって、さっきのあからさまに怒っている様子はない。

もしかしたら、前売り券が2枚あった理由は。

だから、学校で美奈から話しかけてきたのは。

とそこまで考えて、僕は首を振った。それはちょっとありえない、
というか妄想がひどすぎる。美奈はね、そういうことをするような
タイプじゃないと思うし。うん。

「さてと、何頼もつか」

僕の問いに真っ先に反応したのは悠奈。

「オレンジジュース！」

「……いいんだけど、まずはポップコーンの種類から。バターと塩
とキャラメルと……ん？ 何コレ、オレンジジュース？」

「だからオレンジジュースがいいんだってば。お兄ちゃんもしかし
て知らなかった？」

「知ってるかこんなの！ なんだオレンジジュース味って、ガムか
」！

言い争いをしている僕と悠奈を呆れた目で眺めながら、母さんは
さっさと注文を出す。

「じゃあキャラメル味のポップコーンMサイズと、バター味のポッ
プコーンMサイズと、オレンジジュース味のポップコーンをSサイ
ズ。一つずつで」

「かしこまりました。お飲み物はいかがいたしますか？」

結構うるさいはずだと思っ僕と悠奈を見事にスルーしながら店員さんは質問してきた。って、これって営業妨害とかにならないのかな？ すいませんうるさいですとか言わなくていいんですか？

……何で本人が注意してるんだか。

「私はオレンジジュース！」

「またあ？ だってポップコーン頼んだろ」

「別物だもん。食べ物と飲み物は違うもん」

「じゃあ僕は牛乳」

「ないです。メニュー見なよ」

「えー……じゃあ烏龍茶でいいや」

「お母さんはそうねえ……カフェラテで」

「ないって！ ここは喫茶店じゃないの！ っであるのかよ

！ すげえな品揃え……。てかじゃあ何で牛乳は無いんだ」

「それで、悠揮は何にするの？」

「うーん、僕はじゃあホワイトウォーターで」

「兄ちゃん、水は透明だからスケルトンウォーターだよ！」

「違うよ、お兄ちゃん牛乳は無いんだよ!」

「……ちょっと静かにしろよお前達」

好き勝手に騒ぎまくる僕らを見て、店員さんは困ったような笑顔でいる。申し訳ないのでさっさと終わらせよう。

「それで、美奈は？」

「……」

美奈はメニューを上から下まで見た後、舌打ちをして一言で。

「砂糖水」

「ねえよ!……!」

何とかポップコーンとそれぞれの飲み物を獲得し、劇場の中に入った僕らだが、今度はホールの場所が分からずに迷っていた。

前売り券と引き替えに貰った映画券には12番ホールと書かれているが、当の12番ホールはスクリーンの故障が原因で入れなくなっている。その扉に貼られていた紙には『急遽12番ホールでの上演は35番Bホールで行うことになりました』とか書かれていたのだが、35ってどこよ？ ホール多すぎるだろ！ BってことはAとかCもあるの？ といった具合で見事に彷徨っているのだ。

「あと14分で上映開始だよ……。どうするの？」

「やっぱり係の人に聞くしかないかあ。すみません！」

たまたま近くの上演終了ホールで、ゴミを集める袋を組み立てていた人に声をかける。

その人は半分かけていた袋を途中で放し、それが元に戻ってしまったのも気にせずに「何ですか？」と聞いてくれた。いくら仕事とはいえなんだか申し訳ない。

「えと、あの35番Bホールってどこですか？」

「ああー……」

思い出そうとしているのか、なにやら難しい表情で腕を組む清掃員さん。そんな考え込むほど遠いの？ とみんなが戦慄しかけたところだ。

「その角曲がって右側沿いにありますね」

「近いな！」

思わずといった感じで漏らした悠介の口を塞ぎ、不思議そうな顔の清掃員さんにお礼を言つて歩き出す。角を曲がってみれば、34C、35A、35Bという並びでホールの入り口が見えた。ホールがありすぎて紛らわしいな。

中に入ってみると、それはそれは大きな部屋だった。Bとかついでるから半分程度の大きさかなあなんて思っていたらそんなもんじゃない。あと少し大きかったら2階席がつくよ。

「さて？ Fの8、9、10と……あら、Dの23と24……。そうか美奈ちゃんが買った前売り券だものね。悠揮と美奈ちゃんがD席でもいい？」

僕が答える前に、さつさと美奈が頷いて了承すると、僕の手をつねるように引っ張っていく。けどさつき僕と二人で行くのは嫌だとか言つてたじゃんと思つたのだが、もうすぐ映画が始まるので何も言わずに従つて、席に着いた。

そういえば、美奈とこうして2人で座るのなんて何十年かぶりだ（すいません大袈裟です）。でもだつて、最後に一緒に並んで座つたのは学校の席くらいだと思う。幼馴染みつたつて、そんなに格別仲が良かったりするもんじゃないし。……美奈はたぶん僕のことなどまるで意識してないだろうし。

僕は飲み物を手すりの穴に入れると、ポップコーンを軽く揺らししてみる。匂いで分かったがこれはバター味だ。

「美奈、食べる？」

「ない」

せめて、「食べない」か「いらない」と言ってください。そんな一言で済ませなくても。

「……それは、太るから？」

ガス。

「痛いッ！ 殴るな！」

「うるさい」

無茶苦茶な言われように、僕はちょっと落ち込んだけど気を持ち直し、ポップコーンを食べる。

……味が濃い。

すごく濃かった。これ絶対、味付けの量を間違えている。単純に水が飲みたくなる。

水といえば、あの後美奈は苦笑している店員さんから、水をMサイズ分とシュガースティック1本を貰って砂糖水を自分で作っていた。美奈は炭酸とか合成ジュースとかよりも、「自然な甘さ」のする飲み物が好きだ。それは知ってるし別段おかしいことでもないと思うが、あそこで水と砂糖よこせと言うとは思わなかった。店員さんすごいよ。迷惑かけっぱなしでごめんなさい。

……ていうわけで、なんとなく美奈の方を見てみた僕は
その時やっと、美奈に足を踏みにじられていることに気が付いた。

「あ……何？」

「食べる」

「あそぶ。はい」

容器の口を美奈の方へ向ける。

「いらない」

どっちだよ。

再び元の向きに戻して抱え込もうとすると、また美奈が何か言う。

「貸して」

なんなんだよ。

僕は今まさに抱えようとしていたポップコーン容器を、押しつけるようにして美奈に渡した。

「でも、濃いよっ」

この際意味不明瞭な発言で僕を惑わせたことは大目に見てやり、忠告をした。美奈は聞いていないようで聞いているようでポップコーンをじーっと見つめている。

美奈はやがて、試しになのか食べたいのか、3つほど掴んで口に入れた。

「……」

……グシャ。

ポップコーンの容器が中身と共に潰される音が響いた。

自然な甘さ、つまり言い換えると薄めの味付けが好きな美奈、濃すぎる味付けがその逆鱗に触れたらしい。

「ちよつ、美奈、美奈ってば！ 潰すな！ 気に入らないなら僕が食べるからほら潰すなってもつたいないだろ！」

僕の必死の叫びも虚しくポップコーンがプレスされて煎餅みたいになった瞬間、上映開始のためにホールの電気が消えていった。

1 - 6 実は面白い？

「結論から言うところ、やっぱり」

「「面白かった!!」「」」

上演終了後、馬鹿ファンの3人（僕含む）は見事に意見が一致した。そんなに感動はなかったけど、とてもハラハラした映画だった。やっぱり面白い映画って面白いよ。

そんな僕らを母さんは呆れ笑いみたいな目で見て、美奈は美奈は、こっちを見てない。

「兄ちゃん！ ほら行くよお土産！」

「いや、土産っていつのか」

「お兄ちゃん！ ほら行くよお土産！」

「同じような台詞2度も繰り返さんでいい。分かったよ行くよ。母さん、まだ時間あるでしょ？」

「ん？ ああそつね、お土産見ていこうかしらね」

だからお土産っていつかね……とぶつぶつ言う僕を残し、3人はさっさと記念商品売り場へと歩いていく。喜んで選んでいるように見えるから、母さんも実はハマったのかもしれない。

で、こっちのトトは。

「……はあ」

お前、その歳でよくそんな疲れた溜息が出せるな。

「美奈は何か買っていないの」

「別に」

「売りきれるかもよ」

「興味ないし」

「えー？ 嘘だろ？ だって楽しそうな顔してたよ」

指摘され、ちらりとこちらを見た美奈は、何故か真横に腕を突き出して殴ってきた。

「痛！」

「……変態」

「何で!？」

「悠揮だから」

理由になってねーよ！ と叫ぶ僕を置いて、美奈も商品店へ向かって行ってしまった。行ったってことは、やっぱり興味あるのかなあ、なーんて考えていたら。

不意に肩を叩かれた。

誰だろう？ と振り向いてみる。

「よう悠揮」

「ああ、トシかあ」

そこに立っていたのは僕のクラスメイトだった。

トシ1人だけじゃない。トシの後ろに、ちょっとした集団があった。だいたい十何人ほど、修学旅行みたいな感じだ。

ほとんどは顔を知るクラスメイトや小学校からの昔馴染みの友達なのだが、僕の知らない子も何人かいた。

……ただ、男女混合だからまるで合コンみたいだよ。

「悠揮もファースト見るのか？」

「いいえー、もう見たよ」

「えっホント？ なんだった？ どんなの？」

「お前な、見る前にネタ聞いてどうするんだよ」

「……でも原作を読んだ人は、だいたいの話知ってるよ」

「そうか、お前は原作読んでないっけ。今度貸そうか」

「いいなあ俺も借りたい」

「じゃあジャンケンで」

よし、サンマな！ いや普通にジャンケンでいいっしょ？ じゃあサンマが普通のジャンケンか決めるジャンケンしようぜ！ いいよそんな面倒なこと！ とまあ、彼らはくだらないコントを繰り広げている。

……見てて飽きないよ。

「じゃあ稲橋君って一人で来たの？ 電話かけたけどいなかったって伊藤君が言ってた」

と、いきなり質問が来た。ぼーっと見てたから誰に聞かれたのかわからないけど……

「うーんとね、あっちの方に連れが」

僕が指さした方を総勢十数人が一斉に見る。その先には、かなり楽しそうに商品を見てはしゃぐ親子と、パンフレット持ったままピタリと固まっている知り合いが。

「ああ、古館も一緒か。そりゃそうか」

「じゃあ今度次回作が出た時は一緒に行こうぜ」

「……頑張れ」

いろいろ言葉をかけてくれながら歩み去るみんな。……その後ろ姿を見て、ちよっと楽しそうだと思って心寂しくなったのは悪いことじゃないはず。

……というか今更だけど、頑張れって何を？

「おー兄ちゃん！ これ買って！」

「これ買った！ の間違いじゃなくて？」

「ううんーこれ買って！」

「母さんに頼め！」

言いつつも近付いて行って、悠奈が持っているものをちょっと見てみる。

《ファースト第2弾記念ポスター 1680円》

「無理」

「えー？」

「なんだその声は。だからさあ、そんなに持ってないんだって」

「じゃあこれ」

隣から悠介がやってきて、片手に握った何かを僕に見せる。

《ファーストボールペン2本セット 952円》

「……なあ、あのさ。僕を虐めて楽しいか？」

「駄目なの？ ちえー」

「母さんに、頼め」

「お兄ちゃん頼んで」

「自分で言いなさい」

さっきの頑張れの意味がなんとなく分かってきた。言ってくれたのは誰だか分からないけど。きっとそいつも同じような苦労を知ってるんだろう。誰だか分かったら今度同盟組もう。

母さんの元へトコトコと走っていく2人を眺めていたら、今度は後ろから声がかかった。

「……おい」

「はい？」

そこは美奈、「ねえ」とかでしょう。何バリバリ男言葉使ってるだよ。

「……ねえ」

何で言い換えたんだよ。聞こえたのか？ まさか！

微妙に恐怖している僕の気持ちなど露知らず、美奈はぐいぐいと何かを押しつけてくる。最初は単なる嫌がらせかと思っていたのだが、やがて美奈が商品を握っているのだと気付いた。

「おい、それまだ買ってないだろ」

「買う」

「そう」

「買うから金出せ」

恐喝か。

美奈が持っているのもボールペンだ。だがこちらはだいぶ丁寧に作られているのがよく分かる。しかも、1本1000円。ボッタクリもいいところだろ。

「何でまた？ ていうかそれ……自分で買わないの？」

「奢るって言った」

もしかして前売り券の件だろうか。

「え？ ああ……でも僕は言ってない」

「……」

グサッ。

「わ……分りましたよ……」

ちよつと軽く返したただけなのに、美奈はボールペンを突き刺してきた。かなり痛いが我慢して、僕は財布を取り出すと、美奈の手を強引に掴んで掌を上

……。

ばっちん！

「痛い……ッ」

いい音と共に、僕の手は思い切り叩かれた。弾みで掴んでいた美奈の手が離れる。

痛い。

赤い。

僕が何したって言うんだよ。

「触るな」

はいはい、すいませんでしたと。

……ていうか叩かなくてもいいだろ。すごく痛いんですけど。ほらまだじんじんしてる。

そんな僕の心境などお構いなしに、美奈はぐいと掌を突き出してくる。超傲慢な態度で。

「ちよつと待って」

僕は財布をひっくり返し、952円を美奈の掌の上に落とす。中にレシートの切れ端が混ざっていたのを見て美奈は眉を寄せたが、まあお気になさらずに。

「48円と、あと消費税は自分で用意してくれる？」

「……ちっ」

……露骨すぎる。

でも仕方ないだろう持ってないものは持ってないんだよ。ほら、無い袖は振れぬと言っでしよう？

「役立たず」

おい、それはひどくない？

「ひどいよね」

「何が」

レジへと向かいかけていた美奈の足を止めてしまった。

いいよ独り言なんだから、お気になさらずにだっば。

「ライトニックガンだよね？」

「えー違うよ、ライティングガンだったよ」

「そうかしら、お母さんにはランニングガンって聞こえたんだけど」

僕が歩いている道の少し前に行く、ファーストに出てきたアイテムの名前で議論中の僕の家族。

で僕の歩いている道の少し後ろに行く、片手でボールペン回しをしている僕の義理家族。

「……変人ばっかし」

む？ と顔を上げた美奈には聞こえたみたいで蹴られたが、前の人達は話に夢中すぎて全然聞こえてないようだ。

馬鹿、馬鹿、ストップ！ 赤信号だって！

「ライティニーガンとか……違うなあ」

「ラティスナイガンだったような」

「えーやっぱりお母さんはランキングガンだったような気がするわね」

どんな銃だ。

僕は赤信号の横断歩道を渡りかけた危険人物達の服を掴んで溜息をつく。

正確にはライティニーでもラティスナイでもなく、ライトニングガンなのだが、ここで答えを教えると可哀想だから黙っておこう。

信号が青に変わり、僕は掴んでいた服を放す。何事もなく歩き始める親子。……もしかして気付いてないんかよ。

「……鈍感すぎる」

バコッ。

「痛い！ よくもボールペンケースで殴ったな！ ていうか美奈に向けて言った台詞じゃないから！」

「知ってる」

「嘘つけ！」

空からとはいえ硬いものは痛いんです。

僕は美奈の手からさっとケースを奪い取る。

「……」

取られたと理解した瞬間、美奈は何も言わず、片手で回していたボールペンを恐るべきスピードで突き出してきた。

「うわ!?!」

その稲妻の槍みたいな危険な一撃を、思わず後ろへ飛んで避けた僕は

ガドン。

硬いコンクリの電信柱に、思い切り後頭部をぶつけた。

「……!」

体中にぐわんぐわんとした衝撃が走り、とても立っていられずに僕は膝を突く。ケースの方はというと、僕の手を離れた瞬間に美奈がしっかきキャッチしていた。

頭を押さえながら突っ伏している僕をちらりとも見ずに、美奈はさっさと横を通り抜けて歩いていく。

心配はしてくれないんだね。分かっていたことだけど。

「……」

少し置いて。

とりあえず頭を揺らさないように（揺れると痛いので）気をつけて起き上がるうとしたところで、地面に誰かの影が落ちたのに気付いた。

顔を上げてみれば、またまた美奈だった。本日3回目。

「遅い」

「……ごつめんねえ、遅くて。ちょっと頭蓋骨が割れてるんで動けないんだよ」

バチン。

言った途端、手の平で思いっきり頭を叩かれた。わざとやるのやめてくれよ、痛いんだって！

「割れてない」

「そりゃそうだよ、本当に割れてたら会話なんかできないから」

「早くしろ」

「先に行っていていいよ。後からのんびり歩いてくから。できれば母さん達に言ってくれろと助かるけど」

憎いはずの電信柱に頼ること立ち上がった僕は、美奈にお願いをしてみる。

けど。

「絶対言わない」

美奈は正面から拒否すると、スタスタ歩き出した。

……だったら、何で戻ってきたんだよ。

「分かった急ぐ！ から置いていかないで！」

僕は一生懸命後頭部の痛みと格闘しながら美奈を追いかける。頭がガンガンに響いてる状態っていうのは、かなり歩きづらいものだ。熱が出た時を想像すると分かりやすいだろう。三半規管あたりにまで衝撃がまわってるのかも。

珍しく、美奈はちょっと止まってくれた。

「……何」

「え？ 別に何も？」

「っそ」

「何か？ あ、ありがとう希望ですか？」

「うるさい」

「待っていてくれてありがとう」

「黙れ」

言葉くらい受け取ってください。拒絶しすぎ。そんなに僕のあり

がとうは嫌いですか。

嫌いですよね。変なこと聞いてごめんなさい。

ああでも。

「そつだなあ、明日早く起きて……」

「は？」

「起きて、それで」

「……」

「……うーん」

「何」

マズい。美奈がどんどんどんどん不機嫌顔になっていく。

「いや、別に！ 今度は僕が用意しようかと思って思ってただけで
すごめんなさい！」

「意味分かんない」

「……そつだよね。」

『日記』 # 1

4月1日 晴れ

今日は始業式。

悠揮はまた寝坊。昨日の夜に、明日は学校だからなってお母さんにさんざん言われてたくせに、寝坊。

何のための目覚まし時計か、そろそろ学習しろ。

結局始業式に間に合わなかったのに、先生は大目に見て遅刻扱いにはしないって言ってた。

甘い。

悠揮には一度遅刻をさせて、早起きの大切さを教えてやればいい。

それから、映画を見に行った。

ファーストとかいうやつ。

ファーストファンタジーワールドストーリー
1stじゃなくて、空想世界の物語とかいうらしい。長いし紛らわしい。

私も面白いとは思ってたけど、悠揮の家族、とくに悠介君と悠奈ちゃんは燃えすぎ。

大変だと思った。

あと、映画は悠揮と2人で座って観た。

だけど悠揮はあまり意識してなかったみたい。

足を踏んでみたりしたんだけど、全然気付いてなかったし。

2人で映画を観たのはずいぶん久しぶりなんだけど、関心はゼロっぽかった。

前売り券、買っただけ損したかも。

『日記』 #1 (後書き)

これでチャプター1は終了です。

> i 2 4 9 7 4 — 8 7 3 <

2 - 1 お花見勧誘（前書き）

チャプター2に入ることができました。これで2月中にチャプター2を公開するという目標を（何とかギリで）達成することができて一安心です。でもチャプター3を3月中に完成させるのは無理です。どうしたら執筆のテンポって上がるんでしょうね。

2 - 1 お花見勧誘

「ねえ、お花見に行かない？」

授業が終わり、途端に睡魔に襲われてうとうととしていた僕の頭上から、そんな声が降ってきた。

誰です？ とぼんやりと顔を上げればそこに、クラスメイトの少女が。

作利川楓奈さきかわ ふうな

1年の時に知り合った大人っぽい女の子だ。今はその長い黒髪を先の方で緩く束ねているだけだが、部活の時はポニーテールにしている。それがまたよく似合う。

背丈が僕よりもほんの僅かに高い（つまり背が高い）ことを除けば、特にこれといって大人っぽい点は無いんだけど、総合的に見ると大人っぽいという不思議な人だ。……もつとも同級生の視点から話だけだね。

僕は数回ばちばちと瞬きをする。

本当は眠いしここで美奈だったら無視を決行（そして蹴られる）のだが、相手は作利川なので、僕はゆっくりと体を起こすと首筋のあたりを軽く搔きつつ、反芻して訊ねる。

「お花見って？」

作利川は、そうそう、とばかりに目を輝かせて僕の机に両手を着き、一気に言った。

「あのね、夜桜町の人気お花見スポットを絵理えりが見つけてきてくれてね。知ってる？ 夜桜町。桜の観光地としてこの辺で有名で、ピクがこの頃ってことだからみんなで行こうよって話になって」

「絵理えりって、追滝おいたきのこと？」

「そう」

「ふーん、それで何で僕に？」

「いやーそれがさあ、今日は坂原君さかはらとか新井君あらいは用事があるみたいで、男子が少ないんだ。女子だけでもいいけど場所取りとかは男子がいてくれた方が心強いじゃん」

「ちょっと解説すると、坂原も新井も、ついでに追滝もこの2・1のクラスメイトだ。あ、追滝は女子。」

「ていうかさあ……桜見に行くのにどんな事件に巻き込まれることを想像してんだ。」

「今時場所取りするのに難癖付ける人なんていないよ。」

「それと私たちが買い物行ってる時に場所守っててもらおう」

「……男子の役は置き石か」

「ぐつたりと言う僕に、作利川の方はにこつと笑って続ける。」

「それだけじゃないよ。荷物持ち」

その表情を見て、僕は心の中で溜息をつく。あんたは結婚したら夫を一生尻に敷いてそうだね。未来の夫さん、ご愁傷様です。

……ああでも、美奈よりはマシだよな。

僕は行く気ゼロになって再びぐてーっと机に突っ伏す。その様子を見て、作利川は今更少し慌てたようになって付け加えた。

「いやいやでも、でもね、お弁当はちゃんと私たちが作ってくるから、そんな気落ちしないで」

「は？ 弁当？」

怪訝な顔で聞き返した。

だって今は昼食を終えて、5時限目が終わったところだ。弁当なんかいらないはず。

おやつ？ おやつに弁当なんか持ってくる奴がいるか。

と頭の中だけで一人問答していた僕に、作利川は、何を言っているという顔で教えてくれた。

「だって夜桜町に行くんだよ。夜桜。どうしてそんな地名が付いたと思うてんの、夜桜が綺麗だからに決まってるじゃん。それを見に行くの。帰るのは9時くらいになっちゃうからさ」

「あーそーですかー。行つてらっしゃーい」

「……何そのやる気無い返事。稲橋君も行くんだよ」

えー、と僕は顔だけ上げて反論する。

「別にいいよ桜なんて。門限破るってことでうちの両親にも頼み込まなきゃいけないし。春の花ならそこら辺のタンポポでも見てればいいじゃん」

「雑草と桜を一緒にするな」

「なんだと。それは春の風物詩であるありとあらゆるツクシやタンポポに対して失礼だろ」

「あんだこそ桜に失礼でしょうが」

桜がなんぼのもんじゃないあ！ と僕は叫び返す。

そうだ、僕は幼稚園くらいの頃に一度家族で花見に行ったことがあります。桜が綺麗だったのは認めるけどね、弁当箱の中に花びらがいくつもいくつも落っこちてきて傘を差さないと昼食が食べれなかったんだよ。花吹雪も度が過ぎれば埃の雨と一緒になんだよ！

ていう感じでわーわーと言い争いをしていた僕らだが、ふいに、作利川は肩の力を抜いた。

「……そう。なら奥の手を使おうかなあ」

「はい？」

何ですかそのやられかかったボスキャラみたいな台詞。

僅かに危険を感じて僕が椅子を引くと、にまっと、作利川はあま

り友好的ではない暗い笑みを浮かべる。

「実はねー、さっき美奈にも一緒にどうかって誘ってきたの。それでOKもらったから、もし稲橋君が意地でもテコでも動かないって言っなら、美奈に蹴っ飛ばしてでも連れてきてもらっから」

「わ、分かったよ！ 行きます！ 行くから美奈に言うのはやめて！」

僕は背をビンツと立てると、慌てて作利川を制止した。

奥の手っていうか必殺の一撃だ。

美奈のことだから、そう言われれば僕のことをサッカーボールみたいに扱って連れて行くだろう。そしたら僕は着いた途端に病院に行く羽目になる。

作利川は、にっこー、というさつきとは正反対の笑顔を見せた。

「それじゃあ、駅に4時集合ね。遅刻したら罰金2千円」

金額が微妙にリアルなんですけど！

「あとまあ、途中で桜饅頭とか売っているらしいから、2000円くらいあった方がいいかも。持ってこなかったら罰金3千円ね」

なんで遅刻より財布持ってこなかった時の罰金の方が高いんだよ！ 奢らせる気か？ そうなのか！？

ていうか僕一文無しなんですけど！

それじゃあねー、と言いたいただけ言っ作利川は自分の席へ戻って行く。ちよつと待って！と叫ぶが、作利川は振り向いて手を振るだけ。

その姿を目では見つつ、もう既に僕には何も見えていなかった。財布がなかったら罰金3千円……。不条理すぎるけど……。

「た、大変だ……」

「何が」

背後から、予想もしていなかった返事が聞こえ、僕は思わず10cm程飛び上がって膝で机を打ち上げてしまった。

痛む膝を押さえつつ振り向けば、そこにはやっぱり美奈がいた。

しかも怒ってる。……ように見える。

「何でもないです」

「嘘つけ」

「嘘じゃないです」

「顔に出てる」

「顔じゃないです」

「意味分かんない」

……確かにね。

僕はある意味絶望的な表情を見せて美奈に教えた。

「財布持って行かないと罰金3千円なんだって」

「あつそ」

……自分で聞いていてその反応は何。しかもあつそとか言いつつまだ睨んでるし。僕が何か悪いことしましたか？

「だから僕は大変なんですね。君の相手をしている暇もないくらい。だからさっさとどっか行

ズゴ。

遮るように、美奈の鋭い一撃が僕の胸の辺りと真ん中を直撃した。

本当は、「どっか行ってください怖いし」と締めくくろうとしたのだが、伝えきれずに僕はノックダウン。体力無くてごめんなさい。でも僕は割と体強い方のはずなのだ。美奈が強すぎるだけ。

「雑魚」

それ言つな。

僕は何とか調子の狂った肺で呼吸をしつつ、胸を押さえて体を起

こしかけて……痛くてまた屈んだ。
床を見つめたまま、美奈に話しかける。

「美奈は財布　　じゃなくて2000円持ってるわけ？」

「当たり前」

そうですか。持っていない僕は当たり前の対象から除外されるわけですね。

「持っていないの」

美奈の方から質問がきた。

「この前900と何円が使い切ったからもう無い」

「絶対貸さないから」

分かってるよそんなん。いちいち改めて言わんでもいいです。

というか貸して欲しいなんて一言も言ってますからね。本当のこと言ったら貸してくれた方がありがたいけど、でも美奈には頼まないよ家族の誰かに借金するよ。

「でもそういえばさあ、美奈って花見初体験？」

びく、と美奈の指先が動いた。

「……」

……返事のもりかい。

「そっか。ねえ花卉はなびり占うらひいって知ってる？」

「知らない」

今度はまともな返答を受けた僕は、そのまま続ける。

「落ちてくる花卉の中で、破れたり汚れたりしてない綺麗なのを選んで、そこに好きな人の名前書いてとっておくと恋が叶うらしいよ。確率は花卉の綺麗さに比例するとか何とか」

情報源は悠奈だ。学校の女友達の間で話題になってたらしい。

「迷信」

……一言で切り捨てるなよ。

「でさ、僕これ実際にやったことあるんだ」

「で？」

「名前書なまえかこうとしたら花卉が破れた」

「馬鹿」

馬鹿言つな。

「美奈もやってみたら？ ほら、美奈って地の性格が荒々しいからこうたよいうの頼たよんないと彼氏とか一生できないんじゃない」

ゴキヤ。

思い切りからかい半分に言った途端、美奈の拳2発目が今度は上から下へ振り落とされ、僕は自分の膝で肺を圧迫して酸欠にまで陥った。

2 - 2 待ち合わせ

僕は今、地下鉄駅前の広場に突っ立っている。

正確に言つと、駅舎の壁にちよつともたれて体重を預けた状態。

僕がここにいる理由は一つ、花見に行く他のみんななどの待ち合わせです。

格好は春らしいラフなスタイルで決めてみました。でも帽子を持つてこなかったのは失敗だったかもしれない。日差し強いし。荷物として軽く肩に掛けているナツプザックの中には、本当に必要最低限の物しか入っていない。母さんに持ってけと強く勧められたから、シートだけは嵩張る^{かさば}点を許して特別に入ってるけど。

花見に行く予定なのは作利川を初め、追滝、トシ、それに古谷^{ふるや}（映画館で出会った知らなかった子、作利川が紹介してくれた）。あとは僕と美奈の合計6人、だそうだ。

隣の方には、これまた涼しげで、活発そうな格好の美奈が壁にもたれている。美奈はすっかり帽子を持ってきていた。顔さえ見えなければ、まるで男子だ。

僕と美奈はそもそも家が同じだから待ち合わせの必要がないのだけど、美奈は駅前に着いた途端、僕から少し離れたところに落ち着いた。

『仲が悪い知り合いにも見えるし、赤の他人にも見える』距離だ。

まあ、何故距離をとるのか聞くなんて野暮だし、この頃はもう気にもならないので僕も美奈をほつといて回想をすることにしよう。

僕が家に帰った時、家では何故か大掃除をしていた。

母さん曰く、「掃除と大掃除の違いなんて微々たるものよ」とのこと。……よく分かんないけどみんなで広範囲の掃除をしたから大掃除なんだろう、たぶん。

そのブーム(?)に便乗して、僕も部屋を軽く掃除していたら、なんと机の下から2年前のお年玉がひょっこり出てきた。普通の何の変哲もなく、筆ペンで「悠揮くん」と書かれたお年玉袋の中には、五千円札が一枚。

お年玉らしく三つ折りにされた五千円札を見た途端、僕は埋蔵金でも掘り当てた気分になった。スケールは全然違うけどね。

これで、僕は罰金を払うとか煩わされる必要が無くなったわけだ。

「うわーラッキー！　と思わず叫んだ途端、美奈に、うるさいって殴られたけど。」

そうして掃除の終了後、今度は二人で花見に行くことを母さんに伝えたのだが、予想通りとでも言うべきか、側で聞いていた悠介と悠奈が駄々をこねてきた。

『てかどうしていつも兄ちゃんばっか出かけるのさあ』

『どっか行きたいなら自分で出かけるよ』

『どうしていつもお兄ちゃんばかり誘われるの』

『僕の友達だからだよ』

という感じで。

最後は苦笑しているお母さんに一人を押さえてもらって家を後にした、というわけ。

「遅い」

回想というか振り返りを終えた時、タイミングを測りでもしたかのように美奈の声が聞こえた。

そつちを見れば、美奈は若干不機嫌そうに腕を組んで僕とは反対方向を向いている。

あれで話しかけているつもりなのかは分からないけど、とりあえず僕はフォローしてみた。

「まあ、まだ待ち合わせの5分前なんだし」

「悠揮には何も言っていない」

「独り言かよ。声でかいんだよ。」

……てか、せめて文句言う時だけでもこっち向けよ。

それにしても、と僕は額の辺りで手を翳してその辺を見回す。

確かにみんな集まるのが遅い。トシや作利川はまだしも、追滝み
たいな真面目キヤラは待ち合わせ時間の10分前には来ていそうな
もんなのに、未だ駅前広場には誰の姿も見当たらない。

4月とはいえ、石畳で完璧に舗装された広場にいると、正直暑い。

「ねえ美奈、暑くない？」

「暑い」

聞いてみると、あっさり肯定の返事が戻ってきた。

「なかはい中入る？」

「一人で入れば」

「暑いんじゃないの？」

「別に」

「えー、だってさっき暑いって言ってたじゃん」

「うるさい」

でた。

この台詞を発したあとは、美奈はもうとことん意地になる。揚げ
足を取るつと何をしようと。そして、しまいには実力行使で殴りか
かってくるのだ。

……ホントに。
小学校低学年の頃が懐かしいなあ。

美奈が今みたいないな険悪かつバイオレンスな性格になってしまったのは、やっぱり小4の時のあの出来事が大きいと思う。僕は捨てられた事が無いから分からないけど、親からそういう扱いを受けたらかなり傷付くだろうってのは凄い想像できる。極ストレス、とでも言うのか。

実際、美奈はそうなってる気がする。あまり笑わないし、いつも僕の家族に対しても遠慮気味だし。
それで非行に走らないあたり、実はずいぶん偉かったりするのかも。

僕は美奈の後ろ姿を眺めながら、考えた。
今の美奈の表情は僕には見えない。たぶん、みんな遅いと怒りながら取り留めのない事を考えているだけだろう。そうに違いない。だけど、もしかしたら、もっと別の事を思い巡らせている可能性もある。

僕には、美奈が何を想っているのか分からない。
幼馴染みだけ。
分かれるものなら、分かりたいけど。

「ねえ、美奈」

返事はない。
美奈は振り向きもしない。

「……」

「……何」

と、数拍置いて返事が戻ってきた。もちろん言葉だけで、あつちを向いたままの返事。

「……」

「何？」

声が若干苛立ったような色に変わった。

自分で声を掛けておきながら、僕は慌てて言う。

「あ、いや、何でもない」

何だよバカ、みたいな台詞が返ってくるか、あるいは石でも飛んでくるかと僕は覚悟していたが、予想に反して何も来なかった。

ちら、とほんの一瞬だけ、美奈の顔がこっちを向いた。

「あつそ」

それだけ言うと元に戻った。

『ちょっと、今どこにいるの!』

人気の少ない駅前広場に携帯の呼び出し音が鳴り響いた。

そして、通話ボタンを押してみたところ……第一声がこれだった。

相手は作利川。

「どこって、あいな」

『今何時だか分かってる!?!』

半端無く声がでかい。

声が漏れすぎて、隣の美奈も何事かとこっちを見ている程だ。

「分かってるよ、えーと……4時36分」

『分かってんのかあ! 待ち合わせの時間忘れてんでしょ!』

「はあ!? 忘れてんのはそっちじゃないのか、こっちは4時の5分前くらいにはもう来てんだぞ」

『どこに!?! 言っとくけどどちらは10分前には来てたんだからね! てゆーか本当にどこにいるの!?!』

軽く張り合った台詞を放ちながら、作利川は大音量で矢継ぎ早に言葉を飛ばしてくる。

「だから駅前広場」

『バカあ！！』

「何だよでかい声出すなよ！ もとからうるさいんだから」

『駅前じゃなくて改札口前！ だからあれほど念を入れて何度も何度も確認したのに！ ほんつともうバカ！ いいから後30秒以内に来なさい！』

作利川の大きな大きな声は、言いたいことをガンガンぶちまけるとそのまま通話を切ってしまった。

ツーツーツーという虚しい終了音が耳を流れていく。

僕は、とりあえず隣を見た。

「……聞こえた？」

「全部しっかり」

美奈は不機嫌極まりない顔で睨んできた。僕は思わず足が竦む。ちよ、ちよつと待って、何でこつち迫ってくるんだよ！

「……お前のせいだ」

「え、ちよつと怖いんですけど」

「悠揮が確認しないからッ！」

銃声みたいな怒号と共に、ものすごい速さで拳骨が飛んできた。

僕は慌てて身を屈めてかわしつつ、必死で美奈を宥める。こんな事をしている場合じゃないんだって、一刻も早く作利川たちの所へ行かないと。

「行くよー!!」

僕は美奈の空いた方の手をガシツと掴むと、そのまま引つ張って勢いよく駅に入った。階段を駆け下り、ひたすら改札口前を目指す。後ろで、美奈が「ちよつ……止まれこの野郎……ッ」とか何とか言っていたような気もするけど、この時だけは僕は待ち合わせを優先した。もう美奈がどうなっているか分からない。

改札口前広場に辿り着いた途端、僕は急ブレーキをかけて停止した。

そして、明らかに勢いを殺していないだろうと思われる美奈のタックルが背中に激突して3mほど吹っ飛ばされた。

「遅い！」

吹っ飛ばされた先には、お怒りの表情の作利川が。

作利川はずんずんと歩いてくると、全力疾走+美奈のタックルで酸素不足になって喘いでいる僕に人差し指を突きつけた。

「罰金20000円！」

「う、うめ」

「ごめの言葉すら満足に言えない僕。

「やーっと来たかー」

怒り心頭な作利川とは対照的に、のんびりした声も聞こえた。

トシ。

「いやこの遅刻大王の俺より遅いとか、お前すごいんじゃない？ 近いうち悠揮の名は遅刻大王を倒した遅刻帝王として学校中に知れ渡るだろうぜ」

いろいろと突っ込みたいところだが僕には言葉を出すための酸素が足りない。

「まあでも遅刻っていうか、要はニアミスってだけでしょ？」

「ほら楓奈もあんまり怒らないで」

古谷、追滝。二人もそれぞれ、とても優しいフォローの言葉をかけてくれた。なんか泣きそう。

だがしかし作利川は。

「いや許さん。そっちが遅刻帝王として来るなら、こっちは厳守界王としてその根性叩き直してやる」

……大丈夫か？

僕はやっところ深呼吸をして言葉の原料を確保すると、まずは謝罪の言葉を発した。

「本当ごめん。ちゃんと話聞いてなかったみたいで」

頭を下げると、さすがに作利川も怒り熱を冷ましてくれた。

「ま、いいか」

「うん、ちゃんと来てくれれば大丈夫だからいいよ」

「……よくは、ないけど」

美奈てめえ。

よくも古谷の心優しいフォローを潰してくれたな。

ていうか、美奈だってちゃんと聞いていなかったから待ち合わせの場所が違うこと分らなかったんだろ。

とつらつらと考えている僕だが、それを言葉に出すと美奈に吹っ飛ばされる羽目になるので心の中だけにしまっておく。

「……役立たず」

美奈てめえ、まだ言うか。

「美奈だって気付かなかったんだからおあいこだろ」

「何となく違う気がしてた」

「嘘つくなよ」

ちよつと言い争いに発展しかけたが、僕らの口論は、バン！という大きな音で遮られた。

見れば、追滝が読んでいた本を勢いよく閉じたところだった。

「君子は諸を己に求む、小人は諸を人に求む」

訳の分からないことを言われ、ちよつと戸惑った僕らに追滝は小さな笑みを見せた。

「いいから早く行こうよ。もう電車2本過ぎしてるんだから」

2 - 3 激突ペットボトル

【次ハー、夜桜町ー、夜桜町ー。才出口八左側デス】

電車内に流れる、機械的なアナウンスと共に電車の左側の扉が一齐に開いた。

扉のすぐ傍にいた僕は、作利川達に押し出されるような感じでホームに降り立つ。

……で、降りて立ち止まった直後、誰かに踵を蹴られた。……たぶん美奈だ。すぐ後ろにいたし。

「着いたー？」

「まだだよ。あっちあっち」

そして、ホームから改札口へ向かう。

夜桜町駅は意外と人が多かった。ということは、夜桜町は結構有名なレジャースポットなのかもしれない。僕は聞いたこと無かったんだけどね。

改札を抜け、駅を出ると、この駅にもそれなりに広い駅前広場があった。中心にでかい樹が植えてあるところを見ると、これはクリスマスに凄いことになるパターンだな。

「で？ 次はどっちに行くの？」

作利川が誰にもなく聞く。

……おまえ知らないのかよ、あんだけ行く気満々だったくせに。

「ちょっと待ってね」

応えたのは追滝。真面目キャラの彼女は、ポケットから小さな手帳を取り出した。何やら細かい文字がびっしりと書かれている。

追滝は目を細めて手帳を前後に動かしながら何かやっていたが、しばらく後にギブアップ。

「だめだ、やっぱり眼鏡が無いと見えないや」

普段の追滝は眼鏡をかけている。クラスに良くいる真面目キャラそのまんまの見た目だから、初めて会った時は逆にすごく覚えやすかったよ。黒髪ショートヘアの髪型からも少し想像つくように、運動だつてそれなりにできる人だ。

弱点といったら、極端に視力が低いことくらいか。

「どれ、見せてみ」

そう言つてトシが追滝から手帳を受け取った。トシは前も言ったけど、スポーツマンだから視力はいい。つまり細かい文字だつて読めるはずなのだが。

受け取つてすぐさまトシは手帳を閉じた。

「……あー、字が綺麗すぎて逆に読めねえ」

「そんな訳あるか」

ここ突っ込みどころだよな。間違えてないよね。

字が綺麗すぎて読めないとか言つてたら、新聞も読めないじゃん。

「じゃー悠揮読んでみる」

トシがこっちに手帳を放る。

僕としてはこの手帳は追滝の物なんだから、どうしてトシはそう
適当に扱えるのか不思議で仕方ない。落としたらどうしてくれるん
だよ。追滝は普通に許してくれそうな人だけだ。

……もしかしたら、僕が物を慎重に扱うのは美奈のせいかもしれ
ないな。

さて、件くだんの手帳を受け取った僕はそれを開いてみる。そしてまず、
字の細かさと正確さ、その量に仰天した。

「何これ？ 虫眼鏡で見ながら書いたの？」

「あはは、そんな訳ないよ。たぶん眼鏡のせいじゃないかな。ほら、
文字とか大きく見えるから」

どこからともなく眼鏡を取り出し、それを掛けながら、追滝は笑
って答えてくれた。

僕も別に目は悪くないんだけど、これは確かに読めない。

「な、読めないだろ？」

言った通りだろ的な顔でトシが言うので、僕は少し対抗して言っ
た。

「綺麗すぎるっていつか細かすぎてね」

「それも含めての『綺麗すぎる』だよ。理路整然とかそういう意味の」

「ちなみに理路整然の意味分かってる？」

「いや、さっぱり」

あっけなく認めたとし。やっぱり頭の中身がスポーツ知識で占められているところなるのだ。

まあ僕も何となくの意味しか知らないけどね。……今度調べておこうかな。

と、今度は後ろから僕に声がかかった。

「じゃ私にも見せて？」

「え？」

振り向けば、いつの間に僕の後ろにいたのか、古谷ふるやが可愛らしく小首を傾げている。

ちなみにその隣では、美奈が腕を組んで、駅前広場の道案内らしき看板に寄りかかっていた。

僕の視線に気付いた美奈は不機嫌そうな半目で言う。

「……何見てんの変態」

「あのなあ」

別に見てないって。ちょっと目線がそっち行っただけだろ。

どうしていつもいつも突っかかってくるのかなあこの人は……。

「ねえ、ねえ、稲橋君」

呼ばれ、僕の意識は古谷の方に戻った。

古谷は、誰でも第一印象で「可愛い女の子」と言いそうな女の子だ。

アニメでたまに出てきそうな、茶髪のショートで子供っぽい顔つき。髪は美奈よりも明るい色。これは本人が認めているのだが、染めてる。地毛が黒と茶色と金色が混ざって変だから、だそうだ。さらには、名前が古谷こみや味羅。珍しい名前で、かつ小動物っぽいイメージだと思う。

フルタニじゃなくてフルヤですっ！ は、本人曰く自己紹介の時のお決まりの台詞だとか。

手帳を渡すと、古谷は鑑定士っぽい大げさな仕草でそれを開き、「ふむう……」なんて唸り始める。

「どっ、読める？」

僕の横までやって来た追滝が聞く。古谷はすぐには答えず、しばらく手帳と睨めっこしていたが、やがて言った。

「読めるけど、どこ読めばいいのか分からないやー。あっはは」

……あっはは、だって。この台詞は古谷が言うから似合っん

だろう。他の奴が言ったらきつと引く。

たとえば美奈とかね。もし美奈がこんな言葉を言った暁には、僕は引きすぎて腰が抜けるね。

「ていう訳でギブです。にしても絵理ちゃん字綺麗だねえ」

「そうかなあ」

古谷に手帳と一緒に褒め言葉を返され、追滝はまんざらでもなさそうにしつつ照れていた。

その時、ひょいっと話に作利川が割り込んできた。

「でさあ、結局どっちに行けばいいの？ そろそろ動かないと寒くなってくるんだけど」

……は？

「今、春だから」

「4月だから」

「4月の暑い日だから」

「ちなみに気温19 だから」

僕とトシと古谷と追滝の4人に同時に突っ込まれた作利川。唯一ノってこなかった美奈は、さっきと全く同じ体勢のまま、顔だけがそっぽを向いていた。

「『花見場所は主に公園、川沿い、その他至る所で行うことができます。公共の場所であれば全て立ち入り自由です。また、夜桜が目的なら川沿いをオススメします。ライトアップも行われるので、より一層夜桜を楽しむことが出来るかと。』」

歩行者用の道路（つまり遊歩道）を歩きながら、追滝が手帳を読み上げている。それを聞いているのは主に僕と古谷だけで、作利川とトシは後ろの方で遊びながら歩いているので多分聞いていないだろう。美奈はといえば、ポケットに両手を突っ込んだまま何かムスツとした感じで歩いているので、こちらも聞いていないだろう。

ていうか、公式サイトだかパンフレットだか知らないけど、文章、丸ごと書き写しただろ。……それじゃ意味無いつて。要点だけメモしろよメモ。僕は何も準備してないんだから偉そうなことを言えないのは重々承知してるけどさ！

僕の思念に気付くはずもなく、追滝は続ける。

「『また、花見では花火大会と異なり、屋店を出す許可は出ておりません。食べ物や飲み物が必要な場合、事前に用意しておくか、最

寄りのコンビニなどで購入しておいてください。尚、持ち込んだ物は全て自己責任で処分してください。ポイ捨ては禁止です。発覚した場合、罰金200000円を請求します」

罰金200000円で……作利川みたいだな。

てかこれ、作利川が書いたんじゃないや無かるうな。

「違います。これ本当にパンフレットに書いてあったんだよ」

「何で僕の心が読めるんだお前！」

「全部顔に出てるよ」

作利川はいつの間にか隣にいた。

そして読心術みたいなことを平気で言ってるのける。

ひゃー怖い。うっかり陰口なんか言ったりしたら、全部隣で聞いていそうだな。

別に陰口なんて言うつもりはないけどね。

「ていう訳で、お弁当はあるから飲み物は買っておいの方がいいかな。一応水筒は持ってきてるけど絶対足りないと思うし」

「夜までお茶じゃつままないしね」

追滝の後を作利川が続ける。

「あー焼きそばとかたこ焼きとか売ってないかねー」

お祭りじゃないっての。

もしかしたらコンビニで売ってるかもしれないけどさ。

……そうして、僕らはしばらく歩いてコンビニを見つけると、迷わず中に入った。チリーンチリーン、というコンビニ特有の入店音が僕らを迎えてくれた。

コンビニは平常時より少し人が多いように見える。やっぱりお花見効果だろう。

いいね、こういうイベントがある場所の近くにあるコンビニってさ。客がいっぱい来るって楽しいだろうな、きっと。

一足先に飲料エリアまで辿り着いた僕は、ガラス戸越しに中の商品を眺めた。

……やっぱり迷うんだよねー、こういうの。

自動販売機よりも遙かにラインナップ豊富だし。新作とか出てるとついつい惹かれちゃうし。

他のみんながさっさと思い思いの飲み物を取り出す中、僕は腕を組んだ格好で固まっていた。

「あんま迷ってる就先にレジ行っちゃまうぞ」

トシがコーヒースイダーとか書かれている茶色いラベルが貼られた奇妙なペットボトルを振りつつ、僕を急かしてくる。

「どつぞどつ自由に……。……よしじゃあ僕はこれにしよっ」

僕が決めたのは、『ファースト世界の架空飲料、<フルミツシュ>を完全再現！ 砂糖不使用、自然な甘さ！！』と派手やかに宣伝されたやつだ。

ファーストという単語に釣られたわけではない、と言ったら100%嘘になる。飲料自体に魅力を感じた訳じゃなくて、ファーストファン魂に火がついただけだ。

たった数話前の話なのに忘れた物忘れの激しい人の為に解説をすると、ファーストとは正式名称『ファンタジーワールドストーリー空想世界の物語』という作品の略語だ。僕はその大ファンである。

ちなみに、余程人気があるのか、そのペットボトルは最後の1本だった。

これ買ったら、ラベル剥がさないでとっておこうかなあ。

そんなことを考えながら、僕はペットボトルに手を伸ばし

「「あ」「

たところで、伸ばした手は誰かの掌とぶつかった。

思わず出た「あ」の声まで綺麗にハモった相手は……

「……………」

「……………」

美奈だ。

また、お前なのかと言いきそうになる自分を必死に堪えた。

何でこの間から毎回毎回もったいぶった演出の後には必ず美奈が出てくんのかねえ。ほんつとに。僕が何か悪いことでもした？

それにやっぱ美奈ってばファーストに興味あるんじゃない。違うの？ 惹かれたのは『自然な甘さ』の方？ …… そんなんどっちだつていいよ。今問題なのは、ここで美奈と鉢合わせした以上、僕はこのペットボトルを買うことができないってことだ。理由？ 自分で考えてよ、分かるだろ。

僕は瞬時に諦めを付けると、美奈に何か言われたり実力行使の被害を受ける前に手を引いた。

そうしたら。

何の冗談か、美奈も同じ瞬間に手を引いた。
まるで鏡みたいに。

「……………どうしたの？」

「……………」

「え、美奈ってばどこか具合悪いの？」

「……………ば」

「何？」

「これ、買えば」

.....。

ああ、美奈が壊れた。

こんな優しい気遣い、普段の美奈がするわけないよ。

だって例えば去年の体験学習。自動販売機で何か飲もつて話になった時、僕に奢らせたあげく、僕の分を買おうとしたら勝手に超濃いデミタスコーヒーのボタン押しやがった美奈だよ。しかもホツトだよ。

絶対おかしいって。

実はこういうシチュエーション前もあったんだ。6年の遠足準備で、僕がお菓子を買おうとしたら最後の1個で、今と同じように美奈と被ってしまったってことがあったんだ。そうしたら美奈、何したと思う？ 僕が何もしないうちに、僕のことを5mくらい靴底で蹴っ飛ばして悠々とそのお菓子買ったんだぜ。

絶対どうかしちゃってるって。

「買えばいいじゃん」

だってのに美奈は、信じられない程の親切さをこの僕に見せている。言葉はぶっきらぼうでいつも通りだけど、言っていることがもう普段の美奈と違う。

それとも、これ全部幻聴だろうか。

「……ねえ美奈、今日って僕の誕生日だっけ？」

「知らない」

ひっどいな。知らないはないだろ。

でもちよつと安心してしまった。

「じゃあどうしたっての？　ねえ、いいよこれ美奈が買いだよ」

「別に」

「ほんとやめてよ、何か怖いって。ほら」

僕は掴んだくフルミツシュ>をぐいつと美奈に押しつける。もう不気味すぎて買いたくなかった。買ったなら何かに呪われるような気さえした。

すると、美奈は。

チツ、と音高い舌打ちをすると、どこから見ても分かる超不機嫌なモードになって、僕を睨んだ。

それは半端無く恐ろしい睨みだった。

何で？　僕、失敗した？　これ欲しかったんじゃないの？

そんなテレパシーが通じるはずもなく。

「……、消える！」

鋭い一言を発した直後、美奈は<フルミツシユ>のペットボトルをものすごい勢いで投げつけてきた。当然、僕はキャッチできずに、それを顔面で受けた。

痛み爆発。

「イツ………てえ〜ツ!!」

僕はペットボトルと大激突した顔を押さえて蹲つまずった。受け取り損ねたペットボトルは、中の液体が音を立てながら転がっていく。だが拾うはおろか、追いかけることすらできない。そんな余裕はない。

「うわあ、いつたいよ今の……。稲橋君だいじょうぶ?」

ぜんっぜん大丈夫じゃないです。

少し押さえる手をずらして辺りを見てみると、古谷が心配そうな顔で僕のことを見ていた。転がっていったペットボトルを拾ってきてくれたらしい。

美奈はといえば、結局何も買わずに店を出ていつていた。

……何なんだよ。

消えたのはそっちじゃないか。

2 - 4 怒りの理由

美奈が怒ってる。

不機嫌といういつものレベルではなく、むしろいつもと比較して「怒ってる」という表現が使えるような状態になっている。いつもなら後ろからついてくるのに、ずんずん前を進んでいるのも、怒っている印だ。

僕には美奈の後頭部から湯気が噴出されているのが見える。

……いったい何をそんなに怒っているのか、僕にはさっぱり分からないのだが、とにかく美奈は怒っている。

あーあ、超恐い。

結局、僕はあのコンビニでフルミツシュを含むペットボトル飲料を3本、スナック菓子を少し買った。フルミツシュは中身が泡立ってしまったっていたが、僕は飲み物自体にはそれほど執着は無い。ラベルさえ無事ならそれでいい。

会計を済ませて僕がコンビニを出ると、作利川と古谷が二人がかりになって、ご機嫌斜めで腕を組んでいる美奈を宥めていた。

…… どんだけ美奈の機嫌を損ねたんだ僕は。

そしてどんだけみんなに迷惑をかけてるんだ僕と美奈は。

ふと、美奈と目があつたのだが、それは一瞬のことで、すぐに逸らされた。

何を怒っているのか分からないっていうのに。

「ねえ作利川、ちょっといい？」

「はいはい何でしょう」

僕は、後ろでタンポポを探している作利川に声をかける。
作利川からは微妙な生返事がきた。

「どうして美奈が怒ってるのか分かる？」

「え？」

作利川は顔を上げた。少し返事の声が大きかった。なんとというか、過敏に反応したっていう感じがしたんだけど……気のせい？

「稲橋君は分かんないわけ？」

「ちっぱり」

「……へー、案外無粋だねえ」

にやにやと言われた。
てか無粋って何だよ。失敬な。

作利川は片手のタンポポを教鞭のように振りながら、にやにやとした表情のままに言う。

「むしろ今の美奈はいつもの美奈より分かりやすいよ」

……そーかなあ？

「ねえ絵理も分かるよね？」

僕を挟んで反対側を、手帳を読みながら歩いていた追滝に作利川が話を振ると、追滝は手帳から少し目を上げた。その拍子に軽く下がった眼鏡を元の位置に押し上げて、追滝は一言。

「分かるね」

ちら、と僕の方を向いて追加でもう一言。

「火を見るよりも明らか」

「ほらね、分かりやすいつて」

そう得意げに作利川が言うのだが、僕は同意できません。

いや、何となくなら、僕が素直に〈フルミッシュ〉を譲り受けなかったからかなあと予想はできるよ。でもそれだけの理由であそこまで怒るかね。

もしそんな理由だったら、ワガママの極みだろ。

でも試しに僕は言ってみる。

「僕がペットボトルを譲られるの拒否したから怒ってるのかな？」

すると、作利川は何だか拍子抜けしたかのように応じた。

「何だ、分かってんじゃない」

「……とすると、美奈のあの態度はそれが原因と？」

呆れ半分に問い返す僕。だってね、誰だってそう思うでしょ。
怒り過ぎつてもんだよ。

作利川は至極真面目な表情になって答える。

「そうだよ、そつに決まってるよ。ね、絵理」

またしても追滝に話を振る。

さっきと同じように手帳を読んでいた追滝はさっきと全く同じ動きで目線を上げ、さっきと同じように眼鏡を押し上げて、「そうだね」と答えた後に、やはりさっきと同じように僕の方をちらりを見た。

「ほら、理由分かってるんだから鎮めてきて」

無理に決まってるんだろ追滝さん。

何静かに人を地雷エリアに進ませようとしてんだよ。ていうかそんな目で見るとのやめてください。やめてくださいって言うてるでしょ。いや言っていないか思ってるだけか。でもそんなのはどうでもいいんです。

追滝の眼力恐いくらい強いな。何だか無言のプレッシャーってやつで責められてるみたいなの！

「絵理、絵理ってば、あんまり苛めるのはよしなさい」

状況を判断した作利川が止めに入ってくれた。その言葉に我に返ったように、通常モードに戻った追滝はふんわりとした笑みを浮かべる。

「ああ、ごめんごめん。行き過ぎた」

どっこー！

無言で突っ込む。

いや、口に出したらまたあの目線で責められそうな気がしたので………ていうか眼鏡侮れないな。

話を戻そう。

「……でもさあ、美奈はどうしてあんなことしたのかな？」

「ん、あんなことって？」

「美奈ってばあのコンビニで急に優しくなったんだよ。変じゃね？だって改札口前ではタックル受けたし、駅のホームでは踵蹴られたし、この前映画見に行った時も……普通だったし……」

どっこー！と言っ普通っていうのは、いつも通りってことだ。

まあね、ちょっと気になるといえば、この前の映画の時から美奈

がいつも通りらしくないことをしていた気もするんだけど……きちん確認のあることじゃないし。

その点から考えても、今回は明らかに変だ。

僕の問いからしばらく間を置いて、作利川はまるで遠くを見るような口調で返事をくれた。

「人間ってというのは時々自分を壊したくなるものなのさ……」

「は？」

「特にね、自分に近い人が自分にどういうイメージを持っているのか気になる時期がある。それで、気になって気になって仕方が無くなって、ロクに分からなくてもそれを覆したいって思ったりするんだよ。それを一般に、思春期と呼ぶ」

……ナニ言ってるの？

あんまり意味が分からなかったんだけど、ただひとつだけ引っかかったことを聞いてみる。

「ひょっとして作利川は何か知ってるの？」

……、あ。ちょっと肩が震えた。凶星かな。

「さあ、どうだと思っ？」

作利川はあくまで目を逸らしたりといった分かりやすい行動はせず、しかしはぐらかすように言った。

僕としては、絶対知ってると思うけどね。大方、何か相談でもされたんだろ。作利川は頼れる人だから。……間違っても、僕に何か相談をするような美奈じゃないしな。

「やっぱり、気になるよね」

分かりきった口調で言われるのは気に入らないけど、その通りだよ。

……でもまあ。

気になるっちゃ気になるけど、美奈はプライド高いやつだし。僕に知られたくないっていうのなら、僕は無理に教えてもらおうとは思わないさ。美奈の気持ちを尊重してね。

「……ホントに稲橋君は美奈に優しいよねえ」

「……だから何でお前は僕の心が読めるんだっての」

顔に出るわけ無いだろ。

「というわけでさあ」

作利川はいきなり悪戯っぽい笑みを浮かべた。うわ、何か嫌な予感。例えるなら、学校でこの人に花見に誘われた時の、やられなかったボスキャラみたいなた台詞と共にあった暗い笑みを見た時くらいの嫌な予感。

「気になるんなら直接美奈に聞いちゃおっかー」

「ちょ、聞いちゃおつかー、じゃねーよ!!
何だそれ、僕を美奈にぶっ殺させたいのか!

「僕はとんでもない提案をしやがる人から助けを求めて思わず反対側を向き

「うつツ!?」

ところが、追滝が例の追い詰める目つきになって僕を見ていた。さつきと同じ眼力半端無いモード。もはや一欠片の笑みもない。

「何なのお前ら。グルなのか!?

「ほらほら早く〜」

「冗談じゃない! 美奈の頭はまだ火山みたいな状態なんだって! せめてそれが冷えて収まるまで待つて!」

「聞いてよ!

「……気になるんでしょう?」

「だからその目は怖いって! いやお願い、頼むから御勘弁! ふつ、二人ともぐいぐい押すんじゃないって!! 君ら美奈の怖さ知らないんだって、美奈はその気になれば平気で電柱蹴倒せるんだから!」

「……。」

「あ。」

終わった。

ふと前を見れば、美奈が振り返ってこっちを向いていた。その立ち姿は僕からすれば閻魔大王のようだ。僕は恐ろしさのあまり、とても美奈の顔を直視することなんて出来なかった。

……。

「うるッさい黙れッ！……！」

雷が、落ちた。

だから御勘弁って言ったんだよ……。

2 - 5 桜文字

僕は、追滝が予定していたお花見スポットに到着した。

そこはずばり河川岸。綺麗な水の流れる浅い川を挟むように植えられた何本もの桜の樹が、ずらーっと向こうの方まで続いている。橋で途切れて見えないのだが、きつと橋の向こうにもずらーっと続いているんだろう。

後から遊びながらやってきた作利川達や、怒りつつ下を向いてきた美奈は、追滝の「とうちゃく」という声に顔を上げた。

「おわー見事な桜ですなあ」

感心したように、あちこちをきよろきよろと見回しながらそう漏らす作利川。

「そして見事にガラツガラですなあ」

で、トシは茶化した感じでそう付け加える。

言い方はあれだが、トシの言う通り、この河川岸にはほとんど人がいない。結構遠くにちらほらとブルーシートが見えるのみだ。それは対岸も同様。

「なんか見るからに人気も人気も無さそうなんだけど、本当にここのでいいの？ 実は私有地だったりしない？」

きよろきよろと辺りを見ながら不安そうに古谷が言う。

僕もちょっと同感だ。てっきりもつと凄い人混みがあるものかと思っていたんだけど……。

こんなに桜が綺麗なのに人気が無いっていうのはちょっと変じゃないかな？

だが追滝は時々手帳に目を落としながらも自信たつぷりで答えた。

「ここは真正銘の公共地だからご心配なく。えーと、この川は過桜川あきつていいいます。過ぎる桜で過桜。もうちょっと下ると流桜川いほつていう大きな川とぶつかるんだけど、実はそっちの方がお花見スポットとしては有名で桜の樹も大きいんだ。だけどその代わり人混みかがすごいから、ちょっと上流のこの辺を選んでみました」

「丁寧な解説を聞き流しつつ、僕はさっき見た橋の方を眺める。あの橋からなら、その流桜川とかいう川沿いの桜が見えるんだろうか。」

「てことはここではライトアップされないんだね」

「いいじゃん別に。自然の明かりのみで見る夜桜こそ真の夜桜なんだよ」

若干首を傾げながら言った僕に対し、作利川の返答。なんか変に説得力のありそうな言葉だな。

「今日は夜も曇らないって天気予報が言ってたから、月も出ると思っよ。いいよね、ロマンチックだよね」

「昔風ロマンな」

「もー伊藤君ってば余計な突っ込みを……」

「いやこの前音楽で荒城の月とかやったろ。そのイメージが強くてさ。……敢えてもう一度言うけど昔風口マンな」

「もー」

……よく分からないがトシと古谷が軽く言い合いながらじゃれ始めた。僕としては、口に出して言うつもりもないが、人工のライト光だろぅが天然の月光だろぅがどっちでもいい。メインは桜なんだから。

頭上を見上げてみれば、桜はいっぱい枝を伸ばして花を綺麗に咲かせていた。

今まで花見なんてそれほど興味は無かったし、桜といっても春の風物詩程度のイメージしか無かったが、こうして見るとそれなりに綺麗だ。うん、わざわざ来るほどの価値があるかどうかは分からないけど見て損はないって感じ。まるでピンク色の天井がそこにあつて、桜の花弁が剥がれて落ちてきているかのようだ。……いや、似合わない感想だったのは分かっているけど。

ちらほらと降る花弁の中には、川に落ちてそのまま流れていくものもある。

桜の雨。綺麗っていうか、なんというか、面白い。率直に抱いた感想はそれだった。

「ね、桜って面白いよねえ」

「うわっ!?!」

唐突に聞こえた作利川の声に、僕はびっくりして振り向く。作利川が僕の隣で、同じようにして頭上の桜を見上げてた。

……これで3回目だけど、どうして僕の心の中が読めるんだお前。じとーっと睨めつけてやるのだが、作利川は動じない。っていうよりこっちを見ていないので気付いていないだけかもしれない。そんなわけで再び上を向いた僕。なのだが、その瞬間を狙ったかのように作利川は切り出した。

「もし自分が桜の花弁だったら、どう思うだろうね」

……。

「あの、何をいきなり」

「こっぴつところらに咲いてると、綺麗なのに誰にも見てもらえないじゃん。でさ、向こうの方みたいな目立つ場所で咲いてると、沢山の人に見られて、それはいいことかもしれないけど、散った後は人混みに踏まれちゃうんだよね。散ってる瞬間は見るけど、地面に落ちた後の花弁は誰も気にしない。……人間ってさ、そういうところあるよね」

さらりとした口調だった。

……はあ、うん、まあそうなのかもしれないけどさ。

どうしたの? 何を感じ性豊かな現代社会を風刺した台詞吐いてるわけ?

僕が無言の疑問視線を投げかけていると、それに気付いた作利川がこちらを向いて微妙な表情を見せた。どうかしたのかと聞く前に、その顔がみるみる陰ったかと思うと、ぽつりと、聞こえるか聞こえないかくらいの声で言う。

「捨て子ってそれと同じだよね」

捨て子。

その言葉に、僕は胸を殴られたような感じがした。……どうしても、この言葉にだけは敏感に反応してしまうのだ、僕は。

「みんなさ、赤ちゃんのこと可愛い可愛いって言うじゃん。でも実際何かあった時って見て見ぬふりするんだよ。関わりつとすらないんだよね」

そう。

美奈が捨てられたというニュースがあった次の日。

美奈はちゃんと学校へ来てた。そして、みんなは美奈に質問を浴びせるわけだ。好奇心からくる興味で。

そんなの答えなくていいじゃないかって僕はよっぽどそう思った。だけど美奈は答えるんだ。

誰も同情なんかしてやしないこと、美奈も分かってたと思うんだけど。……同情っていうのは相手をやたらと哀れむことじゃない。その人の不幸と一緒になって悲しむことをいうんだ。そして当時は誰も、そんなこと、していなかった。

作利川は中1の時初めて美奈と知り合って、友達になって、この話を聞いた時はショックを受けて、それで何故か謝っていた。いい人だと思うよ、本当に。

そうじゃなかったらこの話でこんなに暗い声にはならないだろうから。

「きつとさ」

「やめようよ」

気付けば、僕は遮っていた。作利川はムツとするでもしょんぼりするでもなく、ただ押し黙る。

僕は話題になっている当事者の姿を探してみる。

そして、じゃれ合っているトシと古谷の後ろで、腕を組んでたいそうご立腹な様子の美奈を見つけて、僕は何故か無性にほっとした。

……いい加減、機嫌直せよ。

というわけで目的地であるお花見スポットに到着した僕らは、何

もすることがないので三々五々好きな方へ散って遊び始めた。この辺、小学生の遠足とそっくりだ。

せつかくなので（僕もどうせすることなんかないので）みんなの様子を見てみよう。

トシはというと、そこらの石を拾っては川に向けて投げている。

……水切りって普通もつと深い水のある場所でやるもんじゃないかな。この川は浅いから、跳ねずに川底に当たってアウトになる。でも、トシはめげていない。というかスポーツ的脳で馬鹿だから気付いていないだけかもしれない。

作利川と古谷は、宙を舞う花弁をキャッチしようかと奮闘しつつ、うまくいったらそれを川に浮かべて遊んでいる。

美奈はというと、さっきからずっと腕を組んだ体勢のまま動かない。

……あ、目が合った。睨まれたり何か言われる前に僕は目を逸らす。

追滝はというと、降ってくる花弁を集めて地面に規則正しく置いていた。魚の鱗みたいに、少し重なる形ですらりと。

「……何やってんの？」

僕の問いかけに、追滝は片手に花弁を掴んだまま顔を上げた。

「何やってると思っ？」

「桜の花弁並べてると思っ」

「その通り」

それだけ言うと、追滝はまた黙々と花弁を並べ始める。

……いや、その通りじゃなくてさ。何故そんなことをしているの
かってことが聞きたかったんだけどなあ。分かってくれないかなあ。

こういう時は作利川みたいに心を読んでもくると楽なんだけど。

しばらく突っ立っていたら、今度は追滝が自主的に顔を上げて僕
に話しかけてきた。

「見てるならちょっと手伝ってくれる？」

「手伝うって何を？」

「これを」

追滝は両手の花弁を僕に掲げた。

「……花弁を集めてこいと？」

「違う違う」

言葉の後、追滝が手招きしたので、僕は追滝の隣にしゃがみ込
んだ。途端に斜面になっている川岸のせいで僕は水に落っこちそうに
なり、慌てて立ち上がる。

日付だ。追滝は地面に花弁を綺麗に並べて、今日の日付『4・1

フ』を作り上げてようとしている、んだと思う。ただ、まだフが出来上がっていない。

「手伝ってっていうのは、一緒に作ってってこと」

追滝は言いながらもさっさと並べていく。

僕は協力を要請されたってことを何となく半分理解しつつも、残り半分ですればいいってんだよと考えていた。

だってさあ。追滝並べるの速いしさあ。僕が手伝う必要なんか無いんじゃないの。

と、追滝が目を上げた。そして僕を見た。まともに目が合う。

「……………」

それは例の追い詰めるあの目つきだった。

しかも哀願みたいな色まで加えられている。こんな時に何だが、追滝は眼のエキスパートじゃないだろうか。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………分かったからそんな目で見るのやめて」

僕は我ながら弱々しい声で言い、またしゃがみ込んだ。適当に近くの花弁を拾い、できるだけ追滝の置き方を真似して、綺麗になる

ように神経使って置いていく。

僕がゆっくりやっても追滝はまるでペースに変化が無く、さながら見事に噛み合った歯車のように作業が進んだ。

こんな時に何だが、追滝はこういう作業でも凄腕なんだろう。パズルとか超得意そう。

「追滝ってこういう作業、好き？」

「うん、まあ」

誰かさんみたいなお返しじゃなく、僕は大いにはつとしたよ。

「あのさ、こういうのって一人でやった方が早いんじゃない？」

「飽きた？ それともこうしてるのが嫌？」

割り込む返答の速さだった。

あのね、ちゃんと返してくれるのはすごく嬉しいんだけど、追滝の場合早過ぎ。僕が言い終える前に返されると困っちゃって。

結局困った僕は、花卉を並べる手を止めずに答える。

「別に飽きてても嫌でもないけどね」

「なら完成まで付き合って」

……その返事が返ってくるってことは、僕の遅さをあまり迷惑に

思っていないってことだよ……ね？

下を向いて黙々と作業を続ける追滝の感情は、もしかしたらただいつも不機嫌なだけの美奈よりも分かりにくかった。

そして、7が完成。

「できた」

「できたね」

見事なものです。

まるでパソコンのソフトで連打機能を上手く使って作った絵のように、等間隔で桜の花弁が並べられて……芸術とまではいかな
いまでも、一つの立派な作品だった。いい記念だよ。

これに僕が関与しているだと？ ……ちょっと誇らしい。

「ねえ稲橋君カメラとか持ってる？」

唐突に顔を上げて言われたもんだから、少しびっくりして尻餅をつきそうになってしまった。

何？ カメラ？ 持っていないよ。

「おーイトシーカメラ持ってるー？」

立ち上がり、トシに向かって聞いてみる。しかし石を投げる直前

の格好で振り返ったトシの返事は、持ってきてねーよーというものであったので、僕は方向を変える。くるっと180。向き変換した僕を見て、追滝は「灯台みたい」とか言っていて笑った。

「おーい作利川ーカメラ持ってるー？」

「なにー？」

声が届かなかったらしい。あるいは、これも単なる生返事か。

「楓ちゃんカメラだってカメラ」

「え、カメラ？」

でも隣の古谷には届いていたようだ。

「持ってるよー」

「貸してー」

よく考えればわざわざ大声で会話しないでも、作利川たちのところまで僕が行けば良かったのだが、ごめん気が利かなかった。

作利川はかなり小さなデジカメを持ってこっちへ来て、渡してくれた。

だが。

「……ちょ、バッテリー切れてんじゃん」

「え、嘘、ホントだ。充電するの忘れてた」

「……」

持ってきた意味ねー。

追滝は何か残念そうな目をしてるし、古谷は爆笑してるし、作利川は「でも何度か付けてるうちにしばらく保つようになるんじゃない？」とか言ってるしで、僕は頭を抱えそうになった。

「物的証拠が残らないね」

追滝はまるで刑事みたいなことを言う。今時の女子中学生が「物的証拠」なんて言葉を使うかね。使わないよね。少なくとも、僕は今日この場面で初めて聞いた。

「いい思い出っというのは、物なんか残ってなくたって心の中にずつとあるものなんだよ、きつと」

「そんなものだよねー」

だいじょうぶだいじょうぶと言いながら追滝の肩を叩く古谷の台詞に、作利川も頷く。

「ほら絵理、たとえ絵理がこの瞬間を忘れても、僕はいつまでもここで2人で作った桜文字のことを忘れないよって稲橋君が言ってるよ」

「僕はそんな恥ずかしい台詞を考えたことはないよ」

作利川の口真似を即刻否定する。

まったく何を勝手に言い出すんだ。
忘れようと努力するつもりもないけど覚えようと努力するつもりもないって。

「そっかあ……なんだか照れるなあ」

「追滝も人の話聞いてる？ 僕がそんな口説き文句っぽいこと言うわけないだろ。……というかさあ、携帯のカメラじゃ駄目なの？ 撮って送ろうか？」

「嬉しいなあ……」

駄目だ。ぜんっぜん聞いてないし。話が噛み合わねえ噛み合わねえ。
え。

追滝は微妙に頬を染めながら意味もなく花弁を集めている。たぶんあれは、思考が空回りしていると思う。僕の言ってることなんて聞こえないはずだ。

どうしてくれるんだよ作利川……。

「もし面倒なことになったら作利川、お前にセキニン取ってもらうからな」

すると、作利川はわざとらしく赤くなって、「あ、わー……」とか呟いたかと思うと。

「美奈と絵理を誑たぶらかしておいて私にも手を出そうと？ 稲橋君では意外とプレイボーイなんだねえ」

「違うだろ！ どこをどういう風に変換したらそう繋がるんだよ！」

必死になって弁明すると、作利川はしてやったとばかりに悪戯っぽく笑う。

……この野郎……。

さらに追い打ちをかけるように古谷の台詞が僕を襲った。

「あ、稲橋君、みんなに手を出すのに私にはアプローチ何もナシ？
それはそれで落ち込んだじゃうなあ、なんか……」

絶対わざとだよな。

もう、嫌だ……。僕で遊ぶな……。

2・6 弁当選べ鬼じっし

「そろそろお弁当にしようか！」

鶴の一声。

作利川が辺りに響く声で御夕食の時間をお知らせすると、好き勝手に散らばって遊んでいた僕らは、作利川の元へ一堂に会した。

作利川は本当にタイミングがいい。僕は今、丁度、そろそろお腹が空いてきたな……なんて思っていたところだ。特に何か運動をしていたわけでもないけどね。

「よしではシートを敷こうか。誰か敷いて」

「シート持ってないよ」

「私も持ってないよ」

「あれ？ 頼まなかったっけ？」

「頼まれたかもしれないけど聞いてなかったと思う」

集まった一同にシート敷きを呼びかけた作利川だが、反応は芳しくない。

あのねえ……。みんな忘れたのか。まあ僕だって母さんに言われなければ持つてこなかったから人のことは言えないけど。それにしても母さんってばいつもボケてる割にはこういうところしっかりしてるよな。

「えー、じゃあ誰も持ってきてないの？」

「……悠揮が持ってきてるよ」

突然、僕の後ろからぼそりとした声が聞こえた。

いきなりなことでも少し驚いたは驚いたけど、振り返らずとも美奈だと分かる。

ていうか……美奈、いいとこ取っていくなよ。そりゃ僕だって母さんに言われなければ持ってこなかったから人のことは言えないと
いうかいいとこ見せようって考えるのがまず悪いのかもしれないけど。それぐらいの考えを起こしたっていいだろ。悪いの？

「よくやった稲橋君」

手柄を褒め讃える隊長みたいな作利川にシートを手渡ししながらそんなことを思っていると、さらに独り言のような言葉が追加で聞こえた。

「悠揮のお母さんの手柄だけだね」

「……そこまでバラすなよ。もう。」

横目で睨みつけてやるのだが、美奈は動じない。というかそもそもこっちは眼中に入っていないようだった。そこまで行くと哀しい気もするけど、まあ我慢我慢。

作利川は僕から受け取ったシートを軽く眺めて言った。

「ふーん、このシートは稲橋君のお母さんが作ったと。じゃあ今度

私ん家ちの分もお願いしよ

「「そういう意味じゃない」」

僕と美奈の声が入る。途端、美奈が不機嫌な舌打ちをした。

対照的に作利川はにやりとした笑みを浮かべると、シートを地面の上に広げてから、からかうような台詞を放つ。

「さっすが、幼馴染みのお二人さんは息もピッタリでよろしいこと
で」

「変なこと言わないで」

美奈の声色はかなり刺々しい。それでも言い方がソフトな辺り、僕に向けられるものと比べれば遙かにマシだ。素の美奈に散々きついことを言われている僕にとっては、可愛いと思えるほどに。もっとも、作利川は美奈が素のどぎつい台詞を放ったとしても笑顔でスルーできる人なような気がする。

「そつだよ、どっからどういふ風に見れば僕と美奈が息ピッタリに見えるってん」

「悠揮もつるさい黙れ」

僕も作利川に向けて文句を言ったのだが、言い終わらないうちに美奈に言葉で突き飛ばされた。

……ちよつとイラつときた。

「美奈には言っていないのに何でそう横から」

「うるさい」

「何がうるさいんだよ」

「存在がうるさい」

「存在がうるさいって、僕は太鼓じゃな」

「うるさい」

駄目だ。

これはもう何を言おうと美奈はうるさいを連発してくるだろう。

それに、「存在がうるさい」なんてあからさまな悪口、普段の美奈は言わない。分かりづらいかもしれないけど、これはまた機嫌を損ねたな。さつき会話に参加してきたから、少しでも機嫌を直したのかと思っていたのに……。

これはあれだ、作利川のせいだ。作利川がお二人さんがどうのとか冷やかすから美奈が機嫌を悪くしたんだ。どうしてくれるんだよ。

作利川といえばそんな事情こと知りませんといった感じで（実際知らないんだと思うけど）シートの上に弁当箱達を置いて開け始めている。

ぐだぐだ言っても仕方が無いし、僕はシートに膝を着いた。

「……で？ 何だってこんな大きい弁当箱が5つもあるの？」

シートの上に置かれた弁当を順に指さす。作利川は顔を少し上げ

て答えた。

「いやあ男の子ってすごいたくさん食べるじゃん？ こんくらいいっぱい用意した方がいいのかなって思ってたさー」

そりゃあ同年代の女子と比べれば沢山食べるでしょうよ。でもいくら何でも、おせち重箱みたいな弁当5個分を6人で食べられるか？ それに、僕ら別にそこまで大食いじゃないっての。この前も昼食の時間に弁当箱見せあったでしょ？

別に、残したところで僕が困るわけでもないんだけど。

「だから全部食べないと祟るよ？」

ない、はず、なんだけど……。

「何その無理矢理タタリ」

「食べ物を残すと稲橋君はお怒りを受ける羽目になるんだよ」

「誰に」

「美奈に」

「美奈と弁当関係ないじゃん」

呟くような突っ込み。だって美奈は弁当作りを手伝ったわけでもないし。

すると、作利川が今度は本格的に顔を上げた。微妙に意地悪い笑

みを浮かべてる。

……作利川のこの表情を見ると、腰が引けそうになるのは何でだろう？

「ふーん、そんなこと言っちゃって。何が起こっても知らないよ？」

そこで一拍置き、作利川は僕からある御方に視線を移す。

「ねえ美奈、もし稲橋君が残したら私の代わりに祟ってね」

「分かった」

「ちよ！」

「何そこで了承しちゃってんだよ！ ていつか祟るって何、そんなのどうせ蹴っ飛ばすだけなんだから！」

無理矢理タタリの要望を、軽く頷いて簡単に引き受けてしまった美奈に対し、僕は精一杯の苦情を叩きつけた。

「が、美奈は「うっさいな……」とでも言いたげに僕の方を一瞥して、さっさとシートの上に座る。そして一言。

「その川の川に沈める」

「祟り殺す気か!？」

「イジメってか拷問だよねそれは。」

「……蹴られて何mも吹っ飛ばされるより遙かにマシだと思っけど」

あー……、そうか。そうだね……。

……。

って違う！ 何を納得してんだ僕は！

美奈の普段の暴力に慣れきっちゃってる自分の感覚が怖いです！

何か、そのうち取り返しのつかない精神状態になってしまいそう。

それに今更だけど、いつも男子（僕）を何mも蹴っ飛ばしてる美奈の脚力って……どんだけ……。

「さあ答えてもらおう。どれが一番だった？」

「い……いや、一番とか言われても……。俺、料理とか分かんねえし……。なあ、悠揮？」

「うん、僕も……そう思うんだけどなあ……」

苦しげに顔を見合わせる僕とトシ。

だが作利川は納得してくれない。

「そんな答えでは納得できないと何度言えば分かるのかな」

とても答え辛い質問だということがどうして君達には分からないかな。

頭の中だけで反発してみるも、誰も分かってくれない。

美奈は我関せずといった顔で知らんぷりを決め込んでるし。

お願いだから助けてよ。

「だ、だからね、どれも美味しかったって……」

無難な返事で誤魔化そうと試みるけど、全く持って無理。通じない。

「稲橋君……どれが一番か聞いてるだけだよ？」

「より良い製品を作るためのアンケートに協力してくれると思えば、それでいいから」

古谷と追滝も詰め寄ってくる。逃げ場は無い。

……というか、より良い製品って、そんな大それたものじゃないよね。既に君達の弁当は製品化されてるの？

僕はもう一度、美奈の方に助けて視線を送る。

目が合った。すぐさま、チャンスとばかりに僕は（お願いだからこの人たち何とかしてよ）と、アイコンタクト。

「……」

意味は通じた……かな？　しばらく見つめていると、美奈はさつと目を逸らしてしまった。邪悪な目をして、わざわざ大振りな仕草で肩をすくめる。つまるところ、その意味は「知らねーよばーか」ってところだろう。

……ひっど。

いつまでもまごまごしている僕とトシを前に、作利川はご立腹の表情で告げた。

「二人とも、どの弁当が一番だったかを吐くまでは帰さないから」

お前は刑事か。

僕は一瞬、取調室で刑事が両手にカツ丼と親子丼を持ち、今の作利川と全く同じ台詞を放っているところを想像して吹き出しそうになった。やばい、堪えろ……見咎められたら言い訳なんか思いつかない……！

そう、僕らは花見ながらの夕食会を終え、片付ける頃になって、シートを畳む前に作利川に切り出されたのだ。「で　お弁当、どれが一番美味しかった？」と。

話を聞けば、5つある弁当のうち、ひとつを作利川、ひとつを古谷、ふたつを追滝、でもって残りのひとつを作利川のお母さんが作

ったのだという。その中で、どれが一番美味しかったかという話なんだけど……。

答えられるはずが無いだろう？ 男子なら、まだこんなシチュエーションを体験したことが無くても分かってくれるはず。女子にそんなこと聞かれたら黙り込むことしか出来ないわけですよ。ていうか、僕は5つの弁当を何とか空にしようと思う一心で正直味わってる暇なんか無かったよ。

「あ、あなの、俺はな」

苦し紛れに切り出すトシの声が聞こえた。

凄いよトシ！ この状況をいつたいどう打開するといつの？

「やっぱりソレが一番美味うまいかったと思う」

自信なさげな台詞と共に、トシが指を指して示したのは、一番大きくて立派な弁当箱。……でも、たぶんそれは。

「ちっ、それは私の母上の作った弁当よ」

……だろうと思ったよ、やっぱりね。

さらに、展開は最悪の方向へ転がった。

「やっぱり大人が作ったらそりゃ一番に決まってるか。よし、これなしで」

ちよ、ちよっと待って。

作利川は、トシが指さした弁当箱をずずずと僕に隠すような位置に移動させた。そうして改めて残りの4つの弁当箱を僕の前に並べる。

「あれは除外で。この中でどれが一番美味しかった？」

…… 本当に最悪です。

どんなパス寄越してんだよ……とジト目でトシを睨みつけると、トシは済まなそうに笑って、声を出さずに口の動きだけでご愁傷様と……ふざけるな。

もう美奈もトシも頼りにならない。どうしよう。

追い詰められた僕は、作利川、追滝、古谷の3人の顔を見回して、観念したように目を閉じて　いきなり飛び起きた。

「ごめん急用が出来た！」

我ながらここまで嘘とはっきり分かる台詞は無いだろ。だけどそれ以上の言葉なんか思いつかなかったんです。

みんなに背を向け、一目散にその場から逃げ出す。

上手いこと言いくるめる方法が見つからなかった時、最善の方法は、さっさと逃げてしまうことだって前にテレビで誰かが言っていた気がするんだ！

「につ、逃がしてたまるか！ 皆の者、ヤツを追えー！」

作利川の鬨こゑの声と同時に、夜、過桜川の岸边にて、いい年の中学生らによる大・鬼ごっここの火蓋が切って落とされた。

2・0 誘う方だって頑張ってるんだからね

4月17日、午前1時頃。学校は昼休み。

私はお花見に行くメンバーを集めようと、色んな人を誘ってました。

今日は何故か、用事がある人が多くて、なかなか集まらない。仲の良い女子には朝のうちに声をかけてみたし、昼休みには男子に声をかけてみたんだけど、新井君にも坂原君にも何か用があるってんでフラれました。

新井君は学級委員の用事が。で、坂原君は幼馴染みとどこか行くんだと。中学生でデートとかよくやるよ。本人は違うって否定してるけどあれは付き合ってるようにしか見えないね。それを言うなら稲橋君と美奈も相当仲良さげに見えるけど。

ああそつだ、二人も誘ってみよつと。

そついう次第で、まずは教室にいた美奈に声をかけてみた。

「美奈、ちよつといいかい」

「……」

「おーい美奈ー？ 何をぼけつとしてるのさ」

「……ん、ああ、楓奈……」

「……どうしたの？ あ、稲橋君を殴り足りなくてモヤモヤしてる
とか？」

言った途端、ちよっと後悔した。これは無粋で失礼な発言だった
か。

美奈は特に怒る素振りも気を悪くする風も無かったけど、ぼそぼ
そと小さな声が返ってきた。

「悠揮はサンドバッグじゃない」

よく言いますねえ。貴方の稲橋君に対する接し方はサンドバッグ
どころの話じゃないでしょ。

続けざまに更に小さな声が聞こえた。

「……悠揮なんかのことでモヤモヤするなんてありえない」

「ふーん……」

別にそういうことでもいいけどさ。

「そっぴゃ、稲橋君はどこにいるの？ お昼の時いなかったけど、
早退？」

「保健室」

何故に。

今日、体育とかは無いから、そんな怪我するよつなことは……。

いや待て、分かったぞ。

ていうか随分前から何度かある事態だし、もっと早く考えつくべきだったか。迂闊。

「美奈が保健室送りにしたわけ？」

「……そう」

やっぱり。そういや昨日も稲橋君は美奈に蹴っ飛ばされて教室のドア外してたもんなあ。あの時も保健室行かなくても大丈夫なのかって心配するくらいだったし。

「やりい！ 強いね美奈、ほらハイタッチ」

「……」

美奈は無反応。

まっ、そりゃそうかな。

誰かを保健室送りにして悦よろこんでる人とかいたら、その人アブないし。

「……、つれないなあお前さんは。で、何？ 責任感じて気落ちしてるの？」

「別に、気落ちなんか」

してないって？ いや、嘘だね！。

「声のトーン2段階くらい低いよ、美奈」

「……」

美奈は黙り込んだ。美奈は黙り込んだ。

そういえば、私は美奈を花見に誘いに来たんだ。いけない、どうしてこうすぐ脱線しちゃうんだ。

気を取り直して、私はもう一回美奈に話しかける。

「ねえ、お花見に行かない？」

「……お花見って？」

相変わらず低いトーンのまま、美奈が反芻して訊ねてくる。

とても乗って来そうな雰囲気では無かったけど、とりあえず伝えるだけ伝えてみた。こっちはメンバー集めようと必死なんですよ。

「絵理がさあ、お花見のいいスポット見つけてきてくれたんだよね。でみんなで行きたいんだけど、メンバー集まなくて。どう？ 行かない？」

「ん……」

「稲橋君も一緒じゃないと嫌？ それなら心配しなくても後で誘ってみるよ」

「誰もそんなこと言ってない」

瞬間的な返事と一緒に、美奈が顔を上げた。

おおー……相変わらず美奈の怒った顔っておっかないわ。迫力ある。

分かったよ、分かったからさ……そんな睨まんでも。

「でもさ美奈、稲橋君のお見舞い行かないの？ 気まずくなって沈んでるくらいなら素直に謝ればいいのに」

「だから気まずくなんかなってない。それに今更謝ることなんか無いしだいたい悠揮が悪いんだ」

ほう……。またそれは随分な自信で。

「ま、そうだよな。いちいち謝ってたらそろそろ美奈は土下座通り越して切腹して謝らなきゃいけない頃合いだもんね」

「……」

また黙っちゃった。

少し意地悪な言い方だったかもしれない。反省。

反省した私は、不機嫌な顔でむすつとしてる美奈を今度はからかいにかかる。

「良かったよね、美奈には稲橋君みたいな人がいて。きっと美奈のことを幸せにしてくれるよ」

「ねえ、楓奈」

「こっちの言ってることは丸無視で、少しばかり真剣な顔つきで美奈が切り出してきた。」

「……せつかくからかったんだからさ、怒るなり笑うなり何か反応してよ。寂しいよ。」

「どついたら直ると思う?」

唐突な相談。意味がよく分からなかったので、私は誤魔化すことにした。

「何が? ニキビが? それともイビキ? ビキニ?」

「違う」

ほんの可愛いボケだつてば。ほらあそんな恐い顔しないで。

美奈はしばらく恐い顔のまま私のことを睨んでたけど、ふいに殊勝な表情に切り替えて、また聞いてきた。

「……性格って、変わるかな」

「……、ああ。」

美奈が言いたいのはそういうことか。

話、繋がってたんだね。

今の台詞を翻訳すると? 今までみたいなのを続けてて、いつか本当に大きな怪我をさせてしまったりしないかとか、そんな風に考えて不安に思ってるんだよね、美奈は。

稲橋君はいつも平気な顔しようとしてるけど、「痛いって!」とか叫んでるのはノリとか嘘じゃなさそうだしね。

でもさー……、端から見てる分には、二人とも結構楽しそうに見えるんだけどね。心配するようなことっていうより、ほっといて楽しませてあげた方がいいんじゃないかって思うような雰囲気なんだよ? 知ってるかい?

「そりゃ、変えようと思えば変わるんじゃない?」

「どうやって?」

どうやって、と来ましたが。難しい質問だなあ。先に言っとくけど、私はスクールカウンセラーじゃないってことだけ覚えといてもらいたい。

しばらく頭を捻って考えてから、私は、思いついたことをそのまま美奈に告げてみた。

「やっぱり……自分らしくないと思うことをやってみるといいんじゃないかな。ちょっとずつでもいいからさ」

『日記』 #2

4月17日 晴れ

今日は楓奈に誘われて、お花見に行ってきた。

夜桜町とかいうスポット。私は花見に行くのは初めてだったから、楽しかった。

でも悠揮の鈍さとか論外だった。あんなに親切に言ったのに信じられない。ちょっとは空気読むことを学習すればいいのに。

空気読まないから集合場所間違えたり馬鹿みたいに鬼ごっこかして電車に乗り遅れるんだ。

綺麗な花弁なんか見つからなかったし。悠揮のせいで桜まで空気読まなくなったんだ。

それと、どうしたら性格って変わるのか、楓奈に聞いてみた。自分らしくないことをすればいいって言われたから、譲ってみたのに。

悠揮は全然分かってくれないし、ホントに鈍感な奴。

いつか病院行きになっても知らないから。

お弁当は、追滝さんのが一番美味しかったと思う。

『日記』 #2 (後書き)

これでチャプター2は終わりです。

> i 2 4 9 7 5 — 8 7 3 <

3 - 1 早起きはお菓子の得（前書き）

お話の完成度がさらに下がった……
チャプター3が出来上がりでしたが、今回も疲れすぎないよう画面から2m程離れてお楽しみください。

3 - 1 早起きはお菓子の特

「お兄ちゃんお兄ちゃん！ 起きろー！」

「兄ちゃん兄ちゃん！ 起きろー！」

「真似しないでよー！」

「真似なんかしてねーよー！」

僕はその日、弟と妹のでかい目覚まし声で目が覚めた。どうやら、僕を呼んでいるみたいだけど。

……朝から騒々しい奴らだなあ。

ぼんやりと布団の中でそう思う。

今、何時だ？ と思って首を回し、目覚まし時計を眺めてみる。
……7時半ってところか。

「お兄ちゃん！ まだ寝てるのー！？」

はい、寝てます。寝てるんだから静かにしてほっといってください。

休日なんだから8時過ぎくらいまでは寝かせてよ。

僕は布団を顔の上まで引っ張り上げる。

二人の声がいくらかくぐもって、小さくなった。これで済んだと思いきや……。

どばーんっ！ という、ものすごい音がした。

たぶんドアを開け放った音だ。たぶん僕の部屋のドアを開け放った音だ。たぶん僕の部屋のドアをそれはもう躊躇無しに勢いよく開け放った音だと、思う。

僕の部屋のドアは内開きだ。今ので絶対部屋の壁が傷付いた。

そして。

「お兄ちゃーんっ！ さっさと、起・き・ろーっ！」

ばっ、がふっ！！

一際大きな悠奈の声が聞こえたと思った途端、それはもう言葉で言い表せない衝撃が僕の腹の部分を襲った。

始業式の日、デジャヴを感じてしまうような、痛さ。流石にドゴという音まではしなかったけど。

無言で悶絶しながら（涙目で）僕が布団を跳ね上げると、悠奈の顔がすぐそこにあった。

まさか、ボディプレスでもしやがったというのか……？

「あは……、ごめんね、そんなに痛かった？」

「ていうか……お前、な……膝は、反則、だろ……」

悠奈は実に可愛らしい動作で頭を搔く。

……でも、痛い。それに重い。そろそろどいて。

「いや妹は兄を起こすためにボディプレスするもんだって誰かが言っただから」

「そんな得体の知れない情報鵜呑みにするな。ていうか今お前は僕のこと殺すところだっただぞ」

「いいじゃん生きてるんだから。それより、お兄ちゃん、早く起きてきてよ」

ベッド、というか正確には僕の体の上に座り込む形になって、僕の手を引っ張りつつ、跳ねるように上下に動く悠奈。

お願いだからやめてもうどいて。お兄ちゃんは腹の痛みに吐きそうです。

何とか悠奈を体の上からどかし、さっさと部屋から追い出して、僕は着替えを済ませる。跳ね上げて吹っ飛ばしてしまった布団をベットのの上に整えてから、僕は部屋のドアノブに手をかけ

ガンッ。

「終わったねー!？」

ドアノブを捻った瞬間、ひとりでにドアが開いて、ドア板が僕の顔を直撃した。

どしん。

それだけでは飽きたらず、悠奈とその声が飛んできたかと思った瞬間には、僕は抱きつかれた上に後ろの壁まで叩きつけられていた。

「…………痛った…………」

「あれ、お兄ちゃん大丈夫？」

後頭部を押さえてひたすら痛みに耐える僕に、悠奈は自分の行為を棚に上げて、心配そうな顔で聞いてきた。

台詞はありがたいけどお前に言われる筋合いは無い。

「…………お前は今すぐ母さんのところ行って手加減という言葉の意味を聞いてこい」

「えっと、電子辞書でもいい？」

真面目に返してくるなや。

朝っぱらから一気に疲れが溜まってしまった僕は、心の底からの溜息をつけてから、いい加減僕にしがみついている悠奈を引き剥がした。

「で？ 何だってお前はそんなに朝からテンション高いの？」

「だって」

悠奈はキラキラと幸せそうな顔で言う。

「お兄ちゃんたち、25日……明後日遠足でしょ？ だからお菓子買いに行くんだよね？ その時、お母さんが悠奈たちも買っていいってー！」

それはもう嬉しそうに報告する悠奈。

お前はもう小3なんだからさあ……そろそろお菓子卒業したらどう？

「だからみんな待ってたんだよ」

なるほど悠奈の言う通り、僕の部屋の外では、頭の後ろで腕を組んだ悠介と、胸の前で腕を組んだ美奈が、僕を待っていた。

「あ、起きた起きた」

僕の姿を確認するや、悠介は腕組みを解く。悠奈と同じように顔が輝いている。

その顔を見るに、悠介もお菓子を心待ちにしているんだと分かる。

うーん……小学生ってみんなお菓子好きなのかな？ 僕は早いちにお菓子好きを卒業したから、感覚が分からないだけなんだろうか……。

美奈はといえば、腕を組んださっきの姿勢から全く動いていない。

……美奈には、お菓子好きな頃なんて経験すら無さそうだな。

そんな風に頭の中で思っていたら、美奈が口を開いた。

「……遅い」

「え？」

「……今何時だと思ってるの」

えっと、あの……。僕の記憶が正しければ、まだ8時にもなってないと思うんですが。

「お兄ちゃん」

僕の表情から何かを読み取ったのか、悠奈が至極真面目な表情で切り出してきた。

「遠足前の休日をなめたらいけないよ。急がないと欲しいお菓子はすぐに無くなっちゃうんだから」

無かったら、別のお菓子買えばいいじゃん。

それが別の日っていう手もあるよね。何も遠足の日だからってそこまでしなくても……。

あと遠足前の休日って、なめるとかそういうもんじゃないと思うよ。

「そっだよ、兄ちゃん」

さらに、横から悠介も口を出す。

「遠足前の休日、スーパーのお菓子コーナーは子供たちの戦場と化

すんだぜ」

「大げさな……」

呆れてしまったって言葉が次に続かない僕。何が呆れるって、悠介も悠奈も顔が大真面目なんだもん。

馬鹿かお前らと言ってしまいたい。

「もう、悠介は黙っててよ」

「何だよ！ 賛成してやっただけだろーが」

「せ、戦場って私が言いたかったの！」

「言えばいいじゃんかよ！」

「タイミングってものがあるの！」

……馬鹿かお前ら、と、言ってしまいたい。

超が付く低レベルな口喧嘩を始めた二人を適当に仲裁しつつ、僕は思う。

5月の定番イベント、遠足か……。

とても中学校の行事じゃないよなあ……。

時はいくらか遡って、5月18日。学活の時間。

「遠足について色々さっさと決めちゃいたいと思います」

教卓の前で口火を切ったのは、学級委員の新井君^{あらい}。

彼は、くじ引きで選ばれた学級委員だ。要は、男子に立候補者がいないからくじ引きしたところ、新井君が当たっちゃったというだけの話。本人はことあるごとに面倒だとぼやいているけど、実際のところはなかなか上手に学級委員として役目を果たしている。

「まず遠足先でのクラスレクについて」

彼がそう言うと、隣にいたもう片方の学級委員の子が、無言で学級委員用の小型ファイルを開いて新井君に指し示す。

彼女は芽寺^{めいじ}という女子の学級委員。こっちはくじ引きではなくて、自分で名乗り出て決まった方だ。

クラスの話し合いでは、新井君が司会を務め、芽寺さんが秘書的な役割を務める。この形が今や定番になりつつある。

まあでも、僕はあまり意見を言うようなタイプじゃないし……話し合いでは、多数決の時に手を挙げるくらいだ。それは美奈含め、大多数がそんな感じ。

どこの学級もそんなもんじゃないかなと思う。

新井君は、芽寺さんに渡されたファイルを少し眺めてから、クラスに問いかけた。

「それぞれクラスごとに自由に決めてOKです。ただし大がかりな荷物が要る物は駄目。あとかくれんぼも、昔それで数時間行方不明になった人がいたそうだから駄目です」

かくれんぼって……。

どう考えても中学生のレクじゃないよなあ……。

「何かレクでやりたいものがある人は挙手で」

新井君が「挙手で」とわざわざ言ったにも関わらず、クラスの誰かが適当に言った。

「鬼ごっこでいいじゃん」

途端に少し、クラスがざわつく。

「鬼ごっこか小学何年生の遊びだよ」

「お前鬼ごっこなめんなよ、世界共通の遊びだぞ」

誰が言ってるのか分からないけど、とりあえず会話になっている。
ただし脱線している。

「はい、はい、じゃあ多数決。鬼ごっこがいいと思う人」

新井君が強制的に舵を取り、多数決に持ち込んだ。僕は手を挙げ
なかったけど、代わりに周りを見渡してみる。

……多いな。

「19、20、21 半数以上。じゃあこのクラスは鬼ごっこ
に決定」

いえーい、ぱちぱち……と適当な音が響く。本格的にやる気が無
いなこのクラス。

とはいえ、僕も人のことは言えない。少し眠くなってきたけど、
我慢して新井君の話に集中する。

「んじゃ、次は……」

新井君はそこで一旦言葉を切り、芽寺さんが指し示した場所を軽
く眺める。

「お待ちかねの、グループ分」

「自由で！」

新井君が言い終えないうちに、誰かが叫んだ。

食いつきが全然違った。ていうか、クラスの空気が変わっていた。たぶん初めっからみんなこれしか気にしてなかったんだろっな。

「自由でもいいですけど」

新井君は、まあこの展開を予想していたようで、顔色も変えずに淡々と続ける。

今やクラス中のみんなが『聴く』姿勢を取っていた。

「条件として、誰もハブかれないようにということです。クラスを8つに分けるんで、男子3女子2のグループが4つ、男子2女子3が4つってことになります」

クラス中が聴く姿勢だったにも関わらず、その2秒後の新井君の説明は誰も聞いていなかったと思う。既にあちこちで「一緒に組もう」とか「誰々とグループになるう」とか、囁き声が飛び交っている。

僕も、つんつんと背中を突かれ、振り向いたらトシに開口一番に誘われた。

「一緒に組もうぜ」

「うん、分かった後で」

聞き流し気味に了承して、僕は前に意識を戻す。

新井君は教室の中が一段落するのを待って、続けた。

「じゃあグループ分けの紙を黒板に貼つとくので、グループ出来たら班長も決めて書いておいてください。グループは最大で5人、男子も女子も最高3人。あと売れ残りがいた場合は強制的にくじ引きとなるんで注意してください」

売れ残りって嫌な言い方だな。どんぴしゃな表現だとしても。

「その他細かいことは、今度遠足のしおりが配られた時に説明します。あと遠足の目標は社会科の定期テストに出るらしいから覚えとくといいと思います。じゃ学級委員からは以上」

とまあ、そういう次第で。

遠足にお菓子はつきものとはいえ、僕は土曜日に朝早くから叩き起こされて、子供たち4人でお菓子を買いに行く羽目になったのだった。

3 - 2 スーパーは超混雑

僕が住んでいる付近は、近くに比較的大きな公園があることを除けば、至って静かで普通の住宅地だ。

ただし除かないと、この辺りでは結構有名な地域で、遊歩道などの歩行者用設備も整っている。人も多い。そのため、子供連れにはなかなか住みやすいらしい。

有名なのはその大きな公園のおかげで、名前をイベント公園という。これはなまじ広いから、様々な行事とかお祭りがその公園で行われるので、いつの間にか誰からともなくそう呼ぶようになっていった。他にも、自然公園とか大公園とか、色々な呼び方をされるけど、本来の名前はもっと地味で漢字何文字かの名前だったと思う。

で、なんでこんな話をしてるかというと、実はその公園は僕らが明後日行く遠足先の公園よりも広い。

ということはそれだけ人がたくさん集まるということ。

ということは親子連れや友達同士でピクニックに来る人もたくさんいるということ。

ということとは……

「近くにコンビニが無いこの地域ではスーパーの混雑ぶりが半端無いということなんだよな……」

「お兄ちゃん何呟いてるの？」

「何でもないよ」

振り返って聞いてきた悠奈に、そう返す。

気持ちが先走って駆け出さんばかりの悠介と悠奈に引つ張られるようにして、僕はスーパーに到着した。

で、中に入ってみれば、満員電車の一步手前みたいな賑わいっぷり。圧倒されて、辟易して突っ立ってるところだ。

休日とはいえここまで混雑するスーパーなんかあるだろうか。たぶん今現在日本で一番混んでるスーパーだと断言してもいいかもしれない。

もー……お弁当なんか売ってんじゃねえよって八つ当たりしたくなってくるんですけど。

「兄ちゃん早く行こうよ!」

「お菓子売り切れるよ!」

弟妹はこの人混みを前にしても、何も思うところが無いようだ。きつとお菓子コーナーと書かれた吊り下げ看板しか目に入っていないだろう。

そんなにお菓子が欲しいかなあ。

僕は1歩後ろに下がると、おそらくは僕と同じ感覚を持っているだろうと思われる美奈に話を振ってみる。

「……いやー、すごい混んでるね」

「……」

ああ、無視ですか。
でも僕はめげないよ。

「この前花見行った時に寄ったコンビニも混んでたけどさ、あれが可愛いくらいすごいよね」

「……」

また無視。

……ただ、さっきの沈黙とは少し何かが違う感じがした。

そして僕は遅れて気付く。そういえばこの前そのコンビニで、僕は美奈にペットボトルを思い切り顔面に投げつけられたんだ。色々あって機嫌はその日のうちに直ったように思ってたし、僕の方はもう忘れかけてたんだけど、美奈はまだ根に持っていた……のかな？

「あの、美奈？」

「……」

「……あ……その、ごめんね？」

「何が」

「いや、怒ってる？」

「誰が」

「美奈が」

「……別に」

いつも通りの低い不機嫌な声で答えた美奈。どうやら僕の思い過ごしだったみたい。

「どうしよっか」

「……お菓子買いに来たんじゃないの」

「そうなんだけどさ、この人混みすごいし……」

向こうの方を眺めた途端、ぐいっと服を引っ張られる。悠奈だ。

「お兄ちゃん！ もう行っちゃっよー！」

「……あー、ご自由に」

そもそも何で悠介と悠奈は今までじっと待ってたんだらう。ご自由、と僕が言い終える前に、悠介と悠奈は人混みの中に姿を消していた。一人500円までだからなー、と誰にともなく呟いてから、隣を振り向く。

同じように突っ立ったままの美奈に話しかけた。

「……どこ通っていけばお菓子コーナーに辿り着けると思うっ？」

「……ばっかみたい」

え、話しかけただけなのにいきなり馬鹿と言われてしまいました
が。

何故に？

「人混みに怖じ気づいてるとかばっかみたい」

理由が付いてきましたけどどうして馬鹿と言われてしまったのかそ
こんとこまだ分からないんですけど。

そもそも怖じ気づいてなどいないって。……本当だよ。嘘じゃな
いって。

「何だよ。行けばいいんだろあの二人みたいに」

意を決して人混みの中に割り込もうとした直前、美奈の音が聞こ
えた。

「私の分も買ってきて」

……パシるのか。ていうかもしかしてそれが狙いか。
残念だけど通じないよ。

舌打ちの音が聞こえたような気がしなくてもないけど、僕は気に
せず、美奈の手首あたりを掴むと人混みに突入する。かき分けかき
分け、お菓子コーナーを目指す。

……どっちかというとき、怖じ気づいてるのは美奈の方じゃない
のかな。

あ、舌打ちがまた聞こえた。

……そっか、怖じ気づいてるといふより、嫌気が差してるって方が正しいのか。

「うわ……」

人混みを突破してお菓子コーナーに到達した途端、思わず僕の中から声が出ていた。

何故かって？

「本当に売り切れてるよ……」

いつも、地震とか起きたら近くにいる人生き埋めになるんじゃないかと思われるようなぎつしり加減で棚に並べてあるはずのお菓子は、今日はやたらと過疎っていた。

これ全部が全部買われたということなんだろうか。……当たり前か。

お花見効果もすごいけど……遠足効果も馬鹿に出来ないな。

と、人混みに反比例した商品棚のスカスカっぷりに立ち止まっていた僕のしばらく先で、小学生が二人、並んで同じ格好で突っ伏していた。やめるよこんな人がいっぱいいるところで床に手とかついて……。

「……お前らそんなところで二人揃って失意体前屈やつちゃってどうしたの？」

声を掛けた途端、二人が一気に食いついてきた。

「聞いてよお兄ちゃん！」

「聞いてくれ兄ちゃん！」

「うん……聞いているけど」

「とつとつとがー！」

「売り切れてたー！」

ああ……そうですか。とつとつとですか……。

ちなみに、とつとつとつていうのは、主に低学年向けらしい海の生き物をモチーフにしたお菓子である。

「他にもチョコマールとか、たまごボーロとか、じゃがっことか、食べられどぶつとか、遠足定番のお菓子はみんな売り切れてるの！ もうお煎餅とかしか残ってないの！ 何で！？ どうして！？」

それは遠足定番だからこそだと思っただけだな……。

あと言い並べられてくお菓子たちが無性に懐かしい感じがするのは何でだろう。

とはいえ、目的のお菓子をゲットし損ねて凹んでいる二人に止めを刺すのは少し可哀想なので、僕はフォローに入ることにした。

「ほら、起きろ。お前ら別に遠足に行くわけでもないんだしお菓子はいつでも買えるんだから」

「お母さん買ってくれないし！」

「何度も言うけど欲しかったら自分で買え。自分で代金を支払え。物々交換の基本鉄則だ」

「ぶつぶつ？ よく分かんないけど、じゃあお兄ちゃん買ってくれる？」

「何でそうなるんだよ。自分で買えって言うてんだろ」

「……悠揮」

弟妹と一緒にあって、賑やかに騒ぎ合い、もとい言い争いをして
いる僕。そこへ後ろから美奈の声が聞こえた。

振り向けば、両手の中に様々なお菓子を抱えている美奈が。その
中には、この二人が無いとか騒いでいたとつとつとつかもある。

「どうしたのそれ？」

「……持ってきた」

「どこから？」

美奈が答える前に、お菓子に気付いた悠介が声を張り上げる。

「あつ、誰かのカゴからかつぱらってきたんだね！？」

「でかい声で人聞きの悪いこと言うな。美奈はそんなことしないで
る。……でもこれ本当にどっから持ってきたの？」

お菓子をいくつか僕に渡して持たせながら、美奈は答える。

「棚の奥とか、隣のスペースに混ざってないか探してみたら、あった」

「……………(うわぁ)」

「……………何その顔」

「いやぁ、美奈にもそんな主婦のおばさんのスキルがあったんだねと」

ばきっ。

言い終える前に美奈が蹴りを放ってきた。きちんと急所を押さえ、威力もあって痛いのに、両手のお菓子はひとつも落とさない器用な蹴り方だ。

「……………痛い……………」

「悠揮が失礼なこと言うから」

「だってその通りじゃん。主婦のおばさんたちって執念が凄まじいからお菓子ひとつでも美奈みたいに」

ばきっ。

今度はさっきよりも強い蹴りが僕を襲った。ていうかばきって鳴ったよ？

「……………痛いです……………」

「じゃあもう黙れば」

「くっ……」

美奈の言っていることが正しいので何も反論できない。言い返すとしたら、さらに輪をかけたからかいの言葉か……。

「……そつだ美奈、今度から短パンやめてミニスカート穿きなよ」

「黙れ痴漢」

ものすごい断りよう。痴漢って何さ。確かに突然こんな話題振ったら変だし怪しく思うかもしれないけど、こっちは単に、ミニスカートなら中身を気にして無闇に蹴りなんか出来ないだろうなと思っただけなのに。

「そうしたら美奈もちよつとは蹴るの自重できて、僕におばさんのスキルと言われただけで蹴ってくるのも躊躇うようになるかもしれないのに」

どかつ。

……今度は、微妙に回し蹴りのようなテクニクも混ざってた気がする。そしてさっきよりももっと強くて痛い。

蹴られた箇所を押さえて無言で苦しむ僕を、気付けば悠介と悠奈が哀れみの視線で見つめていた。

「兄ちゃん……」

「痛いなら美奈ちゃん虐めるのやめたらいいのに……」

「虐めてる側僕なの!?!」

絵的に虐めてるのは美奈だと思うんですけど。あと実際痛いのも僕なんですけど。

だがこの人達はそういうったことに気付かないようで、悠奈と来たらさも当然といった顔で僕の背を叩いた。

「ほら美奈ちゃんに謝って」

「何で!?!」

「早く。せつかくお菓子見つけてくれたのにおばさんがどうとかいふとか言っでごめんなさいって謝って」

お前の個人的な気持ちも混ぜてない?

「ついでに兄ちゃんが起きるの遅かったせいでお菓子売り切れちゃっでごめんなさいって謝って」

「どんだけ僕を謝らせたいんだお前は」

「早くしなさい」

「早く」

ダブルで背中をどつかれた。

「……、……ごめんなさい」

「……」

「……」

「……ひっぱたいていい？」

「だから何で！？ 百歩譲って変な風にからかってすみませんでした！ けど蹴られた上に殴られるのは納得いかない！」

「殴るとは言っていない。ひっぱたく」

「美奈の場合同じなの！」

何この無理矢理な展開。あとさっきから僕らが騒いでるせいで混んでるスーパーのはずなのにこのお菓子コーナーには誰も来ないんだけど、そういうのもひっくるめてもう早くお菓子買って帰ろ？

「見損なっただせ兄ちゃん……」

「でも大丈夫、この負けはいつか必ず取り返せるんだから頑張って」

勝手に見損なってくれた悠介と、勝手に同情して応援してくれた悠奈。もうお菓子のこととか一切頭に無いだろお前ら。

本当に都合良くて勝手にでうるさい奴らだなあ……。僕は疲れたよ。

「悠揮、これも持って」

でもってこの人は相変わらず……。だし。

逆らわずにお菓子受け取ってる僕ごときが、何も言えないことは分かってるんだけどね……。

3 - 3 目逸らし

遠足当日の25日がやってきた。

予定では、僕らはまず学校集合の後、班別で目的地へと向かうことになっていて。で弁当食べてお菓子食べて、行き先の公園で遊んでから帰る。シンプルな遠足だ。

ちなみに、どこの学校では遠足でバスを使って遠くまで出かけたりすることもあるらしいけど、生憎と僕の学校では、「基本的に徒歩で出かける」のが遠足なのだ。バスとか使うのは、修学旅行とか体験学習とか、年に一度の学校旅行くらい。

それが普通だから慣れてはいるけど、やっぱりバスは羨ましいなあ。5月の良い天気、遠足は暑くて暑くて。ハンカチかタオルが必需品だよ。

「あゝ暑い〜」

僕は早速湧き出してきた額の汗を手の甲で拭う。

毎度毎度長いんだよ校長の話は。炎天下の校庭で長々と生徒束縛するのやめていただけないかな。脚色とか要らないから「怪我はすんなよ。車に気をつけるよ。じゃ行つてらっしゃい」でいいじゃん。そもそも小学校じゃないんだから校長先生の話なんて出発前にしなくてもいいと思うんだけど。

そう、僕らはまだ歩き出していない。出発してもいない。僕の額が汗を流しているのは、太陽の日差しギラギラの校庭で校長の話が聞かされているからだ。

「つーか校長自身はちつとも暑そうじゃねーしな。あんなスーツ着込んでるくせに」

後ろから声がした。振り向けば、同じく汗顔になってしまっているトシが不平不満をぶーぶーと垂らし始めた。

「実は自分だけ保冷剤仕込んでんじゃないの？」

「保冷剤あつたつて顔は汗かくだろ。いや俺前から薄々思ってたんだけど、あの校長は実は南米人の血を引いてるんだよ。その証拠になんか肌黒っぽいし」

「南米人の血を引いてたつて暑さに弱い人は弱いよ」

集中力が保たない僕らは、そんな感じでお喋りを開始する。

ふと思うんだけど、遠足前の校長の話ってちゃんと聞いてる人ってどれくらいいるんだろうね。

少し間が開くと、トシは今度は一人でぶつぶつ呟き始める。

「ホント今日あつちいよなあ5月のくせに。これも地球温暖化の影響かね。だったら俺この夏からエアコン28 設定に取り組もうかな」

今まで取り組んでなかったのか。

「さっさと行って帰って、帰ったらエアコンつけてえ。暑くて死にそう」

「……そんなに暑いなら、これ使っ？」

突然、横から別の声が割り込んだ。と同時に、うちの取っ手部分がよきつと差し出される。

見れば、差し出したのは追滝だった。追滝は片手でうちわを差し出しつつ、もう片方の手でリュックサックの中をこそこそ探りながら「あともう2つ3つあるけど……」とか言っている。ちなみにこの人は同じ班である。

関係ないけど、追滝自身は全く暑くなさそうで、汗もかいていない。校長といい追滝といい、そういう人種の違いなのかね。

「あーさんきゅ。……てかなんで遠足にうちわ持ってきてんの？
花火大会じゃあるまいし」

「備えあれば憂いなし」

「？」

ことわざの意味が分からないトシは疑問符を頭に浮かべている。これくらい知っておけよと思わなくもない。

「僕はサッカー好きのくせにタオルとかすら持ってきてないトシの方に疑問が」

「いいじゃねえか忘れたんだよ。てかサッカーとかスポーツ好きな奴がタオル持ってくるだろうってのは偏見だし」

そうかなあ。そうでもないと思うけどね。

さて、追滝に貸してもらったうちわでパタパタ仰ぎながらも未だぶつぶつと呟き続けるトシはおいといて、少し話を変えよう。

今僕らは、クラスごとに集まった中でさらに班ごとに集まっている。そして名目上は校長先生の話を聞いているわけだけでも実際は聞いていないので飛ばす。

今回、僕らの班は、僕を初めとしてトシ、追滝、作利川、美奈といった男2女3の組み合わせだ。結局グループ決めて売れ残りは出なかったので、仲良しグループの班で遠足に行けることになった。

この前の花見に行ったメンバーから古谷が抜けただけだ。

ちなみに補足すると、古谷は女子の間では結構人気者なので、グループ決めの時も普通に引っ張りだだった。ちよっと羨ましいなと思う。

「と俺は思うんだけど悠揮はどう思う？」

「えっ？」

いきなりトシに話を振られた僕は、何のことだか分からずに戸惑う。

何？

校長がどうしたこうしたっていう話？

「だから、坂原と海内みたいに、幼馴染み同士って付き合ったりしやすいものなのか？」

「ぜっ、全然違う話じゃなか！」

「は？ 何が？」

「どうやら、知らない間に話題は変わっていたらしい。」

坂原と海内っていうのは、このクラスでも有名な幼馴染みの二人組のことだ。坂原の方が男子で海内は女子。付き合ってるのかどうか知らないけど、やたら仲が良い。もう単語みたいなものだからそうやって覚えて。

「私あの二人とも結構話すんだけどさあ、坂原君は愚痴で歩実はノロケ話するんだよね。歩実はともかく、坂原君の方はもう本気で疲れてるんだいっつも」

歩実つてのは海内の下の名前だけどそこはいいや。

あと知らない間に作利川も会話に加わっていたらしい。今の台詞は作利川のものだ。

「だから？」

「けどあの二人は付き合ってるの確定でしょ。幼馴染みってそういう特別な縁があるのかなって」

「で、悠揮はどう思ってたかって聞いてみたんだ。何せお前には実際幼馴染みいるし」

「……………え……………えーと」

会話の流れとかそういうのはよく分かりました。分かったけど……………僕のすぐ後ろに美奈いるんだよ？ 何でそんなこと聞いてくるのさ……………。それとも僕が過剰に反応してるだけ？

「……まあ、幼馴染みっていったら多少は縁があるかもしれないけど……付き合いやすいかどうかは……」

「つまり稲橋君は美奈と付き合ったりはありえないと」

「そうは言っていないよ!」

もう一度言うけど後ろに美奈いるんだってば! 別に美奈が僕を好きとかそういう次元の問題じゃなくて、ここで自然な会話の中で「あいつとは付き合わない」みたいなことを言ったら失礼にも程があるだろ。

それと、何となくだけと思い過ぎしかもしれないけどそうであることを願ってるけど、僕のすぐ後ろで変なこと言ったら殴るぞオラが沸いてるような気がするんだよ。

「とにかく、幼馴染みでも仲が良かったり悪かったり色々あるから、付き合おうとかそういうのあまり関係ないと思うんだ」

「ふーん……。さすが現場の意見って説得力あるなあ」

現場って何。

とりあえずそれで納得してくれたようなので、変なこと言っただけで殴られるようなことはなかったけど……。

「……」

「……作利川さあ、何ニヤついてんの?」

「べつっこー。何でもないよ」

……、怪しい。

長い校長の話は終わり、僕らは各々学校を出発した。

目指すはここから10km程度離れた自然公園。これもイベント公園と同じく、緑が多いという理由で自然公園と呼ばれている。本当の名前は僕は知らない。追滝か芽寺あたりなら知ってるかもしれないけど。

歩いていても暑いものは暑いので、僕らは追滝から交代でうちわを借りて使ったり、タオル被ったり、日陰で休憩したり、自由にお喋りしながら公園へと向かった。

「ねえ美奈」

僕は、何となくいつの間にか隣を歩いていた美奈に話しかける。

視線を向けると、美奈も横目で返してきた。僕の方が若干背が高いから、美奈の横目はやや上目遣いになる。そのせいだろうか、美奈の横目はすごく威嚇感がある。

大人しく普通にしてれば可愛い女の子なのにな。でも美奈はいつも私服が短パンだから、大人しいというイメージは欠片もない。

……あーあ、今日くらいスカートにしてくれたら僕は蹴られずに

済むかもしれないのに。まあ、わざわざ蹴られるようなことを好き
このんで言う僕が悪いんだけど。

と、色々内側で考え事をしていると、やっと返事が来た。

「……何」

「さっきの幼馴染みについての話、どう思う？」

「は？」

「特別な縁があったりするものだと思う？」

「思わない」

「……即答ですか。」

僕は前に行く人達を遠い目でぼんやりと見ながら考える。確かに
幼馴染みかどうかなんて関係ないだろうけど、それでも幼馴染みと
いうのは普通のクラスメイトよりずっと近い存在のはずだ。

僕にとっては美奈は家族みたいなもので、もっと言えば似てない
双子のような感じだと自分で思っている。

ただ、僕らの場合は、少し縁が特殊すぎるんだろう。

「……縁なんか無かったけど」

ぼつりと告げられた、独り言のような呟き声に、僕は美奈の横顔
を見る。

美奈は今度は僕に目を向けなかった。前しか見てない。

……美奈がそうやって故意に僕と目を合わせないのは、ケンカした時か、単に虫の居所が悪い時か、あるいは。

「最初はただのクラスメイトだったけど、私たちは幼馴染みになっただから」

恥ずかしい時だ。

そして僕は驚いていた。美奈がこんな詩的なことを言う人だったとは。……っというのもあるけど、……何というか、こう、上手く表せないけど、美奈が言った台詞の雰囲気には、僕らが幼馴染みであるということを感じた。

「ねえその二人！ 二人して初デートの日みたいな気まずい空間醸し出してどうしたの！」

そして、作利川の声で現実に戻る。

「どうもしてないよ。ていうか、何？」

「自販機。何飲むって聞いてんのに二人とも返事しないんだからさあ」

なるほど自動販売機の前で片手をそれについた体勢の作利川。トシと追滝は既に何か飲んでる。

休憩の時間か。

「奢ってくれんの？」

「別にそんなつもりはなかったけどまあいいよ。お金入ってるから好きなの押して」

僕は少し歩調を早めて自動販売機に近付くと、何種類かあるお茶の中から適当に選んでボタンを押した。取り出し口からそれを取り出しつつ、美奈に声をかける。

「美奈、味付き天然水あるよ」

「……………」

あれ、無反応。

僕は自販機を指で指し示してもう一度。

「あの、味付き天然水あるけど」

「あっそ」

……………あれ？

どうしていきなり不機嫌になったんだろう。

腕を組んで、分かりやすい不機嫌な顔して、さらには僕と目が合った途端にふいと顔を逸らした。

何か変なこと言ったんだろうか……………。

「……………」

「……………だから何で作利川はそんな面白そうな顔してるんだよ」

「だから何でもないよ」

……、嘘っぱい。

3 - 4 到着

遠足の目的地である自然公園に到着したのは、正午少し前のこと。既に先に到着したグループは、集まるわけでも散らばるわけでもなく、教師の周りでお喋りをしている。

見たところ、全体の半分以上のグループはもう到着しているようだ。

「ふー、歩いた歩いた」

至って健康そうな汗をごしごしと拭い取りながら、作利川はそんなことを言う。

僕も、立ち止まった途端に健康的すぎる汗がだらだらと溢れてきて、急いでタオルを取り出した。顔に押し当てると、火照っているのがタオル越しによく分かる。脇や首筋なんてびしょびしょだ。

こんなに汗が出るのには歴とした理由がある。そもそも僕は、『歩いてきた』と表現するよりも、『走ってきた』と表現する方が正しいんだし。

どういふことかというと……。

僕は若干屈み気味の姿勢で美奈の方を向く。

「……ねえ、美奈」

「……」

っーん。話しかけても完全シカトである。

反応してくれないのもう言ってしまうと、僕の汗がこんなになる、及びここまで走ってくる羽目になった原因は、この人だ。さらに元を辿れば僕が悪いんだらうけど今はどうでもいい。

僕は美奈に、追っかけられた。

僕は逃げて数kmを走破した。

つまりそういうこと。

「二人ともさあ、子供じゃないんだから全速力で追いかけることができるのやめなよ。美奈もいちいちマジになって稲橋君狙うのやめてさあ、で稲橋君も美奈をからかうの程々にしなよ」

仲裁役に回る作利川。

作利川の言う通り、僕が美奈をからかったところ、何か癪に障ったのか、美奈は逃げる僕を怖い顔で追いかけてきた。そのせいで僕も止まるに止まらず、あちこち逃げて走りっぱなしで公園に来る羽目になったというわけ。

いや疲れた。そして恐かった。

当の美奈は、まあいつものことだけどご機嫌斜めで腕を組んでいる。これ以上しつこく話しかけると蹴っ飛ばされるだろうな。

はあ、と僕が大きな息を吐くと、作利川が腰に手を当てた格好で僕を見た。

「……ていつか稲橋君ごんだけ疲れてんのさ。体力無いの？」
うるさいほっとけ。

確かに今にも膝着きそうな僕の様子を見れば、そう思うのは仕方のないことかもしれない。

けど違うんだって。前も言ったけど美奈が規格違いなんだって。僕は体力ある方なんだってば、ホントに。

だいたい、美奈という幼馴染みがいれば嫌でも体力つくよ。

もう一度大きく息を吐くと、僕はタオルを肩に掛ける。

そのまま美奈の近く（蹴られそうになったら下がれば何とか回避できそうな距離）に立つと、いつ来るか分からない蹴りにちよっとドキドキしながら聞いた。

「美奈、さっきのことだけど、後学のために聞きたいんだけど、僕の言ったことどの辺が一番むかついた？」

途端、ガツと勢いよく美奈の膝が上がった。咄嗟に下がった僕だが、蹴りは来なかった。美奈は腿上げのような半端な姿勢で固まっただまま、僕を睨みつける。

「全部」

「だからその全部の中のどの辺が」

「全部だって言うてんの」

話になりそうにありません。

本格的に溜められた蹴りが来る前に、ごめんなさいを連呼しながら僕は謝る。とにかく謝る。ふざけ混じりならともかく、本気で必死に謝ってる人間も蹴っ飛ばすほど美奈は外道じゃない。……はず。

と、僕の謝罪倒しが効いたのか、やがて美奈は地面が揺れるくらいの強さで、上げていた足を振り下ろした。どすんという音が地面に響いて、足形がつく。

思わずびくりと反応した僕の体を誰が責められよう。このくらい平気だろとか思う人は、一度美奈の恐ろしさを身を以て体感してみればいい。

「……そもそも、そこじゃないし」

「え、は？」

ふいにぼそつと美奈が何か言ったけど、僕には聞き取れなかった。

「何？」

「別に」

美奈はさっさと僕に背を向ける。その背中が「鬱陶しいからもう話しかけてくんない黙れ」と黙して雄弁に語っていた。

……美奈が何を言ったのかもものすごく気になるけど、ここでさらに質問を重ねたら、今度こそ美奈の堪忍袋の緒を切っちゃうだろうな。

どっつするべきか思い悩む僕。その時。

「……稲橋君」

「はい　　うえー!？」

名前を呼ばれたような気がしたので美奈の背から目を離して振り向くと、すぐそこに追滝がいた。眼鏡を外した追滝が。

……花見に行った時以来、久しぶりに見たよ追滝の眼力モード。ていうか今はそれどころじゃない。怖い。何か怒ってらっしゃるの？

「いい、稲橋君」

「はい」

「古館さんが可哀想」

「はい……え？」

「古館さんが、可哀想」

「いや聞き取れなかったわけじゃなくて」

「鈍くてもいいけどちょっとは気付いてあげなよ」

「はい……あの、でも何を」

「分・か・つ・た？」

「は、はい！」

もう怖さ半端無い。僕の知ってる女子はみんな、恐かったり怖かったりある意味恐ろしかったりでもう嫌だ。

とりあえず怖さに押されてはいつて返事しちゃったけど何も分かってないし。追滝、どうしたの？ 僕に何を要求してるの？

追滝に見つめられてガツガチに固まって動けない僕を、トシと作利川は呆れたように笑って見ていた。

……見てないで助けてよ。

班長の作利川が先生へ到着の報告をしている間、僕はトシを脇に引っ張っていつて内緒話をしていた。

内容は……そう、さっきのこと。

「トシは、美奈とか追滝が何考えてるのか分かる？」

「何だお前唐突に」

トシは驚くというよりも、呆れたように僕を見る。

「いや……僕にはよく分からなくて」

「お前に分からないなら俺に分かるわけないだろ。特に古館のことは」

そう言われてもやっぱり僕には分からないから困ってこうして聞いているんです。

アイコンタクトでそう送ると、トシは頭を掻く。

「……。まあ、正直に言えばお前は俺から見ても鈍いところあるな。例えば去年のクラスで郷原（きょうはら）って奴いたの覚えてるだろ？ あのやたら美術が得意な大人しい奴。あいつお前のこと好きだったんだけど知ってるか？」

「……………」

……嘘お。

僕は耳から入ってきた情報に頭の中を占領された。

その子とは、英語の時に席を変えてパートナーとして少し話した以外は特に接点も無かったんだけど……そうなの？ 全然知らなかった。

表情だけで僕の心の中を察したのか、トシは面白そうな顔になる。

「たぶんクラスのお前以外は全員知ってたぜ。なのにお前だけは気付かないんだもん。好かれる当人は一番気付かないってよく言うけど、あれ本当だよ。にしてもあいつはお前のどこが良かったん

だろうか……」

「いや郷原の話はいいからさ」

郷原には悪いけど。

今は郷原のことは脇に置き、僕はさっきの質問を繰り返した。

「あの二人が何で怒ってるのか、僕の代わりに理解して説明してよ」

「お前さらつと難しいこと言ってるなよ。……ていうかほつとけばよくね？ 女子っていちいち大袈裟な反応したり何か含んだこと言うし。ほつとけよ」

「そうはいかないよ。僕が悪いんだったら、ちゃんと謝らないといけないし」

至極真面目に切り返すと、トシはまた呆れた目で僕を見た。

「お前ってホントに女子大事にするよな。たぶん結婚したら絶対力カオに点火するぞ」

……ん？ カカオに点火？

……かかあ天下、の間違いじゃないの？

間違った慣用語を使い、そしてそれに全く気付かないトシは、適当な仕草で手を振った。その手で作利川の方を指して、トシは言う。

「どうしても知りたいなら作利川に聞けばいいじゃん。あいつ詳しくそうだし。女子だし。俺よりずっと分かっているとと思うけど」

そうなんだけど。それは僕も考えたけど。

作利川に話すと、なんかニヤニヤされそうなんだよね。さっきみたいに。思い過ごしかもしれないけど、作利川は気安く相談するには少し恥ずかしいというか。

……いいや。あとで聞いてみよう。羞恥を覚悟で。

密かに小さな決意をした僕。先生と話している作利川の方を何となく眺めていると、横からトシが軽い口調で言葉を放った。

「俺思っただけど」

振り向けば、トシは美奈の方を見ていた。釣られて僕もそちらを見る。

……美奈の腕を組んだご立腹姿、もう何度見てるだろうか。

「古館に關してだけは、作利川よりお前の方がよく分かってると思っぞ。これ勘とかじゃなくて」

……そうかなあ。

僕は美奈の横顔を遠くに見ながら、片手を頭に乘せて考えた。

周りの人達にはよく言われる。だけどそれが実感を持つことはない。

昔は美奈の考えてることなんてすぐ分かったんだけどなあ。今は分からないことの方が多いような気がする。……現に今も、怒っている理由が分からない。からかったこととは違うのかな……。

……あんまり見ると、気付かれてまた怒られそうだ。

「ん？ 美奈と絵理が怒ってる理由？」

報告から帰ってきた作利川を、美奈達より少し離れたところで先手を打って引き留めた。そしてトシにしたのと同じ質問をする。よく考えれば僕はかなり執着してる気がするけど……それもまあいいや。

「直接聞けば？」

「それをする度胸が無いから聞いてるんだよ。追滝はともかく美奈はあと5分は話しかけられないって」

「意気地無しだなあ」

作利川は、さっきのトシとそっくりな呆れ目で僕を見た。

そしてその直後に、ニヤリと笑みを漏らす。

……やっぱりニヤニヤされたよ。

「……あの追加で聞きたいんだけど、なんでさっきからずっと笑うの？」

若干睨みながらの質問に、作利川は表情を変えることなく、指を二本立てた。

「じゃあ2択。私が笑ってる理由と、二人が怒ってる理由。どっち

か片方だけ教えてあげるから選んで」

何で2択なんだよケチ。

僕はむすつと黙ったが、作利川も譲らない。少し間を開けて僕は諦めた。

「……怒ってる理由」

「了解」

作利川は、ニヤニヤ笑いを顔に貼り付けたまま、二本立てた指の一本を折る。

「先に言っておくけど、私はそのままずばりは教えてあげないよ。自分で考えなさい」

「えー」

「えーじゃない。稲橋君が鈍いのが悪いんだよ」

作利川にも鈍いって言われたよ。今日で初めてなのに二回も言われたんだけど、僕ってそんなに鈍い人間？

「じゃあね、まず稲橋君に聞くけど、自分と美奈が話してるところに伊藤君がやってきて、美奈が伊藤君と話し始めたらどう思う？」

伊藤君っていうのはトシのことだよな。

どう思っつて言われても……トシと美奈って何か話すほどの仲じゃないと思うんだけど。

「えっと……まあ、仲良くなったのかなあと」

「……ふーん」

何そのつままないねみたいな態度は。でもそうとしか思わないんだよ。何て思えば正解なのさ。

「鈍いというより、興味とかないんだね、稲橋君は」

だから何の興味なんだよ。どこが鈍いと言われるんだよ。教えてよ。

だがしかし、作利川はころつと話を変えた。

「たとえば稲橋君、ラブコメの意味分かる？」

「分かるも何も、ラブコメデイの略だろ？」

それくらいは本をあんまり読まない僕だって知ってるっての。

「じゃあそのラブコメジャンルの作品言える？」

「え……」

言えない。

途端に言葉に詰まる僕を前にして、作利川は長い溜息をついた。片手でその長い黒髪の根元をがっさがっさと無造作に掻きつつ、ふとぴたりとその手の動きを止める。

「稲橋君も美奈関連で色々大変だけど、美奈も稲橋君相手に苦労しそうだなあ」

「どういうこと？」

「あ、いや、何でもない」

作利川は空いているもう片方の手を軽く振った。
直後にその手を僕の肩に置く。

「美奈はね、怒っちゃいないよ。拗ねてるだけ。怒るっていうのは、そもそも長いこと続かないものだし。稲橋君には理解できないことかもしれないけど、女の子の不機嫌には色んな種類があるんだよ？」

「……そうなの？」

「……やっぱり稲橋君は鈍いというか。でもね、稲橋君だって自分で分かってないだけで、本当はどこかで気付いてるよ。美奈が本当に怒ってるわけじゃないって。だって一番近くにいる人なんだから」

いやそれはどうかなあ。僕は美奈が怒ってるとしか思えない。

ほら見てよあれ。今は頭から湯気が出てるわけではないけど、明らかに腹立ちを抑えてる感じでしょ。

と、そろそろ全ての班が公園に到着したのか、先生の収集号令がかかる。みんながそちらへ向かう中、作利川は少し口調を速くして続けた。

「絵理もね、怒ってはいないよ。ちょっと気難しいところがあるからそう思われるのかもしれないけどね。絵理は滅多なことじゃ怒っ

たりしない」

「ふーん……じゃあどうしていつも僕に対して眼鏡無しで迫ってくるの？」

「それはねえ……何でだろうね。説教モード？」

そんな、同世代から何度も説教を受けなきゃいけないような駄目な子ですか僕は。

いよいよ周りの人もみんな収集号令をかけた先生の付近に行ってしまう、二人だけ離れて話しているわけにもいかないのです、作利川はもう超早口で言葉を締める。

「最後にひとつ。誰かを一番怒らせることが出来る人は、その誰かを一番幸せに出来る人ということでもある。美奈にとっての一番は、良くも悪くも稲橋君なんだから、そこは自覚しておいた方がいいよ」

そこまで言い終えると、作利川は僕の肩に置いていた手を離して集合場所に急いでいった。……案外、話し出すと饒舌な人だ。ニヤニヤしてたくせにアドバイスをしてる時は真面目な顔だったし。この辺が、個人的に大人っぽいと感じる所以なのかも。

僕も作利川の後を追って足を急いで動かしながら、思わず言われたことを頭の中で繰り返し返す。

美奈にとっての一番、ね……。

間違っではないのかもしれない。ていうか合ってると思う。美奈には本当の両親はいないし、突き抜けて付き合いが長いのは僕だ。それに、よく周りからは僕ら二人は仲良しだとか言われるけど、そ

れもあながち……合っているのかな。

あと作利川は何て言ったか、拗ねてるだけとか言ってたけど……
ホントに怒ってないのかね。

あっ、やばい、急がないと叱られる。

3 - 5 小枝は意外と鋭い

「伊藤君のお弁当凝ってるねえ。自分で作った……わけないよね？」

「まさか。うちの親、普段の弁当は気にしないでしょにこういう時だけ張り切るんだよな。それよりいつも気になってたんだけど、女子ってそんなちいさい弁当で足りんの？」

「むしろこれ以上大きくすると食べきれないっていうか」

遠足といえばの代名詞といっても過言ではない、お弁当の時間。

僕らの中学校は給食制ではなくて弁当制だから、別に遠足だからといって、お弁当だわーいやったーみたいな人は少ないけど、それでも遠足といえば外で食べるお弁当だ。

お昼タイムは40分。公園のあちらこちらに、主に大きく分ければクラスごとに分かれた感じで、生徒達は昼食の時間に入っている。まあ何人かは他のクラスゾーンに行ったり、数人で独立して食べたりするけど、だいたい言えば大きな島ができています。

基本は班のメンバーでシートをくつつけあって食べるルールだが、そんな規則は見たところあまり守られてはいない。そもそも教師陣が徹底する気とか無さそうだし。

そういうわけで、僕らは大所帯シート軍団のひとつに付着する形で、シートと弁当を広げていた。

僕は弁当のおかず（母さんは弁当作りが趣味のひとつだから凝っている）のミニトマトを箸であちこち転がしながら、班員であるト

シと作利川と追滝の話をもなしに聞いている。

たった今作利川の言った「食べきれない」という台詞。あれは嘘だね。本当は女子ながらの別の理由があるだろ。特に作利川は小食にはとても見えないし。

鈍いとか散々言われたせいで、女子の言葉に少し敏感になっている僕だった。

「食べきれないとかいう割には、この前の花見の時とかものすごい量作ってきたよな」

「それは男子が大量に食べるんじゃないかなと思った次第ですから。で結局ぺろりと食べたじゃん全部」

「いやきつかったですよ？ そのあと僕なんか食事直後だということに走り回ったんだからね。」

あと食べたという表現だと語弊が生じると思うな。正確には食べさせた、でしょ？ 美奈の祟りとか何とか言っつて僕を脅したの誰だっけ。

無言で作利川の台詞に突っ込みを入れまくる僕。ミニトマトがくるくるくるくる。

「……悠揮」

隣から声が聞こえた気がした。だけど僕は脳内でまだ色々突っ込んでいたので、口からはつい生返事が出た。

「はい？」

「……悠揮、ミニトマト回しすぎ」

ようやくそれが美奈の声だと分かった。そして何を言われているのかにも気づき、急いで弁当に意識を向ける。ミニトマトを勝手に自動的に回し続けていた箸を止める。

で……僕はさらに、横を向いて美奈を見る。
対照的に美奈は一度そっぽを向いた。

「……何」

「いやあ、機嫌直ったのかなって」

「別に直ってない」

直ってるよね。

美奈、最近何だか不機嫌になってもすぐ直るようになってない？

僕の黙ったままの視線をどう解釈したのか知らないけど、美奈は僕の方を睨むと鋭く言った。

「じろじろ見るな変態」

「じろじろは見えてないよ。じっと見てるだけ」

「黙れ」

はい、はい。

僕は回されすぎて若干へこんでしまったミニトマトをやっと箸で

摘んで、口の中に放り込む。

ミニトマト……から連想して、僕はとあることを思いついた。

「そつえばさあ」

「……何」

「美奈ってピーマン食べれるようになったっけ」

「……最初はつから食べられるから」

「あれっ、じゃあアスパラは？」

……しばしの沈黙。

「……たべれない」

「ぶっ」

僕は美奈の子供のような呟きに思わず吹き出した。

いや……わざとじゃないよ？ からかっているわけでもないよ？

本当だって！ たまたま吹く琴線に触れちゃっただけだって！ だって美奈が「たべれない」とか真面目に言うとは思わなかったし！ だから最初から吹いてからかおうとかいう目的で聞いたわけじゃないよっ！ 美奈！ 怒るなっばー！！

何だか美奈の右手がマツサージ器でも当てたかのようにぶるぶると震えているような錯覚がして、僕は慌てて念力を送る。そして数

秒後に念力じゃ伝わるはずがないから意味がなかったと気付く。
で。間に合わず。

「……別に怒ってなんかいないからッ!!」

ばっこーん。

あれー何で頭の中で叫んだことが美奈に伝わっているんだろう、
なんて浮かんだ些細な疑問を根こそぎ吹っ飛ばさせるかのように、
美奈は手元にあった自分の水筒をバットのよう到大振りして僕の額
をぶん殴った。

「……うっ……まだ少し頭がズキズキする……」

公園内の日陰を走り抜けながら、僕は額を抑えてこぼした。
さっき弁当の時間に、美奈ったら水筒の角で殴りやがったから、
そのせいだと思う。

「この辺で休憩しようかな」

適当な木の陰に入ると、背を預けて一息。辺りの様子を窺う。

ただいま、2年1組はクラス総出で鬼ごっこ大会を実施している。ルールは普通の鬼ごっこ。一人の鬼が走り回ってクラスメイトを追いかけて、タッチされれば鬼交代。これを自由時間の終わりまで続けるのだ。ほんとにレクにやる気入ってないようちのクラス。でも、いつ誰が忍び寄ってるか分からないから気を抜けない。

しかしまあ……「2年1組は鬼ごっこ大会をしている」の文だけ抜き取ると、小学校のイベントにしか思えないよね。

「……何で真面目に鬼ごっこなんかやってるんだろうな僕は」

この分なら、別のクラスの人混みにでも隠れていればよかったよ。日向の中を走り回るなんて、暑いったらありゃしない。

「よいしょっと」

気合いの入らないかけ声と共に、預けていた背を離し、僕はまた出発しようとした。

と、そこで。

「悠揮」

「うわぁ!?!」

背後からいきなり声を掛けられて、僕は心臓も体も激しく飛び上がった。

振り返ると、茶髪の少女が至近距離に立っている。

「……………美奈……………心臓に悪いからいきなり話しかけてこないでよ……………。
あーびつくりした」

「……………邪魔」

え？ と問い返す間もなく、美奈はずいっとこっちに寄ってくる
と、片手で僕を押しつけた。

何をするのかと思いきや、美奈は先程まで僕がもたれていた木の
枝に手を掛けると、腕を曲げて懸垂みたいに体を引き上げ、そのま
ま……………木登り？

「あの、差し支えなければ教えていただきたいんですけど、何をや
っていらつしやるのですか？」

「何で敬語なの」

「ちょっと引いたから」

正直に言ったら、細い枝が数本、僕目がけて降ってきた。

「見れば分かるでしょ」

美奈は高さ3mくらいの場所にある枝まで登ると、そこに腰掛け
る。

いや、見れば分かるでしょって。分かるけど。見れば分かるのは
確かだけども。

「……………何で木登りしてんの？ 猿の本能が蘇りでもしたの？ それ

とも暑さでおかしくなった？」

「頭上の美奈を見上げ、一番気になってることを聞く。

「また枝が降ってきた。」

「涼しいから、」

「あー、そうなんだ……」

「涼しさを求めて……求めて……木登りするか？ 普通。」

「その辺の日陰で座ってればよくないですか？ 女子たる美奈。」

「と僕は思うんだけど、美奈本人は気にしてないというか。だいたい美奈、今日も短パン穿いてるしなあ。スカート穿いてくるような女の子は絶対木登りなんかしないだろう。」

「頭上の美奈を見上げると。本来なら逆光になる位置に美奈は座っている。だがしかし、葉が良い感じにブラインドのように日差しを遮っていて、日陰となっていてよく見える。本当に涼しそうだ。」

「あ、そうだ。美奈にひとつ聞きたいことがあるんだけど」

「……何」

「いつもなら返事は来ても、視線は来ない。特に機嫌の悪い時は。でも今回は視線も来た。やっぱり変わったよ。」

「最近ちょっと変わったよね、美奈」

「別に」

即答。

「この前作利川に『美奈から何か相談受けた？』みたいなこと聞いたんだけど、反応が怪しかったんだよね」

「……」

「ていうわけですばり聞くけど、美奈、作利川になんか相談した？」

「別に？」

これも即答。

ただし。美奈には不自然に言葉の語尾が上がっていた。こんな喋り方、というか発音は美奈らしくない。

怪しい。

凶星なんだろうかねー。

「ていうか、何でそんなこと聞いてくるの」

「いやー美奈もようやく大人の階段を登り始めようとしているのかなとか思いましたですね」

言葉の途中で鋭い枝が僕目がけて矢のように飛んできた。

僕は慌ててちよつと右に飛んで、際どいところでそれを避ける。

「……というのは冗談だからね！」

第二投が飛んできそうだったので、僕は体勢を立て直す間も無しに一も二もなく叫ぶ。幸いにも木の矢が再び飛んでくることは無かったけど、ふん、という顔を背ける効果音みたいなものが聞こえた気がした。

ああ、しまった。ちょっと機嫌損ねちゃったかも。

僕は内心で頭を掻きながら、せっかくの会話を続けられるよう試みる。

「作利川繋がりの話なんだけど、さっき、作利川に美奈がどうして怒ってるのかって聞いてみたんだ」

「……」

この沈黙は……返事はしないけどしつかり聞いている沈黙だな、うん。

……。

……、いや、分かりません。知ったかぶってすみません。

「そうしたら、作利川……えーと……そう、怒ってるんじゃないかと、拗ねてるだけとか言ってたんだよね。どうなの、美奈って拗ねてるの？」

「……」

ん、この沈黙は……さっきと違うな。

僅かに感じた異変について深く考える前に。いきなり、僕の上の方から、枝なんか遙かに凌駕するサイズのでかい物体が降ってきた。それは僕の真横に、だんっ！！ と大きな音を立てて着地する。

「……………美奈……………」

信じられない。何今の。木の上から何を介するわけでもなく落ちてきたよ。

……………美奈が運動神経抜群なのは知ってるよ。でも3mの高さから飛び降りて大丈夫なの？ それよかどうして飛び降りてきたの？

美奈は僕を睨んでいる。……………けど何故か、加えて、微妙に恥じらっているような雰囲気は僕は受け取った。

空（正しくは木の上）から降ってきた少女は、僕をちらりと一瞥し、一言。

「……………何その顔」

「……………ふ、ふつとい枝が落っこってきたなって」

ゴッ。

僕の失礼発言に、美奈は思いつきり頭突きかましてきた。高威力のその頭突きが頭にモロに直撃したもので、たまらず僕が後ろに倒れ込んで痛がっていると、美奈は、美奈にしては珍しい柔らかい表情を浮かべた。

「……悠揮は変わらないね」

「……痛……。……え、変わらないって？」

「昔っから。馬鹿で分かりやすいところも、……性格も」

馬鹿で分かりやすいってひどいな。美奈は僕のことをそんな風に思ってたの？

……でもまあ。中学生くらいだと、一般に女子の方が成長が早い、なんて言われるよね。僕が考えてることが作利川に筒抜けなのは、そういう理由からなのかな。そして、最近美奈の考えてることか感じてることとか、僕に分からなくなってきたのも、そういう理由がもとなのかな。

「で……」

僕は尻餅体勢から頭を押さえたまま立ち上がると、さっきの質問の続きをする。

「美奈は拗ねてるの？」

「……」

特に深い意味があつて聞いた台詞でもない。けれど美奈は、美奈に限らず誰もあんまりしないような複雑な表情で顔を逸らした。

この表情を前に見たのは、4月に花見に行った時、河原で作利川が美奈のことについて話した時。桜の花びらとかけて、作利川は、捨て子について独り言のように話していた。その時の作利川の表情

と、今の美奈の表情は、何だかよく似ている気がした。

「……えっと、変なこと聞いた？」

「……………別……………、聞いた」

「そっか。じゃあ何でもない。忘れて」

この台詞にも、別に他意があつて言つたわけじゃない。美奈がこちらに戻した視線は、有り体に言えば 変な視線だった。違和感があつた。

その視線を跳ねとばすかの如く、意識しなくても僕は少し明るい声を出していた。

「でも、作利川って面白い人だね」

「……………何が」

「だって普段は悪戯っ子みたいな感じで不真面目な印象なのにさ。真面目になった時は、とことん大人っぽいなだよ。……………この前花見に行った時に、美奈の話をしたんだけどね。作利川もあれで結構美奈のことを不憫だと思つて、……………その、心を痛めてるつて言つのかな。そんな様子だったよ」

美奈は言葉の途中から、横を向いた。

僕は何か気に障ること言つたかなと、美奈の横顔を見ながら思つたのだが、そうではなかった。

「……、……私是不憫じゃない」

いや、正確に言えば「不憫」という言葉が気に障ったのか。ぼつりと呟いたその言葉を聞いて、僕はどうしてか少し笑いそうな気分になった。

「……そうだね」

美奈には今こうして、クラスメイトという友達がいて、家族がいて、自分の居場所があつて。ちつとも不憫なんかじゃないよね。

横を向いたままの美奈に、僕は笑顔で声を掛ける。

「すっかり忘れてたけど、僕さ、鬼ごっこやってる途中だったよ」

「……あっそ」

「美奈も鬼ごっこ一緒にやらない？」

公園の天気は、一日の中の暑さのピークをようやく過ぎようとしていた。さっきよりも木の影が薄くなった気がする。まったく、まだ5月なのにこの暑さは異常だね。地球温暖化は深刻だね。

「……やる」

返事は、ものすごく小さくて聞き取れないような声だったけど、たとえば返事がNOだったとしても僕は美奈を鬼ごっこに引き入れたと思うな。

理由は二つ。

一つは、せっかくのクラスレクは一応クラス全員で楽しむものなんだからね。

で、二つ目はこれ。

僕は、返事はしたものの相変わらず僕に横顔を見せている美奈に一步近付くと、美奈の腕に軽く触れた。

映画館でみたいにバシツとはたかれる前に、僕は美奈に触れた手を引っ込める。

「僕、鬼だったから、鬼のバトンを受け渡し。頑張つてね！」

馬鹿みたいに明るい声で言っただけだ……美奈の様子が変だ。

まず段々と俯き始めてサイドの髪で顔が隠れた。そして両拳にゆつくりと力が集まっていき、結果ガチガチに握り締められた。おまけに、体全体が洗濯機みたいに激しく振動し始め、無言のくせにゴゴゴゴという破壊衝動オーラが辺りに渦巻き初め。

これ……野に放つといったら危険じゃね？

ゆつくりと数歩後ろへ下がらなかつつ、冷や汗と共に、そう僕が危惧した途端。

美奈は噴火した。

そうして、僕は本日二度目となる、そして一回目を遙かに超える恐ろしさの美奈という鬼に追っかけられる二人鬼ごっこをする羽目になった、とさ。

3 - 0 あれ捕まったら大変なことになりそうな……

「あー……何かまたやってるねえ」

楓ちゃんの声が隣から聞こえて、私は顔を上げた。

私達が今いるのは、遠足で訪れた、ある大きな緑溢れる公園。本当はクラスで鬼ごっこをしているはずの時間なんだけど、みんながあっちこっちに散り散りで、とても成立していない状態なんだよね。私はもう、鬼が誰かも分からないよ。

それはそれとして、私は楓ちゃんの方を見る。

「何？」

「ほら、あれ見てごらんよ」

首を傾げて聞いた私を見て、楓ちゃんは公園内のとある一点を指さす。その指の先を目で追って……私は何が何を「やってる」のかを理解した。

稲橋君と古館さんが追いかけてっこしている。

それも……何というか、リアル鬼ごっこ？ 稲橋君は必死の形相で逃がっているし、古館さんの方はもうあいつ殺す絶対殺すみたいな波動をビンビン放っている。

背筋にぞくぞくくるような、凄まじい波動。大魔王に立ち向かう勇者は、きつとこんな波動を味わうんだろうな……って感じ。うわっ、もう言葉にできない。

これ、端から見ると大事件の一步手前な気がするんだけど、ほつとして大丈夫なのかな……？ 楓ちゃん動じないね。

「いやー……、何やってんだろうね、クラス全員での鬼ごっこなのに二人でやつちゃってるよ」

楓ちゃんは、やれやれまったく……と呆れながら、片手を頭に当てて、件の二人を見守っている。

「あの……助けなくて大丈夫なの？」

「平気平気。稲橋君は丈夫だから」

そう言われても納得できない。

え、何？ 巨大な竜巻がこっちに向かってる？ 牛も飛んでるって？ ははっ、大丈夫大丈夫、オレタチ家の中にいるんだから
みたいな、的外れな安心に聞こえるよ。

楓ちゃんは頭から手を離して、代わりに腕を組む。

「まー大方の予想はつくよ、稲橋君が美奈に何か言ったか、しでかしたんでしょ。そうだなあ……、さっきまで稲橋君は鬼だったから、何か話してるときに、裏切る感じで隙を突いて美奈にタッチして、それで美奈の逆鱗にでも触れたとかそんなところじゃないかな」

「楓ちゃん、すごいね……。何で分かるの？」

「分かってない、勘だよ勘。でも言ってるそんな気がしてきた。た

ぶんそうだ」

うんうんと頷いている楓ちゃん。まあ、理由はどうでもいいとして、本当に助けなくていいの、あれ……。

それに、不意打ちでタッチされたからって、あそこまで怒るかなあ。古館さんってそんな恐い人だったっけ。今見ると、こっちまで心臓がドキドキ言いつうなくらいなのに……。追いかけてる稲橋君、どれくらい恐い思いしてるんだろう。

「古館さん……実はものすごく短気なの？」

私が、少し恐る恐るになりながら聞くと、楓ちゃんは笑い飛ばした。

「そっか、味羅まろは美奈とはこのクラスからだから、あんまり知らないよね。美奈はね、雑誌のモデルでもやってそうなくらい可愛いけど、ああ見えて実はすごいキレイらしい」

そっか、やつぱり……。ああ見えて、っていつか薄々そんな気もしてたんだけど……。

「でもね」

難しい顔で黙った私に、楓ちゃんは笑ったまま付け足した。

「美奈はいい子だよ。特にびっくりするくらい遠慮深くて、良く言えばいつまでも丁寧で、悪く言えばいつまでも他人行儀なんだよね。私だってまだ素で接されてないと思う」

「楓ちゃん、古館さんとあんなに仲良いの？」

「うん。で、美奈が素の自分であることが出来るのは、稲橋君と一緒にいる時だけなんだ」

遠い目で、鬼ごっこをする稲橋君と古館さんを眺める楓ちゃん。

確かにあの古館さんは、完全に素だろう。学校ではあんな様子見たことないし。

「だから稲橋君と美奈は相当な仲良しだから、たとえどんなに修羅場であっても無視しちゃって全然問題ないから。安心して」

軽く請け合われたけど、やっぱり心配だし、安心なんかとても出来ないよ……。

私は一人、両手を握って、逃げる稲橋君が捕まらないように心の中で応援することにした。

ちゃんと届けば、いいけど。

5月25日 晴れ

今日は学校遠足の日だった。

悠揮はそれについて家で散々「遠足なんて中学校の行事じゃない」とかぼやいてたけど、別にそんなの決まってるじゃないと思う。

レクの鬼ごっこだって、あんなの反則だし。

帰りに、結果的に美奈が鬼だったよねとか言われて半端無くムカついた。

もっと威力上げて蹴つ飛ばしてやればよかったと後悔。……でも、最近何故か力が入らない。楓奈が変なこと言ったせいかも。

悠揮が私にも分からないこと指摘してきた時は、ちょっとびっくりしたけど、楓奈の受け売りだった。よかった。

アスパラガスが食べられないのは珍しいのかな。

『日記』 #3 (後書き)

これでチャプター3は終わりです。

> i 2 4 9 7 6 — 8 7 3 <

4 - 1 蛇口の補強が必要です(前書き)

お気に入り件数が着々と減ってきているので、予定より2日早めてチャプター4に入りました。

はい、不純な動機です(笑)。

まあ……どうせチャプター4を全部投稿し終えて更新が止まれば、減っちゃうんでしょうけどね。段階更新のそういう小説だと思って欲しいです。

なんてね、前書きを書き込んでどうするんでしょうかね。

今回のチャプターでは美奈がちよっとは可愛くなってるといいんですけど……。

コメディー専にしようかと思いましたが無理でした。

じゃ、画面から数m離れて、地震に気をつけて読んでくださいね。疲れても責任は取りませんからね。

4 - 1 蛇口の補強が必要です

今日も朝から雨が降っている。

「雨だねえ〜」

誰かが、半ば独り言のように発した言葉を聞いて、僕は顔を上げた。

窓の外を見れば、今朝からずっと降り続けている雨が、途切れることなく校庭を濡らしていた。今朝というかより正確に言えばこの一週間ずっと、だ。

天気予報でも梅雨に入ったことが報道され、さすが梅雨時とでも言うべきか、梅雨らしいシトシト雨が随分長引いている。毎年のことながら、誰かが逆さてるてる坊主を大量に作ったか、行き過ぎた雨乞いの儀式でもやったのではないかと思うほどに続く雨。二人して部屋に居るてるてる坊主を飾っていた弟と妹の様子を思い出し、僕は少し微笑ましい気分になる。

窓際にいたのは作利川だった。作利川は、窓を開けて身を乗り出し、片手で雨を受けている。

「この分では今日も止みそうにないね」

「そだねー」

窓ガラスひとつ隔てた隣の窓を開け、作利川と似たような体勢で外を眺めている古谷が返事をした。

その古谷の方をちらりと見、また外の天気にも目を戻す作利川。

「かたつむりが喜びそうな天気だよ」

「……私あまりかたつむり好きじゃないなあ」

「……ふーん。でもその窓枠のところに一匹いるけど？」

何気なく作利川に指摘されて、ひゃわっ!? と面白いような反応をする古谷。その拍子に窓枠についていた手が滑って外れ、勢いで頭から転落しそうになった古谷に、クラスの中から二人のやり取りを見ていた周り一同は冷や冷やさせられた。

……ちなみに、古谷は干された布団みたいな格好で窓際に引っかかりセーフだったので、あと少し腰が上がっていればスカートの中身が見えてしまいそうで、男子達は別の意味でも冷や冷やしたよ。

「かたつむりねえ……」

と、冷や冷やが一段落したところで、窓際に近付いていったトシが、古谷と作利川の中間地点に立った。何をするのかなと思えば……。

「ほら、かたつむり」

「わっ!?! や、やめてよ伊藤君!」

「古谷……お前少しビビリ過ぎやしないか? こんな小さいんだぞ? 動き遅いんだぞ?」

「う……。で、でも、私はナメクジとかヒルとかプラナリアとかべ

たべた動くのは駄目なん

「ほら、かたつむり」

「きゃー！！ やめてっばー！！」

目の前にかたつむりがにゅっと差し出された途端、ただでさえかたつむりを指に乗せて近付いてくるトシからじりじりと後退していた古谷は、両目をバツ印にして叫ぶと教室を飛び出していった。

その速度が結構な速さで、あとに残されるトシ。

窓枠から摘み剥がされ、至近距離で叫ばれたかたつむりが一番い迷惑だろう。ほら、殻の中に籠もっちゃった。

トシは指にかたつむりを乗つけたまま、顔だけ振り返る。

「すげえ反応……。作利川は別に平気だろ？」

「平気だけどさ……」

一旦言葉を切った作利川は、半眼になる。

「何？ 私には女っぽさが足りないとかそっついう意味？」

「いや別にそうじゃないけど。っーかお前がかたつむり見て『きゃーやめて』』とか言ったらそっつちの方が引くわ」

「何ソレどっついう意味！？」

「そのまんまの意味ー」

煽り言葉を吐いた後、いみじくも古谷が逃げ出したのと同じルートを通って逃げ出すトシ。……かたつむりを持ったまま。

教室の出口までは追いかけた作利川は、廊下に顔だけ突き出して何やら叫ぶ。しばらく叫び合いの応答を続け、唐突に作利川は教室を飛び出しつつ、ガラガラバツと教室のドアを勢いよく閉めた。廊下から何やら凄まじい音が聞こえたけど何の音なんだろうか。

……それら一連の出来事を、席に着いてのんびりと傍観していた僕は、窓から身を乗り出して落ちそうになったり、虫を怖がる女子にあえてその虫を近づける男子、からかわれて起こって追いかける女子とそこから逃げる男子、等々のシチュエーションは全て小学校で見たことあるなあとか想像していた。

「さて、と」

思考を一段落させて切り替えた僕は、机の横に掛けてある鞆から、国語の教科書を取り出す。

今日は2時間目の漢字の小テストがあり、こういう事前勉強はその日になってから済ませる主義である僕は、朝学活が始まる前に復習しておこうと教科書を開いた。

いやあ、今回は特に書き順の多い漢字が出るから、ちょっとは勉強してくるべきだったかな。

今回の出題範囲を頭に叩き込むことに没頭していた僕は、そのせいで目の前に立った人影に気付かなかった。

「……悠揮」

「……」

「悠揮ってば」

ああ、何か僕の名前を呼ばれているような気がするなあと感じてはいながら返答をしなかったのがいけなかったのか。

いきなり何の前触れも無しにがこんっ！ と机が飛び上がり、その勢いで上に載っていた国語の教科書も跳ね上がった。

心臓がかなり飛び上がったものの、幸い僕に直接的な打撃被害は出なかった。でも……、机を蹴られて僕に被害が出ないことなんてかなりレアだ。珍事だ。

あーびっくりした。

まあ……とりあえず下手人は見なくても分かるので、教科書片手にガタガタと机を安定させた僕は、わざとその人を見ないまま、口を尖らせて文句を言う。

「机蹴るなっついても言っつてんじゃん」

「……」

「……」

無言。

「……」

「……………」

無言、二乗。

毎度思つのだが、美奈は無言が一番恐ろしい。

いわゆる無言責めに耐えられなくなった僕は、ギブアップして顔を上げた。

……ああ、恐いからだよ？ 他に理由なんか無いよ。笑いたきゃ笑えばいいじゃん。

「で、何か用事でも って、ちょ！」

ただ、観念して言いかけた僕は、言葉の途中で思わず突っ込みが入った。

それは美奈の格好、というか様子に驚いたからだ。

どういふことかというとな、美奈はまるで滝の中を突っ切ってきた人のように、全身水でびちゃびちゃだった。間違えて洗濯機に突っ込まれた人形……をイメージするとかかなり近いと思う。一呼吸の度、茶髪の手やら学生服の裾やらから水滴が滴り、刻一刻と足下に水溜まりを作っていく。さらに美奈にしては珍しいことに、果てしなく困ったオーラを無言で漂わせていた。

……どうしたのさその格好。一足早くプールに飛び込んだの？

「……………」タオル、ある？」

「……………」えと……………傘拭くために持ってきたタオルなら、あるけど……

……」

「……それでいいから、貸して」

「あ、傘には使っていないから綺麗だよ……」

美奈のびつちよびちよな姿から驚きのあまり目が離せず、僕はゆつくりした動作で鞆からタオルを取り出して美奈に渡した。

僕らの学校では、盗難防止のために昇降口だけではなくそれぞれのクラスにも傘立てが設置しており、盗まれたくない人はクラスの傘立てに置いておけ、ということになっている。クラスの傘立てにある傘なら、誰の置き傘か判明しやすい利点もあるとか。

そういう理由で僕は、廊下を塗らさないように傘を拭くためタオルを持っていたのだ。今日みたいな雨の日に傘を持ってこない馬鹿などいるはずもないだろうし、だから盗難の心配もないだろうというところで僕の傘自体は昇降口の傘立てに置いてある。

とまあ、説明が入ってしまったけど、この間僕はずっと、タオルで髪を拭う美奈を見つめていた。

……こういう訳の分からない理解の追いつかない非常事態の時、最初に何を言うべきなんだろうね。

うん、感想が多すぎてどれから出せばいいのか判断に困るんだけど……。

「……で、美奈は何でそんなにびしょびしょになってるの？」

真っ先に気になったことを聞く。すると美奈は動きを止め、後ろ

を気にするような素振りを見せた。

不思議に思つて僕がそちらを覗こうとすると、その前に、美奈の両肩に手を乗せて横からひよこつと顔を出した人物が。

柔らかい木材をイメージさせる色のボブショートで、愛嬌のある顔立ちをした女の子。

隠していたテストが親に見つかった小学生の表情をそのまま再現している。

「あ、あのね、ごめんね稲橋君古館さんをこんな目に遭わせちゃつてね、でもね、あのねこれには、南極のクレパスくらい深い訳がありまして……」

「……海内か……」

……泡を食つたような台詞で弁解をするその人物を認め、溜息に近い言葉を漏らした僕。

海内の仕業と分かれれば、状況は大まかに想像できる。

あと海内、クレパスじゃ絵を描く道具だよ。クレパスだろ。

何から説明しようか。

海内歩実。^{かいない あゆみ}前に幼馴染み云々の話で言ったような気がするんだけど、このクラスに多数いる幼馴染みペアの一人だ。坂原と海内、という言葉を、単語みたいなものだから覚えてと言った気がする。

海内はとにかく明るい元気な性格の女子なのだが、一つだけ重大な問題がある。天然ドジという危険極まりない特性を持つのだ。なまじ行動派である分、ドジの被害が半端無い。

例えば、理科の実験で試験管を割ったり、薬品を溢したりなんてのは当たり前。何でそうなっちゃうのか分からないが、ノートが裂けたり、鞆の底が抜けたりなんてこともしょっちゅう。特に酷いのは家庭科で、調理実習で火災を起こしたり裁縫ではミシンを暴走させたりもする、故意ではない故に余計に危険な人なのである。

そういうことだから、大方、廊下を歩いていた美奈にバケツの水をぶっかけたとか、水道の蛇口を捻りすぎて水が噴射したところに美奈が巻き込まれたとか、そんな事情じゃないかと予想したわけだよ僕は。

「……そうです」

本人に問い質してみたところ、どうやらビンゴらしい。

「水道の蛇口ごと取れちゃった」

いや、ビンゴどころじゃない。さらにその上を行ってやがった。

何がどういう風に作用したら女の子の力で蛇口が外れるわけ？

とは言え、これは海内が悪い訳ではないので何とも責めにくい。

……ああ、海内が悪いのは事実なんだけど、避けられぬ業というか、海内は明るい元気人間といっても「ごめんねーあっはっはー」

で済ませる子ではなく、何かへマをやらかす度にゴメンなさいと恐縮する子だ。だから、責めにくい。

それに、と僕は思い返す。

海内の保護者は僕じゃないんだ。

「おい、歩実、お前いったい何をやらかしたんだ？」

そこへ、タイミングよく教室の入り口から声が飛んできた。

おそらくは廊下の水浸し惨状を見て、呆れ顔でこつちに歩いてくるのが、件の海内の保護者様である、坂原圭佑さかはらけいすけ。坂原と海内、の男の方ね。

海内という幼馴染みがいるせいか、料理やら家事やら勉強やら運動やら、特に欠点も無くこなせるらしい。

彼が海内の幼馴染みだ。

そして何かにつけて海内の面倒を見ている苦勞人だ。

「けいすけ」

覚束おぼつかない足取りで坂原に縋る海内。その態度は正にはぐれた親と無事に再会した迷子。だが、そんな海内を軽く受け流した坂原は一言。

「はあ、お前また蛇口引っこ抜きでもしたんだろ」

「うん」

……流石、と言うべきか、坂原は原因を一発で見抜いてしまった。この辺、慣れなんだろうなあ。僕はこの二人を見てみると、自分の幼馴染みが美奈で良かったと切に思う。だってこう、引き起こす事態が想像の斜め上に行くほど美奈はかつ飛んでないしね。

自身の腕を掴む海内の手を引き剥がしながら、坂原は教室の向かいに呼びかけた。

「学級委員、悪いけど廊下拭きの手伝い頼む」

「言われると思ったー。断るー」

返事はすぐさま返ってきた。向かいから叫び返したのは学級委員の新井君。彼も僕と同じように、国語の教科書を眺めていて、目も上げない徹底ぶりだった。

「じゃあ芽寺だけでも手伝ってくれないか」

そこで矛先を変えた坂原。頼まれた芽寺さんは、一度だけ、小さく頷き返した。この人は基本的に小心で無口だ。

そして……新井君の元につかつかと歩み寄り、その腕を引っ張る芽寺さん。

「何だよ、俺に手伝わそうってのか」

「……（じくり）」

また無言で頷かれた新井君は、はあっ、という溜息をつく。

「断るつつつてんだろ。今俺勉強してるんだから邪魔するなつての」

ぐいつ。問答無用で椅子から引きずり上げられ、廊下に引つ張られていく新井君。抗議の声も全く無視な芽寺さんは、新井君相手だとちよつとだけ強くなるのだ。

「おい、芽寺聞けよ、やだつて言つてん、ちよつとお前ちよつと力強い痛い握り過ぎ！ 分かつたやるよやるつてばちよつと力抜けよ！」

「……」

……訂正、やたら強くなるのだ。

そんな二人を眺め、坂原も海内を引つ張つて廊下に出て行った。その際、しつかり僕にも手伝いを要求していく。

「どうせ暇なら手伝つてくれ。朝学活までに終わらないかもしれない」

「暇じゃないんだけどな……」

朝学活までに終わらないと、漢字の勉強も出来ないから尚更嫌なんだけど。

でもまあ、同じく漢字の勉強をしたがつていた新井君がやってやらされて（いるのに、その理由で手伝わないのはちよつとずるいかな、なーんて、自分で言つのも何だけど人のいい僕は、手伝つことに決めて席を立つ。

と、そこで、いい加減に髪を拭き終えた美奈の、何かモノ言いたげな目と僕の目が合った。

「……」

……うーん……その目は何を欲しているんですかね。そもそもアイコンタクトなんて今まで何回やったことがあるよ、目線だけじゃ分からないんだけどな。

僕もそれらの意見を目線に乗せて発信してみたのだが、当然ながら伝わっている手応えも無し。仕方がないので予想で聞いてみる。

「……えーと、保健室から体操服ジャージでも借りてこようか？」

もし美奈と同じ状況だったらと考えると、まず着替えが欲しいと僕は思う。生憎今日は体育の授業が無いんだ。

問いに、芽寺さんと同じように無言で頷いて答える美奈。予想は外れていなかった。

そして、美奈は握っていたタオルを僕に押しつけてきた。

「……タオル」

言いかけて、何か逡巡した様子を見せ、それから黙る。

「何すか？」

「別に、何でも」

僕が首を傾げると、美奈はそれ以上何も応えずに背を向ける。

たぶん、今のありがとうを言おうとしたんじゃないかな。そう勝手に解釈した僕は、自分の席に歩いていく美奈の背中はどういたしましてと返すと、自分の雑巾を装備して廊下に出た。

……で、えっと、これはどういふ……。

「……、……トシに古谷に作利川に……みんな何やってるの？」

「掃除だよ」

「手伝わされてるんだよ」

「見て分かるでしょうに」

廊下に出たところ、総勢7名ものクラスメイトが水拭きに勤しんでいた。

学級委員の二人と坂原と海内はいいとして……何故か作業に参加していた、さつき教室を出て行ったはずの3人を見て、僕は思わず笑ってしまった。

「稲橋……笑ってないで」

「分かってるよ、今手伝う」

4 - 2 冗談ばかり

朝学活は体育祭の実行委員が放課後活動がある旨を伝えて終わら
だつた。

「だりい〜」

体育祭実行委員（男）であるトシの呻きが聞こえたような気がし
たが、とりあえず僕はスルーして国語の教科書を再び取り出した。
1時間目の授業の準備などよりも、テストに備える方がずっと大事
なのだ。僕にとっては。

結局廊下の水拭き作業に参加した僕は、朝学活前に再び国語の教
科書を眺めることは出来なかった。水拭き自体は、主に坂原と芽寺
さんの頑張り、最後辺りではんの少し手伝ってくれた美奈の介入
によって、どうにかこうにか朝学活前に終わらせることが出来たの
だが、それも朝学活のチャイムが鳴り終える寸前。危うく集団遅刻
する羽目になるところだった。

そして、その問題を引き起こした張本人である海内は、僕の目の
前（ひとつ前の席）で坂原に説教を食らっている。

この二人は、席替えを何度やっても何度やっても何度やってもど
んな方法でやっても、席が隣同士になる。かなり強い縁で結ばれて
いるんだろう。その点、僕と美奈は中学生になってから、隣同士の
席はおるか、同じ班にさえなつたことは無い。このクラスでさえ6
月の今日までにもう2回程席替えをしているというのに、だ。

何でも良いけど海内、朝学活中もずっと説教受けてたよね。同学

年から叱られる中学生ってどうよ。もうしょんぼりして涙目になっちゃってんじゃない。

面白そうなのでちょっと聞き耳を立ててみる。

「だからな、何度も言うけど蛇口はドアノブじゃねえんだから押すものでも引くものでもなくて捻るものなんだって」

「私ちゃんと捻ったよ？ そしたら足が滑って転びそうになってガツてなっただけだもん」

「転ばない為に水道のそこには特別に滑り止めの床になってるんだよ。その上で敢えて転ぶとかお前の上履き何塗ってあるんだよ。ちよつと見せてみる」

「えー……」

「てかお前踵踏んでんじゃないやねえよ。ただでさえ転けやすいくせに余計転ぶだろうが」

「だって、この上履きサイズ小さいし。新しいの買いに行こうと思っても私ドジだからお金持って歩けないし、お母さん帰ってくるの遅いし」

「……はーあ……。じゃあ今日買いに行つてやるよ。お前サイズいくつになつたっけ？」

二人の会話を聞いている途中から、僕は坂原の苦勞人っぷりに感嘆して、国語の教科書を開いたまま固まっていた。

特に最後の「はーあ……」の溜息なんか、経歴を積み重ねてきた熟練者のそれだ。僕も手の掛かる弟と妹がいるから、坂原の心境は少なからず理解できる。そして海内は僕の弟妹よりずっと手が掛かる子に違いない。

すごいよ坂原。ひよつとして4月の初めに映画館行った時、「頑張れ」って色々な思念が一言に凝縮された言葉をくれたのは君か？

「えつとねー、ウエストがだいたい60くらいでー、バストが」

「そつちのサイズは聞いてねえよ！ お前俺にいつたい何買いに行かせるつもりでいるんだ」

「もう、冗談に決まってるじゃん。……えーと？ この上履きが22cmだから……、23・5とか24くらいかなあ」

「22ねえ……。小学何年生の時に買った上履きだ？」

「圭佑のお古じゃなかったっけ？」

「……マジかよ。じゃあ6年以上前のじゃねえか。そんなもの後生大事に使ってんなよ」

「えへへ……」

お古、という概念が普通に行われているこの二人の関係……。僕と美奈よりもずっと家族に近いかもしれないね。

聞いたところによると、海内は母と弟と三人家族の母子家庭なんだそう。それで坂原が父兄代わりとなって海内を育ててきた(?)

らしい。坂原も坂原で、両親を交通事故で亡くし、近所の親戚を頼りつつも一人暮らしをしているとか。

何でこうこのクラスには不幸な身の上の人が多いんだろう。

流石に、捨てられて頼れる人がいなくなった状況にまで陥ったのは美奈の他にはいないだろうけど。

……と。

「おい悠揮」

前の席の人達の話に興味が向いてしまつて国語の教科書を開いておくせに一度も眺めていない僕に向け、トシからのヘルプ要請がやつてきた。

「放課後の活動の為に脚立をホールに用意しろとか言われたんだけどさあ、面倒だからお前手伝つ」

「だが断る」

急ぎ、新井君のように、わざと教科書に目を落として即答する。

「だがじゃねえよ。いいじゃん手伝えよ。俺達友達だろ？」

「それとこれとあれは別問題」

「どれとどれとどれだ。いいからさ、ほら。お前が手伝つてくれれば1回で済むし、そしたら俺も漢字テストに備えられるわけだから」

「トシはどうせ備えたって大した点は取れないだろ？　しょうがないな……」

本当にしょうがないが、僕は強く押されると従ってしまう夕チなので、どうせごたごた言っただけで結局手伝わされるくらいならもう最初から承認しちゃおうと、諦めに似た心意気になった。

こういう性分になったのは9割以上美奈のせいだけだね。

まだ授業の時間でもないのに、先程から出されたりしまわれたり大忙しな国語の教科書を再び鞆の中にしまい、僕は席を立つ。

「ほら、早くしろよ1時間目が始まったらどうするんだよ」

「態度でかいな！。手伝ってやらないぞ？」

急ぎ足のトシと軽口を叩き合いながら、教室を出る瞬間にふと坂原と海内の二人を見ると、今度は海内は上履きの踵を踏んでいた件について坂原に説教を受けているところだった。

「で？　脚立なんか用意してどうするんだよ？」

「知らないけど、体育祭の大道具でも作るんじゃないの？　あーあめんどくせー、担任が委員会顧問って嫌だよな！。部活の顧問なのも嫌だけど」

階段を一段飛ばしで駆け下りつつ、ふと横を併走するトシにそんなことを聞いてみた。

確かにクラス担任が顧問となると、パシられたり少しだけ面倒かもしれない。

「ついかさ、体育祭実行委員は俺だけじゃないのに、どうしてこう女子は優遇されんだろうな」

「力仕事は男子の仕事だろ。それを言ったら僕は実行委員ですらないのに手伝わされてるんだぞ」

「お前の仕事はお助け委員だ」

「誰がそんな慈善活動をやるかって　と、危っ」

階段を踏み外しかけ、バランスを崩し、危うく下の階まで落ちそうになった僕。

体勢を戻した時には、トシは僕を抜き去っていた。

「お先にっ」

「あ、待て、卑怯な」

抜かされると抜き返したくなるのが小学生の心理。

僕らは一応中学生の真ん中であるはずなのだが、そんなことは関係ない。いつの間にか飛ばす段数が二段、三段と増え、僕は前を行くトシの背中を本気で追っていた。

途中で、始業式の日在校門にいた先生とすれ違う。

「お前らな！　また走ってんのか！　危ないからやめろ！」

「この程度で転けたらその程度つてことです！」

「どの程度だか知らんが止まれ！」

トシがよく分からないことを言い返す時には、もう僕もその先生の姿が見えなくなっていた。

で、結局追いつくわけもなく、僕は1階の床に五段飛ばしで着地した。

「きゃあっ！！」

「うわっ！」

着地したのだが、勢い余って前に飛び出したところで、集配係なのか、何やら大量のお便りプリントを抱えた1年生の女子とぶつかりそうになり。

「ご想像通り、直接激突するのは必死の思いで避けたものの、後ろに転んだその子が持っていたプリント達が、ざばざばとそこら辺に舞い散らばった。

「あつ、ご、ごめん！　今拾うから！」

まだ事態がよく飲み込めていないのか、床に座り込んだまま呆然と胸に手を当てている後輩を前に、僕は慌てて散らばったプリントを拾い集める。

いや周りに他の人がいなくて良かった。もし見られてたら恥ずかしいだけじゃなくて、ひよっとしたら怒られていたかも。

いきなり飛び出して女子の後輩に迷惑を掛ける男子上級生、なんて学校生活において、女子の着替えを覗く男子の次に嫌なレツテルじゃないか。

驚異の後片付けスキルでプリントを全て拾った僕は、とん、とんと軽くプリント束を整えて、まださつきと同じ格好で固まっている女の子に渡した。

「ごめん、失礼しました。……えっと、大丈夫？」

「あ、あつ、はい、大丈夫です」

急にあたふたと動きが戻り、驚きと照れか何かで顔を赤くしたその子は、僕からプリントを受け取ると、そのまま立ち上がって走って階段を上っていった。僕はその後ろ姿を首だけ振り向く形で見送った。

ちなみにこの間、トシは脇でずっと笑っていた。

「……何が可笑しいんだよ」

ゆっくり首を巡らせ、低い声でトシに問い質す。

トシは笑いの余韻を顔に残したまま答えた。

「お前あのままあの子押し倒したら面白かったのになー」

「面白いわけない」

もしそうなら、もう変態確定じゃんかよ！

面白いどころじゃないよ！ もう僕その子に会うかと思うと学校
行けないよ！

心の中だけで突っ込み台詞を連発していると、トシが続けた。

「……っっていうのはまー冗談だけど。俺が思うに、あの子、今の一
瞬でお前に惚れたんじゃないかね？」

……は？ 何言ってるの？

無言でトシを貫く。

「まあまあ、』は？ 何言ってるの？』みたいな目でこっち見るな
よ」

「あのさ、何でトシといい作利川といい、人の考えてることが分か
るんだ」

「知らん。話を戻すけどな、あの子がお前を見た目、あれは……心
底驚いていた目だ」

そんな言われなくても分かるって。目の前に階段から誰かが飛
び出してきてもびっくりしない人なんか美奈が大仏くらいだろ。

「っっていうのも冗談だけど。作利川によると、中学生の女子は先輩
に優しい態度で接されることに弱いんだと。それに俺は女子の顔の
赤くなり方で、どうして赤くなっていたのかが分かるんだ。脳内メ
ーカーならぬ、頬染メーカーってやつ？」

それこそ知らん。意味も違うし。

でも、もういいよそういうことにしておこう。面倒だから。

どうでもいいけど、トシ、何の為に一階まで降りてきたのかさっぱり忘れてるだろ、その顔だと。

「……トシ、ひとつ聞くけど、一時間目までに脚立用意できるのか？」

「あっ!?! やべえ忘れてた!！」

やっぱりか。馬鹿だなあ。

4 - 3 攻撃用ベンチ

「なあ悠揮、さっきの子って可愛かったよな」

「だから知らないってば」

歩き出してから、トシはそればかり繰り返す。

僕としてはうるさいことこの上ない。何なの？ 惹かれたの？

そういう気持ちも分からないことはないけどさあ。

「あの驚いた顔とか相当にポイント高かったかも」

「どこに魅力感じてるんだか。 ていうかさあ、ひょっとして

さっきの惚れてる云々の話はヤキモチ？」

「そついうんじゃねーけど」

何やら難しい表情で考え込むトシ。額に手を当て、歩きながら考えること数秒。

「…………理想に対する…………憧れってやつ？」

「後輩に憧れてどうすんだよ」

溜息の代わりに、軽いチョップ動作で突っ込む。トシってそんな手っ取り早い人間だったわけ。直情的な性格してるのは知ってるけど。

僕は両手を頭の後ろに組み、話を逸らす感じで目的の脚立の置き場所について聞いた。

「で、脚立はどこに置いてあるの?」

「用具室に決まってるだろ」

「決まってるのか……」。

「……」。

「……どこにあるんだそんな部屋?」

「……」

「……」

「……どこまで行くだよ。着いたぞ」

「あつ、ほんと?」

いい加減着くまでに時間掛かったなあと思っただが、それもそのはず、用具室は1Fの職員室よりもさらに奥の突き当たり位置に位置していた。通りで僕がそんな部屋を覚えているわけがないのである。

「失礼しまーす」

一応、職員室に入る時と同じように挨拶をして、僕は用具室に入る。トシはといえば特に何か断るでもなく、無言でスタスタ行ってしまうものだから、僕はその後を急いで追った。

用具室の中は若干埃っぽく、技術室でもないのに、何故かヤスリがかけられていない木材と木工用ボンドの臭いがした。

一番よく出し入れされるのだろう、部屋の真ん中を陣取っている台車を跨ぎ、僕らは脚立の立てかけてあるエリアへと到着する。

「……えっと、これしかねーな」

「うん」

そこには、脚立（大）が1つだけ立てかけてあった。トシの話では、普段2つか3つはあるのだという。

「仕方ねえな。悠揮、職員室行って他の脚立の在りかを聞いてきてくれ。俺はこれ持っていくから……」

さつさと言って、さつさと持ち去ろうとしたトシの手を、僕はガツと勢いよく掴んで引き留める。

「……何か用か悠揮」

「ちよつと待て。何で体育祭実行委員であるトシが体育祭実行委員ではない僕に面倒な方を押しつけるんだよ」

さつき女の子とぶつかりそうになった時以上に低い声で問い質すと、トシはあからさまに目を泳がせて、動揺しながら答えた。

「いや、だって人間誰しもめんどくせーのは嫌だし。俺早く漢字の練習したいし1時間目に遅れるのも嫌だし。ここは早いもん勝ちと

「……」

トシは、僕の手をさっと振り解くと、用具室の出口へとダッシュする。

「あつ待てこの」

ガツンッ。

咄嗟に追いかけてようとした僕だが、トシの抱えていた脚立が、結構危険な音を立ててドア枠に引っ掛かったのを見て足を止めた。焦って猛スピードで去ろうとしていたトシは、そのままの勢いを反動として脚立に引っ張られ、後ろ向きにひっくり返る。

「……」

「……」

「……何か言うことは？」

「……こ、公平にじゃんけんにするか、な？」

結局じゃんけんでも負けた。

グーとパー。正当な理由を手に入れたトシは、それじゃあよろしくとか言いながら、脚立抱えて悠々と用具室を出て行った。

否、かなり重そうにえっちらおっちらしてたかも。

あーあ、面倒だなあ。何で僕が授業までの隙間休み時間を返上して体育祭実行委員会の活動の為に尽力しなければならいんだらう。教室の僕の鞆で待つてる国語の教科書が、僕を呼んでるよ。

「失礼しま　　」

職員室の入り口に辿り着いた僕は、形式的に呟きながら、引き戸に手を掛けた。

と。

「こらBダツシュ2号、職員室に何か用か」

「はい？」

振り返ると、この前校門の前にいた先生、もといさつき階段ですれ違った時に僕らを注意してきた先生が立っていた。さつきは持っていないかったクリアファイルの束を抱えている。

「Bダツシュ2号って何ですか」

「お前いつも走ってるじゃないか。それも危険な猛スピードで。だからだ」

それは貴方と出会う時はたまたま走ってましたけど。必死に走ってましたから猛スピードでしたけど。Bダツシユは無いわ。オーバールに失礼だと思います。

ていうか2号ってことは、1号はトシですか？

「それで、何の用だ」

「用が無かったら職員室の扉に手を掛けてはいけないんですか」

「良い悪いの問題じゃないだろ」

「Bダツシユ1号が僕に体育祭実行委員の仕事を押しつけてきたのでさっき一緒に用具室へ行っただんですけど、脚立が一個しかなかったから他の脚立はどこにあるのか聞きに来たんです」

「Bダツシユ1号って誰のことだ？」

トシのことじゃなかったんですか。

平坦な口調と表情で、淡々と事情を話した僕。これは僕の性格上の問題で、先生というか立場が上の大人を前にすると、緊張して無機物になってしまうのだ。

……というのは冗談で、この人は教師の中でも比較的人の良い先生だから、内面急いで苛ついていた僕は、なるべくそれを表に出さないよう話しただけである。もしそういう遠慮を全部取っ払って隠さず話していたら、「脚立探してるだけですが何か」とか思い切り喧嘩腰な口調になっていたと思う。

そんな僕の内面思考を、作利川等とは違って露ほども察知できな

い先生は、しばらく考えたあとに、たまたま近くを通りかかった保健室の先生に意見を求めた。

「安原先生、脚立って今どこにあるか分かります？」

「そうですね、演劇部が舞台制作の為に1つ使うと言っていたのと、昨日男子更衣室の電球がいくつか割れたから交換する為に持っていたんではありませんでしたか。あともう1つは用具室にあると思います」

即座に返ってきた答えに、そうでしたかー、ありがとうございますと安原先生に礼を言う、Bダツシユの先生（仮）。

僕は保健室のお世話になることになったら、健康診断の時か、美奈に気絶させられた時くらいしかないのですが、そんなに保健の先生について知ることもないのだが、安原先生の情報通っぷりは校内でも有名なので僕も知っていた。

安原先生は美人なのだが、たまによく分からない豆知識を教えてください、空気を読まずに情報を教えてきたりする点が玉に瑕らしい。そういえば僕も1ヶ月前、美奈に頭突きで吹っ飛ばされて保健室に行った時、目覚め直後に脳震盪について詳しく話されてものすごい戦慄を覚えたことを憶えている。

と、僕に向き直るBダツシユの先生（仮）。

「……だそうだぞ。男子更衣室に置きっぱなしになってるやつを持っていくのが一番手っ取り早いんじゃないか」

「そうつぱいですね。ありがとうございました」

言うが早いか、男子更衣室目指して駆け出す僕。相当、時間が押している気がする。

「ちょっと待てコラ走るな！ あと男子更衣室はそつちじゃないぞ！」

急いでもう走っていこうとした所を後ろから引き留められ、男子更衣室への道程を教えてもらい、それでも半ば迷いかけてようやく男子更衣室の前に着いた僕。

今までの学校生活の中で、こんなに長いと感じた休み時間は無かったよ。

この部屋の中にある脚立を持っていけば、ようやく漢字練習に復帰できる。そんな思いを抱いて、僕は男子更衣室の扉を引き開けた。

ガラガラガラ ガラ……

……だがしかし、動きは、途中で止まった。

何故か。

更衣室の真ん中で、濡れた制服のスカートを今正に脱がんとして

いる美奈がいたからだ。

……。

危険だ。

限りなく危険だ。

僕は一気に混乱した。

だってここは男子更衣室だよな。

なのに何で美奈がいるの。

そして着替えようとしているの。

冷静に考えれば、海内のせいで水被った美奈が、僕が借りてきた体操着に着替える為に更衣室を利用している、というだけの話だろう。でもそこに男子が現れた。

端から見れば、女子の着替えを覗く男子。さっき貼られたくないと思った最悪のレベルが今ここに。

でも何度も言いますがここは男子更衣室のはずなんですけど。

で、何より危険なのが、無言無表情のまま、片手はスカートに添えたまま、もう片手で近くのベンチを音もなく持ち上げる美奈。

その目が告げている。今すぐ出て行くかこのベンチの下敷きになって昇天するかどっちか選べ。

「ちよつちよつとちよつとストップ！ 待って美奈！ これは何かの間違いだっ！」

そう、何かの間違いだ。何かの間違いであって欲しい。美奈がベンチを片手で持ち上げられるような怪力の持ち主だったなんて。

「……い、だ……？」

「え？」

「間違い、だあ……？」

ひええ。超怖いよ。あ、足が竦んじゃって動かない。

ベンチ投擲体勢に入ってしまった、怒り心頭の美奈を何とか宥めるべく、僕は様々な言葉を発してみる。

「ほら、まだスカート脱いでないわけだし僕は何も見てないし！」

「……」

「ベンチなんて学校の備品壊したりしたら絶対怒られるじゃ済まなくて弁償もしいないといけないだし！」

「……」

「そもそもここ、男子更衣室だし！」

「……、えっ……？」

最後の一言を言って一呼吸置いた後、ガタンドンッ、と凶暴なうるさい音を立てて、ベンチが落下した。

僕は、おっ、効いたか？ と内心で胸を撫で下ろす。一方美奈は、ベンチを取り落とした体勢で固まったまま、顔だけをこちらに向けた。

「……更衣室……男、え……、ここ？」

言葉がめっちゃになるほど気が動転しているんだろうか。

「そう、ここ、男子更衣室。女子の方は、隣」

僕はそんな美奈にも分かりやすいように、一言ずつはつきり区切ってお伝えした。それを聞いた美奈は、今更のように顔を赤くしてその場にしゃがみ込む。

さっきは殺気で、今は色々混ざった羞恥。絶え間なく美奈から発せられる波動に困ってしまった僕は、死の危機を回避した安心感でか、つい余計なことを口走った。

「まあでも、そんな恥ずかしい場面を見られたのが他の知らない男子じゃなくて良かったじゃん」

言った途端に僕は後悔した。

そもそも、どうして美奈がスカートに手をかけたただけの状態を見られただけであんなにも怒ったのかといえば、下半身は無事だったのだが、上半身は既に、女子の胸囲を覆う下着一枚しかなかったからなのである。

考えてみればそうだよな。濡れたら普通は上から着替えるよね。

そんなわけで、翻訳すると「ブラ見られたのが知り合いの僕でまだ良かったじゃん」というほとんどセクハラの台詞を放った僕が最後に見たのは、目の前に飛んできた縦のベンチだった。

「君は……あれ？　また例の幼馴染みにポッコポコにされたって感じ？」

「ポッコポコ、っていうのとはまたちょっと違う気がするんですけど……」

結局は脚立も運べなかったし、漢字練習が出来ないどころかテスト自体受けられなかった。

昼食の時間になるまで、僕は保健室で寝かされる羽目になったのだった。

うつ……鼻折れたんじゃないかなあ……。

4・* モノローグ(1) (前書き)

モノローグの定義は登場人物の独白とか思考とかそういう感じだそうですが、
厳密なものなんて気にしません。何となくでいいんです。……だめですか？

4・* モノローグ(1)

「私、悠揮の家の子になりたい」

小学……2年生、くらいの頃だろうか。

美奈は今とそんなに変わらず、無口で、無愛想で、友達はほとんどいない子だったけど、一旦打ち解ければ何てことなく仲良くできる普通の子だった。

それだから、美奈の家庭環境を知った時、僕は文字通り驚いて呆然とした。

自慢じゃないけど、……と断っても自慢になっちゃうけど、僕の家族は良い家族だ。

会社勤めの父親と、専業主婦の母親と、少し離れた弟と妹。賑やかで騒がしくてしょっちゅう子供の喧嘩の声がして、でもその倍くらい明るい笑い声のする、ごくありふれた家庭。

そんな家庭で育った僕だから、美奈の家庭の姿なんて信じられなかった。

「ただいま……」

玄関扉を開け、小声で帰りの挨拶を言う美奈。

「おじゃましまーす」

対して僕は、他の友達の家に入る時のような感覚で気軽な声を出す。

と。

「チツ……うっせーな……おい美奈テメエ何ガキ呼んでんだよ」

部屋の奥から聞こえる超不機嫌な声。余談だが、美奈のイライラボイスは父親の遺伝だと思う。

「……」

「呼ばれてないですよ？ 美奈がランドセル置きに帰るって言うから僕が勝手についてきただけです」

黙して何も言わない美奈に代わって、小学2年生にしてはレベルの高い応答をする僕。

答えるその時に一瞬、今の声は父親じゃなくて、反抗期のお兄さんとかなのかなあと思った。美奈がひとりっ子なのは知ってた上で無意識のうちに、美奈の父親がそんな人なんだと思うことを体が嫌がっていた。

「ああ、そ……んじやさつさと置いて出てけ」

美奈の家は、酒と煙草の臭いが充満していて、正直気分が悪かった。自分の家では誰も煙草は吸わない。たまに父が酔っぱらって帰ってくることはあるけど。

開いた玄関口から出来るだけ離れたところで待っていると、やがてランドセルを置きに行った美奈が小さな包みを持って戻ってきた。

ほとんど聞き取れない声で「いってきます」と言いながら玄関扉を閉める美奈。歩き出してから、僕は意図せずとも内緒話みたいな声色で美奈に話しかけた。

「今の……美奈のパパ？」

「うん」

「へー……」

馬鹿正直に第一印象を言うわけにはいかない。かといって黙り込んでいても雰囲気が悪くなってしまふ。窮した僕は、美奈が持っている小包みについて聞くことにした。

「ね、それ何？」

「え？ これ？ ……これは……夜ご飯」

「夜ご飯……。それだけなの？」

「うん。お母さん帰ってくるの遅いから、朝のうちにおにぎり作っておいてくれた」

美奈は、ほら、と包みを開いて僕に見せてくれた。

おにぎり、と言うが、僕から見ればそんなのはただラップの上にご飯を乗せて閉じただけの、米の塊だった。手間なんか掛かっていない。これよりは僕の方が上手く作れるだろう。

それでも、美奈にとってはこれが唯一感じる事が出来る母親の優しさだった。

「……、何でしーんとしてんの？ 悠揮」

「え、別に……。そうだ美奈、今度うちにお泊まり来なよ」

「お泊まり？」

「そ。で、一緒にお風呂入ろう」

「一緒にお風呂……。？」

「何？ 何か変？」

「えっと、私いつも一人で入ってるから……」

「そうなんだ。僕ねえ、弟と妹がいるから、いつもお風呂の時に世話しなきゃいけないから大変なんだよね。美奈も手伝ってよ。悠介ったらね、目を離れたらすぐ水鉄砲でびゅーってやってくるんだから」

「……楽しそうでいいね」

「うん、楽しいよ？ うるさいけど」

そうして、時々美奈がうちに泊まりに来るようになって。僕と美奈と悠介と悠奈の4人で遊びに行ったり、美奈も含めて旅行をしたり、そんなこともするようになって。

僕は少し意地になるくらいに、美奈とよく遊んだ。何でかはその時はよく分かっていたいなかったけど、美奈を家に帰したくなかった。たぶん、子供同士、美奈は家においても全く楽しくないということを感じ取っていたからかもしれない。

美奈のことで、実の両親から僕ら家族に苦情が来ることは、ただの一度も無かった。

4 - 4 玄関

家に入る時は、いつも僕が先だ。

美奈が僕よりどれだけ先に歩いていても、お互いに姿を認め合える距離なら、家の目前に着いても美奈は玄関の脇で僕が入るのを待っている。

何でそんなことしてんの？ 入ればいいじゃん、と普通はそう思うだろう。僕もそう思った。それで、前に一度、理由を聞いたことがあるのだが、美奈の返事は「別に理由なんか無い」だった。ま、理由ないわけないけど。それは誰でもお見通しだ。

僕の予想では、美奈はたぶん、遠慮しているんだろう。家人の前に家に入ることを。

そんな気にしなくてもいいような些細なことより、もっと気にすることはあると思う。例えば暴力とかね。

変なところですかすぐ気を遣うんだからなあ……。美奈も同じ家族なのに。

というようなことを、僕は玄関脇で傘を片手に佇む美奈を見ながら、玄関扉を開けつつ思っていた。

「ただいまー」

「……ただいま」

傘を閉じ、土足エリアの隅っこに置いてある傘立てに突っ込む。続いて、美奈も同じように傘を入れる。

「おかえり、お兄ちゃん、美奈ちゃん」

学校から帰ってきた僕らを出迎えてくれたのは、今日は悠奈一人だった。いつもなら、何もしていなければ母さんと悠介もわざわざ玄関まで来てくれる。怪訝に思うよりも前に、悠奈が少し小さくした声で教えてくれた。

「今ね、悠介がお母さんに怒られてるの」

「ははあ……。何かやらかしたのか？」

「うん、私と喧嘩して私のこと泣かしたから」

にこにこ笑顔で言う悠奈。……いや、泣かしたって言うっても、お前笑顔じゃん。

感じたことをそのまま悠奈に言うと、悠奈はちょっと膨れた。

「だって怒られてしょんぼりしてる悠介が面白くて」

「……嫌な奴だな、お前。そんなに悠介のこと嫌いか？」

「別に嫌いじゃないけど、同じお兄ちゃんなら悠介よりお兄ちゃんの方がいい」

「そーですか」

悠介も似たようなこと言いそうな気がするなあ。こいつら本当によく似た兄妹だし。

喧嘩するほど仲が良いって言うし。

「何でもいいけど、喧嘩は両成敗なんだからな。後でお前も謝らなきゃ駄目だぞ」

「はあ〜い」

悠介は間延びしたやる気のない声で返事をした。ただ、その後にとてもちっさい声で「悠介が謝ったら」と付け足したのを僕の耳はしっかり捉えていたよ。追求はしなかったけど。

と、悠奈との会話のせいで、またしても靴を脱がずに突っ立っていた僕の背後から、不満そうな美奈の声が。

「……悠揮、邪魔、どいて」

どく前にぐいっと腕で押しつけられ、壁の方に張り付いた僕の眼前で、美奈はさっさと靴を脱いで階段を上り、自分の部屋へと入っていった。

……邪魔だと思っんなら、先に家入ればいいのに、まったく。

溜息をつきながら壁から離れたところで、ようやく母さんと悠介のお出迎えがあった。

「おかえり、悠揮」

「ただいま」

「あら、美奈ちゃんは？」

「もう自分の部屋入ってたよ」

母さんは雨のせいで部屋干しを余儀なくされた洗濯物を何とかしていたのか、片手に洋服やタオルを抱えていた。悠介の方は、怒られたせいか若干むすっとしてしている。

「ほら悠介、あんたちゃんと悠奈に謝りなさいね」

そのむすっとした悠介をちらりと一瞥し、そう言い置いて、母さんは二階へと階段を上っていった。

玄関ホールに残された、僕と、悠介と、悠奈。

謝りなさいねと言われた以上、まず最初に口火を切ってごめんなさいを言うべきなのは悠介なのだが……。

「……ふん、ばーか」

思った通り、素直にごめんなさいなど言うはずもなく。この場に母さんがいないことで安心でもしているのか、悠介はそっぽを向いて、よりもよってばーかと嘲るとききた。

ばーかと言われては黙っていられない悠奈。

「謝りなさいって言われたくせにばーかって何？ ばかのくせにばーかって何？ ばーかばーか」

頼むから小学1年生の喧嘩はしないでくれ。君達は歴とした4年

生と3年生なの。悠奈もあからさまに挑発乗りすぎだって……。あ
あもう、また喧嘩始まりそんな予感がするなあ。

「自分が悪いくせに『ばーかって何?』とかやっぱバツカじゃねえ
の。バカチビのくせに偉そうに。謝らねーよーお前みたいなのに」

「そっちが悪いんでしょ!? 開き直るとか最悪! ばーつか!」

「ばかばかうるせーよバカ」

「そっちの方がうるさいですよーだ!」

…… あー、頭痛くなってきた。お前ら二人ともうるせえよ。

「何が『ですよーだ』だし。バカは言うことがバカだなあ」

「ばかに言われても悔しくないし」

「何強がっちゃってんのバカ」

「強がってなんか」

「何強がっちゃってんのバカ」

「同じこと2回も」

「何強がっちゃってんのバカ」

「ひんね」

「何強がっちゃってんのバカ。死ね」

……あー、ついに出了ました。最終奥義、『死ね』。子供の口喧嘩って言葉だけどんどんヒートアップしてくるからもう聞くに堪えられない。っーかね、君達二人とも別々の押し入れに閉じ込めましょうかって話ですよ。

言葉の弾幕で反論を封じられた拳げ句、死ねとまで言われた悠奈は、しばし沈黙した後

「……………っ……………っ……………」

「……………げ」

「あーあ、やっちゃったよ」

今度はついに思ったことが声に出てしまった僕。

悠奈は一応女の子であるからして、ハートが繊細で傷付きやすいんだね。

しかしこれは喧嘩両成敗という前提があっても、客観的に見て悠介の方が悪いような気がしてくる。

「……………っええ……………っく……………」

「ちよっ、泣くとかお前せこすぎだろ！ さっきもそうだったし！」

ああ、さっきも似たようなことがあったわけね。……………こいつらホ

ント仕方ないなあ。

僕はさっさと靴を脱いで家に行くと、泣き出した悠奈の頭を抱き寄せ、よしよしと慰める。子供をあやす腕については超自信あるよ、僕。

「悠奈、気持ちは分かるけど、自分も喧嘩しておいて泣くのは卑怯だぞ。分かるよな？」

「……………うん……………」

「それにいくら悔しいからって、死ねとか言われたくらいで泣くな。僕なんかただの死ねより3倍以上きつい攻撃を誰かさんに食らってるんだから」

あ、自虐入っちゃった。

まあいいや。落ち着きを取り戻した悠奈の頭をもう一度撫でてから、僕は悠介の方に向き直る。

悠介はびくつと体を震わせて反応したが、わざとらしく目を逸らす。

「……………何さ。おれ悪くねーもん」

「二人とも悪いんだよ。いいからこっち来い」

渋々といった感じで近付いてきた悠介を、悠奈と同じように抱き寄せて……………、数秒後に二人の頭を同時にパカんと（強めに）叩いて離れた。

「痛あ……………」

「痛え……………」

「はいこれで両成敗。ごめんなさい完了。仲良くしろよ」

二人を抱き寄せる際に邪魔だったので床に置いた通学鞆を拾い、僕は二人をその場に置いて、自分の部屋に帰着する。

鞆をベッド近くに放り、閉めたドアに寄っかかって一息。

たぶん…………、二人は照れて言わないだろうから本当のところは分からないけど、たぶん、この隙に二人はちゃんとごめんなさいを言い合っていることだろう。

それと、後で聞いた話だけど、悠介と悠奈は《喧嘩》　謝りなさい　謝らない　また喧嘩《》というサイクルを僕らが帰ってくるまで何回も続けていたらしい。そもそもの喧嘩の発端を忘れるくらいエンドレスに。

ホント、仕方ないよね。

「悠揮、ちょっといいかしら？」

家に帰ってきてから約20分くらい。机に向かって、出された宿題のノルマと睨めっこしていた僕は、部屋の外から聞こえた母親の声に顔を上げた。

「よくないけど、何か用？」

ノブの回る軽い音がして、戸が内側に開く。

僕は鉛筆やら消しゴムやら、プリントの上に散らばっていた文房具を軽くまとめ、椅子を半回転させ

「お使いを頼みたいんだけど」

「他を当たってください」

東になりかけていた文房具を再び机の上にぶちまける。椅子もソッコーで元の向きに戻した。
ずばりお断りです。

「あらかしらその急いで宿題をやっているところをアピールするみたいな動きは」

「ちゃんと宿題はやってました！ 今のは違うの。言えないけど違うんだよ」

「？ 何でもいいけど、お使いお願い」

「だから他当たれってば。今宿題やってるじゃん。見て分からない？」

「えっ、だってそれは親が入ってきたから慌ててやってるフリをしなければでしょう？」

「違うから！ やってたから！ ホントに話通じないなあもう！」

僕は問答無用の証拠とばかりに、半分ほどまでは問題が解かれて
いるプリントを突きつける。

上にはらまかれていた消しゴムが床に転がったけど、気にしない。

だが母さんは数秒後に困った顔をして言う。

「遠くて何が書いてあるのか分からないわ」

ならこっち来いや。

……と思ったが流石に言えないので、僕はプリントを机の上に戻すと、落っこちた消しゴムを拾いながら諦め半分に訊ねる。

「ちなみにお使いって何？」

「悠介と悠奈の上履きの新しいのを買いに」

「やだ。もうお断り確定」

「そう言わないの。お兄ちゃんでしょう?」

「お兄ちゃんだからこそ嫌なんだって。ていうか母さんもあの二人を制御するのが大変だから僕にお使い行かせようとしてるんじゃない?」

「……あら」

曖昧に笑って誤魔化す母さん。

やはりか。そうだろうと思ったよ。だってしょっちゅうだもんこんなこと。

「とにかく。僕は宿題を済ませるので忙しいので。他の人に頼んでください」

「他に頼める人なんていたかしら」

「いるじゃん美奈が! それか二人でお使いに出すとか!」

母親が今回部屋に入ってきてから何度目かになる大声を出す僕。すると母さんは片手を頬に添えて呟いた。

「美奈ちゃん、さつき頼もつと思ったら宿題やってるって言われちゃったのよねえ」

「だ・か・ら、僕も同じ宿題をやってるんだっつーの!」

机をプリントごとバンバン叩いて怒鳴る。

「あらまあ、そんなにカッかすると体に毒よ」

原因は誰だ。

「……まあ、そうねえ、そういう事情なら仕方ないわねえ」

ようやく納得して諦めてくれたらしい。僕は鉛筆片手にほっと一息つきかけたのだが。

「お母さんが悠介と悠奈をスーパーまで連れて行くから、悠揮は部屋干しの残りの洗濯物を取り込んで畳むのと、夕食の炊飯器セットするのと、今日のおかずのお肉に下味付けるの、代わりによろしくね。あ、その宿題終わったらでいいから」

「ちょっと待ってください」

で、結局、引き受けた。

あーあ、心なしか両肩に誰かが乗っかってると思っちゃうくらい肩が重い。

普段なら二人の面倒を見ることをこんなに億劫に感じたりはしないんだけど、今日は目の前でケンカされたばかりだから、何だか気が重い。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！ 上履き買いに行くんだよね！」

「兄ちゃん兄ちゃん！ 上履き買いに行くんだよねおれ22cm！」

「……はい、はい、22ね。……でかいね」

「どしたの兄ちゃん。さつきよりテンション低いんだけど」

「どうしてだろうな」

母さんから預かった財布をポケットに突っ込み、片足を靴に突っ込む。生返事な僕の傍らに悠介が座り込んで靴を履き、もう傍らには悠介が座り込んで同じく靴を履いた。

「お兄ちゃん、私は20だから」

「分かったから報告しなくていいよ。着いたら自分で選びなさい」

「めんどくさいー」

「お前らの買い物に付き合わなければならぬ僕はもつとめんどくさい」

言いながら、僕は靴を履き終えて立ち上がる。いざ出かけんとしたところで唐突に悠介が「あつ」と声を上げた。

「どうした悠介。忘れ物？」

「そうじゃなくて。美奈ちゃんも上履きが小さくなったって前に言ってた気がするんだけど」

「そうなの？」

「うん、兄ちゃんがトイレ行ってる時に」

トイレ行ってる時っていつだよ。ほぼ無限大にある時じゃないか。

「おれちよつと聞いてくるから」

せつかく履いた靴を乱雑に脱ぎ捨てると、悠介は美奈の部屋へと入っていく。

残された僕が何気なく横を見ると、同じく残されて立っていた悠介と目が合った。

「……何だよ、悠介」

「お兄ちゃん、美奈ちゃんの面倒はお兄ちゃんがちゃんと見ないとだめじゃん」

「……はあ、お前もう言ってることワケ分かんないな。突っ込む気力も無いよ。だいたい僕がトイレ行ってる時の話を知ってるわけないだろ」

そうこうしているうちに、美奈の部屋の戸が開いて、悠介と美奈が出てきた。そのまま何の言葉も無く玄関で靴を履き始めた美奈に、僕は思わず声をかける。

「あれ、美奈、ホントに美奈も上履き要るの？」

無言でこくりと頷く美奈。その横で微妙に得意げな悠介。さらに僕の横で何だかその得意げな悠介が気に入らない風の悠介。

「何だ、みんなして上履きの交換が必要なんだ。知らなかった」

僕が三人をそれぞれ見ながら言うと、美奈の動きが一瞬だけ止まった。

「……………この前帰り道で言ったのに」

「え、何？ 何か言った？」

ぼそつ、と美奈が何か漏らしたような気がして、僕は聞き返したのだが、美奈は何でもない和不機嫌に言うとさっさと玄関を出て行った。

「…………？」

僕は自分の傘と、美奈の傘も傘立てから引き出して、若干首を傾げながら玄関ドアを開ける。

4 - 5 青い上履き

今回のスーパーは空いていた。

遠足のお菓子を買いに来た時と比べると、一目瞭然、というかもう見なくても音だけで分かるくらいの差があった。この前は満員電車と例えたような気がするけど、今回は早朝の住宅街の道路。たまに犬の散歩やランニングをしている人とすれ違う程度、そのくらい空いている。

たぶん、今はまだこの辺りの主婦の皆さんが買い物に来るにも少し早い時間なんだろう。

夏だから特にね。1日のピークは過ぎたといえ、まだ少し暑いし。

「お兄ちゃん、上履きってどこ？」

「自分で見るよ吊り下げ看板をさあ。あと走るな」

「あっ、あっちだ！」

「ホントだ！　じゃあどっちが先に着くか競争しよ！」

「競争しよ、じゃなくて走んなくて言ってるだろ！」

僕は待ったを掛けたのに、言うことを聞かない弟妹どもは上履きの売られているコーナーを目指して走って行ってしまった。

慌てて声を追わせる僕。

「おいこら走るな」

がすつ。

「悠揮うるさい。迷惑」

大きな声で呼び止めようと思ったら、言い終える前に美奈の肘打ちが僕の脇腹を直撃した。

片腹押さえて悶絶。

「……ッ」

「人いないから響くんだから」

「それはっ分かってるけど！でもだってあいつら走ってっちゃったし」

「止まるわけないじゃん」

「……そうですね」

美奈の言ってることは正しい。でもどうして僕だって悪いこと言っていないはずなのに、痛い目に遭うんだろう。

小学校を経験した身、こつも無人だと走りたくなっちゃう気持ちは分かるよ。分かるけど、そろそろ自制することを学ばせないと、あいつら破天荒なまま育っちゃいそうで困る。それかセーブを知らずに育つか。美奈みたいに。

まあいい。仕方ない。

脇腹をさすりさすり、僕は二人の消えた方へ歩を進める。

……と。

「悠揮、悠揮」

名前を呼ばれたと思ったら、横合いから軽く袖口を引かれた。

「っと、何？」

「これ」

僕の袖を引っ張ったのは美奈。美奈は、両手にそれぞれ1本ずつ、合計2本のペットボトルを持っていた。よく見れば、それは最初の発売日から少し経って、ラベルも一新したフルミツシュ。

フルミツシュって何だっけ？ って人の為に解説するけど、これはペットボトル飲料で、僕ら家族のハマっている作品『ファンタジーワールド空想世界の物語』ストーリー通称ファーストに出てくる飲み物をこの世界で再現してみたものなのである。

単なるウケ狙いではなくて、案外美味しい。味はスポーツドリンクと乳酸菌飲料とその他諸々を足して二で割ったような、今までにない不思議な味のするものだけど、とにかく極力自然な味が出るように工夫されている。ま、ファーストの世界って緑豊かだからね。

「で、これがどうしたの？」

「要らないの」

「要る」

ちよつとぶざけて言ってみたら、通路を引き返されそうになつたので慌てて受け取る。余談だけど、僕はこのジュース？ は結構好きだ。美奈も、理由は知らないけど自然な甘さのする飲み物や食べ物が好きだから、僕よりか好きかもしれない。

僕は受け取ったペットボトルを軽く揺らしながら、何ともなしに言う。

「にしても、美奈、最近つていうかこの間から、何か優しくなつたよね」

「……」

「4月……花見に行った頃かな？ 若干、昔の面影が戻ってきたつていうか……」

「そう」

肯定なのか疑問なのかさっぱり分からない、とてつもなく素気ない返事。受け流されてるのは重々承知したが、僕はやっぱり何ともなしに続けてみる。

「前にも聞いた気がするけど 何かあつた？」

「別に」

前にも聞いた気がする質問に返ってきたのは、前にも聞いた言葉。

僕の質問に返ってくる美奈の答えの5割以上は「別に」とか無言とか、そういうのばかりだ。

「どうせ作利川とかに恋の相談でもしたんだろうと思うんだけどね」

僕は両手を頭の後ろで組みながら、何気なく言った。

ガッシャーン。

そうしたら、いきなり後ろで大きな音がするもんだから、僕は後ろ手に持っていたフルミツシユを危うく落とすところだったよ。

何事かと振り向けば、どうやらお菓子の棚に派手に片足をぶつけた様子の美奈が、顔を真っ赤にして散乱したお菓子を拾い集めていた。この前は売り切れていて悠介と悠奈が文句を垂れていたとつとつとなど、箱形のお菓子が並んでいる棚だ。通路に飛び出ているから、ぶつかることも少しはあるかもしれないけど、そんな思いつきりぶつかるほど邪魔だとは思えない。

「……、えっと、何やってんの？」

「……別に」

真っ赤な顔をしたまま、ぼそつと呟く美奈。その様子を、フリーズした画面みたいに動かないでしばらく眺めていた僕は、やがて独り言のように言葉を発する。

「……、えっと、まさか凶星？」

「別に！」

噛みつくように叫んだ美奈は、雑にお菓子を拾い集めると、適当に棚に戻していく。

……何が「別に」なんだかよく分からないが、美奈は相当テンパっている。これは十中八九事実と見て間違いないだろう。

花見に行った時に、美奈が何か作利川に相談したんだろう……くらいまでは目星が付いていた僕だったが、まさかそれが恋愛相談とは。驚いた。美奈もそういうお年頃になったってことかなあ。

とりあえず、適当な美奈の並べ方で戻されたお菓子達を綺麗に整えつつ、僕は美奈に話しかける。

「別にね、そんなに恥ずかしがらなくなたって僕は突っついたりしないよ」

「別に恥ずかしくない」

……嘘おっしやい。鏡見てきたらどうだよ。

でもまあ、これで謎は解けた。よく『好きな人がいると他の人も優しくなれる』とか言うが、美奈の態度が4月頃から変化しつつあったのはその原理だろう。

しかしまあ、気になるんだけど、美奈の好きな人って誰なんだろう。

聞けやしないけどな。

「……作利川ってそういうの詳しそうだしなあ……」

なので、一人で納得して頷いていたら、恥ずかしいを通り越してどうやらお怒りモードになった美奈が、バシバシバシバシと僕のことを連続で引っぱたいてきた。売り物のお菓子の箱で。

「痛い痛い痛い！ 何だよ、何か文句あるの？」

お菓子の箱を丁重に美奈から取り上げてから、痛いアピールをする僕。

美奈はしばし言葉を彷徨わせた後、まだ赤い顔のままに言った。

「……恋の相談じゃ、ないから」

「ないの？」

「ないッ！！」

うわ、びっくりした……。そんな大声で怒鳴らなくてもいいのに。

ただ、美奈は顔こそ赤かったものの、少し、本当に怒っているようでもあった。恥ずかしいのではないのかもしれない。そんな気がする。

……ということとは……、僕の想像は読み違い？

うーん……、と頭を捻って考える僕。さっきの予想が間違ってた

とすると、美奈の態度の変化の説明が出来なくなってしまふ。どうなってるのかなーと知恵熱が出始めたところで、ふと美奈と目が合った。

「……………」

「……………」

「……………見るな」

「いや、見るなって言われても。……………実際、美奈は最近僕のこと蹴っ飛ばす回数も少なくなってきたし、気を遣ってくれるし、絶対優しくなってきたと思うんだけどさ、恋の相談じゃなかったら、何を相談したらそれに繋がるのか」

「……………」

「……………」

「……………兄ちゃん、遅いよ。何やってたの？」

「まあ、ちよつとね……」

棚を元通りに直してから、ようやく上履きの売っているコーナーへたどり着くと、僕を見つけた悠介に開口一番そう言われた。

まさか「いやーちよつと恋愛の話を振ったら美奈がお菓子の棚を蹴っ飛ばしてねー」なんて言うわけにもいかず（隣に美奈がいるわけ）、僕は適当にはぐらかしておく。

「それより、ほら、とつとつと売ってたぞ」

「……ふーん」

僕が差し出したお菓子にあまり興味を示さない悠介。

「何だお前。遠足の時にあんなに欲しがってたのに」

「ホントのこと言うと、実際あの時、そんなに食べたかったわけでもないし。その場のノリだよノリ」

「……」

言葉が出ない。

もう一度言う、何だお前。この前はそれが手に入らないからって床に両手まで着いて落ち込んでたじゃないか。それもノリだということか。……変な奴。

と、悠介の後ろから、僕らに気付いた悠奈が寄ってきた。

「あっ、とつとつと！ 今日はあるんだ、やったあ！」

悠奈は悠介と違い、ノリでとつとつとを欲しがってたわけでは無いらしい。お菓子の箱を抱えて嬉しそうにしている。

「……前はお菓子如きで何であんなに盛り上がってんだろつと思っただけど、こうしてみるとこっちの反応の方が正しいような気がするな」

「何で言いながらこっち見るんだよ兄ちゃん。おれもう4年生だぜ？」

「その台詞を是非とも数週間前のお前に言ってほしかったな」

ていうか、もう4年生なら、一人で上履き買いに行くくらいのこと、何の問題も無いだろうと思う僕だった。

そうそう、本題を忘れてたよ。

「で、選べたのか、上履き」

「まだ」

遅いよ。

言うまでもなく思っていることが伝わったのか、悠介と悠奈は二人して弁明を開始。

「だって爪先のとこの色がいっぱいあってどれ選べばいいか分からなくて」

「好きなの選べばいいだろ」

「だって学校では青か白がいいよって言われてるんだもん」

「じゃあ青か白で好きな方選べばいいだろ」

「だって黄色いのがいいんだもん！」

「じゃあそれにしろよ！」

「だって先生に怒られるし！」

「じゃあ諦めて青か白にすればいいだろっ」

段々うるさくなつていく悠奈と一緒にヒートアップしかけた僕は、途中でハッと我に返る。

「……もういい。悠奈黙れ。お前は青色で決定だ」

「えー、何で？」

「いつまでも答えが出せないお前の代わりに選んでやったんだろ。それから悠介は白だ」

「え、おれ青の方がいいんだけど」

「私は青より白の方が……」

ぴーちくぱーちく、指定してやったらやったで反抗しやがる。ストレスも溜まるが、何より疲れる。精神的疲労ってやつだ。もうお

前から好きにしろよって叫んで今すぐ帰りたい。そして自分の部屋に引きこもりたい。

「…………お疲れ」

…………感情のこもっていない、小さな美奈の声にでさえ、ちょっと救われた。

「…………おっけ、分かった。悠介は青の22cm、悠奈は白の20cmだな。異論はもう認めないぞ」

言い置いて、二人の反論を待たずに、まずは青い上履きがまとまっているエリアから22cmと書かれている箱を探す。

22、22つと…………。どこにあるのかな？

「おい悠介、22cmの青い上履きなんてないんじゃないの？」

「22の青が無いの？」

「そうなんだよ　　ってうわっ!?!」

突如、背後から聞こえた聞き覚えのある声に何気なく返事しかけて、気付いて慌てて振り向いて、僕は目を瞠る。

そこにいたのは、クラスメイトで、前の席の誰かさんの幼馴染みの…………。

「海内じゃないか！　びっくりした…………」

そう、海内だった。海内は快活に笑ってとりあえず詫びてくる。

「えへっ、ごつめんねー。で、何なの？ 青の上履きの22cmのやつが無いって言った？」

「うん、そう言ったけど……だから何？」

そう返すと、海内はにこにこしながら一息置いて、大きな声で呼んだ。

「けいすけー！！」

人が少ないスーパーの店内に、けいすけの4文字が反響する。

僕は一瞬、迷惑だと美奈が海内に手を出すんじゃないかという馬鹿な想像をしてしまった。それくらいうるさかった。

で、数秒ほど経って。

「うるせえよ今度は何だよ歩くトラブルメーカー」

商品棚の陰から、通路を急いできたらしい坂原の姿が現れた。

彼は、ほんの少し驚いた様子で言葉を止める。

「何だ、稲橋……と古館じゃないか、奇遇だな」

「や、やあ？」

空気の移り変わりについていけず、語尾が疑問型になった挨拶を

する僕。坂原も僕に挨拶を返してから、一気に海内との距離を詰めた。そのまま胸倉でも掴みそうな勢いだ。

「……店内で大声を出すなど、小学生の頃から再三言ってる……」

低くドスの効いた声。本当に親みたいな叱り方だ。美奈とはまた違った恐さがある。

「……というか、小学校の頃からって、要するに今でも再三言ってるのか……」

一方、詰め寄られた海内は特に気にすることもなく笑った。

「あはは、ごめんねー」

「……謝る相手は俺じゃねえよ。店の人だよ……」

一気に消沈して叱る気が失せたような様子の坂原。それから、気を取り直して海内に質問した。

「で、何の用だよ」

「うん、あのね、圭佑のお古の上履き、稲橋君にあげてもいい？」

「……は？」

「何か稲橋君、青い22cmの上履き探してるんだって。丁度私が今履いているやつじゃん？ だからあげてもいいかって」

「要らねーだろー！」

「それは要らないって!」

僕と坂原の叫び声が同時に放たれ、重なった。何を言い出すかと思えば、この海内さんはお古をくれようとしていたのだ。踵を踏まれてポロポロになって年季の入った上履きをだ。そんなもの悠介が履けるかって。

だいたい、僕が今日の学校で抱いた、お古という概念が普通に行われるこの二人の関係……なんて思いはあれ全部見当違いだね。単に海内がお古という行為が好きただけだったんだ。

「何さ二人して要らないって」

海内は少し膨れている。

そんな海内に、坂原が溜息混じりに言った。

「お前さ、いくら何でもクラスメイトでお古は無いわ。なあ稲橋？」

「そう、だね。ていうか22cmを僕が履くわけじゃないし。海内が履けないサイズなんて僕も履けないよそんなの」

呆れ笑いで言うと、海内は「あれっ?」という表情になった。

「稲橋君の上履きを買いに来たんじゃないの?」

「だから違うよ。22cmなんて履けるわけないじゃんか。今回は弟と妹の上履きを買いに来たの」

僕は振り返り、悠介と悠奈を指し示す。僕ら三人の話についていてなかったのか、悠介と悠奈と美奈はそれぞれ呆然と突っ立って

いた。

そういうことかーと納得する坂原を尻目に、「画期的なアイデアだ
と思っただけどなあ……と自身の頭を掻く海内。

いや、画期的なアイデアなのは認めるけどね。

さて、悠介の上履きは本当にどうしようかと思ったところで

「おれ別にお古でもいいけどね」

……。

悠介の声が聞こえた。

「……。……。えっ？ いま、今なんて？」

「だから、お古でもいいって言ったんだよ。上履きなんて履ければ
何でもいいし」

さも当然のように言う悠介を目にし、今度は僕がぽかーんと凍結
する。だって、だってお前、白より青がいいとか言ってたくせに……
……。履ければ何でもいいとか……。言葉が出せない僕の代わりに、海内がアクションを起こした。

「えっ、キミ、お古がいいの？」

「いや、えっとお古」が『いいんじゃないなくて、お古』でも『いいっ

て言ったんですけど」

「そっかーそっかー、じゃあ今こことあげるね!」

ほいつ、と何の前触れもなく、軽く悠介に上履きを手渡す海内。
爪先の青い上履きだ。

「どっから!」

「出したんだよそれ!」

またしても台詞が被る僕と坂原。

いやー、もう、何というかね。坂原と海内、と話していると驚きの連続だよ。よくも坂原はこんな娘この相手をしてられるなあ。尊敬するよ、やっぱり。

突っ込み役としても気が合いそうな予感がするしね。

坂原と海内と別れ、レジへと向かう僕ら。僕の片手には悠介が海内から貰った青い爪先の上履きと、自分の分のフルミツシュ。もう片方の手には、悠奈の白い爪先の上履きと、美奈の分のフルミツシ

こと、美奈の上履き。悠奈と美奈は、僕らが騒いでいる間にさつさと自分で上履きを確保していた。

「……お兄ちゃんの友達って、コセイテキだよな」

「……まあ、海内は特別な種類だな」

言葉を知ったばかりなのか、発音があやふやな悠奈の台詞に、僕もトーンの落ちた声で返す。一方、悠介は、結局自分も欲しくなつて取ってきたとつとつとの箱を振りながら、声を張り上げた。

「安上がり!」

「聞こえたら失礼だから黙ってるよ……」

まさかそんな、家計を気にかけてお古でもいいと発言したわけではあるまい。

と、僕はそこで、後ろに美奈がついてきていないことに気付く。

「あれ？ 美奈は？」

「ああ、美奈ちゃんなら、すぐ戻ってくるよ」

「え？」

どこから戻ってくるんだか。だが悠奈の言葉通り、しばらくそこで待っていると、美奈が急いで戻ってきた。若干、顔が赤いような気がする。

「美奈、何してたの？」

「何でもないから」

「ホントに？」

「ホントだから」

僕の問いかけに、早口で呟くように答える美奈。そんな僕らのやり取りをじつと見ていた悠奈と悠介は、どちらからともなく呟いた。

「美奈ちゃんはね、頑張って見つけ出した青い22cmの上履きを」「元の上履きコーナーに戻ってきてたんだよ、必要なくなっちゃったから」

「ちよっ……」

美奈は、かあっと一気に赤面して言い淀む。

……そうだったのか。

僕が美奈の顔を見ると、美奈は自分の赤くなった顔を意地でも見られたくないのか、ほぼ真後ろを向いて固まっていた。

……美奈ってさ、この前も商品棚の奥のお菓子とか見つけ出してたし、目当てのものを探すのが得意なんだよね。今回は意味なかったけど。

あの有名な、赤と白のボーダーシャツを着た眼鏡を探す本とか、凄い得意だもんね。小学校の頃の話だけ。

「……あの、美奈？」

「……」

返事はない。珍しいことでもないが、今回は恥ずかしいからだろ
う。僕はなるべく優しい声が出るように意識して、言っただら

「……お疲れ、美奈」

「……はい……」

「……わっ……？」

6月12日 雨

今日は海内さんに水引っかけられた。
びしょびしょで寒かったけど悠揮がタオル持ってて助かった。

でもその悠揮に上半身見られた。
気持ちとしてはベンチ一発じゃ足りなかったけど、またやっち
やったことは反省。

それから、上履きを買いに行った。
悠揮が変なこと言ったからお菓子の棚に足ぶつけた。すごく痛
かった。そして恥ずかしかった。
言えるわけないじゃん、悠揮との接し方についての相談だなん
て。

フルミツシュが売ってたから、悠揮の分も持って行ったら、そ
れだけで優しくなったとか何とか言われた。
あれだけのことで感謝されるなんて。
でも今まであれだけのこともしてなかったんだ。

楓奈に言われたことに、段々慣れられればいいなと思う。

優しいと言われて、実はちょっと嬉しかった。
ずいぶん久しぶりに言われたような気がする。

あと何でか知らないけど、昔の、小学生の頃のことを夢で見た。

『日記』 #4 (後書き)

> i 2 4 9 7 7 — 8 7 3 <

美奈のキャラが安定しない。

美奈に限らずキャラが安定しない。ブレないのは稲橋母と作利川くらいです。

場面場面の小説で申し訳ないです。

5 - 1 七夕飾り（前書き）

この時を気長に待っていてくださった貴方にお久しぶりです。

初っ端からタイトルは『七夕飾り』……。でも突っ込まないでください。どうか言い訳をさせてください。

本当は夏休み前にあと1話を残すところまで完成してたんです。ですが夏休みに入った途端にぶつりと……。受験生の夏怖い。カムバツク中二病の夏。

そんなわけで夏も終わりの時期に七夕チャプターです。スイカ片手に、疲れないようにして読んでくださいね。

5 - 1 七夕飾り

「折って切り込みを……ちょっとテレビの音うるさいな、悠介下げ
てくれる？ ……そう、それで折って切るだけだから」

「ここを、こう切ればいいの？」

「そ……、いや違う、その向きに切っちゃ」

「シャキッ。」

「……あーあ、間違えた」

「あれー、お兄ちゃん、変な形になっちゃったよ？ 見本みたいに
ならないよ」

「切る向きが逆だったんだよ」

……そんな話し声が聞こえる、7月初旬の稲橋家。
時刻は、夕方から夜に変わる時間帯。

カビやらじつとり汗やらに悩まされる湿度の高い夏がとりあえず
過ぎて、カラッとした日差しの強い夏へと切り替わってきたこの頃。

また、本格的に夏休みが近付いてきたことで、皆の意識が梅雨の
憂鬱モードから快晴の爆発モードに切り替わってきたこの頃。

稲橋家では、もうじき迎える七夕に備え、美奈以外の子供達が揃
ってリビングで七夕飾り作りに勤しんでいた。

七夕飾り、と言われてピンと来た人はいい。来ない人でも、流石に7月7日の七夕というイベントについては知ってるよね。その際に笹の葉に飾る飾りのことを七夕飾りって言うんだ。テストには出ないよ。

僕はそろそろ七夕飾りを作るような歳ではなくなってきたのだが、特に妹が作りたがるため、家事に忙しい母さんに変わって僕が監督を務めている。

毎年のことだし、僕はもう慣れてしまっているから手際よく作業が出来ると自負してる。反面、悠介と悠奈は過ぎ去りし七夕のことなどすっかり忘れているようだ。僕としては、毎年作り方を教え直しているような気がする。

「うじうじ？ うじをこうこの向きで切るの？」

くにやくにやつ、とわざわざ複雑にハサミを握る腕を動かして、僕に確認を取る悠奈。

「うじうじうじだって、変なの」

それを側で笑う悠介。

「くだらないことで笑ってないで、悠介もほら、飾り作れよ」

僕は床の上に束になって置いてある折り紙を悠介の方へスライドさせたのだが、悠介はそれを押し返してくる。

「やだよ分かんないし、上手くできないもん」

「……不器用」

「黙れ悠奈」

最近、二人のやりとりを聞いてみると、何となく美奈に感化されているような気がして不安を覚える僕だった。

僕にとっての恐怖対象は美奈だけで充分だったのに、弟妹まで黙れとか言うようになったら僕は神経症になるかもしれないよ。……まあ、ありえないことだとは思っけど。

悠奈の挑発に乗ったのか、悠介もしょうがなしにちきちきとハサミを動かし始めたのを見て、僕は作り終えた飾りを脇に置くと、新たな折り紙を手を取った。

何を作っているのかといえば、七夕飾りの中でも比較的有名な、提灯、吹き流し、網飾り、貝飾り……と呼ばれている、折り紙1枚で簡単に作れるレベルの飾りだ。ひとつも知らないんだがって人は、もう少し日本の行事に興味を持った方がいいと思うよ。織姫と彦星が悲しむよ。

と、ただ真面目に作るのも飽きてきたので、吹き流しのぴらぴらの間隔を一定にしようという意味のない極める努力をしていた僕は、ふっと目の前に翳された提灯に目を細める。

「何？ 悠奈」

「お兄ちゃん、これで完成？」

「可愛らしく小首を傾げて問う悠奈。」

余談、親バカならぬ兄バカかもしれないが、悠奈はこの仕草がと

ても似合っている。

だが、これは……。

「完成、というか……。……何で白い方を外側にしてるんだ？」

そう突っ込まずにはいられない。提灯というのは、中に切り込みを入れた折り紙を円筒状にして作るものなのに、悠奈のは見事に色のついた面が内側になっていた。

これじゃ遠目に見たらトレットペーパーの芯を七夕の飾りにしてるみたいじゃないか。

「えっ、違うの!？」

「見本を見て確かめてみるよ。何でわざわざ裏側を表に出しちゃうんだよ」

「だって悠介だってやってるよ」

「悠介が作ってるのは網飾りだろ」

「えっ、おれ、提灯作ってるつもりだったんだけど」

「……」

お、お前らなあ……。

どうして七夕が来る度に、僕は去年も教えたことを繰り返し繰り返し教えてあげなければならないの？　こんなんなら、インターネッットで作り方検索してプリントアウトしておけばよかったよ。

内心で頭を抱える僕を余所に、悠介と悠奈はここ切るのそこ切らないのつて勝手に進めてしまう。お陰で、気付いたら何か『海のもずくb y折り紙』みたいな、飾りとも呼べない飾りが出来上がっていた。

「あー、と、僕は途中から間隔一定を諦めて完成させた吹き流しを、出来上がった飾りのまとまりに追加する。」

これは実際に飾りとして使える飾りは半分くらいかな。盛大な仕分けが起きそうな予感だよ。

「お兄ちゃん、私もつと難しいの作ってみたい」

「あーはいはい簡単なのも作れない奴が何抜かすか」

「作れるもん。ほら見てよこの上手な吹き流し！」

「……シュレッダーでやったとかじゃないだろうな？」

「……」

ホントにシュレッダーでやったのかよ。冗談だったのに。

「というかシュレッダーとか邪道だぞお前。それに細すぎるだろ。」

ハサミで一本一本丁寧に切って作ることに意義があるんじゃないか」

「……知らないもん」

ぶっくー……と悠奈が膨れてそっぱを向いてしまったので、僕は意識を悠介の方に向ける。

悠介は悠介で、何か真面目に作ってるなあと思っていたら、出来上がった品はここに見本としてある飾りのどれとも異なっていた。何というか……、適切にそのままを表すとすれば、リンゴの剥いた皮。

「……悠介、それは何作ってるつもりなんだ？」

「兄ちゃん、『つもり』って言うのは傷付くからやめてくれる」

「だってもう明らかに違うもの作ってんじゃないお前。リンゴの皮が飾られてる笹なんか今まで見たことあるか？」

「リンゴの皮じゃねえし。……もういいよ、やめた」

リンゴの皮が余程気に障ったのか、悠介に続き、悠介も膨れてハサミを置いた。

今のはリンゴの皮などと中傷した僕が悪いと思ったので、拗ねてしまった悠介に謝ろうとしたのだが、その前に向こうで膨れていた悠介の聲が割り込んできた。

「……悠介、不器用（笑）」

「……」

一瞬の後、今度は黙れ悠介と返すこともなく、無言でハサミという凶器をナイフの握り方で手に取る悠介。

……これはやばい。

「ゆ、悠介、落ち着け、そういう突発的なイラつきで凶器を手にす

る癖なんかついちゃったら後々人殺しとか傷害とか起こしやすくなるんだから」

慌てて悠奈との間に割り込み、何とか悠介を宥めようと、僕は適当なことを口走ったのだ、が……。

「不器用じゃねえとこ見せてやるし！」

悠介は、唐突にそんなことを叫んだと思ったら、猛烈なハサミさばきで折り紙をジョキジョキやり始めた。呆気に取られる僕の目の前で、折り紙がどんどん切り刻まれていく。

……。うん、どうやら、火がついたのは別なところのようだったよかった。

無言で悠介の飾り作りを見守る僕と悠奈。やがて、悠介の超スピードでハサミを動かす手が止まったと思ったら、一息置いて、ばばんっ！ と完成品が僕らの前に突き出された。

「どうだ！」

見せつけ、胸を張って自信満々に言う悠介。

「くっ……」

その技量を認めたのか、やや歯を食いしばって引き下がる悠奈。

僕としても思ったことは色々あったが、とりあえず突き出された瞬間に思った、一番優先度の高い質問を試みることにする。

「……ちなみにそれ、何を作ったんだ？」

「だからー、さっきからおれは提灯作ってるんだって」

「嘘つけ！ それどう見てもさっきのもずくがレベルアップしただけだろ！ 何で簡単な作り方なのに理解できないんだよ！ あと悠奈もこのもずくにいつまでも感嘆してないで戻ってこい！」

「絡まり具合が凄いや、お兄ちゃん……」

だから何だっつんだ。

確かに、絡まり具合がさっきよりも凄いことになっている。網飾りを失敗したってここまでぐしゃぐしゃにはならないだろう。だがこれは提灯の失敗作のはずだ。解せぬ。どうしたらこうなる。

ここにきて、悠介のあまりのテクニクの無さに、僕はついに頭を抱えた。

「ほらどうだ兄ちゃん。これやっぱりってっぺんに飾るべきだと思うんだよね」

クリスマスツリーじゃないんだよ。

あと何でこの作品にそんな自信持てるんだよ。

「悪いけどボツ。諦める。あとハサミはもう没収します」

「えー……」

はいはいこれにて飾り作りはおしまい。

今度から、七夕飾り作りのナビゲーションは作り方プリントに任せよう、と決意する僕だった。

続いては、お待ちかねの『短冊に願い事を書く』作業。

僕はこれ、七夕に無くてはならないものだと思う。もしもこの慣習が無かったら、七夕の需要って半分くらいは下がっちゃうと思うんだよね。最も、真面目に願い事を書いているかと言われればそうでもないけど。

「何お願いしてもいいんだっけ？」

無邪気にキラキラとした瞳でそう聞いてくる悠奈。またしても余談だが、悠奈はまだサンタクロースを信じている。それ故のこの発言である。

もう既に、『サンタクロース？ 何それ不法侵入者じゃん』という推察が出来ている悠介と僕は、顔を見合わせてからどちらともなく言った。

「何お願いしても大丈夫だろうけど、あまり期待しない方がいいと思うよ」

「えー。期待しなかったらお願いにならないじゃん」

まあそれはその通りだけど。

気を取り直した悠奈は、上機嫌で短冊を眺めながら願い事の内容を考えている。悠介は、適当でいいよこんなの……とか言いながらも、考えるだけ考えたい様子。僕は書きたい内容とか未定だけど、まあ七夕までにおいおい考えることにしよう。

それより、短冊を母さんと美奈にも渡してこないと。

父さんはまだ仕事から帰ってきてないので後回しだ。

家庭によって、色画用紙を切って作った短冊を使ったりすることもあるらしいが、この家庭では短冊は必ず市販の厚めの和紙なのだった。理由は知らないけど、綺麗な方が願い事が叶いそうな気がするじゃない、とかいうしょうもない理由だと思う。どうせ。

そんなことを思いながら、僕は夕飯を作っている最中の母さんに声を掛ける。

「母さん、短冊は何色がいい？」

「そーねえ、緑色じゃなければ何色でもいいわ」

「……黒でもいいの？」

「あら、黒の短冊をくれるの？」

「……」

質問に質問で返された。しかもこの母さん天然だから、意地悪な皮肉に気付いてないよ絶対。

「じゃあ質問を変える。ピンクと黄色と水色ならどれがいい？」

「そーねえ、緑色じゃなければ」

「はい黄色ね分かった分かった」

フライパン片手に、てんでの外れな回答をするものだから、僕はさっさと会話を打ち切ることにする。あと黄色をセレクトしたのは、3色の中で一番緑に近い色を選んでやったという意地悪なのだが、やっぱり気付いてないだろうね絶対。

もし、年取ってからこれ以上母親のボケが進行したりしたら、僕は重度の神経症になるかもしれない。

今のうちに神経症の勉強でもしておこうかな、とか考えている僕の耳に、ふと、さつき悠介が音量を下げてくれたテレビで流れていた、お天気コーナーのお姉さんの声が引っかけた。

『今週はお日様も顔を出し、湿度は低めですが気温が高く、暑くなる日が続きそうです。そろそろ海に出かける人が多いのではないのでしょうか？ 日焼けや熱中症対策は充分にしてお出かけください』

ふと聞いてみる。

「……………ねえ、母さん、今年の夏休みも海行くの？」

「うーん……………どうかしらね、忙しくなりそうだし……………」

僕と美奈は塾の期間限定で受けられる夏期講習に参加する予定だし、悠介と悠奈は小学校で行われる夏休みスクール（水泳とか漢字とか算数とか）に参加することになっている。父さんも夏休みの間中がずつと休みだというわけでもないし、家族の人数が多いと、予定が合わずまとまった休みが中々取れないのだ。

せつかくの海なら、日帰りよりも数日くらい居たいって悠介と悠奈が言いそうだしなあ。

僕はそんなに泊まりがけが好きではないけど、気持ちは分かるし。

「……それでね、どうせなら夏休みの前に行っちゃおうかって話になつてて」

「え？」

話をちゃんと聞いていなくて、聞き返した僕に、母さんはフライパンを動かす手を止めてこちらを向く。

「夏休みに入っちゃうと、どうしても人が増えるじゃない。なら、いつそのことが増える夏休みの前に出かけちゃおうかってお父さんと話してたのよ」

「父さん、休み取れるの？」

「取れるんじゃないかしら。七夕辺りの週末なら、有給取れそうだって言ってたし」

「ふーん……」

となると、我が家ではどうも夏休み前に海に行くことになりそうだ。

それもいいけど、気分としては夏休み入ってからの方が純粹に楽しめそうな気がするんだけどな。

とはいえ、仕方ない。夏休みのイベントは海だけじゃないだし。テーブルの上に黄色い短冊を置き、もうじきご飯だからついでに美奈ちゃん呼んできてー、という母さんの声を背中に受けながら、僕はリビングを出て階段を上る。

美奈の部屋の前に立ち、ドア板を2回ノック。

「美奈、もうすぐ夕飯だつてー」

……。

返事がない。

ドア板の隙間から漏れる光を見る限り、部屋の電気はついてるっぽいし、寝てるのかなーとか思いながら僕はそつとドアを開けた。

「……あー」

そうしたら案の定、美奈は机に突っ伏してぐっすり眠り込んでいた。

……クーラー効かせたまま寝るとか、風邪引くよ？

「美奈ー、おはようございますー」

少し大きめの声で言ってみたが、どうも起きる気配はない。仕方

がないので部屋にお邪魔させてもらうことにして、美奈の元まで歩いていくと、僕はその肩をそっと突つついた。

「……ん？」

「目が覚めた？ ほら、美奈、もうすぐ夕飯」

腕を組んでそこに頭を乗せていた状態から、ゆっくりとした動作で頭だけを起こし、ぱちぱちと瞬きをしながら、いつもの陰悪さがかなり薄れた眠たげな眼で僕を見ていた美奈だが……、ある瞬間、ハッと我に返る。

「……ッ！」

シュバツ、という効果音が似合いそうなくらいの速度で、美奈は腕の下敷きにしていて、開きっぱなしのノートか何かを急いで閉じた。そうして、どうやら眠気は吹っ飛んだらしい目で僕のことを睨んでくる。

「何それ？ 日記？」

「悠揮には関係ない。それより、何入ってきてんの」

「だって起きなかったんだもん美奈」

確かに僕はノックして呼ぶことしかしてなかったけど、嘘は言うてないよ。

むっとした態度で相変わらず睨みつけてくる美奈に、僕はもう一つの用件を伝えた。ピンクと水色の紙をそれぞれ差し出す。

「それと、美奈、短冊の色はどっちがいい？」

「……短冊？」

「毎年恒例の七夕だよ。今年はちゃんと願い事書いて大事にとつといてよ。去年は美奈、確か短冊無くして僕の短冊の裏に書いたんじやなかったっけ？」

「……」

「あ、それと僕のは黄緑だから、黄緑がよければ交換してあげるけど、どどつする？」

「……どつち」

呟くように言い、美奈はピンクの短冊を指した。

……薄々ピンク選ぶだろうってのは、思ってたけどね。

「やっぱり美奈って意外にも可愛らしい色の方が好」

ギンツ。

先程までとは比べものにならない威力で睨まれた僕は、もう口を閉ざすしかない。恐いから。

何で睨むんだよもう。別にからかってないじゃんか。

……まあ、美奈は自分の好みでピンクを選んだんじゃないって、父さんがピンクじゃ可哀想だから敢えてピンクを選んだんだろうね。それくらいは察しがつくよ。

「ホントは水色がいいなら、水色でいいんだよ？ 僕がピンクにして、父さんには黄緑渡すから」

「……別に」

ふっ、と僕から顔を逸らすと、美奈は短冊をどちらも取らないまま部屋を出て行った。

取り残された僕。

……。

……電気とクーラー、消していけよ……。

5 - 2 うちわの役目

次の日は、今まで以上の快晴だった。

雲ひとつ無い　　というわけではなく、空を見上げれば中サイズの雲がいくつかゆったりと流れていく程度の天気なのだが、お日様の照り加減がとてつもない。まるで太平洋の海水を全て蒸発させようとしても企んでいるかのような猛暑だ。

……まったく、こんな暑いと海水が無くなる前に地球が燃えて無くなっちゃうよ勘弁してよ太陽さん。

「あつっー……」

襟元をバサバサさせながら、なけなしの風で何とか耐え抜こうと努力する僕。

教室の中は日陰なのに、何でこんなにも暑いんだろう。

……いや、これでもまだマシだということなんだよね。次の授業はまだしも、3時間目に体育で校庭集合とか、もう地獄のトレーニングですね。

やる気の削がれる現実と暑さにやられた僕は、べたつと机に突っ伏した。

木製の机は、冷たくない……。

「やつほー、稲橋君。うちわ要る？」

机にへばりついてダウンしていたら、突然うちわの唸る音がして、涼しい風が吹いてきた。それを浴びた僕は途端に活き返る。……頭

だけ。体勢は未だ机を抱いたままだ。

「あー……涼し。ありがと古谷」

「どづいたしましてー」

活き返らせてくれたお礼を言ったら、今度はうちわダブルで風が吹いてきた。

少しの間、その風を甘んじて受けさせてもらうことにして、僕は古谷と世間話を始める。思い出したように、どこからともなく別のうちわを取り出した古谷からそのうちわを受け取りながら、僕は聞いてみた。

「このうちわ、全部古谷が持ってきたの？」

「ううん、絵理ちゃんがねー、別バッグで何十個もうちわ持ってきて貸し出してたよ」

追滝か。……そういえば、遠足の日にも追滝がうちわを何個か用意してた気がする。

にしてもわざわざ別のバッグに何十個もうちわ詰めて持ってくるとか、見習うべきボランティア精神だよな。それ以前に、家にどんだけうちわあるんだらう。お父さんがうちわ製造会社に勤めてるとかなのかな。

僕は受け取ったうちわで、お返しにと古谷に風を贈る。

「ホント、あつついよねー。いいなあ小学生、私もプール入りしたいなあ」

「女子は体育の授業、体育館でやるだけマシだろ。男子はこの暑さの中で校庭だよ」

「あははっ、頑張れ」

「他人事だと思って……」

額に手を当てつつ、扇ぐ強さを二段階ほど上げる。髪が強風に靡なびき、古谷は自身の持つうちわで顔面をガードしつつ「やめー」なんて適当な悲鳴を上げた。

……と、その時、風に煽られる古谷の茶髪を見た僕は、何か強い既視感を覚えた。はつきりとは思いついていなくても、小学校の頃に、こんな風のうちわ合戦をやったような……。

…… 誰かと。

「およ？ おしまいですか？」

内面の考え事に耽り、うちわを扇ぐ手が止まっていた僕に、古谷は構えたうちわの後ろから顔を覗かせる。

「……」

……せつかくなので、無言で暴風のプレゼント。

だが、今度はどうも、慣れか何かで効果が薄いみたい。

「ふっ、その程度の風ではもはや ってスカートはやめて！

お願いだからやめてー！」

途中から古谷が割と本気な叫びを放っていたが、その古谷がばちしスカートを押さえたのを確認した僕は、知ったことかと構わずに続行する。

やめてやめたと連呼してはいるが、古谷は別に逃げようとする様子も嫌がる素振りも見せないなので、僕は気を抜いて古谷で遊んでいた。

……ところが。

「そーおーれっ！ー！」

古谷の背後から、いきなり誰かのでっかい声が響く。と同時に、僕もうちわをタイミング良く振り下ろして……。そして、次の瞬間

ぶわさっ！

と、何の前触れもなく、古谷のスカートが真上に持ち上がった。

前と後ろ、古谷が両手を使ってスカートを押さえていたにも関わらず、その押さえをすり抜けるようにして布地が舞い上がり……。その奥にあった、古谷によく似合った可愛らしい柄のアレが見えてしまった。

「……………え？」

僕と古谷で、同時に声を上げる。

……。

……何ですか、今の。

僕はうちわを振り下ろした体勢で固まったまま、考えを巡らせた。今の原因はいつたい……？　うちわの風じゃないよね絶対ね。でもやっぱり見ちゃったということは、僕にそれだけの非があるということで、……って古谷の顔が真っ赤になってるよ！　うわぁこれ絶対僕怒られて責められる！　追滝とかに知られたら眼力モードで説教される！　ていうか何で最近こんなにピンクイイベントが起こったり起こりかけたりするんだよ！？

久しぶりに心の中で想像を爆発させ、僕はこれから自分の身に降りかかるであろう惨事に戦慄を覚える。

一方、怒りのあまり顔を真っ赤にした古谷は、美奈みたいに両手の拳を握り締め、ぶるぶると震えながら、大きく息を吸い込んで……。

「ふうなッ！！」

……何故か、この場に全く関係の無い人物の名を呼んだ。

あれ？　と拍子抜けしてうちわの先をさらに下へ垂らす僕。すると古谷は、バツと勢いよく振り返り、僕に背を向けた体勢で怒声を上げた。

「サイッター！！　何すんの！？」

「何すんのって……スカートめくっただけじゃん。そんなに怒るよ
うなこと?」

「そつだよっ!」

「あの一……」

貴方はどちら様と口論なさってるんですか?

すっかり置いて行かれた僕は、体をちょっと傾けて、古谷の後ろ
側を覗き込む。

そこで、古谷に詰め寄られていたのは、作利川だった。

真つ赤な顔をして作利川を糾弾する古谷と、そんな古谷を相手に
しても全く圧されることもなく悪ふざけの表情を浮かべている作利
川。

「スカートめくりなんて女子校ではよくある遊びじゃん、そんなに
怒んなくても」

「ここは共学校なの! 男子もいるの!」

「いやー、スカートがっちり押さえてたから、これはスカートめく
ってくださいっていう合図なのかと思ってさー」

「バカじゃないの!? スカート押さえてたのは稲橋君が扇いでく
るからなの!」

あ、やっと僕の名前が出てきた。

「じゃ、聞いてみなよ稲橋君に。運良く見えてないかもよ？」

うつ……、と古谷が言葉に詰まり、頂垂れた。

いやいや、悪いんだけどね、ばつちりという言い方を使うしかないほど見えちゃったよ。てか目の前のことなんだから、古谷だって分かるだろ。

僕はそう考えたのだが、古谷はどうやらパニックってその程度の判断も出来ないらしく、ゆっくりと僕の方を振り向いて小さな声で聞いてくる。

「……その……稲橋君、………見た？」

「えーと……」

保身とか場を収めることを考えれば、ここは嘘でも見てないと言ってあげるべきなんだろう。

しかしながら、古谷に（涙目で）真正面から問われて目が合ってしまった僕は、気まずくてとても誤魔化す術など思いつかなかった。というか、思いついても実行できそうになかった。

僕は座ったまま、無言で頭を下げる。

「ごめん。見えた」

「ほーらーっ！ー！ やっぱ見えたって言ってるじゃん！ どううしてくれるの楓奈ッ！ー！」

「ちょっと落ち着きなよ昧羅」

……いや、スカートめくつといて落ち着きなよはちょっとひどいんじゃないかと思えますよ作利川さん。

僕も悪いけども。」

「いいじゃん減るもんじゃないんだしさ。私別に見られてもいいよ」

「楓奈の話じゃないの！ 私は傷付くの！ 減らないけどいろんなところが傷付いたの！！」

「そっかそっか、ごめんねー」

「楓奈ーッ！！」

若干、古谷のキレっぷりと作利川の悪ノリっぷりに引いていた僕だが、そろそろ場を収める時間だと察した。クラス中が注目しちゃってるし、何より古谷がマジ泣き入ってる。

僕は席を立って二人の間に割って入り、古谷を押し留めながら仲裁を開始する。

「やっぱ今のは作利川が悪いって、いきなりスカートめくつたりしてさ、それが死ぬほど恥ずかしいと思う女子だっているんだから」

「えー。この程度のスキンシップも許されないの？」

「……」

……今気付いたけど、こいつ、本当に悪気無いんだな。スカートめくりは悪ノリでも何でもないんだ。そんな人間に僕如きが説教し

たつて無駄だった。作利川の後の処理は追滝に任せよう。

僕は作利川に見切りを付けると、古谷の方に向き直る。

「……その、作利川の代わりに謝るけど、ごめんね。僕別に古谷のそういうの全然興味ないから、忘れて」

「さり気なく傷付くこと言わないで！」

宥めたつもりなのだが、古谷は僕にも噛みついてきた。

え、何か傷付けること言いましたか僕。

疑問符を何個か頭の上に浮かべた僕を見て、少し収まってきた様子の子の古谷は、顔は赤いままではそぼそと言葉を追加する。

「……だからその、全然興味ないとか言われるのは、見られた側からしたら、それもそれで嫌だというか何というか……」

「ふうん……？」

でもさ、興味あるとか言っちゃったら、もう変態だと思っただよ
ね。

よく分かんないけど、興味ないはNGワードらしいので、僕はそれを抜いてとにかく作利川の分まで謝る。

「本当、ごめん。元はといえば僕が古谷のスカート狙って扇ぐからこんなことになったんだし……」

「い、いいよ別に！ 私、稲橋君のことは怒ってないから……。…
…あ、あはは、怒ったら汗が……」

と言いつつ、腕で軽く顔を拭う古谷。稲橋君の「ことは」の部分をやたら強調しているのがちょっと気になったけど、どうやら古谷は少しでも元気を取り戻せたようだ。

と、そこで、真後ろから、作利川ののんびりした声が聞こえてきた。

「稲橋君って場を収めるの上手だねえ」

「追滝ー悪いけどちょっと来てくれるー」

作利川、お前は別室でお説教だ。

「いいねー、海かー」

昼休みになり、人が閑散とした中で、僕らは夏休みの予定についての話の花を咲かせていた。

夏休みじゃないけど、七夕辺りに家族で海に行く予定なんだー、

と言ったら作利川のこの反応が返ってきた。

誰かの机に集まっている形ではなく、陽光の差し込んでくる窓際から一番離れた他人の席に勝手に座って盛り上がっている僕ら。人が少ないので、誰かに迷惑がかかるというわけではないからこそ出来ることだ。

「今年は海水浴場でサメが出たらしいよ。あとクラゲに刺された件数が増えてるんだって」

またパンフレットが何かで仕入れてきたんだろうか、と思われる追滝の情報。

他の面々がうちわで自分を扇いでいるのに、追滝だけは汗ひとつかかずに涼しい顔をしている。追滝は勉強も運動もそれなりに出来るし、これが生まれつきの差だというんなら神様は不公平だ。

「クラゲに刺されたときはコーラかけるといって聞いたんだけど、それって本当なのか？」

「コーラ？ おしっこじゃなくて？」

作利川は女子のくせに遠慮無くそういうこと言っちゃうんだよな。

トシの疑問に答えたのは、やっぱり物知りな追滝だ。

「本当かどうかは知らないけど、痛みを和らげてくれるとかって聞いたよ」

「ふーん」

「炭酸が抜けけても効果あるのかな？ そのままかけたらすっごい沁みそうな気がするんだけど」

「それは分かんない」

でも、コーラってかかったらベタベタするだけでシュワツとしたりはしないと思うんだけど。

片肘をついてうちわで自分を扇ぐ体勢で、僕はそんなことを思う。

実際にクラゲに刺されてその患部にコーラかけてる人を見たわけじゃないから、何とも言えないんだけどさ。

「他にこの夏に海行く人っているの？」

作利川が聞く。

「俺はサッカー部の合宿があるからなあ」

「夏期講習で忙しくなる予定だから、今のところは行かないことになってる」

サッカー大好き人間のトシは、この夏を部活三昧で過ごすんだろうし、追滝も部活と勉強とで僕らの中で誰よりも忙しい夏になるんだろう。帰宅部の僕はマシな方だ。

で、残るは古谷なわけだけだ。

「……」

何も答えない古谷は、作利川から最も遠く、僕の陰に半分は隠れ

た位置に座り込み、警戒丸出して作利川のことをじーっと睨んでいた。

ていうかそこは通路なんだけどね。

自分以外の全員の視線が集まる中、それでも黙して作利川を睨み続ける古谷。

未だに作利川に対して怒っている様子の古谷は、昼休み始まってからずっとこんな感じである。

流石に作利川も呆れたように息を吐いて、うちわで古谷に向けて軽い風を送ってきた。

「味羅……いつまで怒ってんの？」

「……楓ちゃんがちゃんと謝るか、地球が爆発四散するまで」

「だからさー、さっき謝ったじゃんちゃんと。誠意を込めて」

僕は追滝に頼み、無人の教室で作利川に色々諭してもらった。その結果、とりあえず自分のしたことが古谷にとってショッキング極まりない行動だったことを理解した作利川は、古谷に素直に謝ったのだが、どうしてもスカートを押さえる手が緩められない古谷。

「悪かったって。もう二度としないからこっちおいでよ」

「やだ！　そう言うておいて今度はパンツもずり降ろすんでしょ絶対！」

それは疑心暗鬼になりすぎだと思うよ。

それにもし本当に作利川が男子の前で誰かのパンツまでずり降ろ

したりしたら、いくら作利川が女子だといえども僕は作利川に手を上げるね。

ふと、二人のやりとりを傍観していたトシが、さらりと、本当に何の気無しに言った。

「古谷って結構根に持つタイプなんだな」

「はっ！？」

ぐわっ。

……という擬音が聞こえてきそうなりアクションをする古谷。今の一言も、どうやら傷付く言葉だったらしい。

「味羅って、根に持つタイプなの？」

「そっかそっかー、知らなかったなー」

追滝は完全に天然で、古谷にさらに追い打ちをかける。作利川は分かってて乗っている。

「……………」

古谷はまたまた顔を真っ赤にして、俯きながら、それでもスカートをがっちり押さえて僕の隣まで出てきた。それくらい根に持つタイプに思われるのは嫌らしい。

可哀想だから、あんまりいじめるなよ。

と、僕は隣の古谷を眺めながら思う。

これは最近知ったことだけど、古谷はどうも昔っから弄られキャラで、反応が面白いからって小学生の頃には虐めに遭ってた時期もあるらしい。……僕は可愛い人って絶対虐められたりしないものだと思ってた。そんな簡単なことじゃないんだね。

「冗談、冗談。昧羅そんなに赤くならないでよ」

相変わらず古谷のことを扇ぎ続けながら作利川が声をかける。

「私が悪かったってば、ごめんごめん。ほら、うちわ使って熱冷ませ」

「熱じゃないよ!」

言われてみれば熱を出しているように見える顔を上げ、古谷が反論する。

「そうかい。その割には頭から湯気が出てるけど」

「……誰のせいだし」

「私のせいなんですよ。いい加減分かりましたよ。……まあそう怒るでない、二度とやらないと言ったらやらないから。嘘ついたら針千本飲ませるって誓っよ」

「……」

作利川の言葉に、渋々ながら納得した様子を見せる古谷。

作利川は確かに悪ノリが過ぎていると思うときもあるし、こいつSなんじゃないかって疑うときもあるけど、やっぱり不思議と大人っぽいと思える人間なんだよなあ。何でだろう。

……あと誰も突っ込まないから一応言っておくけど、針千本『飲ませる』じゃなくて、『飲む』だろ。まさかとは思うけど狙って言うってんじゃないよな、作利川。

その作利川は、自身の扇いでいたうちわを古谷に渡してしまったので、代わりにその辺の机にあった誰かのうちわを勝手に使いながら話を戻した。

「じゃあさ、用事がない人は、みんなで稲橋君の日程に合わせて海行こうよ」

「え!？」

話を戻したと思ったら何を急に言い出してるんだお前は。

だが、作利川は「良い案でしょ?」とばかりに身を乗り出す。

「だってさ、その方が面白いじゃん。あと他にみんなで夏の思い出を作るのは夏祭りくらいだし、7月にも一回くらいみんなが集まるイベント作ろうよ」

「いやいやいや、ちょっと待って、僕ら車で行く予定なんだけど」

「私達は電車使うからいいよ」

作利川は意にも介さない。

しかもまだメンバー決まってもいないのに、「達」って言うてるし。

「絵理も味羅も伊藤君も、どう？」

「七夕の前後って言ってたっけ？」

「その日なら何とか……」

「なるかなあ……」

全員一致でOKみたいである。

うわあ。どうしよう。

別に困ることがあるわけじゃないんだけど、自分に関わることに自分関係無しに物事が決まっちゃったときの、この言葉にならない焦りをどう表現したらいいんだろう。

そう、例えるなら自分の乗る豪華客船が、バミューダトライアングル魔の三角海域を突っ切っちゃうと勝手に決まった時みたいな。実際、迷信であっても怖いものは怖いよね。

そんな大きな話じゃないけど。

「だってほら、作利川、泊まる所とかの問題もあるだろ？ 泊まるなら宿泊料が要るし、みんなも親と相談しないで勝手に決めていいの？」

「泊まる所なんてどうにでもなるよ。何なら、タダで泊まれる所見つけてみせるから。それに私、この前の花見の時だっていちいち親に言ったりしてないし」

作利川は全く意に介さない。

凄いな作利川は。その歳でどんだけ自由なんだろう。そして何て自信家なんだろう。タダで泊まれる所なんてそう簡単に見つかると思えないんだけど。

「ま、稲橋君は心配することなんか無いよ。私に任しておきなさい」

心配するなと言われたってとても無理なんだが、ここまで自信満々に言い切るってことは……大丈夫なのかな？

いまいち判断しかねる。何せ作利川のことだからなあ。

まあ、確信あるみたいだし、どっか目星はついているんだろうかな、と考えて僕は引き下がった。

作利川は満足した表情になる。

「美奈も別に問題ないよね？」

「……うん」

「うわあ!？」

美奈はいないと思っていたのに、突然真横から聞こえた美奈の返答に、僕は心底驚いて椅子ごと飛び上がったしまった。

みんなの奇異の視線が集まる中、僕はばっくんばっくん言ってる心臓の辺りを押さえて美奈に向き直る。

「……何」

「い……いるなら話に参加しようよ。ああびっくりした、いたんだ美奈。気付かなかった……」

「あっそ」

ふいっとそっぽを向く美奈。

……あと、「気付かなかった」と言われたイライラが回ってきたのか、数秒経ってから追加で爪先を踏まれた。これが地味に痛い。

机の下で行われた踏みつけ行為に気付くはずのない作利川は、うちわで軽く机を叩くと締めの方を述べる。

「じゃ、他に空いてる人いないか誘ってみるから。集合場所は駅で良いよね？」

三人に確認を取ると、作利川は席をすりと立って教室を出て行った。

5 - 3 魚フライ

信号の色が青になる。

美奈に首根っこを掴まれ、仰け反るような格好で拘束されていた僕は、ようやくその手を放してもらって歩き出した。その拍子に両手にぶら下がっていた買い物袋が揺れ、中のペットボトルの液体がびちゃんという音を立てる。

ここは二車線と一車線の交差点。横断歩道が1mくらいしかないような細い道路。明日の海へお出かけイベントに備え、スーパーで買い出しに行った帰りの路程だ。

この交差点に差し掛かったとき、ちょうど車も人も何にもいないので、信号は赤だったが、まあいつかと僕は気にせず渡ろうとしたところを後ろから美奈に凄い力で引き留められた。

背後から無言の圧力。「お前信号無視か？」という思念がピンピン伝わってくる。

端から見れば、容姿的には美奈より僕の方がルールを守る人間に見えるらしい。まあ、美奈は茶髪だし、そう見えることを否定はしないけどね。だけど実際には、規則とかいうのを破りがちなのは僕の方だ。上履きの踵を踏んだり、腰パン……はしないけどシャツを出しっぱなしにしたり、そういういわゆる「あんまりよろしくない行為」をすることは僕の方が圧倒的に多いのである。

で、その度に美奈にどぎつい矯正を受けるんだよね。

美奈は見た目に反して、中身は結構堅い人間だ。僕は今まで7、8年美奈と幼馴染みをやっているが、初対面の人は、まず間違いな

く第一印象で美奈のことを不良だと思う。けど、美奈はそういう人達が想像するほどの不良ではないのである。

……あ、僕に対して美奈は傷害罪とか器物損壊罪とか、指じゃ足りないくらいの数の罪を犯していると思うわけだけでも。それは例外としておこつ。

そして信号がゴーサインを出すまで後ろから引つ張られた体勢のまま待機し、今に至る。

「……あー。首痛いなー」

美奈に急に引つ張られたせいで、襟元が首に食い込んできて息が詰まりかけたんですよー、ということを喉をさすりながら遠回しにアピールしてみた僕だが、美奈はこれを完全無視。

仕方がないので直球に切り替える。

「あのさ、今美奈に引つ張られたせいで喉が潰れかけたんだけど」

「悠揮の自業自得」

直球は問答無用で場外まで吹っ飛ばされた。

しかもこの間、美奈はこっちを向きもせず前を見たまま喋るのである。こんな状態の美奈が、自分が悪いとなんて思ってるわけがない。

「でも車来てなかったし、あんな狭い道路いちいち信号待ってる方が馬鹿みたいだと思っただけど」

「……、……信号無視するような奴はタンクローリーに轢かれて死ぬ」

……何故にタンクローリー固定。最近の都会ではそうそうタンクローリーなんかお目にかかれないよ？

僕は右手を、ぶらさがった買い物袋ごと重機のような動きで額まで持ち上げると、軽く頭を搔く。美奈にどう切り返せば勝てるかを考える。

ピンと来た。

「タンクローリーに轢かれて死ぬ前に、危うく美奈に窒息死させられるところだったわけだけでも」

「……」

「美奈がいつまで僕を乱暴に扱うのか知らないけど、高校生までにはやめてくれないと、凄まじい脚力ついた美奈に蹴り飛ばされて死ぬよきつと」

「だから」

美奈の足が止まった。

ぺらぺらと言葉を立て続けに流していた僕は、少し語調が強まった美奈の声に「あ、やばいかも」という悪寒を感じて立ち止まる。

今のは冗談で喋ってたんだけど……。

凄まじい脚力とか、カンガルーみたいに言ったことを怒ってるのかな？

美奈が振り返る。

僕はいつでも後ろに飛んで下がるよう、両手に買い物袋を持って中腰という変な格好で構える。

「だから、気をつけてるんじゃないん」

「……」

……。

……、え、それだけ？

僕は少しだけ眉を寄せたが、美奈はそれ以上続けるつもりはないようで、逆にこっちを見てくる。

だって、えっと、気をつけてるって何？ あれでもセーブしてるというんですか？

そりゃあ最近は美奈は優しくなってきたと思うよ。言葉を返してくれる確率も上がったし。だけど、それはそれ、やっぱり殴られたり蹴られたり、数百歩譲って愛情溢れる突っ込みだとしても痛すぎる。威力が低くなった気はしないし、むしろ僕が慣れただけで威力自体は上がってんじゃないの？

……よし、ちょっと試してみよう。

僕は安全の為に買い物袋を地面に置くと、一度深呼吸してから、おもむろに口を開く。

「美奈のばーか」

どがつー!! ガツン!!

か、と言い終える瞬間には僕はもう蹴り飛ばされてすぐ後ろの民家の塀に背中から激突していた。

「ッッ!!」

後頭部から踵まで、まんべんなく激しい痛みが襲ってくる。

駄目だこれは。やっぱ美奈の攻撃の威力上がってるよ。男子中学生を瞬間的な速さでフットバースですよ。どうかしてるよ。美奈ってもう中学生女子キックボクシングで日本一取れんじゃないの？何でもいいけど考えるのやめたら気絶しちやいそうなんだけどどうしよう。

頭を押さえてダンゴムシのように地面で丸くなる僕の背中に、美奈の声が降ってくる。

「馬鹿に馬鹿って言われたくない」

「冗談に決まってるんだろ！ 何で本気で蹴っ飛ばしてくるんだよ！」
頭だけ上げて叫び返すと、美奈はそっぽを向いて目を逸らす。

「……別に本気じゃないから」

「嘘だね。今の本気じゃなかったら美奈の本気受けた人間は月まで飛んでいくんじゃないの」

「……何？」

「何でもないよ」

平淡な声で嘘つくなど言っていると、美奈の凍てつく鋭い流し目で睨まれた。これがまた、泣く子も黙るとか言わしめるほどに怖い。美奈に肩書きを付けるとしたら、『恐怖の暴力美少女中学生』に決定だね。属性ありすぎだろ。

ようやく痛みが治まってきた僕は、地面に置いておいた買い物袋を拾い、立ち上がる。並んで歩き出しながら、僕はふと、可愛いと言われたら美奈はどうするのか、なんて余計なことを思いついた。

昔の美奈は、からかいがてら「可愛いね」なんて言うと、黙って頬を赤くして俯いたものだ。その反応がすっごく面白くて、僕は美奈のことを何度か口説いていたと思う。そういえば最近はそのような風にならかったりはしてなかったな。

ということ、蹴っ飛ばされた仕返しも兼ねてちょっとからかってみる。

「美奈って可愛いね」

「……」

ピタッ。

またも直球を投げつけると、美奈の足が今度は即止まった。勢い

で数歩前に進んだ僕は、何故だか振り返りづらい雰囲気の中で察しながらも、美奈を振り返る。

……そしたら、美奈の目が凍っていた。

「……悠揮、もう一回蹴られたい？」

その静かな声が、例えるなら、ゆっくりと流れていく冬の雪山の夜の風、の中で銀色に光る刃みたいで超恐い。

「何で！？ 僕別に馬鹿とか言っていないよね！？」

とは言いつつ既に防御の姿勢を取っている僕。

何で可愛いつて言われて怒るの？ 流石に昔とそっくり同じ反応をするとは思ってなかったけどさ、まさかこんな静かに怒ると思わなかったよ。

「悠揮はどうせまたからかおうとか思ったんだろ」

「……」

凶星である。

しかも美奈、静かに怒ってるせいか、さり気なく語尾が危ない。

とはいえ、ここで肯定したらまた吹っ飛ばされそうな気がする。すぐくする。ビジョンも浮かぶくらい明確な予感がする。

なので僕は、背中に冷や汗をかきながらも言ってみせた。

「どーかなー」

ドフツ。

一瞬後、目線を降ろせば、美奈の正拳突きが僕の鳩尾を正確に捉えていた。

「母さん、胸痛とか腹痛に効く薬ってうちにある？」

「胸痛？ なに悠揮、恋患いにも罹ったの？」

「そーじゃなくて。さっき美奈に殴られて、そこがまだ痛いんだけど、そういう直接打撃っていうのに効くやつ」

「さあ……ほっとけば治るんじゃないの？」

「それが数時間も治らないんだって」

夕食時。

我が家の食卓は賑やかだ。それは悠介と悠奈がいるところが大き

い。こいつらがやれどちらのおかずが多いの少ないのって騒いでる脇で、僕は母さんに話を振った。

さつき美奈に殴られ、未だ治らない胸痛を気にしながら、僕は今日のメインディッシュである魚フライを口に運ぶ。

「じゃあ、ハート型のチョコレートを割ったりすればいいんじゃないかしら」

「だから恋患いじゃないつつってんに」

ちなみに、我が家のダイニングテーブルは6人掛けの楕円形で、つまり両横1人ずつ上下に2人ずつ座れる形になっている。左端から時計回りに、母さん、悠介、悠奈、父さん、美奈、僕という椅子順なので、僕の隣で黙々と食事をしている美奈にはいくら悠介と悠奈がうるさかろうと僕と母さんの話が聞こえているはずなのだがやっぱり美奈はこれを完全無視。

我関せずという顔で付け合わせの野菜を嚙^{かじ}っている。

「……………」

「……………」

凝視。

「……………何で見んの」

「……………美奈は可愛いね」

「気持ち悪い」

目線すら寄越さず「何で見んの」と、要約すると『こっち見るな』という発言をしたかと思えば、可愛いねと言った途端に、ギロリ、という擬音が似合いそうな鋭い眼光で横目に僕を見る美奈。

……これですよ。何で可愛いねって褒めたのに気持ち悪いって貶されるの？ しかも今のはからかう気持ちなんて微塵も無いって言うのに。

「もしかして美奈って、可愛いって言われるの嫌いな？ 格好良
いって言われたいの？」

「……」

「痛っ！」

美奈のやつ、無言のまま足踏んできやがった。何という理不尽だろっ。

……もういいよ。今度もし美奈と喧嘩になったときには、嫌味なまでに可愛いね連呼して攻め倒してやるから覚悟しとけよ。

「兄ちゃん、魚フライ1個ちょうだい！」

と、そこで、向かい側から悠介がいきなり身を乗り出してきた。何かと思えば僕の魚フライを狙っているらしい。

「あ、ずるい、悠介ばかり！」

と声を上げる悠奈。

「どつちにもあげないよ。ほら悠介、ちゃんと席座れ。お前まだ魚フライ残ってるだろ」

「これはキープ！ ねえちょうどいいじゃん、魚フライの1個くらい」

「……ぐちゃぐちゃ言ってないでそのキープしたやつ見張ってないと」

「え？ 何言ってるん 　　ってあーっ！！ 何盗ってた悠介！」

叫んだ悠介だが、時既に遅し。キープしていたはずの悠介の魚フライは悠奈に奪われてしまっていた。

「返せこの泥棒！」

「へっへーん。これぞギャフンの利！」

「漁夫の利な」

食事中に取っ組み合いを始めた二人に、僕は年輩者としてとりあえず正しい日本語を教えるやろうとしたのだがとても聞いているとは思えない。もうこの二人はうるさいけどほっとくことにする。

それよりも、と僕は悠介に狙われていた魚フライを早いとこ食べながら新たな話題を切り出した。

「父さん、明日のことなんだけど」

うん？ と、僕の声に、片手で新聞を読んでいた父さんが顔を上げる。

眼鏡を掛け、部長とかによくありそうなメタボ体型というよりは、ビジネスマンという言葉の持つイメージそのままのような体型。もうじき四十代の半ばも過ぎるが、白髪の一本も混じっていない短めの黒髪。もともと僕ら家族はみんな黒髪家庭で、美奈だけ特別にすごい茶髪なわけだが、そんな中でも父さんは一際黒が濃い髪なのである。周りより若めの会社員といった感じ、これが僕の父さん。

「あなたねえ、食事中に新聞読むのやめなさいよ」

父さんの向かいに座る母さんが呆れたように言う。

あまり関係ないが、僕の両親はそのまま絵化されて家庭科の教科書に載っていても違和感のない感じの夫婦である。

「朝はおめおめ新聞を読んでいる時間も無いんだから仕方ないだろ。それより悠揮、明日が何とかと言ってなかったか」

「うん。明日さあ、僕の友達も海に来るらしいんだよね」

「同じ海にか？ おや珍しい、それはまた偶然だな」

偶然じゃないんですけどね。

「そんでさ、スペースあつたら、っていうかそっち車なんだからって荷物持ってってほしいって頼まれたんだけど」

「何でだ？ その友達は車じゃないのか？」

「電車で行くんだってさ。ちなみに親と一緒にじゃなくて、一人で

「それはまたすごいな。一人で海に行つてどうするんだ。貝でも集めるのか」

「いいえ、簡単に言えば僕と美奈がいるから来るんです、と僕は心の中だけで呟く。

「そういう次第だから頼まれたんだけど、いいよね？」

「構わないが、だったらその子も一緒に車に乗せていけばいいんじゃないか？　うちの車は8人乗りじゃなかったか」

「いや、1人じゃないんだよね。作利川とトシと追滝と古谷と、えーとあと坂原と海内と新井だから、7人」

「はあ、と父さんは眼鏡の奥で目をぱちくりさせた。

「そうすると結構な荷物の量だな……いや、待て。もしかして玄関に積んであったあの荷物鞆の山、あれがその運んでほしいっていう荷物なのか？」

「そう」

「はあ、と父さんは新聞を置いて溜息をついた。

「お前は運送業者にでもなるつもりか」

「大型免許取れたらトラックの運転手とかでもいいかも」

「だめよ危ないから」

軽く言ってみたら、母さんに反対された。いや、別に本気でトラックの運転手目指そうと思ってるわけじゃないから、そんな真面目に否定しなくても。

「お前は心配性だな。運転手が危ないのはどんな車だって同じだぞ」

「それでもトラックは乗用車より危ないじゃない」

父さんと母さんが論議を始めたので、荷物運びの許可についてはうやむやになってしまったけど、まあこれで……うん、大丈夫ってことなんだよね？ 分からないけど。

にしても作利川の人使いの荒さと行動力にはびっくりしたよ。学校で突然荷物持って行ってほしいとか言ったと思ったら、その日の放課後にリヤカーみたいな引き車でみんなの荷物持ってうちに来るんだもん。びっくりして玄関であんぐり口開けちゃったからね僕。

そんなことを考えながら味噌汁を飲み干していると、また悠介が身を乗り出してきてでかい声を出した。

「あーっ、兄ちゃん魚フライ食べちゃった！」

「僕の分なんだから当たり前だろ」

当然の主張を返す。

すると悠介は、ちえー……とばかりにすごすごと座ったが、その数秒後にまた飛び上がるようにして身を乗り出してきた。

夕食中なんだからちよつと落ち着けよ。お前は遊園地のアトラクションか。

「美奈ちゃんのが余って」

「ない。ほらいいから席に着けよ悠介。他人の魚フライ狙ってんな」

あるうことか美奈の魚フライまでロックオンした悠介を、僕は肩を押して無理矢理座らせる。もうさあどんだけ魚フライ食べたいんだよお前は。この際だから自分で作れよ。

椅子に押しつけられた悠介は口を尖らせる。

「だつて残ってんじゃん」

「残ってるとは言わない。食べてないだけって言っただけだ。美奈もそれ、早く食べちゃいなよ、こいつうるさいから」

ぶーぶーと不満げな悠介を無視し、僕は美奈を振り返って促す。すると美奈は、ちらつと一瞬だけ僕と目を合わせたと思ったら、自分のおかずの皿を持って悠介の方に差し出していた。

「……あげるよ」

「えっ、ホント！ やったー！」

「悠介ずるい！」

差し出された魚のフライを大喜びして頬張る悠介。それを脇から見ていた悠奈は文句を言い始めたのだが……お前は悠介の魚フライ

盗ったんだし、文句言う権利も筋合いも無いだろ。

騒がしい対岸の子供達を心中複雑な思いでしばらく眺めてから、僕は美奈の方を向いた。

僕がそうすることが分かっていたようで、美奈もすぐさま「何」と素っ気なく返してくる。まだ何も言っちゃいないのに。

僕は何を言うべきか少し頭の中で考えてみてから、言った。

「美奈、さ、それは自分の分なんだから、悠介相手に遠慮しなくたっていいんだよ。美奈だって魚フライ、好きだろ。小学校の給食の時に僕の分食べようとしてたじゃん……」

「遠慮してない」

「……本当に？」

「……してない」

……嘘だ。もうこれははっきり分かる。

けれど、嘘つくなと問い詰めるつもりはない。美奈のこのどうしようもない遠慮の気持ちは、拾われ子の立場から考えたら、きっとしょうがないものなんだろう。

「……美奈は、優しいね」

だから僕は、ただ褒めるだけにした。

「……」

美奈は、褒められて嬉しいんだか怒ってるんだか照れてるんだか、いまいち端からは分かりにくい複雑な表情を浮かべ、空になった皿を俯いてじっと見つめていた。

5 - 4 駐車場スタート

目的地の海水浴場に着いたときには、既に作利川たちが僕らの到着を待っていた。

早朝に出発したせい、高速道路の辺りから半分寝惚けてぼやんとしていた僕だけど、駐車場の脇に屯たむろしているクラスメイトを見つけた瞬間に眠気は全部吹っ飛んだ。

普通そうじゃあない？ 嫌でも目が覚めちゃうんだよね。

駐車場に入ってしまった僕らの車を、追滝だけが気付いて目を向けてきて、後部座席の僕と追滝の目が合う。向こうが周りにバレないように、密かに手を振ってきたので僕も手を振り返す。

……何でもいいけど、みんなの荷物は僕らが運んできたはずなのに、追滝がさらに大きなスポーツバッグを持っているのは何でだろう。追滝の荷物多すぎだよ。

どうやら追滝以外は気付いていないみたいなので、車が止まったのを確認してから、僕は音を立てずに車外に出ると、猫のような忍び足で集団に近づく。

が。

ドタン、バンツ！ という家族の何の配慮もない車のドアの開閉音によって、他のみんなにもいとまたやすく見つかってしまった。

「あ、稲橋君だ、いつの間に」

「……何してるの？」

ああもう、僕の家族は何であんなKYなんだよ。

何してるかと問われれば、待たせた側が待ってた側を背後からびつくりさせるといふ古典的な作戦を考えてただけど、そういうのって見つかった後に釈明するの気まずいんだよね。そう思いつつ頭を掻いて、ふと一部始終を知っている追滝を見たら、その追滝は苦笑していた。

「お待たせ、という報告をしに？」

とりあえず無難な台詞。

「そっか、でも私らもそんなに待ってないよ。10分前くらいに着いたばかりだから」

ね？ と皆を見回した作利川。

改めて見てみると、作利川はラフスタイルにウエストポーチの格好、古谷はミニス力薄着で追滝はジーンズ。トシはユニフォームっぽい服装で新井君は何故かジャージ、坂原はこの暑い中に大人風の長袖長ズボン、海内はキャミソール。僕は半ズボンシャツだし美奈は短パンだし、違和感が生じるくらいに、みんなしててんでバラッバラな服装だった。

わらわらとみんなが寄ってきたので、僕は車まで引き返し、バツクドアを引き開ける。

「悠揮、あの子達がお前の友達か？」

「うん、そう」

運転席から出ながら聞いてくる父さんに肯定を返し、僕は荷室からリュックやバッグなどの預かり荷物を引つ張り出す。

これは誰のかな、なんて思いつつも上の方から適当に荷物の山を崩していく。ありがとうございますという謝礼の言葉が聞こえてきたから、何だろうと車のガラス越しに前方を見ると、新井君を初めとした真面目な人達が揃って僕の両親に荷物を運んでもらったお礼を言っていた。

「すみません、いきなり挨拶も無しに荷物運びなんてして頂いてしまってます」

……同級生がこんな社交辞令めいた言葉を口に行っていることに、すごい違和感。学級委員ってみんなこういう大人なお礼が出来るんだろうか。

意識を戻し、一番に車の後ろまでやってきたトシに荷物を投げ渡す。

「回してー」

「つとと。……えつと、これは坂原のか。おーい坂原、これお前の」

「次行くよー」

「ちよつ、待て、よつと！ 危ねえな……。これは……古谷ので」

「次行くよー」

「お前ペース早すぎるんだよ！ 回す側の身にもなれ！」

怒られてしまった。

しょうがないので荷物を出す係は美奈に任せ、僕も荷物を持ってお届けに上がる。

……修学旅行の運送会社の人って、きつとこんな気分なんだろうなって今感じたよ。

荷物を確認すると、これはたぶん作利川と追滝のだ。素早く目を動かして二人を捜すと、車のボンネット前あたりで、悠介と悠奈を捕まえている作利川（と追滝）を発見した。僕はそちらへ足早に近付く。

「うおっ、この子達が稲橋君の弟と妹かあ。似てるね」

悠介と悠奈にぐいっとな顔を寄せて、感想を漏らしている作利川。

「名前は何て言うの？」

追滝の方は、近所のおばさん……と言ったら失礼かもしれないけど、事実そんな雰囲気で二人の名前を訊ねていた。

「悠介です」

「悠奈です」

……普段なら「悠介！」と名前だけを1年生みたいに叫ぶ悠介なのだが、追滝から秀才オーラでも感じ取っているのか、少し緊張しているみたい。流石は僕の弟だね。僕も初めて追滝と話したときは

言葉に詰まったもん。

悠奈に関しては、この子は礼儀作法は比較的しっかりしているから、今のはいつも通りに初対面の人に挨拶をしたに過ぎない。

「悠介君？ うわー、お兄ちゃんをそのまま小さくしたみたいだね」

「よく言われるよ。ほら作利川、追滝、これ荷物」

「あつ、ありがとうー」

悠介が作利川に顔を覗き込まれ、気圧され気味だったので、僕はさっさと介入して行って、持ってきた荷物を作利川に渡した。次いで、追滝にも。

ちなみに、作利川のは投げ渡せるくらいの重さしかない荷物なのに、追滝のは片手でやっとこさつとこ持ち上げられる、というくらいのやたら重いLサイズバッグだった。何が入ってるんだろうこれ。

気になったので聞いてみる。

「追滝、そのバッグすごい重かったんだけどさ、いったい何持ってきたの？」

「え？ これ？」

追滝は一瞬きよんとしたように見えたが、そのバッグを地面に降ろして快く教えてくれた。

「えーと……、鍋とか、自転車の空気入れとか、AEDとか、まあ色々。重い物を自分で持つてくるのはちょっと厳しいと思ったから、車があるなら運んでもらおうと思ったんだけど……。燃費とか大丈夫

夫だった？」

いや、だった？ って聞かれても、燃費なんて気にしたことないから分かんないよ。

それより、例として並べられたものがさっぱりなただけど。空気入れはまだビーチボールとか膨らますのに使えるから分かるとして、鍋って何。何を想定しての鍋なの。

それにAEDもそう。わざわざ持ってこなくても、海の家とかに置いてあるもんじゃないの？ しかもAEDってそう簡単に手に入るものじゃないと思うんだけど。

「備えあれば憂いなし」

若干混乱気味の僕の前で、笑顔で言う追滝。その言葉前にどっかで聞いた気がするよ。

と、パンツ！ というバックドアの閉まる大きな音がして、僕がそちらを見ると、丁度全て荷物を出し終えたのか、美奈が両手に荷物を持って車の脇を歩いてくるところだった。

そのまま美奈は僕の方まで歩いてくると、右手にぶらさげていたリュックサックを僕に突きつける。

「……はい。悠揮の」

「ああ、うん、ありがとう……」

「……何」

僕の反応が怪訝だったせいか、美奈は不機嫌に自分の荷物を担ぎ直す。

「いや、こごわざわざ歩いてきてご丁寧に届けてくれるとは思わなくて。向こうの方から投げつけられるだけかと思った」

「分かった」

「別にそうされたいんじゃないけどー」

美奈が僕の荷物を奪って再びバックドア付近まで戻ろうとしたので、僕は慌てて美奈を引き留める。

何本気にしてやり直そうとしてるのさ。

「……。悠揮こそ、遠慮しないでいいから。盛大にやってあげる」

「そんな遠慮するかつ」

僕の制止を振り切って美奈が引き返そうとするので、僕はもう必死で美奈の腕を引っ張る始末。美奈って本当に力が強いよ。いつか腕相撲で女子の美奈に負ける日が来たりしそうだから嫌だ。

「ホント君らは仲良いねえ」

僕らをニヤニヤと眺めながら、まるで挑発するかのような口調で言う作利川。

仲良いって言うのか、これ……。

ああ、もう、いい加減、僕のリュック離せよ、美奈ったら……！

リュックサックを取り返し、みんなの準備が整っていることを確認して、僕は父さんに出発しても大丈夫な旨を伝える。

父さんが車の鍵を取り出して、正面のライトを一度だけ光らせた。

「よし。じゃ、行こうか」

ということで、ここから数百m離れた海水浴場の入り口を目指し、僕の家族とクラスメイト、総勢13名が駐車場を出発して歩いていく。端から見れば大人は1セットしかいないわけだし、これは凄まじい大家族だと思われたりするのもかね。

……いや、ないか。流石に年代を見て想像がつくか。

僕は頭を振る。そしてふと、隣の方でもうごそごと自分のバッグの中を漁っている作利川を見て、あることを思い出す。

「そっぴや作利川、泊まるどころって見つかったの？」

「ん？」

手を止め、顔を上げる作利川。聞いてなかったようなので、もう一度そっくり同じことを訊ねると、作利川は得心したような表情になった。

「うん、見つかったっていうか、見つけたよ」

「へー。どこ？」

いくら作利川でも僕らと同じ宿を取ることはできないでしょ。最低でも1週間前の予約が必要だとか何とか、母さん言ってたし。

でも、作利川はそんな考えを覆して何でも出来そうだから怖い。例えば、その旅館の経営者が知り合いだったり、急遽ドタキャンした団体客の代わりに入ったりね。

まあ、作利川の返事は、僕が恐怖するほどにはぶっ飛んだものではなかった。

「稲橋君達が泊まるって言った旅館、あるでしょ？ その旅館のすぐ裏に私の親戚のおじさんの家があってね、そこに泊まりに行きたいって言ったらOK貰った。無駄に広い家だから、私ら7人同じ部屋で寝られるくらいだし」

「はあ……そうですか……」

旅館のすぐ裏に知り合いのただっ広い家があることが、もう偶然にしてはすごすぎるけど。

あと同じ部屋で寝ることができるからって、実際に一緒の部屋で男女7人で寝たりしないだろうな。

ちょっと心配。

顎に手をやって考えに耽る僕に、人（というか僕）の心を読む達人の作利川は半目を向けてくる。

「あ、何か失礼なこと考えてない？」

「いいえ。でも、否定はしない」

「どっちだよ」

珍しく、作利川に突っ込まれた。

そんな僕らのやり取りを、後ろで見ていた母さんは、片手を頬に添えて失礼なことを言う。

「あらまあ、悠揮にもちゃんと同年代のお友達とかいたのね。それも女の子の」

「……母さん、今更になって何言ってるんだよ。しかもそれじゃ僕には同年代じゃないお友達ばかりいるみたいだに聞こえるじゃないか」

……うん、僕って多少自分より小さい子に好かれやすい体質なのは自覚してるけど。小学生や幼稚園児に遊んでもらう中学生なんて可哀想すぎるよ。そしてそんな可哀想な子が息子でもいいのかあんなは。

心の中でだけまくし立てる。一方、作利川は何のつもりだか知らないけど、丁寧なフォローをしてくれた。

「いいえ、稲橋君は結構人脈広いですよ。例えば、稲橋君に情報を流してもらえば全クラスに行き渡るくらいですし、先生達の間でも下級生の面倒見がいい人って感じで有名ですし、中学校見学に来た小学校の子達なんてみんな稲橋君のこと知ってましたし」

最後の部分は要らなくないですか。

それに作利川が言うほど僕は人脈広かないって。確かに情報を流

すことに關しては他の男子よりも上なのは認めるよ。他クラスの中心的人物とそれぞれ知り合いつてもあるし。でもそれは女子の情報網に勝るわけでもないし、そもそも人付き合いが広く浅いつてだけの話だし。それから下級生の面倒見がいい云々で先生達の間で有名だなんて今ここで初めて知つたし。

口に出すと舌が疲れそうなので、心の中で突っ込みを何倍にも膨らませて返してやる。

「えっ、お兄ちゃんカキューサーめんどくさいって先生達に言ったの？」

「色々違うー！」

中途半端に話を聞いた悠奈がとぼけた発言をしてきたので、手首の辺で悠奈のこめかみをぐりぐりと押さえつけてやる。

痛い、痛いといつてじたばた暴れる悠奈だが……、ふっ、この程度で痛がつてるようでは僕には遠く及ばないな。修行して出直してこい。

……って妹相手に何考えてんだ僕は。

手を離すと、さつと逃げ出して母さんの方に避難する悠奈。母さんの腰の辺りに隠れて顔だけ出しつつ、挑発的にあっかんべーをしてきた。正直イラツと来たが、今はいいや。あとで旅館でたっぷりやってあげるから安心しな。

ふと、逃げてきた悠奈の頭を適当に撫でていた母さんの声が、潜まって低いものになった。

内緒話でもするかのように、屈んで作利川の耳に顔を近づけたの

で、何を聞くのかと思いきや。

「……あのね、これは母親としてとても興味があることなんだけど……悠揮って学校ではモテるの？」

ずっこーん。

下はアスファルトで舗装された歩道だっていうのにマジで足滑ったよ母さん。

ちよ、せめてそういうのは本人のいないところで聞いてよ。目の前で聞くなよ。

母親ってのはどうしても息子の恋愛模様が気になり、父親というのもどうしても娘の色恋事情が気になる……とかいうのは正論なんだろうな。

どうしよう、どんな答えが返ってきてても絶対恥ずかしくて顔真っ赤になる……と一人で悶々としていたら、作利川は案外あっさりと言いつつ切った。

「それなりに人気ありますよ、稲橋君は」

「マジで！？ 兄ちゃん人気者なの！？」

……悠介のこの食いつきよう。どの部分がお前の琴線に触れたのか。

とはいえ、今の台詞は僕としても非常に気になるところ。悶々とするのをやめて、作利川の言葉を待つ。

えーっとー、と作利川は指折りで何かを数えて思案中。
待つこと十数秒後に、作利川は、ぼんと手を叩いた。

「1年の時に4人。今では他のクラスの子も併せて11人、稲橋君のことが好きな子、私知ってますよ」

「……嘘だあ……」

今度はついに口に出た。見れば悠介も僕と同じようにぽかんとしている。

かなり衝撃的な事実を知らされて硬直状態に陥った僕を振り向き、作利川は快活に笑って言う。

「嘘じゃないって。だからね、稲橋君はもうちょっとそういうのに興味持った方がいいんだよ。前も言わなかったっけ？」

「言われたような気もするけど覚えてないよそんなの」

「……すげー、兄ちゃん、11人とかバレンタインに鼻血出るレベルだ……」

悠介は感心の方向が少しずれている。バレンタインに鼻血出るレベルって、人によるだろ。

ただ、驚いているというかリアクションをしているのは僕と悠介だけで、確実に話を聞いていたであろう僕の両親も美奈も、いまいち反応が薄い。リアクションしろとは言わないけどさ、何かねえ。

「11人……本当ね、悠揮もそれなりに人気あるのね……」

「何だよ母さん、その「まあまあね」みたいな態度。あんた息子がどれくらいモテること望んでんの？」

「そつだよお母さん、11人っていったらバレンタインに紙袋が必要レベルだよ！」

乗ってくる悠介。バレンタインはもういいよ。

「そつですよ稲橋君のお母さん、今時珍しいんですよ、11人の子がオープンに一人の男子を好きだと宣言する状況もさることながら、11人もの子がこいつを好きなんだって周りは知ってるのに本人が気付かないなんて」

「……………」

…………え？

耳にした不穏な言葉に、再び石化状態になる僕。そんな僕を美術館の石像を紹介するガイドさんみたいな格好で示す作利川は、呆れた口調で解説する。

「とまあ、本人はこの通り、恋愛関係についてはものすごい鈍感でしかも興味もないくらいですけど」

「いや、ちよっ」

オープンとか周りは知ってるのにならぬってどういふこと？ と聞こうと思って、その肩を叩こうと伸ばした僕の手を華麗に躲した作利川は、僕の代わりみたいに美奈の肩に手を乗せる。

「どーおーだー、美奈ー、ちょっとは妬いたりするもんかい？」

しかもこの人をイライラさせるような台詞。

「……」

美奈の返事は、ちっ、という何だか懐かしい舌打ちの音だった。しかし作利川は気を悪くした様子もなく、ニヤニヤと人の悪そうな笑みを浮かべている。僕はこの作利川の笑みに、美奈が拳骨を鳴らしている時と同じような、身震いするような悪寒を感じる。

というか、よくもまあ作利川は美奈の肩に手を置いて、あまつさえ明確に不機嫌にさせることを言えるものだ。僕が同じこととしてたら、美奈の見事な回し上段蹴りで道路の反対側までぶっ飛ばされたたね。

一方で、のんびりと考え事をする風に顎に手を当てて上向き目線で歩いていた僕の母さんは、ひょこつと笑顔になって、唐突に切り出してきた。

「いやあね、お父さんは昔、後輩のみならず先輩からも告白されるような人だったから、悠揮にも遺伝してるのかしらって思ったのよ」

「ちよっ、お前なあ、勝手に人の学生時代を暴露するなって」

いきなり自分の話になって慌てる父さん。

……ああ、父さんってモテたんだ。そりゃ良かったね。

冷静になって客観的に見て考えてみると、僕の慌て方と父さんの

慌て方はとてもよく似てる。

僕ら家族は、本当によく似た家族だと思うよ？ 色んな意味で。

……と。

「おいその人達ー、おっせえぞー」

道の前方から、トシの呼び声が飛んできた。どうやら、僕ら家族集団と作利川はのんびりお喋りを楽しんでいて、気付かないまま前の人達より少し遅れていたらしい。

僕らは揃って歩調を早めた。

5・5 海（前書き）

海、とか名付けつつ海で遊んでる描写ちっとも出てきませんが許してください。

どうやって表せばいいのかさっぱり分かりません。

ところで、海といえば、君は咄嗟に何を連想する？

魚とか、貝殻とか、船とか、波とか砂浜とかスイカ割りとか、それはもう多種多様な回答があるだろう。そもそも海という定義があまりにも大きすぎるから、海に関連したものなんて、細かく考えればそれこそ全世界の砂浜に立つビーチパラソルくらいの数は挙げられると思うんだ。

で、その中で、「水着」っていう言葉を思いつく人もいるよね。特に男子。

海に行く目的「女子の水着を見る為、なんて考えてる少し危ないゾーンに足を踏み入れかけている人は自重するべきだとは思っている僕だけど、ただすぐ連想してしまうのは仕方がないことなんじゃないかな。避けられぬ業とでも言うか、思春期男子の性質というか。

かくいう僕は海から一番に連想する言葉は「太平洋」であって、水着ではない。断じて。命懸けてもいい。

そもそもどこかの誰かが語るような水着の属性の良さなんて分からない人間だし、あくまで水着は泳ぐときに着る衣類だと思ってるし、ビキニの黄金比なんて知ったことかと思ってるし、幼児体型とスクール水着がいかにマッチするかなんて心底どうでもいいと思ってる。

あんまり言うのと逆に怪しくなってくるだろうからやめておくけど、要するに僕にとって水着の存在意義なんて、元々水着が作られた目的と同じ程度なんだ、ということだ。

だというのに

「誰の水着姿が一番良いと思う!?!」

これなんだよ。

場所はもちろん海。

海辺に到着し、堤防のすぐ根元に建てられていた湿っぽい更衣室で水着に着替え、さあ海に行こうかと準備万端な気分で砂浜に出たところで、さつさと水着に着替えて待ち伏せしていたらしい作利川にストップをかけられてしまった。

引き留められたのは、男子メンバーである僕とトシと坂原と新井君。何なんだろうなと囁き交わしていたところに、女子更衣室から水着姿のクラスメイトがぞろぞろと出てきたものだから、おいこれは何なんだと改めて作利川に聞こうとしたところで上記の台詞が飛んできたのである。

「はあー……」

またこれか、と揃って溜息をつく僕とトシ。新井君は前回の花見には来ていないので、僕ら二人が何故溜息をついたのか分からずに不思議そうな顔をしている。坂原はあまり動じてない。

勘弁してよ作利川。僕は上目遣いに作利川をジト目で睨む。

僕さつさと海に入りたいんだけど。

悠介と悠奈が向こうで僕のこと呼んでるんだけど。

作利川は自身もラインナップのつもりなのだろう、特にそれ以上何か言うでもなく突っ立って胸を張っている。

うんざりモードの僕の代わりに、代表としてトシが話を切り出してくれた。

「あの、作利川、これは誰の水着姿が一番いいかを選べってことだよな？」

「その通り」

めんどくさいなとぼやく僕。あ、そういう意味だったのかと遅れながら納得する坂原。

「花見の時に似たようなことやったじゃん。お前何なの、ここで水着ファッションショーでも開催するつもりなの」

「この前のは弁当でしょ。弁当は自分の料理の腕をアピールするひとつに過ぎないけど、見た目というのは大きなポイントだし、飛躍して着こなし度やファッションセンスにも結びつくものだし、水着姿が似合うということは将来的に役立つじゃん」

知らねえよ。水着が何の役に立つんだよ。

それに僕みんなを見渡してみて思うんだけど、乗り気なの作利川だけじゃないのか。追滝は恥ずかしそうにして他の人に隠れるような位置に立ってるし、美奈なんか僕ら並みにうんざりした顔をして

るし。

ちら、と美奈と目が合った時、うんざりしてるんだろっとなあという予想はその目の色を見た瞬間に確信に変わった。

トシは続ける。

「それと……あれか、選ぶまでは遊ばせてやらないっていう魂胆か」

「その通り」

「……。もう、作利川は変な奴だとして、お前らは抵抗とかないのか？」

変な奴って何だという作利川の声を無視し、素直にトシが他の女子達に声を掛ける。すると、作利川以外の女子達は少しお互いに顔を見合わせた後、第一に古谷が口を開いた。

「私は水着とかって見られること前提で選んでるから、別にいいんだけどね」

そう言うのと他の人を一通り眺めて続ける。

「私以外のみんなは乗り気じゃないよ。むしろ今すぐ穴掘って隠れたい気分だって。でも楓奈が強引で引かないのは分かってるから渋々ここに立ってるわけで、早く遊びたいからさっさと選んでくれると助かる、かな」

強引で引かない……の件で作利川をちらーっと見た古谷だが、作利川は水平線の向こうを眺めてこれを無視。

さつさと選んでくれると助かる……の件では、同意するように追
滝が頷いていた。

「何かよく分かんないけど選べばいいんだな」

と、初めに切り出したのは坂原。彼はいきなり誰を指すのかと思
えば、親指でぐっと見当違いな後ろの方向を指し示す。

「俺はあの稲橋の妹のが一番似合ってると思うんだけど」

「……」

スクール水着ですね分かります。

現役小学生なんだから似合ってるのも当たり前だよな。

みんなして波打ち際ではしゃいでいる悠奈を無言で眺める。しば
し何とも言えない空気が辺りを漂っていたが、唐突に海内の声がそ
の空気を打ち破った。

「えっと……、圭佑ってああいう水着の方が好きなの？ 私も着て
あげようか？」

「ちつげえよ何言ってるんだよお前は。誰が一番似合ってるかって聞
かれたから、一番似合ってる奴を選んだ次第。おい作利川、選んだ
んだし、俺もう行っていいか」

ぐっ……と言葉に詰まった様子で坂原を睨んでいた作利川だが、
ドン！ と砂に深い足跡を付けて（要するに勢いよく地面を踏んで）
叫ぶ。

「向こうは禁止！ 半径5m以内！」

「えー……制限が付くのかよ」

呆れたようにトシ。視線が集まるが、トシは臆することなく続けて言った。

「なら、俺は自分の水着が一番似合ってると思う」

「……」

……。

どう解読してもナルシストにしか聞こえない台詞を耳にして、トシ以外の全員が固まった。うわあ〜という引き気味ムードが男女関係なく発せられる中、トシは急いで、というか慌てて声を張り上げる。

「いやいや俺別に本気で言ってるんじゃないから！ 上手くこの場を凌ぐ為の方便であつてさあ！ 悠揮までそんな顔すんじゃないよ！ お前なら分かるだろあの花見の時に同じ空気を味わったんだから！」

「分かるけど……今の発言はね、うん、まあね」

言葉を濁すなよー！！ とトシは懊惱してしまつ。

そんなトシを横目に見ながら、作利川はさらにでかい声で制限の幅を狭めた。

「男子はだめ！」

これだけ制限が付くと、そろそろはぐらかし回答もきつくなってきた。さてどうしよう。

頼むから早く終わらせてくれ、という念が作利川以外の女子から送られてきていることだし、手っ取り早く上手い言い訳を考えないと。

と、頭をいつもの3倍ほどで高速回転させていた僕の先を越し、新井君が口を開いた。

「よし、決めた。俺はその人が一番似合っていると思う」

ビシッ！ とある人物を人差し指で指し示す新井君。

指の延長線上にいた人物は たった今女子更衣室から出てきた、水着姿の知らないお姉さんだった。

「はっ、え？ 何ですか？」

指された本人は、当然ながら何のことか分からず、しかも何でこんなに中学生が注目してくるのか、といった表情で狼狽えている。

その人への説明及び謝罪は追滝に任せるとして、僕は思った。しっかりと制限の範囲内に留まっておきながら、矛先をずらす、新井君もなかなかやる人だな、と。

しかし感心してる場合じゃない。流れ的には次は僕の番だ。これ以上狭い制限が来る前に急いで言ってしまうなければ、と僕は口を開きかけたのだが……作利川の方が早かった。

「……私か、絵理か、昧羅か、歩実か、美奈、のうちの誰か限定」

……最悪な制限だ。

しかも、今までとは打って変わったローボイス。作利川ちよっとイラついてるんじゃないだろうか。

どうしよう、とヘルプを求めて他の男子を見るも、これは俺にはどうにも出来ない、と3人とも同じアイコンタクトが返ってくる。ベストなのはここでさっさと誰かを選んでしまうことだ。それは分かっている。でも優柔不断気味な僕からすればクラスメイトでもある中から一人を選ぶなんて不可能だ。それにいくら早く終わって欲しいという気持ちがあったとしたって、女子は女子なんだから、指名されれば嬉しいし、そうでなければ少し凹むはずだ。心のほんの僅かな部分で。

そんな可能性を考えるだけで僕の方が耐えられない。

困窮の極みに追いやられた僕は、仕方なく、本当に仕方なく、最後の手段のアレを使うことにした。

アレ、ってというのは

「あつ！ 作利川、すぐ後ろにカメラ持った変態がいる！」

僕の大声に、えっ、と作利川が振り返ったその一瞬について、僕は両隣にいたトシと新井君の肩を素早く叩き、素早く踵を返して海に向かって走り出す。僕の目的に気付いた他のみんなも、僕に習って散り散りにその場を逃げ出した。あまりに一斉に動いたもんだから、砂嵐まで起こる始末。

後ろを見てみて、変態どころか人すらいないのを確認した作利川

は怒って前に向き直る。そのタイムロスは僅かに3秒にも満たないが、しかし時既に遅し。僕らはもう逃げ出している。

「待てこらーっ！」

作利川の声が、「お前逃げるの好きだよなあ」「好きでいつも逃げてるわけじゃないんだって」と話しながら併走して逃げていた僕らの背中を追いかけてきたが、もちろん、待つわけがない。

思い知ったか作利川、逃げるが勝ちなんです！

今度こそ捕まってたまるかと、走りづらい砂浜を全力疾走する僕だった。

走り続けて数分。念には念を入れて、海に入って潜ってみたり、ビーチバレーをしている人達の輪の中を突っ切らせてもらったり、海水浴場の中をこれでもかと走り回った僕はようやく速度を落とし、足を止めた。

「……………はあー」

自然と溜息が出てしまった。

かけっこなら自然公園でやればいいものを、どうして僕は海に来てまで走ってんだろうね。よく考えると、僕は美奈や作利川からしよっちゅう逃げ回っているんだよ。これじゃもう、プロフィールの特技欄に『逃走』って書くべきじゃないか。

腰に手を当てて、軽く背中を反らせて整理体操する。

それにしてもここは凄まじく広い海水浴場だ。おそらく、直径数kmの湾がそのまま海水浴場になっているんだろう。人もそこまで多いわけではないから、余計にだだっ広く感じる。

「……」

だだっ広く感じる、なんてことを考えたからか、不意にちよつと寂しくなった。せつかくみんなで遊びに来たのに、初っ端から逃走劇で、いつの間にかみんなを見失ってしまったのだから当然といっちゃ当然かもしれない。

「……さっさと戻って作利川と和解しよう」

これで戻った先でみんなが楽しく遊んでいたらちよつと凹むなー、なんて考えながら僕は引き返そうとしたのだが、振り向いた一瞬、目の端に見覚えのある水着姿を捉えた。

それは……追滝に見える。砂浜にしゃがみ込み、僕には背を向ける格好で、朝礼の最中に校庭の砂をいじくる小学生みたいに砂浜に何か細工している。……ように見える。

海だからか、いつも掛けている眼鏡を掛けていないので若干分かりにくいけども、そういえばさっき見た水着姿を思い出せばそれで

確定だ。

少し逡巡したけど、何をしているのか気になったので僕は追滝の背中に向かって声をかけた。

「何してんの？」

「……？」

軽い反応。続いて、僅かながらこちらを振り返った追滝は、ゆっくりと、超スローモーションで目を細めていく。

「……どちら様でしょうか」

「貴方のクラスメイトの稲橋悠揮という者ですが」

馬鹿丁寧な台詞に、僕はほぼ突っ込みの勢いで台詞を返した。どちら様でしょうかって、上流階級のご婦人方が電話口で使うような言葉じゃん。生で初めて聞いたよ僕。

名乗った直後、追滝はパツと疑問が氷解したような表情になり、細めていた目も元に戻った。

「何だ、稲橋君かあ。そういえば似てると思った」

「本人だからね。追滝ってさあ、何かさらに目悪くなってない？」

「そうなの、ちょっともう病気じゃないかなあってくらい悪くなってるから、眼鏡無しじゃ出かけられないし、部活にも支障出るし」

声は明るかったが、言ってる内容は何だか暗い。僕はちよつと言葉に詰まる。

「いつそコンタクトにしちゃえば？」と言いかけた軽口を呑み込んで、代わりに再び聞き返した。

「そんで何やってんの？」

「……」

追滝は考える素振りを見せながら少し体を脇に動かして、砂浜に何をしていたのかを僕に見せてくれた。

それは、貝の欠片、海藻、木っ端のような流木で、砂の上に数字が書いてある。7がひとつと、もうひとつ作りかけの7。一目見て、ああこれ前にも見たなと思った。確か……。

「この前花見行ったときは、桜の花弁で作ってたよね」

「うん」

頷いて、追滝は視線をこの数字アートに戻す。今日は七夕なので、これも花見の時と同じく、日付を作ってるんだろう。

「これってさ、何か意味あるの？」

「……うーん」

追滝は、しゃがんだまま両膝を抱くようにして、しばしそのまま止まっていた。やがてまた手を動かし始める。

「趣味なのかなあ。こうして、どこかに遊びに来たときとか、その場所にちなんだ物で日付を作って、それで、完成したら写真に撮る」

今日はちゃんとカメラ忘れずに持ってきたから、と追滝は言う。

「そして撮った写真を、小さくプリントアウトして日記に日付の代わりに貼るの。そうするとき、一目でこの日はどこに行ったかが分かるから、便利なんだ」

「へえ……」

理由、あつたんだね。

僕は作成途中の日付を眺める。前にも思ったけど、追滝はやたらこの作業が上手いだけでなく、センスもいい。パーツとして使っている小物の組み合わせ方が綺麗だ。

「手伝おつか？」

今回は自主的に聞いてみた。すると、追滝は顔を上げて僕を見、何が可笑しいのかくすつと笑った。

「……何笑ってんの」

「稲橋君って、男子の割に手先器用だね。一度これ楓奈に手伝ってもらったこともあったんだけど、楓奈って笑っちゃうくらい不器用なんだよ」

「ああ、分かる気がする」

頷くと、何を思ったか追滝はさらに笑みを広げた。

「稲橋君って、小さい頃、おままごとやってたでしょ」

「やってないよ」

瞬時に否定したものの、よく考えてみると、妹に付き合ってから近までやっていたような記憶がある。美奈はあまり家庭的な女の子ではなかったし、少なくとも知り合ってから一度もそういう遊びをしていたことはないけれども、対して悠奈はおままごととかお人形ごっこが大好きなバリバリの女の子だった。

そうだ、美奈も悠介も上手く逃げるから、割を食って僕が相手をやらされていたのだ。

その当時のクラスメイト、特に男子には知られたくない恥ずかしい話だ。思い出し、微妙に居心地が悪くなった僕は、はぐらかしを試みる。

「でもままごとって器用さとは関係ないだろ」

「あるよ。毎日お皿を運んだか、運んでないかだって変わってくるんだから。しょっちゅうおままごとやってれば、それだけ器用になるよ」

「……………それ本当?」

「たぶん、でも分かんない。私が試したわけじゃないもの」

……………と、他愛もない話をしながら、僕は追滝も結構喋る人なんだなあというようなことを感じていた。

中1の頃、追滝も同じクラスではあったが、これといって話をしたこともなかった。元がおとなしい人なので、特に目立つというわけでもなく、また、寡黙なイメージから近付きにくい雰囲気もあると言えはあった。

だが、中2になって多少は仲良くなり、こうして話していると、追滝も普通の女子と大して変わらないと思う。若干、例えば難解な言葉を放ってきたり、眼力で追い詰める行為が凄まじく強かったりといった変なところもあるが。

イメージと実際が違ったり、どうやら人見知りでもあるらしいところを見ると、つい、美奈と似てるなあと思ってしまう。人の良さは間違いだけどね。

「稲橋君、稲橋君」

とそこで、追滝が何やら僕を呼んだ。

「それで、手伝ってくれるの、くれないの?」

わざわざ僕が手伝うこともなく、数分で日付アートは完成した。立ち上がって眺めてみて、僕は感嘆する。小学校の図工の教科書に手本として載っているような完成度の高さに、だ。

「改めて思うけど、上手いよなあ……」

「それはありがとう」

言つて、追滝は、水着姿のくせにどこからともなくカメラを取り出した。構えてカメラ枠いっぱい日付アートを捉えてシャッターを切る。カシャーツというシャッター音が、お疲れ様でしたの合図のようにも聞こえて少し可笑しかった。

「おしまい？」

「うん」

追滝は頷いて、カメラを下げる。

……どうしてこんな満足げな表情をしてるんだろうね、追滝は。

「そついや、自分の写真は撮らないの？ 撮つてあげようか」

そつ言つと、追滝の満足げな表情が……そのまんま真っ赤になつた。

おお見事なトマトですね、と僕が感想を漏らす前に、追滝は腕を使ってできるだけ自分の体を隠そつと努力しながら言った。

「水着、恥ずかしいから、いい」

そして、僕は何も言つてないというのに、セルフでさらに勝手に赤くなる。

どうやら、追滝は露出が多いものを着てるということがとても恥ずかしいご様子。こんなに赤くなるとは、意外な一面である。

「そんなに水着が恥ずかしいなら、着替えなくて服着てれば良かったのに」

うん、と微かに頷く追滝。

「……私もそうしたかったんだけど、楓奈が、いいから着替えるって半強制的に……」

「あいつって奴は……」

溜息ならぬ呆れ息が出そうになる。作利川の強引さの一端を垣間見たというところか。

たとえ追滝が水着を持ってこなかったとしても、レンタルとかして無理矢理にでも着せるんだろう。普通にそういうことをしそうな気がする。

「ああいうコンテストっぽいことをして、何がしたいんだろうね、作利川って」

「そうだね……」

追滝も赤みが引いてきた顔で呟く。

僕はてつきり、同意の「そうだね」だと思ったのだが、追滝はさらにその後続けた。

「楓奈って、人の恋愛を面白がる癖があるから、仲の良い男女をくつつきたいんじゃないの？」

「で、何で今こっちを見たんだよ」

「ううん、別に。……それかもしくは、単純に自分のことを選んで欲しいんじゃないのかな。楓奈は家が好きじゃないそうだしあ、えっと、ちょっと複雑な事情があるからって……前に、言ってる……」

途中から歯切れが悪くなり、後ろめたいことでも言つかのようになり声小さくなった追滝。家庭云々のそれは作利川があまり人に知られたくないと思ってることなのかもしれない。何せ、こうして振り返ってみると、僕は作利川の家のことを全然知らない。

そういえば、作利川という人は自分の家族のことは何も話さない気にはなつたが、詮索するのも気分が悪いので、僕は黙って何も言わなかった。

と、そこに。

「兄ちゃんと眼鏡のお姉さんはそんなとこで何してんの？」

背後から、我が弟の弾んだ声が聞こえた。

もう、声を聞いただけで分かるくらい、悠介はこの海をエンジンイしているようだ。

僕と追滝は揃って振り返り、僕は答える。

「説明すると長くなることながら、簡単に言つと、ある物を作つてた」

「子供？」

「……お前そういう下ネタ言つのやめような」

どこで仕入れてくるんだろうなあ、小学生のくせに。

「それで、何か用があつて来たのか？」

「そう！ 兄ちゃん、ほらこれ見てよ、海の中でおれが見つけたん
」

「違つつしよ」

ずびし、と悠介の頭にチョップを繰り出す音と共に、別の声。

悠介は僕に見せ示しかけていた貝っぽい物体を取り落とし、痛えと文句を言いながら勢いよく振り返った。

悠奈、……と、美奈がそこに立っていた。

「お兄ちゃん、悠介の言うこと無視していいよ。さっきからその貝のことはつか話してるんだよ。そんなにすごくないのに」

「すごくなくねーし。すげーし。お前みたいな脳みそが紙粘土で出来てるやつには分からねーんだよーだ」

「紙粘土じゃないもん！」

例の如く、放っておいたら取っ組み合いに変化しそうなケンカを始めた悠介と悠奈。そんな2人を苦笑混じりに引き剥がしつつ、僕は唯一のまともな情報伝達人になりえそうな美奈に訊ねる。

「で、何の用なの？」

美奈は、僕を見て、追滝を見て、また僕を見てから、何だか面白くなさそうな表情で言った。

「楓奈が、悠揮呼んでこいって」

「ついに美奈を用いた呼び出しか!？」

作利川、まだ怒ってるんだろうか。

「……。ビーチバレーするんだって」

「ああ、ならよかった」

ほっとしかけた僕。だがしかし、続いた美奈の一言は、そんな僕の安心を打ち砕いた。

「……私の代わりに、稲橋君を蹴ってきて、って楓奈言ってた」

「……。だからなに？」

「……こっち来い」

恐る恐る聞き返した僕の腕を掴み、ぐいっと追滝たちから引き離すように僕をどこかへ引っ張っていく美奈。それも、結構な速さで。

何か言いかけた追滝に、悠介達について先に作利川の所行つててー、とだけ先手を打って叫ぶと、僕はすすん進む美奈の歩調に合わせて転けないように必死に足を動かす。

「えっ何なの何されるの僕、ねえ美奈ってば」

「……」

話しかけるも、美奈の返事はなし。やがて、人の少なめな堤防近くの木陰で、美奈はようやく足を止めた。

そして、振り返って開口一番、僕に向かって言い放った。

「何してたの」

「……えっと、何してたというと」

「追滝さんと、何してたの」

平淡な声で問い詰めてくる。

ただ、いつものように不機嫌や怒っているというよりは、今はただつまらない……つまらながっている？ という表現が合う顔だった。

僕は何と言ったものか迷ったが、直感のままに口を動かす。

「何ってというか……そっちこそ、どうしたの。嫉妬？」

ドバン。

……美奈のストレートキックが見事に命中して、僕はここは茶化すべきではない場面だと悟った。

ていうか裸足なのに何この威力。

一通り痛みを耐えてから、僕は、何をしていたかという質問に事

細かに答えた。すると美奈は、一息ついてから、腕組みをして言う。

「楽しかった？」

「楽しいっていうか、うん、まあ、普通」

いきなり何を聞くんだろうか？ と僕が訝しんでいると、美奈はもう一度、さっきより小さく息を吐く。

「……そっか」

そうして口に出されたのは、何とも形容しにくい、感情が判断できない台詞。僕は美奈の顔を伺ってみたが、何も読み取れはしなかった。

美奈は何か言いたそうな雰囲気だったように思えたのだが、少しの間後、ふいに僕に背を向けると、そのまま僕をほっといて歩いていく。

急な尋問終了に戸惑った僕は、咄嗟に美奈の背中に声をかけた。

「えっ、ちよっと美奈、何なの？ 僕を蹴る為に引っ張ってきたんじゃないの？」

僕の問いかけに、美奈は僅かながら振り向く。

「……もう、蹴ったじゃん」

「あ」

そういえば蹴られてた。日常茶飯事と化してるから、意識ある力

ウントに入らなくなってるのか。それって嫌だな。

美奈はまた背を向ける。

僕は頭を掻き、美奈の後ろ姿を追った。

「ビーチバレー楽しかったねえ、稲橋君」

「まあね」

僕は、腕に抱えた浮き輪や水着、ゴーグルなどの洗い物を、旅館の部屋のテラスに手早く引っかけながら、作利川の言うことに生相槌を打つ。

「稲橋君と美奈のペア、思ってたより強かったよ」

「そうね」

「美奈のスパイクって半端無く痛いよね」

「確かにね」

「……ねえ、稲橋君」

「その通りだね」

「稲橋君ってば、ちょっとこっち向いてよ」

そろそろ僕が話をちゃんと聞いてないことに気付いたのか、作利川が拗ねた声で僕を呼んだ。仕方なく僕は色々干していた手を止め、鬱陶しそうな目で作利川の方を見る。

「今ちょっと忙しいんだよ。分かってください」

「あとそれ引つ掛けたら終わりじゃん」

「まだ第二弾が洗面所に残ってるんだよ」

言いながら、僕は我慢できずに再び作業を開始する。構ってあげる余裕はあんまり無いんだ。悪いね。だって水着が濡れてて冷たいんだもん。文句ならこの洗い物達に言っておくれ。

そんな様子をどうも少し膨れながら見ていた作利川は、ふと切り出してきた。

「じゃあ私手伝ってあげようか」

「は？」

今度のは変な相槌になってしまったが、作利川は、はいともいいえとも言つ前に、さっさと向こう側の手摺りを乗り越えてこっちのテラスに移ってこようとしてきた。

そう、僕らは今、ベランダの手摺り越しに会話をしているのだ。

僕がいるのは当然旅館のテラスで、作利川がいるのは、作利川のおじさんの家のベランダ。作利川の後ろには、窓越しに他の女子達の姿も見える。女子部屋なのだろう。カーテン閉めようよ。

と、そんなことはおいといて、僕はこっちに移ってこようとする作利川を急いで制止する。

「待てよ、落ちたら危ないって！」

「平気平気」

「平気じゃねえよ、落ちるってば！ ちょっとこら、話を聞けよ。ていうか作利川、自分がバスローブ姿なの忘れてる！」

必死扱いて押し留め、僕は何とか作利川を落とさずに済んだ。そして、くだらないことで体力使っちゃったなあ、とぐったりする。……男子でもやらない人はやらないことをやるうとするなんて、作利川って本当に女子か？

押し戻されて一応おとなしくなっていた作利川は、手摺りにもたれて、まるでお前まで干されているのか状態の僕を黙って眺めていたが、急にぶるっと身震いをしたかと思うと、自分で自分の肩を抱いた。

でもって一言。

「寒っ」

「風呂出てすぐ外に出てたんだから当たり前だろー。もう部屋戻りなよ、風邪引くよ」

最後の水着を引っかけてから、作利川を横目で見て、僕は親切心からの忠告をしてやる。

風邪引いて夏休みの出鼻を挫いても知らないぞ。

作利川は肩を抱いたまま、また僕を黙って眺めていたが、ふと口だけを動かして言った。

「稲橋君」

「はい」

「せつかくだから、私も親切心からの忠告をしてあげるよ」

「……」

……何でお前は僕の心が読めるんだ、ということについては、もう突っ込まないでスルーの処置を取るようにしよう。深く掘り下げたくない。

僕は手摺りに両肘をつけて腕を組み、作利川と向かい合う。

「何？」

「美奈のこと」

作利川は片手で無造作に、まだしっとり湿っている髪を梳く。

「二人は充分仲良しだから、私が出る幕なんかないかなあとは思っちゃいるんだけど、時々稲橋君が鈍すぎて美奈が可哀想になるときがあるんだよね」

「何のこと？」

「今日ね、あ、海でのことね。美奈、稲橋君の代わりにずっと悠介君と悠奈ちゃんの面倒を見てたんだよ。知ってた？ 私が稲橋君のことを呼んできてって言うまで。……だからね、稲橋君。もっと美奈のこと見てあげて。何てったって稲橋君は、美奈のこと一番分かっている人なんだからさ」

「……」

作利川に指摘されて、僕は美奈に蹴りを食らったような気分になり、思わず手摺りから腕を浮かせた。

言われてみれば、辻褄の合う思い当たる節がある。

だから、木陰に引つ張つていかれたあのとき、美奈は様子が変わったんだ。ずつとつまらなそうな顔をしていたわけだ。遊びに来てずつと子守だなんて、僕だって楽しくない。

作利川は正しい。そして有り難い。言われなければ僕はきつと気付かなかった。

そろそろ、僕が鈍いと言われる訳も分かってきた。僕はそういうことにあまり気付かないのだ。

これで本当に美奈のことを一番分かってる人かどうか、怪しいなあ……。

大丈夫かな、僕。

「……まあ、ありがとう、作利川。胸に刻んでおく」

僕がそう言うと、作利川はにやりと笑ってみせた。

作利川にこうやって笑われると、恥ずかしいような気分になるもんだけど、不思議と今はそれがいい。

僕は部屋の中を振り向く。美奈は部屋の端に座り込み、何か……いや、短冊を眺めている。

「あ、そうだ」

短冊だ。今日は七夕なんだった。それを言うのを今まで忘れてた

よ。僕は作利川の方に向き直ると、思い出したことを告げる。

「作利川、おじさんの家に色画用紙ってある？」

「色？ うん、多分あると思う。工作好きな子供がいるから」

「そっか、じゃあそれを切って、そっちの人数分の短冊作ってよ」

短冊、という言葉に作利川の目が反応した。

「もしかして七夕？」

「そう、飾り付きの笹持ってきてるからさ。海辺で星見よっていう予定なんだ。短冊作って願い事書いて、それぞれ持って8時半くらいに海辺に集合、できる？」

「できるできる。おっけー、みんなに伝えとく」

作利川は、今度は楽しげな笑みを浮かべると、踵を返して家の中に戻っていった。

「この辺でいいかな？」

さくつ。

「うん、ちゃんと立ってる。ほら二人とも、飾り付けしていいよ」

笹を砂浜に突き立て、至近距離で待機していた悠介と悠奈に許可を出す。

二人だけではなく、数人飾り付けを手伝ってくれる様子を確認してから、僕は波打ち際まで行ってみた。

暗褐色色の波が、寄せては遠ざかり、ざざん、ざざんとさつきから静かな躰からだを繰り返している。

「ねー悠介ー！！ 同じところにはっかり飾り付けないでよー！」

「ちゃんと違う飾りに変えてるからいいじゃん別に」

「よくない！」

……夜の海の空気を引き裂く大声。……ざざん、という音が少し大きくなつた気がした。

……いやホント申し訳ない海さん。うちの馬鹿どもがでかい声を出したせいでせっかく気持ちよく寝ていたところを起こしてしまつたみたいで。

僕は頭を搔くと、波打ち際から引き返し、笹の飾り付けでぎゃあぎゃあ言い争いをしている弟妹の頭を同時に引っぱたく。そして叱る。

「うるさいお前ら。もう夜なんだからでかい声出すな」

「悠奈が一人で怒って叫んでんだぜ……」

悠介が口を尖らせる。

「だって……！」

悠奈は悠奈で、過剰に飾り付けられた笹の一部分を指さし、目で僕に訴えてくる。

はあ面倒くさい、と僕は溜息をついた。辺りを見てみれば、みんなが苦笑している。

……っ！か母さんはさ、笑ってないで僕より先にこの二人を止めて欲しいんだけど。

僕は悠介と悠奈を交互に見て、それから偏った飾りのせいで傾いている笹を見た後、少し考え、悠奈にこう提案する。

「じゃあ悠奈、こうしよう。もし悠介が一カ所に付けすぎたせいで飾りが足りなくなったときは、旅館で悠介に一人で飾りを作らせる」

「ちよっ、勝手に決めるなよ兄ちゃん」

そこで悠介が口を挟んできた。見るからに慌てている。

これは自分でも変な風に飾っている自覚あったな。そう判断した僕は、わざと意地悪っぽく言ってやる。

「何で？ 妥当だろ？ やり直すなら飾りが無くなる前にしないと、

お前が一人寂しく飾りを作る羽目になるぞ？」

そう言っつて、今も海内や新井君が飾り付けをするのを手伝っつてくれている笹を指さす。新井君は顔が見えないが、海内は僕らの会話を聞いて笑っつていた。

「ちくしょう……」

力なく呟いた悠介は、とぼとぼと自らが付けまくつた飾りを外しにかかる。ちくしょうとか何とかぶつぶつ言いながらも、勝手に決められたことにも従つところは小学生の可愛さか。

……で、と僕は次に、僕の傍らで恍惚の表情になっている悠奈の頭を軽く突つついた。

「兄妹仲の悪い奴は幸せになんかなれないぞ、お前いい加減悠介が悄気てるときにあからさまに嬉しそうな顔するのやめろ」

次は短冊を飾る作業に移る。

ありがちなことだけど、ほとんどの人はまだ短冊が白紙のようだった。つまり、何を書こうか悩んでいるか、あるいはもう書きたいことは決まっているけど先に飾るのは恥ずかしいから書いていない、とかそつう話だ。

ちなみに僕は前者である。

そのうち決まるだろうと思って特に考えないでいたら、特に思いつくこともないまま今に至ってしまった。

短冊って、いざ書くとなると迷うよね。実際七夕の願い事をふざけて書く人って意外と少ないと思うし、少なくとも僕はそんな人を見たことがない。

そんなわけで、短冊を見ながら唸っている僕だった。

ちなみにもうさつさと飾ってしまったのは僕の両親と坂原と追滝。あの潔さがちよつと羨ましい。

「……あれっ、何だ何も書いてないのかー」

と、僕の背後から、肩越しに気楽な声が聞こえた。

振り向けば、気付かぬうちに接近したトシが至近距離で僕の短冊を覗き込んでいる。

「そっちこそ書いてないのはお互い様だろ」

何も書いていないのだが、何となく短冊を隠しながら僕はトシに言い返す。するとトシは僕の横に座ると、短冊を裏表めくってからみよんみよんと振ってみせた。

「いや、書くことと違ってることとは浮かんだんだぜ？ だけどそれが2つあって絞れなくてさあ。裏と表に願い事1つずつ書いたらどっちも叶うかね」

何という我俣か。

僕が目逸らしたのに気付かず、トシは続ける。

「人間つてくだらないと思っではいても、案外心の中でアテにしてたりするもんだよなあ」

「だから七夕は今まで続いてきたんじゃないの。ま、願い事を叶えるのは神様なのか星の王子様なのか知らないけど、どうせ余裕があるときしか叶えてくれなさそうだからさ、両面に書いとけば？」

僕がそう提案すると、トシは短冊をぱたぱたと振る手を止めた。

「そうするかなー」

「それか裏にまとめて書いて、表に宛先書けばいいよ」

「懸賞か」

ナイス突っ込み。

僕らが笑い合っていると、するとそこへ、第三者の言葉が飛んできた。

「楽しそうですねお二人さん」

作利川だった。

何故かは知らないが、片手に色画用紙製の短冊を束にして持っている。そんなにいっぱい短冊作ったのか。どれだけの書き損じを予想しているんだか。

陽気にトシが答える。

「短冊に書くことについて話してたところなんだけど。作利川はもう書いたのか？」

「今笹に吊してきた。それより稲橋君」

作利川は短冊の束をもう片方の掌にバシンと当てると、どこか事務口調で言う。

「美奈の願い事一緒に考えてあげたら？ さつきから美奈、短冊持ったままずっと固まってるよ」

美奈？ と、僕は周囲の海辺に目を走らせて美奈を探す。そうして、笹から少し離れたところに見つけた美奈は、砂浜に座り込んで短冊を穴が開くほどじっと見つめていた。なるほど、全く動かず固まっている。

さつき言われたことを思い出し、僕はゆっくりと作利川に視線を戻すと、僅かに間を置いて立ち上がった。

「うん、そうする」

歩き去っていく僕の後ろ姿を見送るトシの、何かあいつ急に真面目な顔になったけど何かあったのか？ という声と、さあ？ という作利川のはぐらかす声が、重なって聞こえた。

「そんなべったり座っちゃって、砂冷たくない？」

そう問いかけると、やっと美奈は動いて顔を上げた。目がちよつと細くなる。ああ悠揮か、とそれだけで言われたような気分になる。

そのまま美奈は顔を下げたので、スルーされるのかと思ったが、美奈は伸ばしていた両足を折り曲げ、体育座りのポーズを取った。美奈つていつでも短パンを穿いているから、夜や冬には寒そうに見えるのだ。

「短冊さ、何書けばいいのか迷うよね」

言いながら美奈の隣に腰掛ける。美奈は横目でこっちを見ると、膝の間に軽く顔を埋めて呟く。

「……別に」

「書くこと決まったの？」

「……まだ」

「ふーん」

無難に流し、僕は視線を外した。

……何かちょっと気まずい。何なんだろうこれは。僕が、作利川に言われたことを変に意識しすぎているからだろうか。いつもならこんな思いをすることは無いというのに、美奈つては本当に返事がつまらなそうだし、悠介と悠奈の世話を任せちゃったことは謝るべきだろうし、……ああもう。

目を逸らした先で作利川と目が合ったが、作利川は「頑張れ！」とばかりにグッドラックサインを送ってきた。

……分かったよ。

僕は再び、美奈に話しかけてみる。

「あの、美奈、今日は海でずっと悠介と悠奈の面倒見ていてくれたんだって？」

「……………」

「そのこと謝つとかないといけないなって思ってたさ。ごめんね、僕作利川から逃げっぱなしで」

「……………別に」

……………会話が續かない。

思うんだけど、そういえば美奈との会話が弾んだことって1回もないよな。美奈が口下手じゃなくなったらそれはそれで違和感があるけど、もう少し乗ってくれてもいいじゃないか。

美奈がこうだから、僕はつい美奈のことをからかっちゃうのかなあ。

はあ、と僕も短冊を見つめると、思わぬことに、美奈の方から切り出してきた。

「……………悠揮は、もう短冊吊してきたの」

「……………えっ、あの、僕短冊持ってんじゃないん」

美奈がまた横目で僕を（正確には僕の手の辺りを）見る。

「ほんとだ」

ほんとだ、って……。

僕は思わず呆れてしまった。美奈の驚くべき観察力の無さに。

「美奈、何か調子悪いっぽいけど、どうかした？ 悠介と悠奈にも
ともと少ない精気を抜き取られた？」

「……」

げしっ。

無言の裏拳が決まり、僕も無言で顔を押しさえる。

「……痛いです」

「知らない」

「知ってる」

「うるさい」

また出た。うるさいって一蹴されると会話が続かないんだよ、この会話壊しめ。

僕はこれ見よがしに溜息を吐き、持っている短冊の角で美奈のピ
ンクの短冊を突つつく。

「短冊の色が気に入らない？」

「……違う」

「ああそう。じゃあ、単純に何書こうか迷ってるんだ」

「そう」

まともな返事来たよ。何かちょっと嬉しい。

内心の喜びとは違う意味の笑みを浮かべて、僕は美奈に提案してみる。

「じゃあさ、こう書けばいいよ。『来世では普通の乙女な女の子に生まれ変われますように』って」

「悠揮」

僕が言い終えるのと同時かそれより早く美奈は僕の名を呼ぶと、横目でなく首も動かして僕を直視した。

「海と砂、どっちか好きな方選べ」

……海と砂？

唐突な二択の意味が分からず、はてなマークを頭に浮かべる僕。美奈は何も補足してくれないので、僕は直感で答えてみる。

大海と砂漠とかいう感じの意味なら、砂漠の方がまだ陸地だし、砂の方がいいかなあ。

「じゃあ、砂で」

「分かった」

一言、美奈は頷くと、そのまま両手を使って自分の下の地面を掘

り始めた。

さっぱり理解ができないが、ザッ、ザッ、ザッ……と砂を掻く音には、山姥が包丁を研ぐ音に似た恐怖を覚える。いったい何するつもりなんだ？

……いや、待てよ。……水と砂？

「……美奈それ、どっちに埋められたいかっていう意味？」

恐る恐る訊ねると、美奈は手を動かすのを止め、こくりと頷いた。

くっだらねー！！

……と、口に出さなかった自分を自分で褒めてやりたい。

だってそうでしょう。何この分かりづらさ。美奈の冗談作成能力ってどれくらい低いのか。ここまで来るともうコミュニケーション力欠乏症とかじゃないの？

砂を元通りにし始めた美奈は、怪訝な顔で僕を睨む。

「何笑ってんの」

「美奈のジョーク分かりづれー、と思つて。だってさあ、レベルがあまりに低すぎて」

はっ、と僕は言葉を切つた。美奈の目が、そこから吹雪でも吹いてきそうな程に凍っている。

「……誰がジョークだなんて言った？」

「ごめんなさい」

急いで謝罪する。危うく、凍死した上で砂に埋められることになるところだった。

……黙ってしまつと、再び、僕らの間に気まずい無言の空気が流れる。

どうしたもんかなー、と僕は考えめぐねて、美奈の方をちらりと見たりもしたが、ふと思いついてズボンのポケットから油性ペンを取り出した。そしてそれを短冊の上で走らせていく。

「……決まったの」

「ん？」

書いてる途中で美奈の声が聞こえたので、僕も声でだけ返し、書き終えてから美奈に教えた。

「えっと、『今後美奈に砂に埋められたりしませんように』って書いていた」

「……」

……その一瞬。

ほんの一瞬の話ではあるが、僕は、確かに美奈の頬が僅かながら緩んだように見えた。

見間違いだらうか。一瞬後には、いつも通りに戻っていた。
僕が凝視していることに気付いているのかいないのか、美奈はぼそつと呟く。

「……ばっかじゃないの」

「そういうことはもっと会話のテクが上がってから言ってくださいね。そうだよ美奈、』上手い冗談が言えるようになりますよ」
うに』って書けば

「黙れ」

バコーン。

腕全体を使った攻撃がクリーンヒットし、僕は思わず上半身ごと仰け反る。

……これもう立ってたらKOで後ろに倒れ込んだじゃう威力はあるよ。あゝ、いってえ。

僕はぺたぺたと自分の顔を手で触って目鼻を確認しながら、美奈にも確認を取る。

「顔面に穴開いてない？」

「知らない。開いてたら気持ち悪い」

「開いてたら僕だって気持ち悪いよ。つーか美奈って脚だけじゃなくて腕も強いんだね。作利川も言ってたよ、ビーチバレーの時のスパイク半端無く痛かったって」

「……」

美奈は黙る。

ひよっとして作利川に悪いことしたとか思ってたのかな。そういう気持ちのせめて半分くらい僕に回してくれても良さそうなものなだけでどな。

「来年もみんな海来たいよね。今年よりちょっと遅らせて天の川が見える時期にさ。……で、今度は僕はちゃんと悠介と悠奈の面倒見るから、美奈がつまんないーって膨れていじけちゃうことがなく

」

「悠揮」

一人弁論は途中で遮られてしまった。

「……海の藻屑になっちまえ」

「うわひどい」

とても女子の台詞とは思えない乱暴な言葉をぼそつと言い放つ美奈が、本気で怒って「消え失せろ」とか言ってるのとは違い、あくまで僕と会話する中で冗談として使っただけらしい。口調や表情がそう語っている。

まあ、冗談とはいえ、せめて言葉では手加減して欲しいものだ。美奈だって一応女の子なんだから。

……そうだ、何で今まで考えつかなかったんだろう。美奈の短冊には『もう少し攻撃の威力が落ちますように』以外に書くべきこと

なんか無いじゃないか。最優先事項じゃないか。それが咄嗟に出てこないなんて、どうなってるんだ僕の頭。

……いや待て、それは僕の短冊に書いた方がいいことなのか。トシじゃないけど、両面に書きゃおうか。

そんなことをやれやれと考えながら、僕は短冊を吊しに行った。

5 - 0 人それぞれってことなんですよ

海もいいけど、折角七夕があるのなら、稲橋君も早く教えてくれれば良かったのに。

そんなことを思いながら、私は独創的な飾り付けられ方の笹を力メラに納めました。

7月7日の、時刻は大体8時40分前後。

私達は夜の海辺にて、星空を眺めていました。この時期では少し早いです、織姫と彦星を見る為です。

肝心の空模様は、雲も少なく綺麗な夜空。誰が持ってきたのか、ポータブル音楽プレイヤーから、ゆったりした七夕の歌が流れていて、結構な雰囲気です。さざ波と相成って眠くなりそうです。

「絵理、私さっぱり星とか分かんないんだけど、どれがどの星なの？」

唐突に、隣に座っている楓奈が話しかけてきました。

楓奈はちよっと女の子らしくないというか、興味が向く方向で女の子らしいものといえは恋愛くらいしかなく、しかもそれも若干歪んでいます。よく稲橋君が鈍いと言っていますが、興味が向く方向という観点で考えれば、楓奈は人のことは言えないと私は思います。

「……絵理、何考えてんのさ」

「えっ、うっん、別に」

察しが早く鋭いところも特別です。

「一番明るい星はどこにあるか分かる？」

「さあ……今地球の反対側にあるんじゃないの？」

「……そういう考え方をすると、夢もロマンもないよね。太陽とか惑星じゃなくて、今見える空の中で」

「えー……」

目を細める楓奈。そうまでしないと分からない？ と言いたいところですが、私も眼鏡を外すと星なんか数えられなくなるほどの視力なので言えません。

しばらくして、楓奈は首を横に振りしました。

「星なんかみんな同じに見える」

「楓奈らしいというか、何というか」

残念ながら夢もロマンも気にしないのが楓奈です。

私が出ると、楓奈はぼんと膝を叩いてすつくと立ち上がりました。……何のつもりか知りませんが、微かな夜風に靡く長い黒髪がマントのようで、まるで今から夢とロマンを探しに旅立つ人みたいですね。

当然ながらそんな崇高な目的で立ち上がったわけじゃないでしょう。軽くぱんぱんと砂を払うと、楓奈は、不気味と表現してもあな

がち間違いではないにやり笑いを浮かべて言いました。

「まあ、私はそういうのより、みんなの願い事の方に興味がある」

「……そういうのよくないよ」

私は一応止めますが、楓奈はこの程度のことでは気が変わったりしません。楓奈は今みんなの願い事を見に旅立つ旅人になったのですね。そのまま、クリスマスツリーのように頂上にもずくのような飾り付けが施された笹の方へ、歩いていつてしまいました。

溜息ひとつで見送る私。

辺りを見てみる限り、どうやらみんな、短冊は吊し終えて、空を眺めることに夢中になっているようです。

と、私は、みんなの中でもっとも波打ち際に近い位置に、稲橋君と古館さんが二人きりで並んで座っているのを見つけました。二人は会話しているみたいですが、会話といっても稲橋君が話しかけることに古館さんが頷いたり、何か言葉を返したり、……あつ、今みたいに手を上げたり、そんな感じです。

聞き耳を立ててみてもよく聞こえませんが、アルタイルとか琴座とかいう言葉が切れ切れに聞こえてくることから考えると、星座の話でもしているのでしょうか。

……ほどなくして楓奈が戻ってきました。

まださっきと同じ表情で笑っています。

「いやあ、絵理、みんな面白いこと書いてたよ」

「……そういつのよくないよ」

私は重ね重ね言いますが、楓奈は意にも介さず、軽い口調で話し始めます。

「みんなふざけてるのか真面目に書いてるのか分からないのばかりで。絵理のだって何あれ、『今より性能の良い眼鏡が開発されますように』って笑っちゃったよ」

「私にとっては切実な話なの」

私は少し赤くなりながら言い返しました。

そうです。今後眼鏡が進化するかどうかは、私にとって大事なことなのです。眼科の進歩でもいいですが。

楓奈はまだ言います。

「それにさ、稲橋君と美奈のがまた傑作で、稲橋君のは表が何か塗り潰されてね。裏に『美奈は手加減することを知るべきだと思っ』ってあって、美奈のは『だったら悠揮が私をからかわなければいい』って書いてあってさ。笑えると思わない？ 平安時代の文のやり取りじゃないんだからって笑い声出さないようにするので精一杯だったよ」

思い出し笑いの発作でも起こったのか、脇腹を押さえて声を忍ばせて笑っている楓奈。

確かにそれは面白いかもしれませんが、が、しかし、やはりそれはよくないことだと思います。ざっくり言えばプライバシーの侵害です。ねえ、聞いている？ その辺ももう少し楓奈は気をつけるべきだと

思っただけど。

「本人達に聞こえるよ」

軽く肘で小突くと、楓奈はちらつと稲橋君と古館さんの方に目をやりました。

今度は、稲橋君が空の何かを指さして、二人で何か論じているように見えます。さして大きな声ではないのと、七夕の歌が流れているせいで何について話しているのかは分かりませんが、ずいぶん楽しそうです。

そこで、私と同じように二人を観察していた楓奈が、ぼつりと咳きました。

「羨ましいよねえ」

「え？」

振り向いて聞き返すと、楓奈は何度か足を組み換えて、結局元通りに伸ばしてから言います。

「あの二人は、楽しそうにしても黙ってても寝てても喧嘩してても、一緒にいることが似合ってるからいいよねって話。全然タイプは違うのに。いいなあ、私も幼馴染み欲しいなあ」

「羨ましいなんて言ったら、古館さんに失礼じゃない？」

「そうなんだけどなー。でも美奈は稲橋君がいるからいいじゃん。私なんてさ」

ふっ、と遠い目になって天の向こう側を見つめる楓奈。

楓奈がこういう表情になるのは、決まって感傷に浸る時なので、私は口を挟まずに楓奈の言葉を待ちます。

「稲橋君が悠介くんと悠奈ちゃんの相手をしてんの見ると、うちの兄貴もあんな感じだったなあってしょっちゅう思うんだよね。元気にしてるかな……」

「……」

「……？ 僕のこと呼んだ？」

気付けば、稲橋君が振り向いてこっちを見ていました。

ん、と視線を上げた楓奈は、片手を上げて冗談を飛ばします。

「うん呼んだ呼んだ！。酎ハイ2つください。あと出来ればおでんも」

「申し訳ありませんが当店では未成年者に酒は売れないんです。あと今はおでんの季節じゃないです。……ていうかいきなり何なの作利川。何か飲み物要るの？」

「ただの冗談だよー。突っ込みありがとー」

笑顔で稲橋君に手を振る楓奈でしたが、私は少し複雑な気分でした。

楓奈は一見無神経で適当な人間に見えても、その実は悩みを抱える女の子です。視力が悪いなどという平和な私の悩みよりずっと重い悩みを持っています。楓奈は私よりも強く、表面でない深層の精神年齢もきつと誰よりも大人です。だから余計に心配なんです。

「あつ、絵理、あの星動いてない？ 流れ星じゃない？」

楓奈がはしゃいだ声を上げます。私は苦笑して言いました。

「人工衛星だよ」

7月7日 晴れ

海に出かけた。

正直、海の水って塩辛くて好きじゃない。砂が熱いのもあんまり好きじゃない。

出来れば、夕方より後の海辺で、海に入らなくても済む方がいい。

昼前半は楽しくはなかった。

というか悠介君と悠奈ちゃんの二人に振り回されて疲れた。あの二人の手綱を握って制御できる悠揮は本当に尊敬に値する。

だから早く戻ってきて、面倒を見る係を手伝って欲しかった。

ずっと海の中にいたせいで日焼けしたし、美奈がもし全身焼けたらチヨコレート被ったみたいなのとかって悠揮に言われたときは本当にムカついた。ムカついたからビーチバレーの試合中に蹴っ飛ばしちゃった。

夜の七夕は楽しかったし、星も綺麗だった。

悠揮は織姫星がデネブで、彦星の星がアルタイルだって言うってたけど、織姫星は琴座ことうでデネブは白鳥座はくちだったはずだから、私は絶対違うと思う。

それに10円賭けた。

来年もみんなで来たい。私も思う。

『日記』 #5 (後書き)

> i 2 4 9 7 8 | 8 7 3 <

織姫星がべガで、彦星の星がアルタイルです。デネブはただの夏の
第三角のひとつです。

6 - 1 火種はボールペン（前書き）

お久しぶりです、と言って伝わる方にお久しぶりです。

正直、これの更新って学校の宿題とかよりもずっと圧迫感を与えてくる気がします。

繰り返しますが、これでも受験生なので、いつか必ず本当に凍結させないといけないとは思ってますが……楽しいんですね、これ書いているの。

最近はずっかり寒くなりましたが、この話の季節はまだ夏の暑い日です。

秀囲気を味わう為にできるだけ暑い格好をして、疲れないようにして読んでくださいね。

6 - 1 火種はボールペン

たらっ た〜たらっ たらっ た〜たらっ た〜 たっ たっ たらっ た〜

軽快なデフォルトのメール着信音で、組んだ腕に頭を乗せ、学習机に突っ伏してぐっすり眠りこけていた僕は、目が覚めた。

何事かと、顔をずらして眠い目を僅かに開けて見てみれば、ぴこぴことランプを点滅させながら携帯が歌っている。

「……………」

眠いのでほっときたかったが、曲が長いせいでなかなか鳴りやまない。

……………悠介と悠奈が僕の携帯に電話やメールが来る度に着信音で曲当てゲームをするもんだから、デフォルトに戻しておいたんだけど、今度から着信設定はバイブにしておこう。

「……………んだよ騒々しい……………。ケンカなら外でやれよ……………」

眠いので半ば寝惚けた自分でもよく分からない発言をしながら、僕は仕方なく絶賛歌唱中の携帯を掴み取ると、ぐっつと体を起こして肘について頭を支え、片手で適当に画面を開く。

メールの送り主は作利川だった。

文面はこんな感じ。

『やっほー、稲橋君。』

寝てた？ 起こしちゃったならごめんね。眠いからってイライラ

してると寿命縮まるよー』

「……」

背筋に寒いものが走ったのは、空調の効いた部屋で寝ていたから
だと思いたい。

ついに、目の前にその人がいなくなつて心を読み取れるレベルま
で進化したのかコイツ。エスパーの一族か何かか。

……とか何とか思っていることまで読み取られていたら僕はもう
気を失う。頼むから偶然であつて。

眠気なんかどこか遠くへ吹っ飛んでいつてしまった。僕は、しっ
かり体を起こすと、下キーを連続クリックして読み進める。

『で本題はね、私今みんなのニックネーム考えることにはまってる
んだけど、

稲橋君だつたら美奈にニックネーム付けるとしたら何にする？

美奈って意外と考えつかなくてね。暇な時にでも返事くれると嬉
しいです』

「……そんなくだらないことで起こさないですよ……」

美奈のニックネームなんか【ベストキッカー】とかでいいよ。世
界最高の蹴りを放つ人。ぴったりじゃん。

はあ、と携帯を折り畳もうとした僕だが、メールはそれで終わり
ではなく、続きがあつた。

『ところで私は、稲橋君は「ライス君」、美奈は「みなっち」と考
えてみました』

「……」

……ライスねえ。稲からの想像かな。正直言っただうでもいいし言われても嬉しくないかな。

それよりも美奈だ。みなっちは無いよ。聞いたただけだとたまごっち辺りに出てきそうな名前だけど実際そんな名前で呼んだら美奈は絶対反応しないって。

思いつきり否定しながら、僕は今度こそパタンと携帯を閉じた。

次いで、僕は一度、思いつきり腕を突き上げて伸びをし、そのままの体勢で椅子を回して、僕の毎朝の宿敵である目覚まし時計の方を眺める。別に携帯の時刻表示でもいいんだけど、一度閉じちゃったからまた開くの面倒だったんだよね。特に理由はない。

時計は『18:29』と表していた。

ずばり、勉強を始めてから3時間は経ったことになるが、その間どのくらい寝ていたんだろう。

「……勉強って世界一の眠り薬だよなあ」

適当に呟いた僕は机に向き直ると、机の上に広げていたテキストや参考書を片付けにかかった。

……ええ、そうなんです。僕は一応勉強していたんです。いつの間にか眠りに落ちる前は。

理由としては、両親や夏期講習の先生が、来年に備えて中2の夏は勉強しておいた方がいいって言うから、ちょっとばかりやる気を出して机に向かってみたんだけど……、僕は睡魔には勝てなかった

みたいだ。

ところで、そういえば僕が頭良いのか悪いのか、そういったことには今まで触れてこなかったと思うからこの際言っておくと、悪くはないけど良くもない。つまり普通。基本どのクラスにもいる人当たりのいい奴と同じくらいの成績と考えてくれるとだいたい合ってるんじゃないかな。

僕は勉強より人脈という思考の元に育ってきた人間だからね。

ちなみに、美奈が散々僕を馬鹿呼ばわりすることから察しがつくかもしれないけど、美奈は僕よりちょっと成績は高い。ちよっとね。

「……さてと。下行くかな」

机の上をすっかり片付けてしまうと、そろそろ夕飯を作り始める時間帯だし、お腹が空いているのを自覚した僕は部屋を出た。

廊下は暗く静かで、どうも二階には人の気配は無い。

が、階段に差し掛かった辺りで、僕の耳がリビングから漏れてくるらしき騒音を捉える。その音はどうやら僕がよく知る子供らの言い争いのように聞こえ、階段を一段下りることに大きくなっていく。嫌だなもうまたケンカやってんのか、と僕は一気に重たい気分になりながら、リビングのドアを開けた。

がちやつ。

「うわああああんお兄ちゃああああくん!!」

「うわあああああ!?! 何だ!?!」

開けるなり、いきなり何かか叫びながら僕の腰に抱きついてきた。反動で2m程後ろに下がる羽目になった僕も同じように錯乱した叫び声を上げるも、腰に抱きついていてる人物を認めて一息つく。

「何だ悠奈かびっくりした。……座敷童の類かと思った」

座敷童が叫びながら接近してくるのも、寝てる最中に乗って起こされるのと同じかそれ以上に怖いと思う。

……あれ？ そっぴや、悠奈ってよく両方のことを僕に対してやってくるなあ。悠奈の前世ってもしかして座敷童？

悠奈を見下ろす目を細めてみた。これの前世が妖怪だったらかなり人懐っこい妖怪だったに違いない。

僕は、僕の腰辺りにしがみついてぐずっている悠奈に、呆れ混じりの声を掛ける。

「で、今度は悠介とどんなケンカしてんの」

「今回は絶対おれ悪くねーよ」

悠奈が僕の質問に答える前に、その後ろから、悠介の随分むすつとした声が聞こえた。だいぶ怒ってるような雰囲気だったので、悠奈から顔を上げて悠介を見ると、案の定お怒り顔だった。

しかもその隣には、表情とまでは行かないまでも、困ったような仕草で突っ立っている美奈がいた。

たぶん、今まで何とか悠介と悠奈のケンカを仲裁しようとしていてくれたんだろう。美奈は目で、何とかしてくれというメッセージ

を僕に送ってくる。

「つか母さんはどこに行っただ。父さんも夏休みなのに仕事出かけてないで家にいてくれれば……。」

何から触れればいいんだろう。僕が思案していると、悠奈が僕の腰に手を回したまま、顔だけ振り返って悠介に向けて叫んだ。

「悠介のばか！ 脳みそメロンパン！！」

また新たな悪口を生み出しちゃってまあ。ただ、ベそをかいているせいか、迫力には欠ける。

一方、言われた悠介は、いつもなら2倍3倍に言い返すところを、今日は何も言わずに、止めようとした美奈の手を振り切り黙って悠奈に迫り、その腕をガツと掴んだ。

「痛い！」

「は？」

美奈の舌打ち並みのイライラが籠もった「は？」だった。

悠奈は目を見開いて、自分の腕を握り締める相手を見る。ここまです怒られたのは久しぶりなのかもしれない。

僕からすればこの二人が何でこうケンカしているのか分からないので、内心は美奈以上に戸惑った状態なのだが。

悠介は驚くほど静かな声を出す。

「じゃあさ、おれ、悠奈の部屋にあるもの片っ端から壊していい？
それで、『そこに置いてたのがいけなかったんだ』って言えば、
お前許す？」

淡々と問われた悠奈は、何も答えられずに顔を逸らした。そして
急にぶわっと目に涙を浮かべると、悠介の手を振り払う。

「ばかメロンパン！」

そして僕の腰からも手を離すと、悠奈はうわああんと号泣しながら走り去ってしまった。次いで、どんどんと階段を踏み鳴らす音が聞こえる。

ポツーンと後に残されて、台風でも見送るかのように立ちつくす僕ら。

……今の馬鹿メロンパンは相当ツボに来ただけど、笑っちゃま
ずい場面だよな、ここ。

何とか、吹き出さないように堪えた。

「……うっぎ、あいつ」

ぼそつ、と、今まで聞いたことの無い言葉を放つ悠介。悠介も悠
介でイライラと床を踏み鳴らしながら窓際まで行って乱暴に床に座
り込んだ。

……いやー、恐い恐い。雰囲気がとてつもなく重いよ。

いったいどうしたというのか。僕はいつになく不安げにしている
美奈の近くへ寄ると、ひそひそ話を開始。

「何があつたの？」

その言葉に、美奈はようやく普段通りの表情に戻ると、一度振り返って悠介の方を確認してから僕と同じく小さな声で返してきた。

「ケンカ」

「いやそれは分かってるけど」

「悠奈ちゃんが、床にあつた悠介君のファーストボールペン踏んで壊しちゃつたのが原因」

「……あー」

忘れた人の為に解説するけど、ファーストってのは、正式名称『ファンタジーワールドストーリー』
空想世界の物語』という人気の高いメディアミックス作品の略称だ。

そういえば4月頃に映画観に行ったとき、悠介はボールペン欲しがつてたような気がするし、実は買うか買ってもらつかしていたのかもしれない。

「それで、悠奈は謝つたの？」

その時の様子が目に浮かぶようだが、僕は敢えて聞いてみた。美奈は黙って首を横に振る。

「……ここに置いてた自分が悪いんじゃない、って」

「……言いそうなことだ」

「それで、悠介君がキレて口喧嘩し始めて、しばらくしたら取っ組み合いのケンカになった」

口論なんかさっさと止めればいいじゃんと思う人もいるかもしれないが、こいつらはなかなかケンカ中に人の話を聞かないのである。そういう場合は強制的に首根っこでも掴んで引き離すのだが、美奈はこの二人（に限らず僕以外の人間）に何かを強制するのは苦手だ。

「参考までに聞くけど、先に手を上げたのはどっち？」

僕がそう聞くと、美奈は戸惑ったようにしばらくの間自分の頭の中の記憶ゾーンを駆け回らせていたが、やがて眉を潜めた。

「覚えてない」

「そっか、ありがとう」

これはどう酌量しても悠奈の方が悪いかな。先に悠介が手を出していたとしても、やっぱり人の物を壊しておいて謝りもしないのは問題だ。今まで、多少悠奈の方が大人っぽさがあるかなと考えていたが、今回の件で改めた。やっぱりどっちもどっちだ。

しばらく間を置き、僕は背後を振り返り、覗けるだけ二階の方を覗いてみる。

「……ちょっと、悠奈を説得してくる」

そう言つと、美奈はちょっと僕の内面を伺うような表情を見せた。

「……悠奈ちゃんの方が悪いと思ってる？」

「まあね。僕だって同じ状況だったら怒ると思うし。だってファーストのボールペンだよ？」

美奈は呆れ息を吐く。

「……これだからオタクは」

「オタクって言うなよ」

「……これだからキモオタは」

「より酷くなってるんですけど」

ドアを開けた途端に迎撃されたりしないよう、念のためにノックはした。

「入るよー」

ノックの音にも、かけた声にも返事はないので、僕はドアノブを空き巣泥棒よりも静かに回すと、悠奈の部屋の戸を少し開ける。

部屋は真っ暗だった。

カーテンまで閉まっている。

このままふて寝するつもりなんだろうか。ドラキュラじゃないん

だから……とか思いつつ、僕はドアを開けられるだけ開けると、開けっ放しで部屋の電気のスイッチを入れた。

……あれ？ 無人？

パツと見回したところでは、一瞬悠奈はいないように見えたが、間違い探しの要領でよくよく目を凝らしてみれば、ベッドの布団が何だか膨らんでいた。

そっぴや、小さい頃って僕も布団の中が一番の安全地帯のような気がしていたからなあ。

布団にくるまってぬくぬくしていると、何故か無性に安心するんだよ。

変な点に懐かしさを感じながら、僕はその安全地帯に隠れている人に向け、小さな声で呼びかけてみる。

「悠奈さん、まだ7時にもなってないのに、もう寝るんですかー」

「……寝てないもん」

むすつと機嫌の悪い鼻声が返ってきた。僕は一步踏み出し、少し声のボリュームも上げて、また呼びかけてみる。

「じゃあ何で布団の中で丸くなってるんですか。暑いでしょう」

「……」

我が家の女子は不機嫌になるとすぐ黙る。普段はうるさいのに、こういうところは似てるんだなあ。

僕はつかつかとベッドに歩み寄ると、もっこりしていた布団を一気に引き剥がした。

ベッドの上には、横向きに膝を抱えてダンゴムシみたいに丸まった人が一名。

片手で布団を持ち上げた状態の僕を、悠奈は、小学生なりに精一杯の憎らしい目で睨もうとしたみただけど、残念ながら美奈の睨みを体験している僕にとってはもう可愛いようにしか見えない。

相変わらずの鼻声で悠奈は呟く。

「寒い。やめて」

「寒いじゃなくて……ていうか汗かいてんじゃん。何一人でサウナ体験してるんだよ」

「……」

僕は奪い取った布団を手早く何とか四つ折りにし、悠奈の勉強机の椅子にもっさり引掛けた。

そして、手近なベッドの端、ちょうど悠奈の頭がある方に腰掛ける。ベッドが僕の重みで沈む。

悠奈はそんな僕の動作を、目だけで追っていた。

「本当に寒いんだったら、布団戻すけど？」

まずそう言うと、悠奈は寝たままの体勢で器用に首を横に振った。やがて両手を使って、至極ゆっくりと上半身を起こす。その億劫な

動きは、僕には今から怒られようとしているのが分かっているから腰が引ける、という風に見えた。

悠奈が起き上がるのを待たずして、僕は悠奈の額に手を伸ばす。僅かに悠奈の身が竦んだがそれも気にしない。

額までずり落ちてきていたヘアバンドを元通りに直してやりながら、僕は悠奈の頭のとっぺんに話しかける。

「はあ、せめて寝るならヘアバンドとかは外してから寝ろよ。跡が残るよ」

「……残る？」

「残るっていうか畳の上で寝ると跡が付くのと同じことだけどね。あと朝に寝癖になる」

「……なつてもいいもん」

「うちの家族代々引き継がれてきた寝癖を舐めるとホントに痛い目に遭うぞ。ワックスとか使わないでスーパーサイヤ人になるからな。悠奈くらいの前髪の長さだと、特に」

話の流れからというわけではないが、僕は悠奈の前髪を軽く梳いてやる。悠奈はちょっと黙って、僕の手にされるがままになっていた。

「……ねえ……、……悠奈のこと怒りに来たんじゃないの？ お兄ちゃん」

僕が予想してたことと全く違うことを言い始めたからか、顔を上

げ、悠奈が訊ねる。

なるほど、自分が悪いのは分かってるのね。

……小学3年生にして、自分に非があることを重々承知しておきながら、咄嗟にごめんなさいの一言が出ないとはね。天の邪鬼なのはずっとそうだが、それにまた、悠奈が自分のことを私ではなく自分の名前で呼ぶのは、何かしら幼心に戻る出来事があったときなのだ。

僕は悠奈の額から頭に手を移し、軽く乗せて言う。

「怒ってもいいけど。それこそあと2時間は下に下りて来おたくなくなるくらい心身フルボツに叱るんでもいいけど、お前それだと凹んで傷付いて終わりだろ」

「うん」

「それに僕のボールペンじゃないから、僕には怒る理由はないし。ケンカのことなら両成敗で二人一緒に叱るよ」

「じゃあもし悠奈がお兄ちゃんのボールペン壊したら、お兄ちゃん怒る？」

「壊した後に謝らなかつたらね」

軽く言ってみせる。すると悠奈はじつと床を見て黙り込んだので、僕も悠奈の頭から手を離す。しばらくシートを指先でいじり回していたかと思ったら、ふいに悠奈はまた顔を上げた。

「……」
「……」

「何で僕に謝ってんだよ」

「だってこの前、お兄ちゃんのお団子食べちゃったから」

「……」

……いや、あの、うん。そうだったんですか。

とてつもない重罪を告白したかのようにまた項垂れる悠奈だが、流石にお団子くらいで2時間も顔を合わせたくなくなるくらい激しく怒ったりはしないって。

ていうかそれってどんだけ食いしん坊な人間なんだよ。食べ物への恨みは怖いって言うけどさあ。

でも、正直に言ったのは偉い。そこは褒める。

「いやまあ、団子の話は置いとくけど」

「何で？ お兄ちゃんお団子嫌いななの？」

「置いとくけど」

無視して先に進めます。別に団子嫌いじゃないけどさ。

「悠奈は自分が悪いこと分かってるんだから、もう早く謝っちゃいなよ」

「やだあ……」

「何で」

「だって悠介恐いんだもん。本気で怒ってる気がする……」

消え入りそうな声で言うと、今度は何除けのつもりか枕をぎゅうぎゅうに抱きしめた悠奈。

気がするどころか、たぶん悠介は本気で怒ってるだろう残念ながら。そして悠奈はそんな悠介に相当びびってしまったようだ。これでは、ただ謝ってこいと命令したところで、部屋出た廊下のところで躓すくまっちゃうオチだと思う。何せさっきの悠介の怒りっぷりを見ると、僕もあまり茶化したくないくらいだし。

どうしようかと考えを巡らせ……、僕は簡単に選択肢で選ばせることにした。

「じゃあ悠奈、今から取るべき行動を選択肢にして出しますので、3つの選択肢のうちでどれかを選んでください。A、今すぐ謝りに行く。B、賠償金を支払う。C、償いのため出家する」

言われた悠奈は、目をぱちくりさせる。

ちよつとでも気が刺れれば、それだけ気分も持ち直すはずだ。根拠はないけど。

「しゅっけって何？」

「髪を坊主にして寺に入ること」

「嫌だ！」

物凄く気持ちの籠もった声で悠奈は叫んだ。

兄のボールペンを壊した償いとかいうしょうもない理由でお寺入りというのも、後々言い伝えになって語り継がれそうだけどね。

「じゃあCはなしという方向で」

少しずつ、悠奈の声に張りが戻ってくる。

「ばいしょうきんってというのは何？」

「要するにお金払うんだよ。そのボールペンがいくらするのか知らないけど、最低でもそれが買えるだけのお金を悠奈が謝罪の気持ちとして払う」

「それもやだ……」

さつきほどではないが、それでも切実な声色で枕を掴んだまま言葉を漏らす悠奈。

僕も正直、君に何でもかんでも金を払って問題を解決する大人にはなあってほしくない。つーか、そうやって何でも金で解決するくらいだったらまだ出家して償ってほしいよ。

さて、と僕は自分の立てた選択肢に小さく笑う。悠奈はBもCも嫌なんだな。となると……。

「じゃあ残ったのはAだな。ほら悠奈、謝りに行っておいで。出家と賠償金よりマシだろ」

「うあー……」

ぼんぼんと背中を叩くも、悠奈は不安で不安でしようがないといった情けない声を出して、枕から片手を離して僕の腕を握った。ベッドから降りて立ったものの、僕の手を握ったまま引つ張る。

「お兄ちゃん一緒に来て」

「えー」

「一緒に来てよ……」

「えー」

「お願いだからあ」

「えー」

「お願い……」

「えー」

拒否し続けると、最終的に、悠奈は半泣きになって無言でぐいぐい腕を引つ張ってきた。あんまり妹を精神的にいじめるのも兄としてよろしくないと思うので、しょうがないなコイツは……とあからさまに溜息をつきながらも、仕方なく僕はベッドから重い腰を上げる。

悠奈はあれだけ一緒に来いと僕を引つ張っていたくせに、腰が引けて、部屋を出る前には既に僕が悠奈を引つ張る形になっていた。

「ほら尻込みしてんなー。潔くさつと誠実に謝る癖をつけるお前」

「だって恐いし……。ねえもしかして美奈ちゃんも怒ってる？」

「何で美奈まで怒るんだよ」

「あああちよつと待ってお兄ちゃん待って！ やっぱり心の準備が……！」

「待たない。注射じゃないんだから心の準備も要らないよ。あと枕持って来んなよな」

……さて、ケンカするほど仲が良い奴らのこと、無事に謝って仲直りできたかどうかは、わざわざ報告するまでもないことだよ。

敢えて言うなら、悠介はボールペンをセットで買ったから、同じ物がもう1本あったんだと。

つーかむしろ問題なのは、出かけたままなかなか帰ってこなかったと思っていた母さんが実はアイロンがけの途中に居眠りしてたってことなんだよね。

幸い損失はシャツ1枚で済んだけど、下手したら火事が起きてたかもしれないんだよ。

そんなわけで危ない母さんの代わりにアイロンがけをやってる僕なのでした。

6 - 2 電車は大切にね

間一髪。

そんな言葉を思い出してまざまざと実感した。

真後ろで、空気が抜けるのと似た、プシュー……という電車ドアが閉まる音がする。ほとんど地下鉄のホームへ転がり落ちる勢いで駆け込み乗車を行った僕らは、何とかギリギリ発車時刻に間に合った。

似たような経験をしている人は分かるかもしれないが、僕らは今、夏休み特別の夏期講習からの帰り時。電車に乗り遅れまいと、駅まですっ飛んできて、このように何とか間に合わせることが出来たのだ。

「はあ、はあ……。あ、危なかった……」

自分の後ろすぐ、5cmも離れていないところで閉まった電車の壁に、もたれかかるように片腕を着き、僕は大きく息を吐く。電車のドアが閉まる、要するに発車しますよという合図の電子音がまだ耳に残っている。

「……そんなに疲れなくても」

僕のすぐ傍らで息すら乱れていない美奈はそんなことを言うが、それは貴方様の総合体力スペックが群を抜いて優れているだけであって、合計で20kg近い参考書などの束を持って塾から駅まで数km走り抜けば普通は座り込むくらいの疲労度はあるはずなんだ。まだ立つ

ていられるだけ帰宅部には上出来じゃない？

はあ、ほんと疲れた。

僕は呼吸を整え、電車ドアに着いていた手を離す。

途端、電車が急発進。

間一髪に続いて慣性という言葉を出す間もなく、バランスを崩された僕の体はひとりで傾いて後方に倒れ込み、ゴツチン！！と固い音を立てて後頭部が座席横の手摺りへと激突した。

「痛いっ！」

「……先に言っとくけど、今は何もしてないよ」

「……分かってる分かってる……」

僕は頭を押さえ、念を押してきた美奈に呻き声の返事をする。

そりゃあ発車直前になって、今からドアが閉まりますって時に飛び込んできた僕らが悪いんだけども。そんな急発進しなくてもよくない。そこまで酷いタイムロスにはなってないでしょう。もうすぐで大事な会議が始まっちゃう国の重鎮さんでも乗せてんのかこの電車は。

「だいたい、悪いのは夏期講習塾と駅の距離が離れすぎてることなんだよ。」

「もう夏期講習嫌い……」

電車の床に倒れた格好のまま、後頭部を押さえて泣き言を呟く僕。

半分本気で明日の講習サボろうかな。

「……いつまでも倒れてないで早く立て。見られてる」

言うが早いのか、美奈は僕のメンタル状態お構いなしに、乱暴に僕の手首を引っ張った。その手に助けられ、僕がやっとこさつとこ元通りに立ち上がると、たぶんこつちを見ていたであろう電車の他の乗客の皆さんが一斉に目を逸らした気配がした。

加速気味だった電車の音が、がたんごとんと均一なりズムを刻み始めている。

……はあ。このやり場のない痛い気持ちはどこに飛ばせばいいんだろうか。

……つーかさあ、その女子高生二人、何で声を忍ばせて僕の方見て笑ってんの？

僕は参考書類の詰まった袋を拾い上げて肩に掛けながら、ぼんやり口調で美奈に願う。

「……美奈、明日講習塾の先生に僕は頭部損傷でずる休みしますって伝えといて」

「嫌だ」

一応冗談だったのだが、ぴしゃりと3文字で却下された。続けて、美奈は横目で僕のことを睨みつつ言う。

「そんなんだから悠揮は成績上がらないんだ」

「成績が全てじゃないでしょう」

本当に学業方面では真面目さんなんだからなあ、美奈は。

からかうような返事をする、美奈はその報復に爪先でがすつと僕の脛の辺りを蹴っ飛ばしてきやがった。

……まったく、電車の中でもお構いなしの暴挙である。

しかもこれ、地味にじんじんとした痛みが長引くから辛い。

「ねえ、今蹴られたせいで足が痛いんだけど」

僕は蹴られた脛を指さして文句を言うのだが、美奈は知るかとはかりにそっぽを向くと、空いている席へ歩いて行ってさっさと座ってしまった。

「……」

どうせ数駅分乗るだけだし、別に座らなくてもいいや、と考えた僕は、美奈の後は追わず、電車の開閉ドアに背を預けて適当に手近な金属棒を掴む。

足に長時間の正座直後みたいなじんじんした痛みが襲ってきてるのは、まあ我慢することにしよう。

……しかしまあ。

(……よく考えたら、美奈、あんな足露出させた格好で電車乗って痴漢に遭ったりしそっただよな)

長い座席の一角にちょこんと座っている美奈を見て、僕は思う。

美奈は、いつでもどこでも短パンルックで、それ以外の私服を僕は見たことがない。今日なんかも、7月で猛暑日とはいえ、Tシャツ1枚に短パンという、服より肌の面積の方が多んじゃないかと思われのような姿だ。あれが脚線美自慢のモデルとかだったらまだしも、僕にとつて美奈の生足はキック暴力の象徴だし、これが笑えない話なんだよ。

美奈の性根がもう少しおしとやかだったら、そんなに肌を露出させるのはやめなさいって注意するけど、美奈は痴漢なんか簡単に撃退しちゃいそっだからね。

というかいつそ、痴漢VS美奈のバトルを見たい気さえする。

そんな、美奈に知られたら蹴倒されそんなことを考えていると、しばらくして、電車が次の駅に着いた瞬間、出入りする人の間を縫って、座席に座っていたはずの美奈が僕の元に戻ってきた。

どうしたの……と、そう聞こうとした僕よりも先に、美奈は開口一番不機嫌な声を発する。

「座らないの」

「はい？」

「座らないの？」

あ、今、語尾がイラツとした。

「え、別にそんな長いこと乗らないからいいかなって思ったんだけど」

何でいきなり機嫌が悪くなったのか分からない。

戸惑って、というかちよっとビビって返すと、美奈は席に戻らずにむっとした顔のまままで近くの金属支柱を掴んだ。

「…………美奈こそ座らないの？ 折角座ってたのに、他の誰かに座られちゃうかもよ」

「別にいい」

珍しいこともあったもんだなあと、僕は美奈の顔を眺める。

この人は基本人見知りだが、電車の座席では、人一人分のスペースしか空いてなくてもとにかく空いてればさっさと座る。そうやってスパツと行動できるのはいいことだと思っし、何も悪いとは言わないけど、そんな美奈だけに座れるのに座らないというのは珍しい。

僕があんまりにも長い時間美奈を眺めるからか、美奈は舌打ちと共にこっ呺いた。

「こっち見るな変態馬鹿」

「変態馬鹿って言い過ぎだろ。…………まったく美奈はそうやってすぐちよっと自分の方が頭良いからって人を馬鹿呼ばわりするんだから」

「……………」

「てゆうかあれでしょ？ 美奈は一人で座ってるのは寂しいからこち戻ってきたんでしょ？」

言った途端、僕はしまったと自分の口を縫い合わせた。だが時既に遅し。

「……、違つから」

言葉と共に、今の一言で不機嫌に磨きがかかった美奈は、獲物を狙うカマキリのごとき素早さで僕の手首を掴むと、そのまま万力のような凄まじい力で僕の手首を砕こうとしてくる。

「じりじりじりき。」

「痛い痛い痛い！ 分かったもうからかわないから痛い！ お願い電車内なんだから寂しいのは分かったからもうちょっと力を緩め痛いってば！！」

後半はもう手を振り回す勢いで、何とかかんとか美奈の手を振り払った。

……この美奈の、イライラの渦巻いた目。超恐い。

……もう、相当な迷惑中学生だよ僕ら。周囲から白い目線が集まってる気がする。始業式の日を思い出すよ。早く電車降りたい……。

美奈がどういう反応するか分かっていつつ、電車内なのにならかった僕が悪いつちや悪いんだけどね。

はぁ……と後悔の溜息を吐きながら美奈を見ると、美奈は握り締

め足りなかったのか、金属支柱にももの凄い握力かけてミシミシ言わせていた。

恐すぎるよ美奈。何もそこまでイラつかなくても。

美奈が公共施設（電車も含まれるのかは知らないけど）を破壊する前に何とか宥めるべく、僕は世間話でも始めて美奈の気を逸らすことを試みる。

「そ、そっぴや美奈、今日の夕飯にはアスパラガス出るって朝に母さん言ってたよ」

……あつ。

……咄嗟に出る話題が相手の嫌いなものについてとか、我ながら意地悪だな……。

とは思うものの、言ったことは覆せない。効果はあり、支柱のミシミシ音が僕の言葉を境にびたりと止んだ。

良かった美奈が電車壊さないで、と僕は安堵したのだが……。ゆっくりとこちらを振り向いた美奈の表情は、おっそろしく暗かった。その目に僕は腰が引ける。

「……何？ 嫌味？」

「いや……ご、ごめん、そういうつもりじゃなくて……。ただの会話のきっかけと言いますか何というか」

「……うっさい」

「あつ、じゃあ、夕飯の時に美奈の分のアスパラ食べてあげるから、

そんな悄気ないですよ」

「……………」

美奈は、誰がどう見ても分かる気落ちした口調で僕の言葉を遮った。

……………どうしよう、支柱のミシミシは止んだけど、代わりに美奈が落ち込んだじゃったよ。

しかも美奈に近い席に座ってる会社員っぽいおじさん、美奈の負のオーラに押されて冷や汗かいてるし。

はあそっか、美奈はアスパラの話をすると思沈んじゃうのかー、と、暗い顔のまま目を逸らした美奈を見て、僕は頬を掻く。

以後気をつけることにしよう。ただでさえ口数の少ない美奈が元気を無くすと会話が出来なくなる。

「……………」

「……………」

しかし、こつも気まづくさせてしまうと、新たな話題を切り出しにくいね。

美奈は美奈で、「アスパラなんか……………」とか何とかぼそぼそつぶつぶ言ってるし、何か気を紛らわせる話を振るべきだとは思っただけど……………。

とその時、困り果てた僕の、ズボン右ポケットの中のケータイが、急にぶいーぶいーと震え始めた。

「……………」

……とりあえず、電源を切っていなかったことを反省。外を向き、出来るだけ見咎められないようにこっさり画面を開くと、そのメールの送り主はまた作利川だと表示されていた。車内なので、内容までは確認しないことにしよう。

あとで確認しますから。

ケータイの電源を切りつつ、そういえば、この前のメールの返信もしていなかったことを思い出す。

確かメールの内容は、みんなのニックネームを考えることにハマってたとか何とかという話だった。

「ニックネーム、ねえ……………」

気まぐれで考えるニックネーム相談なんて、あほくさいとは思う。そもそも僕はケータイという物自体、緊急な時とかの連絡用にあれば充分だという認識なので、こういうくだらない話題での連絡は通信代の無駄遣いじゃないかと若干ながら思うわけですよ。

かといって作利川、ずっと返信しないでいると会ったときにうるさいからな。

はあと一息溜息を吐き出して、僕は僅かに上向くように後頭部を電車ドアに預ける。

そしてふと横を見て、美奈が僕の方をちらーっと思っているのを発見してしまった。

「……………」

「……何」

「いや、何て。そっちが僕のこと観察してたんだろ」

「別に観察はしてない」

「そう？ ……あ分かった、美奈、ケータイ羨ましいと思って見てたんでしよう。欲しいなら母さんに言いなよ、頼めば絶対買ってくれるって」

「……要らないし」

美奈は小さな声で否定するが、僕にはどうにも嘘臭く感じる。だって美奈、僕と二人で出かけているときにはしょっちゅう僕のケータイ借りるもん。本当はやっぱ、みんなとアドレス交換とかしたいんじゃないの？

かといって、美奈はたぶん父さん母さんにケータイ買ってくださいいとは頼まないだろう。それくらい欲しかったって罰は当たらないのに……。

僕の両親とも、美奈のことは娘だと思って育てるってあの時言ってたんだからさ。

「美奈はもうちょっと、家族に我俣言っただっていいと思うよ」

「は？」

僕が変に神妙な声を出したからなのか、怪訝な美奈の返事。

「だから、美奈は遠慮しすぎなんだって話。そもそもねえ、美奈って自分の気持ちを伝えるのが下手すぎなんだよ。美奈はアスパラガス嫌いだってこと、うちの母さん未だに気付いてないよ。実はケータイ欲しいと思ってることも僕か作利川くらいしか分からないって家族に対してくらい、もっと言いたいことは言うようにした方がいいよ」

「何で」

この茶髪、人がせっかく心配して真剣にアドバイスしてるというのに、何でと言いやがった。

一瞬にして、美奈のことを案じ想う気持ちが失せる。

「そう、じゃあ美奈は好きにしたらいいよ」

「……」

露骨に棘のある言い方から、僕の内心まで伝わったのだろう、美奈は黙り込んだ。

僕も黙り、紐が食い込んできたので参考書類の入った袋をもう片方の肩に掛け替える。

さっきとは違う種類の気まずい空気が流れてきたが、その空気が充滿する前に、美奈がぼつりと呟いた。

「……そうという意味じゃない」

「え?」

聞き返すと、ややあつて美奈は顔を上げ、正面から僕に視線をぶつけてきた。

強い睨みに僕はちょっと怯む。

「何で悠揮にそんなこと言われなといけないのか、っていう意味。何も知らないくせに」

美奈にしては珍しく長い台詞だった。しかも、だいぶ口調が強い。いつもの怒り方とは違って、僕はついたじろいでしまう。

「そんな風に、悠揮に指図される筋合いはない」

「……そうだけど」

「うるさい黙れ。悠揮は、……悠揮は、親に捨てられたことなんかなくせに……」

段々と、独り言のように声が内向きになっていく。その言葉がまるで自分に向けられたものであるかのように、美奈の表情が随分と強張る。

「……」

「……」

「ここが電車の中であることを思い出したか、美奈はもうそれ以上一言も発さずに俯いてしまった。

……ああ、何も知らないくせに、と言われるとはね。

僕は、頭の中で美奈に言われたことを転がして考えてみる。

何と言われようと、美奈がいつまでも他人行儀なのは家族として良くないと僕は思う。今の台詞にしたって、もっといつも噴火したときみたいに怒鳴ったっていいものを、あんなに静かに言っただのは、きつと僕相手でさえ人を責めることに躊躇したからだ。相手が僕じゃなかったら、美奈は言いたいことは全部胸の中に溜め込んで、何も言わなかったに違いない。美奈はそういう人だ。

「でもさ、僕は美奈の気持ちなら少し分かるよ」

そう言つと、美奈の体がぴくりと反応した。続けて、美奈の顔が少しだけ上がり、小さな反論が返ってくる。

「……分からないよ」

「分かるって」

「……………何で」

「何でってそりゃ、長いこと付き合ってきた幼馴染みだからだよ」

また美奈に睨まれたが、今度はその視線に怯むことなく、僕はさらさらと言つ。

「じゃあ、今美奈が思ってることを当ててみようか？ 正直に言えば自分でも分かっていたことを、僕に言われたから悔しいんですよ。……確かにね、僕は捨て子の経験ないから、美奈の気持ち全部分かるとは言わないけど、でも少なくとも美奈が思ってる以上に分かっているつもりだよ」

特に、捨て子云々とか、美奈の性格みたいな問題ならね。

僕が分からないのは、突然不機嫌になったり、顔を赤くして怒鳴ってきたりする時の美奈の気持ちだ。

「……」

「まあ、美奈が今のままがいいって言うなら無理強いはしないけど、何度も言うけど僕ら家族なんだから、気を遣う必要は無いんだよ。せめて、そうやって過ごしてストレスをあんまり溜めないで欲しいんだ」

僕に対する攻撃の威力が上がるから。

「……、でも」

美奈は睨みの目から一転、どこか不安げな目になって、言い返してきた。

……何というか、中学生になってから美奈はあまり不安そうな表情って見せなくなったから、最近妙に懐かしく感じる。

「……」

でも、と一言だけ言ったはいいものの、続く言葉が見つからずに美奈は口を閉ざした。

僕の予想では、美奈はたぶん、親というのが軽くトラウマになってるんだと思う。美奈は、親に一般的な愛情を注いではもらえなかつた。そしてその果てに捨てられた。僕は心療内科医とかじゃないから、確信持って言えはしないけど、また捨てられるんじゃないかとどこかで思ってしまったって、真実心を許せないということもあるん

じゃないだろうか。

そうすると、美奈が僕に対して素のまんまの態度なのは、安心して素で接せる相手だと思ってくれているからか、あるいは僕との関係が無くなったところでもどうとも思わないから、という理由になるんだけどね。

電車が少し揺れたので、僕は支柱を掴み直す。

美奈があんまり長いこと不安そうな顔なんかしていると、明日隕石でも降ってきてしまいそうだ。

「今すぐ変えろとは言わないからさ、ちょっと家族であることを意識してくれると、僕が嬉しい」

そう言うと、美奈は微妙な角度で黙ったまま頷いた。

それから僕と目を合わせないようにして、小さな声で言う。

「……アスパラガス食べたらいつも吐くって、悠揮のお母さんに言っとく」

「……」

……えっ、食べたらずくの？

「冗談で食べられないとかいうレベルじゃなくて、本当に食べられないのか。そこまで嫌いだとは僕も知らなかった。

僕には好きじゃない食べ物はあるけど、明確に嫌いだという食べ物はないから、そういう気持ちはいまいちよく分からないや。

新たな知識を脳の引き出しにしまっていた僕だが、不意に聞こえ

た美奈の声で現実世界に引き戻された。

「悠揮、悠揮」

「え？」

僕が顔を向けると、美奈は電車ドアの上に取り付けられた、駅名が横に並んで電車の現在地が表示される仕組みの電子図を指さして言う。

「何かいつの間にか、降りる駅乗り過ごしてるみたいだけど」

「えっ!？」

6 - 3 アスパラガス大嫌い

「悠揮、ちょっとおつかい行ってきて」

帰宅するなり、母にそんなことを言われた。

時刻は、帰りに乗ってきた電車の発車時刻から考えて、おやつ時間の少し前、といった頃合いか。

夏期講習から帰ってきたはいいものの、重たい荷物を持ったままで、まだ靴を脱ぎもしていないうちに、そんなことを言われてしまった。

しばし、外で鳴いているセミの鳴き声だけが流れた後、僕は勘弁して欲しいという念を込めて、額に片手を当てる。

「……母さん、僕は今帰ってきたところなんですけど」

「そうね、お帰りなさい。だから今度はおつかい行ってきて」

「……」

何ですか淡々と簡単に言いおつてからに。

暑い日中の外からやっと帰ってきたのに、「おかえり」より先に「また出かけてこい」って言われるのはどんな気分か察してもらえません？ ねえ母さん。

「……いや、おつかいが面倒だからこういう考えに至ってるんじゃないわね。」

僕はとりあえず、後ろで待っている美奈にまた邪魔だとか言っ

突き飛ばされる前に靴を脱ぎ、家に入りながら、スルーを試みる。

「あちよつと待ちなさいよ悠揮。あんた何無言で立ち去ろうとしてんのよ」

「だってさあ。母さん本当は昨日の午後買い物に行く予定だったんでしょ？　なのに、僕がアイロンがけとか洗濯物入れたり畳んだりしてる間までずっと居眠りしてるからさ、行きそびれたんじゃないの？　そのツケがどーして僕に回ってくるんだよ」

「……あら。バレちゃっているのかしら」

「うん、バレバレ。隠すの下手すぎて頭も尻も全部出てるから。そんなわけでさようなら」

「だから待ちなさいってば」

華麗に自分の部屋へ入っていきこうとしたのだが、すんでの所で腕を掴まれ引き留められる。パンを盗んで逃げだそうとしたところを捕まった無法ストリートの少年みたいな格好の僕の横を、美奈はさつさと歩いて通り過ぎてゆく。

……ほら、美奈は声すらかけられないというのに。差別だ差別。

僕はぶんぶん手を振るのだが、母さんは一向に放してくれずに、まるで気にしてないように言う。

「豆腐と油揚げと味噌買ってくるだけだから。ね、悠揮」

味噌汁の材料ごっそり無いんですか。もう今日は味噌汁なしでい

いじゃん。駄目なの？

ああもう面倒臭い。

僕は肩に負担をかけていた重い荷物を一旦廊下に降ろすと、母さんの方へ向き直り、指を一本立てておもむろに口を開いた。

「じゃあ母さん、取引しよう」

「なあに？」

「今日のおかずにアスパラガスを入れなくてくれたら、買い物行ってあげる」

「……？」

僕の言葉に、何でアスパラガス？ とばかりに、まるっきり理解していない表情で眉を潜める母さん。

そうだよ。ちょっと意味分かんないよね。僕だって母さんの立場だったらそういう顔をしたよ。でもここは何も言わず、取引に応じてくれないかな。

あ、ちなみに、僕が美奈のことに触れないのは、僕が言ったら美奈に怒られそうなのがするからだ。

「悠揮、あんたってアスパラガス嫌いだったの？」

いや、普通です。

……だけとさあ、うちには食べると必ず吐くほどアスパラが嫌いな人がいるわけですよ。母さんは知らないだらうけども。

……我ながら、何でも美奈のことをいつも気にかけてるんだろつな、僕は。

シンキングタイム中の僕が我に返って返事をする前に、母さんはさらに眉を潜めて困ったような顔になり、続けた。

「でもねえ、アスパラガス抜いたら今日の野菜炒めが野菜炒めじゃなくなっちゃうのよ」

……少し意味が分からなかったが、今日の野菜炒めはそんな名前のかせに野菜はアスパラガスしか入れないつもりだったのかと解釈した僕は、咄嗟に思い浮かんだ言葉をそのまま言って凌ぐ。

「じゃあ野菜炒め用の野菜も買ってくるから。キャベツとかピーマンとかニンジンとか、色々」

「あらそう？　なら、それでもいいけど……」

今ひとつ、というかさっぱり腑に落ちない顔だが、とりあえず母さんは了承してくれた。

……あんなに一生懸命アスパラガスを抜いてもらおうとするなんて、あの子最近アスパラガスが嫌いになることでもあったのかしら……という感じのことを呟きながら家事をしに戻る母さんの背中を見つつ、僕も溜息をひとつ吐く。

結局また引き受けてしまったよ。我ながら断るの下手だよなあ。たぶん美奈の影響なんだろうけど。

今回は悠介と悠奈の二人を連れて行かなくても良いからまだマシだとしても、早いうちに行かないと主婦の皆さんの買い物タイムが

始まっちゃうんだよね。

「……………」

あの満員電車みたいなスーパーの店内、想像しただけで気分が暗くなる。

そもそもこの地域近辺に、食料品店があつたスーパーくらいしかないことがおかしい。そういうの独占つて言うんじゃないの？

誰かが別の食料品店を建ててくれればなあ……………、と僕は前髪をくしゃくしゃさせて、気持ちを切り替える。

どうせ行くなら早いうちに行こう、と、降ろしておいた講習の荷物を拾い上げ、自分の部屋まで辿り着くと、それらを適当に中に放り込む。買うものを忘れないうちにメモしておくべく、机の中からメモ帳を取り出し、1ページだけちぎって、母さんへ確認を取る為にリビングに急いで向かおう、と廊下を引き返

「うわっ！！」

したところで、誰かに思いつきぶつかってしまった。

意図せずとも、ばーんという効果音が似合いそうな突進に、相手の人影が数歩よろめく。

僕がぶつかつた肩口に片手を当て、煩わしそうな目でこちらを睨んでくるのは……………美奈だ。

「あつ、ごめん美奈、大丈夫？」

「……………」

いくら相手がインド人もびつくりのものすごい体力の持ち主でも、普段からその何倍もの仕打ちを自分が食らっていても、女の子にぶつかってしまった以上、まずは心配して然るべきという感じで美奈に謝った僕。

が、美奈は無言のまま、肩口を押さえて何か思索している。

その無言の思考は、実は激しい痛みに耐えているとかだったら、なんて考えて不安になり、僕は恐る恐る声をかけてみた。

「……あの、ごめんってば。肩外れたりしたんじゃないよね？」

「……外れるか馬鹿」

言うのが早いか、美奈の目がギラツと鋭く光り、拳が握られる。

やばいこれは殴られる！ と仕返しに恐怖に反応して、僕の体は急激に強張ったのだが、肩を砕くような一撃は来なかった。

美奈は、一度握った手を開くと、その手で軽く僕の肩を突っぱねる。

どっつ。

「……んっ？」

衝撃が走り、ちょっと後ろへよろけた。が、いつもに比べれば拍子抜けしてしまうほど情けない攻撃に、僕の口から思わず声が漏れる。

絶対に、何か物足りないとか思った訳じゃないけど、普段ならこんなものじゃ済まないだろう。

そのせいかな、ただひたすらの違和感がある。

僕は半分ぼかんとした、間抜けな表情になっていたかもしれない。少し経って、僕は美奈に問いかけた。

「……えー。美奈、ホントに肩壊れてないよね？」

「……ない」

「じゃあ今のは……？ ……あつ、いや、別にもっと強く殴って欲しいとかそういうこと言ってんじゃなくてね、いつもと違うから心配になっただけなんだけど……！」

「……」

軽く聞いてしまい、もし「じゃあ強くないほうがいいか？」なんて返されたらたまらないと、僕は急いで弁解を付け足す。

が、美奈は、そもそも聞こうとしていないかのように、手を突き出した格好のまま顔を逸らした。

「……」

これは果たして許してもらえたのだろうか、判断しかねる。

というかホントに本当に肩を痛めてないか、ものすごく心配なんですけど。

と、僕は怪訝と不安とが入り交じったような表情で美奈を見つめていたのだが、美奈は唐突にその手を引っ込めた。

そうして、ちらつと僕の方に視線を寄越す。

「……アスパラガスの分だから」

……。

何のこつちや。

えっと、アスパラガスが何なのか、しっかり修飾して言ってくれないと分からないんですけど。

アスパラガスが僕に抱いている恨みが、今のどんっに匹敵するということですか？

アイコンタクトを送った僕。しかし、美奈は気付いたか気付いてないのか、それ以上言うことなく踵を返して玄関まで歩いていくと、靴に足を突っ込んだ。

さつさと、そしていそいそと外出準備を始めた美奈。僕は内心にまだ色々消化不良を抱えつつも、リビングへのドアに近寄りながら美奈に声をかける。

「あれ、美奈どっか出かけるの？」

「違う」

顔はこちらに向けず、靴紐を結びながらの返事だが、とにかく美奈は返事をしてくれた。

ということは、特に不機嫌になったから急に動き始めたという訳じゃなさそうだ。

「違うってことはないだろ、靴履いてるんだから」

「……ちっ」

正論極まりない突っ込みをしたところ、露骨な舌打ちが帰ってきた。

この舌打ちは、あまり詮索するなうざい、という意味かな。わざわざ苛つかせたくはないので、これ以上は黙っていることにしよう。ややあつて、僕はさっさと買い物リストを作ってしまったおと、リビングのドアノブを回す。

と、そこで、玄関口から言葉が飛んできた。

「……買い物」

「はい？」

ドアノブを掴んだまま僕が振り返ってみると、外出用の薄いパーカーを羽織り、靴紐もしっかり締め終えて外出準備万端の美奈が、僕の真似みたいに玄関のドアノブに手をかけて立っていた。

意図的に僕と目を合わせないようにして（いるように僕は感じた）、美奈は、ぼそぼそと言葉を紡ぐ。

「買い物行くんですよ」

「えっ、ひょっとして美奈も一緒に行ってくれるの？」

「……」

僕が心底驚いた感じで言ったのがそんなに腹立たしいのか、美奈は口を真一文字に結んで僕を睨みつけながらも、こくり、と素直に頷いた。

最近美奈は僕に対しても親切というか優しいが、今回はまた一段と凄いや。

今まで、美奈の方から買い物に付き合ってくれるなんて申し出を受けたことは……片手で数えられるレベルだしね。

「うわー、珍しい。あつ、さてはあれだな？ さっきの僕と母さんの会話を聞いて、アスパラガス入れないっていう取引の部分も聞いて、柄にもなく恩返しモード入ってるんじゃないの？」

「しるさい」

「図星か、図星だよな。そうやって目を逸らすのは、自ら認めていくようなもん」

「……」

ばじっ。

調子に乗った僕の顔面に、靴が一足、仲良くペアで飛んできてぶち当たった。

「^{いた}痛ッ!？」

「……悠揮はあと3年くらい黙ってて」

顔を押しさえ、懊悩している人みたいに痛みで溜息が出そうにな

っている僕を尻目に、さっきの意図的に目を逸らしている（ように僕には見えた）態度はどこへやら、見下ろし目線の美奈は冷たい声色で言い放った。

よく見れば、飛んできたのは僕の靴である。あんな咄嗟のことなのに、投げるものも選ぶとか、美奈は本当細部まで遠慮深いというか、人見知りの性格してるよ。

やれやれ、と僕は玄関の土足エリアに飛んできた靴を投げ返す。そうして、今度こそリビングのドアノブを回してドアを開けようとした僕の背中に、またしても玄関口から言葉が飛んでくる。

「……それとあと、本屋寄りしたい」

「……」

……あーあー、本屋ね、なるほどね。本屋ついてこいってそういう魂胆だったんですかそうですね。

ほんの少し前の、美奈が親切で珍しいなとか思っていた自分の目を覚ましに過去へ戻りたい。

やっぱり美奈は美奈か。何だろっこの残念な気分は。

「……何で溜息ついてるの」

「ちょっと美奈のせいで残念な気持ちになっちゃったからね。これだからアスパラ嫌いの人間はさあ」

「意味分かんないんだけど」

言いつつ、美奈はきよろきよろと周囲を見渡した。何か探しているのかと思えば、さつき僕が投げ戻した僕の靴を再び拾い上げて、まるで威嚇か脅迫か何かのようにぶらぶらと揺らす。

「……意味分かんないんだけど」

「2回も言わなくていいって。ていうか、何でちょっとイライラしたの？ 僕はただ、純粹な親切心だと思ったらそうじゃなかったということに失望して、アスパラ嫌いの人間は……って言ったただけだよ」

「……、意味が分からないんだけど、何か悠揮の言い方ムカつく」

それは他人様の靴を他人様の顔面目がけて投げる理由としては如何なものかっ！？ と叫びながら僕は瞬時に顔面はガードした。

そんな僕の防衛反応を、奇行でも見るかのような目で見る美奈は、平淡な声で続けて言う。

「……何か、アスパラ嫌いを馬鹿にされてるみたい」

「いやそりゃ、馬鹿にしてるもん。僕は好き嫌い無いし、アスパラ嫌いとか言っただけで落ち込むとか、滑稽の極み」

口が滑ったことに気付き、ぺらぺらと言葉を並べていた口を閉じたとしても、やっぱりもう遅い。

僕の靴を投げ捨て、せつかく履いた靴を脱ぎ捨て、茶髪のアスパラガス大嫌いな少女が僕の口を封じに襲いかかってきた。

6 - 4 実は面白かった

……よく考えたら、本屋には食料品持ったまま入れないんだっけ。

そのことに気付いたのは、スーパーで買い物を終え（幸いにも時間的に混んではいなかった）、ビニール袋を一人2つずつぶら下げ、美奈の目的地である本屋を目指していたときだった。

僕は片手のビニール袋に入っている、野菜類を初めとした食品達を見下ろす。

何故合計ビニール袋4つ分も大量に買い物をする羽目になったのかというと、あの天然母親が、丁度いいからって買う物リストに色々追加してきたからなのだ。迂闊に「何か他に買うものある？」と聞いた僕も悪かったんだけど、これだけは言いたい。子供に労働させんな。

そりゃ僕や美奈はまだ体が丈夫だから、耐えられないということはないよ。でもさ、米10kgを二つ買わせるのはおかしいと思うんだ。6人家族というのは比較的大きな家族かもしれないが、それでもそんなに米を買い溜めしておく必要はないはずだ。

変なプライドというか、ささやかな騎士道精神というか、その10kgの米は両方とも僕が持つてはいる。ただ、美奈が持つていている分のビニール袋だって充分重い。悠介や悠奈ならひとつ持つだけで精一杯なレベルだ。

「遠慮無く使っちゃってさあ……。これで帰ったときに母さんまた居眠りとかしてたら、米ぶちまけるよ」

不満げにぶつぶつ呟く僕。

美奈は、そんな僕のぶつぶつがうるさいのか、肩越しに振り返ると凍てつく視線で睨んでくる。

「悠揮うるさい。自分の親の悪口言ってんな」

「悪口なんか言ってないよ。僕は悪口は美奈のしか言わないから、安心して」

げしつ。

前方で、美奈の着るパーカーの裾が閃いたのを目の端に捉えた瞬間、美奈の器用な後ろ蹴りが迫ってきた。

まさか買ひ物袋でガードするわけにもいかず、結果的にモロに直撃し、僕は痛みで脂汗を浮かべながら歩く羽目になる。

ふんつ、とばかりにスタスタ歩いていく美奈。しかも買ひ物袋を腰の辺りまで持ち上げ、足がぶつからないように配慮した格好で。……そのテクニクとスタミナには、敬意を表するばかりである。

……と。

前に行く美奈の足が止まった。そこは、コンビニのように全国チェーン展開している某本屋の前。

自動ではなく、押して開閉する方式のドアの前で、美奈はちらりとこちらを振り向いた。

目的地に到着したようだ。

「……」

「……、何固まってるの？ 早く買ってきてよ」

重たいビニール袋をさつさと地面に置き、ぐるぐると肩を回しながら僕は催促する。

一方美奈は、腰ほどまで上げていたビニール袋はそのまま、人差し指で地面を指さした。

「置いていい？」

「いいよもちろん、何でそんなこと聞くの？ そんなのいちいち確認取らなくていいよ。……そもそもさ、何買ったつもりで来たの」

「……悠揮には関係ない」

質問には答えず、ふいつと横を向いて邪険に言い放つ美奈。あんまり邪険な物言いなので、僕は少しからかってやるつもりで、美奈にびしっと指を突きつける。

「そっか人に言えないもの買ったつもりなのかー、今度みんなに教えてー」

言い終える前に、ぐおんという風切り音がして、ビニール袋を提げたままの右フックが飛んできた。拳そのものより、追加で食らう袋アタックの方が痛そうな攻撃だ。

おそらく殴りか蹴りかどちらかが来るだろうと見切っていた僕は、後ろに飛び下がってその攻撃を紙一重で回避。

さらなる追撃をすべく、僕は口調に思い切り馬鹿にした感に乗せて言葉を返す。

「何でそんな反応すんのつかない。凶星ですか？」

「うるせえ」

ちよつ、年頃の女の子がそんな粗雑な言葉遣いになるもんじゃありません！

言うまでもなく自分でまずいと気付いたのだろう、美奈は一瞬フリーズすると、小さな声で「…………うるさい」と言い直した。

この人は時々男子顔負けの男口調になるときがあるからなあ。黙っていればかなり可愛いものを、こんな路上でうるせえとか言うから、たつた今本屋から出てきた小学生が驚いた目でこっち見てるよ？

「…………。買ってくる」

美奈は、若干居心地悪そうに顔を赤くして、ぼそぼそと言うと、両手にぶら下げていた買い物袋を丁寧に地面に置いてから本屋へ入っていった。

「…………。買ってらっしゃい」

見送る僕。

で、結局美奈は華麗にはぐらかしたが、何買いに来たんだろうね。まさか本当に人に言えないような特殊なモノを買いに来たなんてこ

とは、美奈に限って無いと思うけど。

数分後。

本屋入り口のドアが開閉する音が聞こえた。

僕はちょうど、入り口に背を向ける形で壁に寄っかかって待っていた為、出てきたのが誰かは分からなかった。まあ、美奈が出てきたら、声を掛けるなり蹴るなり、何らかのアクションで知らせてくれるだろうし。流石に美奈といえども何も言わずに帰っちゃったりはしないだろう。

そういう次第で、僕はビニール袋を見張ることに専念していた。

見張るといっても別に盗まれないようにとかじゃなくて、勝手に倒れて中の食品が潰れないように気を付けてるだけなんだけどね。

そして、その時、後ろからとんとんと肩を叩かれた。

さっきの音は美奈が出てきた音だったのか、結構早く済んだな、と思いながら僕は振り向く。

「早かったじゃ」

「わっ！！！！」

「っ！！？」

そして唐突な大声に腰を抜かす。

驚きのあまり地面に尻餅をつき、何一つ状況を理解していない僕振り向いた途端に至近距離で叫ばれたんだから、びっくりして腰を抜かしてしまうのは至極当然の反応だと分かってもらえと思う。

そんな僕の前で、相手の人影は爆笑していた。

「あつはつはつは！ いやー悪い、そんな驚かせるとは思ってなかった！」

「……………誰かと思えば……………」

地面に座り込んだまま、恨めしげに斜め上に見上げる僕。

見上げた先で笑っていた相手は、フード付きの上着と足首よりちよつと上くらいの長さのズボン姿で、浅くキャップを被っている。この特徴的なキャップは、うちのクラスの学級委員の新井君であった。

……………いやー、僕もまさかあなたに後ろから驚かされる日が来るとは思ってた。こんなお茶目な悪戯をする人だったとは知らなかったよ。

つくづく、学級委員としてクラスの為に働いているときと、それ以外のOFF時の状態の差が大きい。

何とかかんとか、抜けた腰を元通りにして立ち上がった僕の前で、新井君は尚も笑っている。

「良いリアクションをありがとう稲橋。凄い面白かつ

」

ずがつ。

どういたしまして、と皮肉感溢れる返答を贈ろうとしていた僕だが、新井君の頭に何やら重そうな本が落ちてきたのを見て口が止まった。

「……」

無言で新井君の頭に分厚い辞書を叩きつけたのは、同じくうちのクラスの学級委員である、芽寺さんだった。彼女は、ワンピースのような夏らしい白い服装という、一見人畜無害で大人しそうな姿なのだが、そんな格好しておいてやるのが激しい。

ホントに、随分と迷いのない一撃ですこと。美奈に引けを取らないよ。

僕は芽寺さんのこと、割と気弱な子だと思ってたんだけど。

あつ、今はそれどころじゃない。頭を押さえてしゃがんでしまった新井君の頭蓋骨が陥没していないかどうか確かめないと。

僕は攻撃を食らうことに関してのプロとして、新井君の状態を心配したのだが、手助けする前に新井君は一気に立ち上がった。

「…… 行ってえな!! いくら何でもそんな分厚い本で叩かなくてもいいでしょうよ!」

「」

早くもたんこぶが出来つつある頭を押さえる新井君に詰め寄られ

ながらも、芽寺さんは眉ひとつ動かさず、ぱくぱくと口を開閉した。どうやら、何か言い返したらしい。声が小さすぎて僕には全く聞こえない。

「確かにでかい声出したけど、別にお前にやったわけじゃないんだからいいだろ!? だいたい、合唱中に隣の人にも口パクと間違われるくらい声の出ないお前に、声の大きさについて何か言われたくな痛ッ!」

もう一発、分厚い辞書の攻撃を受けてあえなく沈黙する新井君。

まあ、割と元気そうなので大丈夫だろう。彼も僕と同じく、普段からはこぼこ芽寺さんにシバかれているのかもしれない。

……何だろうねこの実力行使でも男女が逆転した世界は。

「……あー、まあ、悪かったよ稲橋。ほんの出来心だったんだ」

打たれた頭をさすり、さらに芽寺さんの持つ辞書を引き剥がすように取り上げながら、新井君は僕に謝ってきた。

「気にしないでいいよ、慣れてるから。……それよりも、そっちこそ頭大丈夫なの?」

「一応、俺も慣れてるから。こいつまともに人と喋れないから、俺にばかり当たるんだよ。全くもってうざいやな痛ッ! ……こんな感じでな。もう学級委員なんかマジで辞めたいよ、そしたらこんなとコンビ組まなくなっついていいんだか痛ッ!」

無表情の芽寺さんに背中をばしんばしんと叩かれつつも、新井君はノーダメージを装って会話を続ける。新井君が若干芽寺さんのこ

とおちよくってる辺り、僕と美奈の関係を客観的に見てみたいだ。

ただ、あからさまにうざいとかこんなのか、僕はもし美奈が少しでも傷付いて凹んでしまったらと考えると、「冗談でも面と向かつてはなかなか言えない。その点は違うね。」

ようやく芽寺さんから解放された新井君は、ずれたキャップを被り直しながら、ふと聞いてくる。

「そういえば今更だけど、稲橋はこんなところで食材入りビニール袋をいっぱい集めて何やってんだ？」

「人待ち。美奈と一緒にお使いさせられて来たんだけど、美奈が本屋に用があるって言うから。中で見なかった？」

「いや？ 芽寺は見たか？」

新井君が話を振ると、芽寺さんは、さっきまでの勢いが嘘のように小さく頷いた。そして、僕ではなく新井君に向けてまた口を開閉する。何言ってるか僕にはやっぱり分からないので、新井君が通訳してくれた。

「芽寺によると、ベストセラーとかロングセラーとか人気本が集まっているコーナーで、何か立ち読みしてたってさ。割と真剣に」

「立ち読み？」

美奈ってば、何してんだよ。さっさと目的の本買ってきてくれなかな。野菜が暑さで傷んじゃうでしょうが。

「はあ……と僕がビニール袋に入った野菜類を見て溜息をつくど、新井君は察しよく、こんな申し出をしてくれた。」

「稲橋、俺がこれ見張ってやるから、古館急かしてきたらどうだ？ ひよつとしたら夢中になって時間忘れてるかもしれないぞ」

「それはあるかもしれない。」

美奈はそんなに読書が好き人間ではないが、小さい頃に一緒に図書館に行ったとき、オオカミとヤギか何かが登場する絵本を熱中して読んでいて、閉館の時間まで粘ってたこともあったし。

「せっかく言ってくれたので、僕はそのご厚意に甘えることにして、本屋の入り口ドアの取っ手を掴む。」

「じゃあ、ちょっとお願いする。すぐ戻ってくるから」

「はいよー。……あ、芽寺お前は先に学校行っていいよ。つーか後はお前が宜しく」

「」

「はあ？ いいだろ辞典くらい自分で持ってけよ。そもそもお前が図書委員に頼まれたんだろ？ 俺はわざわざ必要ないのについてきたんだろ？ 何で俺も仲良く一緒に学校まで辞典届けに行かなきゃいけないんだよ。また制服に着替えるのも面倒だしさあ。そんなに一人が寂しいのか痛っ！！」

……。

……この二人に買い物袋を預けて大丈夫だろうか。ちょっと心配だ。

本棚と本棚の間をきよろきよろしながら移動していると、本が山積みになっている一角に、問題の人を発見した。

「……いた」

確かに、芽寺さんの言う通り、夢中になって立ち読みしている。本屋で、いかにも本なんか読まなそうな姿形した人間が本を熟読している光景は結構新鮮だ。

何を読んでいるのだろうか、そつと音を立てずに背後から忍び寄ってみると、平積みされている本のタイトルが目に入った。

一番大きい文字には、『ファンタジーワールドストーリー 空想世界の物語』とある。

「……」

つい一瞬、吹き出しそうになって慌てて堪えた。

何を読んでいるのかと思えば、よりによってファーストだった。映画見たときは別に何ともないとか豪語していたくせに、やっぱりハマったんじゃないか。何この夢中っぷり。

真剣に本文を目で追っている姿を観察していると、写真に残して

やろつかと思つくらい、無性に笑えてくる。

面白いのもう少し眺めていたかったが、外に残してきた買い物袋のこともあるし、僕は思い切つて、全く背後に気付いていない様子の子の美奈の肩に手を掛けた。

「何してん」

「ッ!?!」

声を掛けた途端、ビクッ!! と美奈の全身が、こっちがびつくりするくらい反応した。はずみで、手に持っていたファーストの文庫本が平積み山に落ちる。熱いものに触ってしまった猫みたく総毛立っちゃつて、間違いなく数cm飛び上がったね今。

そんなに驚かれると、こっちも続く言葉が見つからないよ……と僕が手を引っ込めた時、美奈はようやくオイルの切れたロボットのようなきこちない動きで振り向いた。

そして。

ばつきい!! (美奈の拳が僕をぶつ飛ばす音)

「痛い　　たあ!?!　何だよいきなり!　そんな力込めて殴んなくたって　　うわー……痛いって……。ちよつと今回の洒落にならないくらい痛い……」

骨の髄までダメージが響いてくる、正真正銘の会心の一撃。

今の一撃は凄かった。どれくらい凄いかっていうと、ゲーセンのパンチングマシンなら間違いないく打撃的まの部分破壊するくらい凄
い。

徐々に屈み込んで痛みを堪える体勢に移行しつつ、それでも僕は
何とか上を見上げた。

自分が涙目になってる自信あるよ。だって痛いもん。

美奈はというと、拳を握り締めて振り放った体勢で固まり、何と
も言えない表情で僕を見下ろしている。

その口が動く。

「……、ふざけるな……」

こっちの台詞です……。

6 - 5 直情は失敗の元

ずんずん。

僕は両手の重たい買い物袋も気にせず、ちよつとばかり早足で帰り道を歩いていく。

「おーい、もう少しペース下げてくださいなとこつちがついていけな
いよ」

数m後ろから声が聞こえ、僕は立ち止まる。振り返ると、新井君と芽寺さんがそれぞれ1つずつ重い買い物袋を持ち、よつこらよつこら、やつとの事で僕のすぐ後ろに着いたところだった。

「ごめんごめん、せつかく持ってくれてるのに、ずんずん行っちゃ
った」

僕は謝り、二人の休憩を促す。

一旦ビニール袋を慎重に地面に降ろし、ふー……と息を吐いて手
の甲で額を拭う動作をする新井君。

「意外と稲橋って力あるんだな。こんな重いもん2つも、軽々と持
てるなんて……」

「うーん、今ちよつと細胞が張り切ってるだけだから」

然様うしろなですか、と新井君は再び重い買い物袋を持ち上げた。

何故、美奈の代わりに新井君と芽寺さんが買い物袋を運んでくれているのかというと、あの後本屋で美奈が、まだ時間かかりそうとかふざけたことを言いおったからだ。ファースト読むのに時間かけるとしてよく言うよね。

というわけで先に帰ってしまおうと思った僕は、一人でも何とか4つ全部運んでしまおうと思うくらいにエネルギーが沸いていたのだが、そりゃさすがに重いだろうとのことで新井君達が手伝いを申し出てくれ、僕はまたお言葉に甘えることにしたのである。親切な人達だ。

……ただちよつと気になるんだけど、隣の芽寺さんは降ろさないでも平気なのかな？

僕の視線を解釈したのか、横から新井君が芽寺さんの頭を指さしながら解説してくれた。

「ああ、こいつ小心だから、他人のもの、しかも食べ物や物を地面に置くななんて絶対出来ないんだよ。そうだろ芽寺。だから酷使しちゃっていいよ。むしろ、普段俺のことこき使ってる分を自分も味わってみるべきだ」

「

きつ、と新井君を睨みつける芽寺さん。だが、美奈のに比べればまだ可愛いと言える。

両手が塞がっているせいか、芽寺さんはそれ以上のアクションを起こそうとはしなかった。美奈とは違って蹴りには訴えないらしい。服装も服装だしね。

それでも、新井君がさらに何か言ったら、買い物袋で新井君をぶん殴ったりしそうな雰囲気醸し出していたので、僕は先に釘を刺しておく。

「あの、ビニール袋破れるから、それを振り回すのはやめてね」

僕が言葉を向けた途端、芽寺さんは水でも引っ掛けられたかのように身を竦めた。

この前、海内が廊下に盛大に水をぶちまけたとき、坂原に声をかけられたときは普通な様子だったのに僕だとだめなのか……と内心でちよっぴり凹む。

そんな僕的心情を知ってか知らずか、芽寺さんはこくこくと頭を頷かせる。

「大丈夫だ、心配する必要はない稲橋。芽寺にはこの重い袋を振り回すだけの腕力なんか無いから」

「きつ、と新井君を睨みつけつつ、今度は追加で新井君の足の先も僅かに踏みつける芽寺さん。」

ただし新井君の言う通り、芽寺さんにはこの買い物袋は随分重そうだ。現に今も芽寺さんの細い腕が小刻みに震えている。力仕事に慣れているとは思えない。

芽寺さんの体はたぶん、新井君をシバくときだけ力が上昇する仕組みになってるんだろう。

「あの、芽寺さん、重いんだったら僕持つから無理しなくても」

「
」
今度は、言い終える前に芽寺さんが首をふるふる横に振った。

「重くない？ 手伝ってくれるのは嬉しいけど、そっちが重いんだ
ったら」

ふるふるふる。芽寺さんは首を振る。

でも、重そうだし……と、どうしたものかと迷っていた僕に、新井君が助け船を出してくれた。

「幼稚園の先生みたいなこと言うけど、稲橋、ここは芽寺のやりた
いようにやらせてあげてくれ。芽寺は前世がキャリアケースだった
から、運ぶの好きなんだよ。大丈夫だろ、こいつ自分が出来ないこ
とを出来るとは言わないし。本当に重くなったら俺に持たせるよき
つと」

前半部分のキャリアケースはどっかにやっつくとして、後半部分
は、流石ペアとして行動を共にしてきた人の見解である。

これは僕自身、長年の付き合いがある人がいるから分かる。

「……別にそれ地面に置いても構わないからね」

休憩を終え、歩き始める前に僕がそう言うと、芽寺さんは一際大
きく頷いた。

ま、置いてもいいと言われたところで、芽寺さんはそんなことし
そうにない気がするけど。

新井君は芽寺さんの横を歩きながら、微妙な表情で言う。

「でもさ、こいつ他人の荷物はこうやって率先して持ってやるくせに、なんで自分の仕事は俺に押しつけようとするんだろっな。……するんだろっな」

繰り返しながら芽寺さんのことを横目で見た新井君だが、芽寺さんは前方を直視したままで無視した。

苦笑と共に僕が応答する。

「それは新井君のこと信頼してるからじゃないの？ 信頼してない人に仕事をやらせたりはしないよね」

「信頼かあ？ そんな幸せな感情を芽寺が俺に対して抱いているとは思えないね。使用人か何かだと思ってるんじゃないか痛っ！」

芽寺さんは、両手でやっと持っていた重たい買い物袋から瞬間的に片手を放し、裏拳気味に新井君の腕をひっぱたくと次の瞬間には元通りに買い物袋を掴み直すという荒技を披露した。

……やはり、新井君に攻撃するときだけ力がアップするという僕の予想は間違っていたようだ。

「何だよ、叩くなよな。……ほら、信頼してる相手をべちべち叩く奴なんているか？」

追撃を避ける為、若干芽寺さんから距離を取りつつ、新井君は不満げな顔でそんなことを言う。

「さあ、どうだろうね。美奈はべちべちとかそんな生易しいレベルじゃないなあ。」

「じゃあほら、あれだよ。芽寺さんは新井君のことが大好きだから一瞬一秒でも長く一緒にいたいんじゃない？ やりたいようにやらせてあげたらいいじゃん、幸せ者」

「……お前、何気持ち悪いこと言ってんだ？」

「」

思いつきり冗談半分で言った僕に対し、新井君は眉を潜めてあからさまに嫌そうな顔をした。

そしてその一方、話題の中心となっていた芽寺さんは、急に足を止め……。

……。

「……、芽寺さん？」

動かなくなってしまった。

瞬間冷凍されたかの如く、前を見つめたまま完全にフリーズしている。

不審に思い、僕が声をかけた次の瞬間。

「」

「バツ、と芽寺さんは急に活動を再開し、重たい買い物袋も何のその、相当な速度で歩き始めた。後に取り残されてしまった僕と新井

君は、「何事だ？」と互いに顔を見合わせる。

逃げるようにこの場からどんどん離れていく芽寺さんの背中に、新井君は片手でメガホンを作って呼びかける。

「おい芽寺ー、買い物袋持ったままどこに行こうとしてるんだよー。そっち方向違うぞー、迷子になって猫バスに迎えに来てもらう羽目になるぞー」

猫バスって……と呆れ目になった僕の視線の先で、遠ざかりつつあった芽寺さんはぴたりと歩みを止めた。

そしてくるりとこちらに振り返ると、行きの半分くらいのゆったりした速度で戻ってくる。

「……」

いったい何のつもりなんだろう、と僕は解説を求めて新井君の方を向いたが、新井君は芽寺さんの方を眺めたまま、怪訝な表情をしていた。

「……何か顔赤くないか、芽寺」

「」

言葉が聞こえたのか、芽寺さんはまたもやその場でぴたっと凍ってしまった。

さらに、俯いて自分の視線を足下の地面に落としてしまう。

言われて、僕も芽寺さんの方を観察してみると、確かに頬が綺麗に染まっていた。

こんな風に芽寺さんの表情を変化させる台詞といたら、さっきのあれしかない。

「……、新井君のことが好きだから、っていう部分……？」

「おい、冗談は声量だけにしとけ……」

僕が呟くのと同時、新井君も頭を抱えてぶつぶつと唸った。

新井君はその場に買い物袋を置くと、少し離れたところで下を向いている芽寺さんの元へ駆け寄り、その肩をゆっさゆっさと揺さぶる。

振動で芽寺さんが何とか持っている買い物袋もずっさずっさと揺れる。

「芽寺、芽寺、おいちゃんどこっち見る。……嘘だろ？ 何でまず顔赤くしてるんだよ、そっぽ向くなって！ ……、……分かった、顔が赤くなってる理由はどうでもいいから、真面目にこっち見る、そんな態度を取られると俺は勘違い 顔を赤くするなっつーの！」

剣玉みたいに顔だけ赤く染まった芽寺さんを、新井君は、舟でも漕げるんじゃないかというほどぐわんぐわんと揺さぶり続ける。

「……いやー。青春っていう枠に当てはまるのかな、これ。」

芽寺さんが何で赤くなっているのか、確めたわけではないにしろ、端から見てる分にはまるでコントである。傍観したがる作利川の気持が少し分かった気がする。

やる時は物凄くやる新井君と、隠れてかかあ天下になりそうな芽寺さん。

僕的にはお似合いの二人だと思っただけだな。

そろそろ芽寺さんの脳が混ざっちゃうよ、と、僕は面白がる気持ちを抑えられないながらも、新井君をセーブしに行こうとした。

するとその時、ポケット内の携帯電話が通話の着信メロディを鳴らす。

画面に表示された電話番号は、全く知らないものだったが、とりあえず僕は両手に持っていた買い物袋を地面に降ろし、通話ボタンを押して電話に出た。

「はい、もしもし」

『……悠揮』

聞こえてきたのは美奈の声。

わざわざ電話してくるなんて、何の用だろう。ていうか、かけてきた元が公衆電話じゃないってことはどこの電話使ってるんだろう。

僕は少し先の新井君と芽寺さんのコントを眺めながら、耳と口だけは電話に集中させる。

「何だ美奈かぁ、何か用？　今ちょっと面白いことになってるんだけど」

『……どうでもいいから、今すぐ本屋に戻ってきて』

「えっ、何で？　まだ家に着いてないんだけど」

『……………万引き』

面白がっている余韻を引きずった、軽いノリで通話をしていた僕だが、聞こえた美奈の声と、その声が告げた不穏な単語に少しテンションが下がった。……………というか、一気に冷めた。

「万引きが何だった？」

声を潜める。

つい、言葉が言葉なので、コントを眺めていた目も電話の方を見ってしまった。

返ってきた言葉は……………。

『捕まった』

「……………」

携帯電話の温度が一気に急降下して、ひどく冷たいものになった気がした。

新井君が芽寺さんに何か言っている声が、どんどん遠ざかっていく錯覚がする。

『助けて』

新井君じゃないけど、冗談は直接会って話しているときだけにし

ろ、と思う自分がいた。

美奈は、神に誓って、万引きなんかするような人間じゃない。それは僕が一番よく知っている。美奈は容姿からは想像出来ないくらい真面目な人間なのだ。

けれど電話越しの美奈の声は、非常に困っているように僕には聞こえた。

一瞬、色々な言葉が一度に口に集まり、言葉に詰まる。それでも僕は一言だけ、囁くように返した。

「……………すぐ行く！」

……………電話を切り、その携帯電話をポケットに突っ込む瞬間には、僕はもう体の向きを変えていた。

「新井君、芽寺さん、本当に悪いけど、ちょっと本屋まで行ってくる！」

二人がぐわんぐわんを止めてこちらを見たかどうか、僕の言葉が聞こえたかどうかの確認をする暇もないまま、僕は全速力で本屋から歩いて来た道を引き返した。

ばんっー！！

本屋の出入り口のドアを勢いよく引き開ける。風圧がかかるほどの勢いだった。

押し開ける式のドアなら、間違いなくドア両脇の壁にぶついていただろう。周りを気にする余裕がいつの間にか僕から消えていた。

いきなり飛び込んできた僕に、他のお客さん達の注目が集まる。しかし僕は気にせず、逆に店内を見回す。

そして見つけた。

見覚えのある茶髪頭の少女が、カウンター近くのスペースで、眼鏡を掛けたいかにも本屋さんらしい女性の店員に何かを言われていた。

「美奈！」

僕の叫んだ声に、カウンター近くにいた二人もこちらに注目しようとした。だが僕は叫ぶと同時に走り出しており、美奈がこちらを振り返る前に、僕は二人の元へ辿り着いた。

そして僕は、美奈の両肩を支えるように掴み、身を乗り出す。

「あ、えつとあの、お客様……」

「すみません先に僕の話聞いてください！」

突然現れた僕に、相手の店員さんは混乱極まりない表情で何かを言おうとしたのだが、僕は息切れを抑えてそれを遮った。

店員さんも美奈も驚いた顔をしていたが、今はそんなこと気にしている場合ではない。

必死だったよ。自分でもびっくりして分別がつかなくなるくらい。

「美奈は確かにこんな見た目してますけど、昔っから中身は堅いんです！ 美奈は絶対万引きなんかする人間じゃない！」

「お、お客様……」

「懸けたっていいです！ 僕は命だって懸けられます！ ずっと一緒に過ごしてきたので分かるんです！」

「お客さん」

「だからきつと、っていうか絶対、何かの間違いで」

どがっ！

言葉半ばにして、凄まじい衝撃が僕の後頭部を襲った。

弾みで前につんのめり、美奈の肩を掴んでいた手が外れる。しかも衝撃で舌嚙んで痛い。

意識しなければ殴ってきた犯人をそのままぶっ飛ばしてしまいうな勢いで振り返ると、そこでは、美奈が、凍り付いた目で僕を見ていた。

何故美奈が殴る……？ と信じられないものを前にした態度の僕。一方美奈は、腕を組んで不遜な態度になって一言。

「……あんまりくつつくな。あと、うるさい」

「うるさいって」

自分の置かれている状況が分かってんのか！？ と思わず噛みつくこととした僕だったが、背後から聞こえた柔らかい声に、何とか引き留まった。

「もしもし、お客様？ 何か勘違いをなさっていませんか？」

へっ？ と気を削がれて店員さんの方を見ると、店員さんはいかにこと随分まあ人の良さそうな笑みを浮かべて、簡単に言う。

「私共は、そちらの方を万引き犯だと疑っているわけではありませんよ？」

「……………、は？」

「そちらの方を万引き犯だと疑っているわけではない、と申し上げ

ました。そちらの方は、万引き犯を捕まえるのにご協力くださった方です」

……。

……。

……。

「……………、はい？」

その瞬間、確かに思考が停止した。

言っていることの意味は分かるものの、それが自分の脳味噌まで届き、消化して現実的に理解されるまでにタイムラグが生じるほどである。相当、アホな顔をしていたと思うよ。

なに、美奈が万引きをしたんじゃないやなくて。

美奈が万引き犯を捕まえた？

「……………大馬鹿」

後ろからの、美奈の冷たい声。

おまけに、周囲の人々のくすくすと忍び笑う声も聞こえた。

……。

勘違いだった、と、いうことが。

……………ああ、どうしようどうしよう。穴があったらそこに入って座り込んでしばらく引き籠もりたい。

「……。あの……勘違いしたみたいで本っ当にごめんなさい……」

精一杯の小さな声で店員さんに謝罪した。

顔が炎上している僕の心中を察してか、店員さんは至極優しい言葉をかけてくれたが。

「えっと……お客様？ その……美しい友情でしたよ？」

余計死にたくなっただけだね。

つまり、美奈が万引きをして捕まったのではなく、美奈が万引きした人を捕まえたということなのか。それを僕は早とちりして美奈が万引きをして捕まったんだと思い込んだのか。

考えてみれば、万引き犯を問い詰めるとき、普通カウンターの横なんかで堂々とやったりしないだろう。ドラマなどで再現されるとき、大抵休憩室などの周りから見られない場所でやってるし。そんな簡単なことにどうして気付かなかったのか……もう自分の短絡さが恥ずかしい。

この恥ずかしさを何とか紛らわすべく、僕は美奈に訴えた。

「だってさあ、美奈、電話越しに『捕まった』って言ったじゃん！ あれ何なの？ 捕まったって言ったから、捕まったんだ思ったのー！」

我ながらまだ頭が混乱しているのか、言葉が上手くまとまっていない。

対して美奈は、とてつもなく冷めた口調で淡々と返事をする。

「捕まったとは言っていない。『捕まえた』って言った。悠揮が聞き間違えたんじゃないの」

……そんな……。勝手に聞き間違えて勝手に思い込んだなんて恥ずかしくすぎるよ。今も充分恥ずかしいけど。

「それに……それなら、美奈が言った『助けて』ってどういう意味？ あんな風に言われたから、相当ピンチなんだと思って必死で走ってきちゃったんだけど！」

今度は、美奈も何か詰まったようにたじろぐと、言わずとも言葉の雰囲気を感じ取ったか、微妙に赤くなった。

「……それは、店員さんが、さっきからお礼がしたいって言うから……」

美奈に合わせて僕も店員さんの方を見ると、店員さんはそれはまあにこにここと機嫌の良さそうな笑みを浮かべながら肯定した。

「ええ、そうです。私共、万引きをする学生は多々見てきましたが、大人の万引き相手に立ち向かう中学生は初めて見ましたから、店長が喜んじやって。もちろん、私も嬉しいですよ？ ですから、何かこう本屋としての感謝の印をお贈りしたいと思ってですね」

「ほら……」

心底参ってしまった感じの口調で、美奈は、喜色満面の店員さんを指し示す。

それにしても、僕が引つかかったのは、大人相手に立ち向かうという部分。美奈が捕まえたのは大人の万引き犯なんだね。もう敬服だよ。凄まじいよ。

きつと今、その店長とやらと問題の万引き犯が、店員室みたいなところで取り調べをやってるんだろっな。

「強く断り切れなくて……」

なるほど、今の美奈の口調はさっき電話越しに聞いた「助けて」の声色とよく似ている。

でもだつて、もう少し言いようがあるでしょう。単語ぶつ切りで助けてなんて言われたら、嫌でも最悪の方向を想像しちゃうのって、僕だけじゃないと思うんだ。

そりゃあ勝手に思い込んで走ってきた僕が確実に悪いんだけど。店員さんに絡まれて抜け出せないから助けて欲しいなら、略さず全部言つて欲しかったよ。後の祭りだけどさ。

それといい加減その人達忍び笑うのやめてくれませんかね。

「はぁ……なんだ……」

事情を理解し、恥ずかしさも段々と抜けてくると、入れ違いに安堵の思いが込み上げてきた。

ほっと一安心したというか、長時間の緊張から解放されたような気分になる。

今更だけど、美奈が万引きをしたんじゃないかって良かった。

安心の副作用で膝の力が抜けそうになったが、人前だし、僕は何とか堪える。

そこへ。

「……稲橋……。お前マジ何なんだよ……」

本屋の入り口辺りから、怨念めいた低い声が聞こえた。

見れば、出入り扉を半分開けてそこに寄りかかるような形で、疲れ果てた顔の新井君がこちらに念を送ってきていた。

両手に重たい買い物袋を持って。

「あっ！」

「あっじゃないだろ。自分の仕事を人に任せるなっていうのに。何で俺は同じことを芽寺だけじゃなく稲橋にも言わなきゃならないんだ」

「じゅめん！」

両手で謝罪の意を表しつつ、僕は出入り口のところへ駆け寄る。

そのすぐ脇に、芽寺さんもいた。

……何があつたか知らないが、芽寺さんは何だか幸せそうな顔で、何と買い物袋を一人で2つ軽々と持っている。力のリミッターを外す出来事でもあつたのかな？

扉に寄りかかったままの新井君は、とてつもなく気怠そうに美奈の方を流し目で見る。

「で、稲橋は古館関連であんな必死になって本屋まで戻ってきたのか？ お前芽寺のことどうこう言えないだろ」

「え？ どういう意味？」

「何でも」

適当に流した新井君は、顎で美奈の方を軽く示し、それから背中に力を入れて寄りかかっていた扉から離れた。

「ほら、古館が困った顔でこっち見てるぞ、行ってやれよ。それで用が終わるまでここで待っててやるよ。今なら芽寺がパワーアップしてるから、何なら家まで付き合っっちゃってもいいけど」

「……それはどうも」

とことん親切な人達だ。

7月28日 晴れ

今日から新しい日記。

今日は夏期講習に行った後、本屋に寄って、この日記とファーストの文庫本買った。

ファーストを買ったことは、悠揮には絶対知られたくない。

本屋で万引きを見つけたとき、つい手が動いちゃった。

店主さんに感謝されて捕まったのはかなり困ったから、悠揮が来てくれたのは助かった。けど、あの早とちりはわけ分かんない。こっちまで恥ずかしい。悠揮は本当に空気読んで行動して欲しい。

でも、悠揮が命だって懸けられるって言うてくれたのは嬉しかった。

アスパラガスのこと、今日の本屋のこと、悠揮が私のことを気にかけてくれるのは前々から感じてたけど、どうしてなのか少し気になる。

私が悠揮の為に何かしてあげられたことなんて、今まで全然ないのに。

ずっと気付かないうちに悠揮に助けてもらっていたんだと思う。

中2の初め頃から、もやもや思っていたことなんだけど、もつと早くに気付ければ良かった。

いつか楓奈に相談したとき、自分らしくないことをすればいいって言ってたそれって、無愛想とか、悠揮にからかわれるとすぐ殴っちゃう癖とか、そういうことを直せっていう意味だとしたら、悠揮は最近少し優しくなったって言うってくれるけど、私はちゃんと変わってこれてるのかな……。そうだったらいいけど。

せつかく悠揮が夕飯のアスパラガス抜くよう頼んでくれたのに、悠揮のお母さんそれ忘れたみたいで、なんかアスパラ出てきた。

悠揮と悠介君と悠奈ちゃんの3人が食べてくれた。

『日記』 #6 (後書き)

> i 2 4 9 7 9 | 8 7 3 <

今回、話数は少ないですが文字数はそんな負けてないはずなんです。

7-1 浴衣着なさい(前書き)

今年の年末もテレビは騒がしいですね。

実はまだ、全部書き終えてもいないのですが、無謀ながらもつ公開します。

間に合わなかったら……その時はごめんなさい。

現実では冬至も過ぎましたが、こいつらは夏祭りとか楽しんでいる回です。

蚊取り線香でもつけて、疲れないようにして読んでくださいね。

7-1 浴衣着なさい

『へー、それは面白……じゃない、大変なことになったんだねえ』
今面白いって言おうとしただろ。

電話口から聞こえる享樂的な誰かさんの声に、僕はちょっと目を細めた。

僕は今、右手のシャーペンを使って夏期講習の宿題の問題を解きながら、左手で支える携帯電話で会話をするという、忙しいことをしている。夏休みも半分過ぎたこの頃、鬱々としながら問題を眺めていたところに電話がかかってきたものだからこんなスタイルになっってしまった。

シャーペンを走らせる右手は止めず、僕は携帯電話に言葉を返す。

「その後も酷いんだよ、美奈はその日一日ずっと機嫌悪くて黙りこくっててさ。唯一、夕飯にアスパラ出たときだけちよつと会話したけど、それ以外の時は何言っても無視されたし」

『……へえ』

ちなみに、何の話をしているのかというと、この間の万引き騒動の話。

相手は皆さんご存じ作利川で、電話がかかってきた用件はメールの返信が全然返ってこないんだけど、というものだったのだが、作利川が切り出した『そういえばこの前新井君から聞いたんだけど、本屋に怒鳴り込んだって本当?』という事実は事実なんだけどもっ

と違う言い方をして欲しい一言によって話題が変わったのだ。

新井君のお陰で、電話越しでもはっきりと分かるニヤニヤ笑いを作利川から贈られることになってしまった。

『じゃあ、稲橋君はお使いの買い物袋も忘れちゃうくらい一生懸命になって本屋に戻ったのに、美奈は怒って稲橋君と口を利かなかつたわけ？』

ニヤニヤしながら言うなって。口調で分かる。

僕は頭の半分で、Xが何でYが何でという計算をしながら、もう半分で作利川との会話を続ける。

「そうだよ。……まあ、大勢の前で一緒に恥かかされたんだから、怒るのは当然だと思うんだけど、何も無視することははないと思うんだよね」

『鈍感頭』

いきなり罵られた。

思わず僕は携帯電話を横目で睨む。

「……誰が鈍感頭だった？」

『稲橋君だよ。頭よく揉んでマッサージしながら考えてごらんよ。普通そんな自分の為に必死になってくれた相手を、怒って無視したりすると思っ？』

「……えつとこれはXが3で……いや美奈の場合それもあるけど、人見知りな性格してるから、他人がいつぱいいるところで恥ずかしい思いをさせられたら怒るんじゃないかなと……で、Yは5、と……」

『稲橋君がそう思うんならそうなのかもしれないけど。でも美奈って素直じゃないじゃん？ 気持ちと態度が逆に出てるとか、稲橋君が必死になってくれたことがちょっと嬉しくてそれが恥ずかしくて話せないとか、そういうこともあるんじゃない？』

「うん……えつと、これ分数なのかな……。……あ、ごめん作利川、よく聞いてなかった」

『……』

ちょっと問題に気を取られたら、嫌な沈黙が電話口の向こうから流れてきた。

「こつちも課題を早く終わらせたっていう気持ちがあるから、つい問題に意識が回っちゃうんだよ。悪いけど。だからそんな作利川まで不機嫌にならないでくれませんか。」

『……稲橋君、今もしかして宿題やってるの？』

「うん。最初に言わなかった？ 夏休みの宿題は家族の誰かが手伝ってくれるけど、夏期講習の課題は美奈も手伝ってくれないから、自分でやらないといけないんだよ。しかもこの期限、次の水曜だし」

『自分でやるべきでしょうが、そんなの』

「そんなこと言って、そっちは夏休みの宿題終わってんの？」

『まだ触ってもいませんけど何か』

半オクターブくらい低くなっていた作利川の声が、また元通りに戻ってきた。

それに安心した僕は、またカリカリとシャーペンを動かし始める。今度はうっかり口で呟いてしまわないよう、余白に計算式を書いて済ませることにしよう。

数拍置いて、唐突に別の話題を作利川が切り出してきた。

『あのねえ、稲橋君。最近ちょっとずつ美奈が変わってきたと思うでしょう』

「はい？」

聞き返した拍子に芯が折れた。

カチカチと新たな芯を飛び出させながら、僕は返事をする。

「ああ、それは思う。中学の最初より会話が増えたし、優しくなっ
たし、あと感情表現豊かになった。昔の小学校低学年の頃みたいに」

これは真実、最近になってやたら感じることも多くなった。美奈の性格が、激変……という程でもないけど、少し変わってしまったのが、例の小4の時。それ以前の温和しい美奈が戻って来つつある、そんな気がするんだ。

その原因はさっぱりなんだけどね。
だいぶ前から緩やか〜に変わってきたと思えなくもないし。

電話の向こうの作利川は、そこでふと、カウンセラーのような落ち着いた声になった。

『美奈はあれでも稲橋君のこと、頼りにしてるんだよ、きっと。それで出来るだけ自分のことで迷惑かけたくないともしっかり思ってる、と私は思ってる』

「迷惑ね……。美奈はもう少し人に迷惑かけたっていいと僕は思ってる。前美奈に言ったら違うって怒られたけど、小さくなってるしかないんじゃないか。あんなに殴られたり蹴られたりするのは嫌だけども」

『本当……。稲橋君は美奈想いで感心する。暴力振るわれてまでその相手を心配する人なんて、そうそういないよ』

「あれは単に僕が好きでからかっているだけだから、そう偉い話でもないと思うけど。そもそも、家族に対する心配って無条件なものなんじゃないの?」

ふう、という溜息のようなノイズが電話口から聞こえた。

『その台詞が出るのが証拠だというか。……。でね、美奈は、そんな稲橋君だからこそ、余計迷惑かけたくないって思っているみたいなんだよ。私もスキシッブくらいどうってことないと思うんだけどねー』

いやそのスキシッブっていう表現にはちょっと賛同しかねます

よ作利川さん。

確かに僕も「そのスキンシップおかしいだろ」みたいに言うことはあるけども、基本的に美奈に何かされたらそれはスキンシップじゃなくてバイオレンスですから。一度受けてみれば分かるよ。

で、それがさっきの話とどう繋がってくるわけ？

『だから、美奈は稲橋君に迷惑　　って言っても、この迷惑って本当の意味での迷惑だけ　　をかけないように努力しているってことなんですよ。そんな風に考えてる美奈が、恥ずかしい目に遭ったという理由で怒って、稲橋君のことを丸一日も無視すると思えますか？』

「ごめん作利川、話が難しくって言うことがよく分からない」

『稲橋君次会ったときフライパンでばこんね』

何でやねん。ホントに分からないんだって。

美奈は怒るときは火山みたいになるし、丸一日怒ってたって不自然じゃないと思うんだよ。

なかなか僕が理解しないことに呆れたのか、ちよっぴり投げやりな口調で作利川は言う。

『要するに美奈はただ嬉しかったんだってきつと。それを悟られるのが嫌か、あるいは恥ずかしいから稲橋君と口利けなかったんだと思っよ』

「…………ええー」

『何その疑り深い声』

むっとした作利川の声が返事として聞こえる。

だってそんな可愛い美奈、今のイメージに当てはまらないよ。もし、もし本当にそっちなら僕としても嬉しい、というか安心だけど……どうなんだろう。僕は今揺らいでいる。

作利川、随分自信ありげに言うしき。

ほら、もし作利川が今言った通りのことを美奈に相談されてたんだとしたら、色々辻褄が合うし。

流石に読心術使いの作利川でも、裏付けの無いことを自信持つて言えないと思うし。

それでもやっぱり、僕は昔のじゃない、今の美奈のイメージが拭いきれない。

電話を掴んで固まり、黙りこくっていると、作利川はふっと愉快そうな声に戻って言うてきた。

『でもま、鈍い稲橋君にもそのうち分かるよ、そのうち。美奈は努力家って感じるから、絶対頑張る。稲橋君もちゃんと見てあげてね』

もう何言ってるのか分からん作利川の話である。

しかもこれ作利川のことだから、きつと変な暗喩かかっているんだろっな。美奈のこと見てるってこの前も言われた気がするし。言わ

れなくても割と美奈のこと見てるんだけどな、僕は。そういう「見
てる」じゃないんだろうということろまでは分かるけど、その先は
僕には考えが及ばない。

僕は一番の美奈の理解者だと、今までは自他共に認めていたけれ
ど、この頃の女子の心情は男子には察せないのかもしれない。その
逆だつてあるだろう。

「……課題以上に難しいこと考えて知恵熱出そう……」

『そんな難しいことは誰も言っていないって』

笑いながら言う作利川だけど、僕にとつちや十分難しいよ。

大事なこと真剣に話しているのかと思えば、次には笑つてる作利
川もよく分からないし。

……何なんだろうな。

と僕がシャーペンを適当にくるくる回した、その時。

「おっ兄ちゃん！ 見て見てー！」

どたどたどたつと激しく階段を上がってくる音と、その音と一緒に
悠奈の声が聞こえた。と思つたら、廊下を走る足音は急接近し、
そしてこの部屋のドアが、どばんっ！ と勢いよく開かれた。

前にも言つたけど、僕の部屋のドアは内開きだ。今ので絶対また
壁が傷付いた。

「ねえほら見てー！ 似合ってる？」

部屋に飛び込んで来て、見て見てを連呼する悠奈は、いつもとは違う格好をしていた。

青を基調とした柄入りの衣に、山吹色の帯。夏らしい涼しげな浴^{かた}衣姿である。

久しぶりに浴衣を着られ、大喜びで光っている悠奈を見て僕は苦笑すると、電話越しに作利川に早口で告げる。

「悪い作利川、悠奈が浴衣姿で飛び込んできたから、一旦切るね」

「はい了解。明日は夏祭りだもんねえ。稲橋君も浴衣で来たら？」

「何でだよ」

あははっ、という笑い声を残して電話が切れる。

通話終了の合図を確認してから携帯電話をしまつと、僕は浴衣姿の悠奈に向き合った。

作利川も言っていたが、明日はこの近くで夏祭りが行われる日だ。毎年、いつも8月12日に行われるその夏祭りは、自然公園で行われる。自然公園は僕らが5月に遠足で行った場所ね。

僕なんかは屋台にしか興味が無いけど、盆踊りもやっていたかもしれない。ちゃんとした夏祭りなんてこの日くらいだから、段々と大きなものになっていって、今ではこの近辺でクリスマス並みに有名な夏のイベントになっている。

そんな夏祭りの前日である今日、明日に向けて浴衣を出して合わせてみた……ということだろう。

僕は帯まできっちり締めた悠奈を上から下まで一通り眺めると、軽く頷いて言う。

「似合ってるじゃん」

「ほんと?」

嬉しそうににこにこ笑う悠奈。

そんなに似合っていることが嬉しいのか、それとも浴衣に興奮しているのか、悠奈はその場でくるくる回り始めた。

「ねえお兄ちゃん、いま1階で悠介も浴衣着てるから、行こうよ」

「えー。僕課題しなきゃいけないんだけどなー」

「だーめ、お兄ちゃんは降りてくるの」

浴衣効果で普段より行動的な悠奈に、渋々ながら引っ張られて部屋を出る僕。

悠奈が弾む足取りで階段を降りていくのを見ると、どれだけ浴衣が嬉しいかっていうのが分かる。微笑ましいね。

悠奈に引かれるがまま1階に降り、リビングのドアを開けると…
…真ん前に浴衣姿の悠介がいた。

ちょうど帯を締め終えたところなのか、帯に両手を回していた悠介は、こちらに気付くや開口一番。

「げっ……兄ちゃんにも見られた」

「げって何だよお前。どうせ祭りの日に見られるんだからいいだろ」

悠介の浴衣は、モノクロみみたいな印象である。白黒灰の衣に黒っぽい帯で、全体的にシンプル。いかにも男の子っぽい。

「いいじゃんお前も似合ってるよ。かつこいい」

僕が褒めると、悠介は中途半端な顔になって、えー……とか唸りながら浴衣をいじった。

その後、帯を何度か調整すると、悠介はようやくこちらを向く。

「おれ浴衣恥ずかしいんだよね。あと残ってるお父さんには見せたくない」

「見せればいいだろ、かつこいいって言うてくれるよ」

「それが恥ずかしいんだってば！」

勢いよく言う悠介。あ、さっきの中途半端な顔の由来はそれが。

再び帯をいじり始めた悠介から視線を外し、部屋を見渡してみると、二人の着物を合わせてくれたのであろう母さんは、キッチンで夕食の準備に勤しんでいた。

特にやることのなかった僕は傍らの悠奈の頭を撫でてみる。

「小学校のうちは、浴衣を遠慮無く着れるからいいよなあ」

中学校になると、男子が浴衣を着るのにはちょっと抵抗があるか
う。

そう言つと、悠奈は僕の顔を見上げて、ぱちぱちと瞬きをし、僕の服の裾を引つ張つてきた。

「そしたらお兄ちゃん、美奈ちゃんを説得してよ。折角お母さんが着物大きくしてくれたのに、美奈ちゃん恥ずかしがっちゃって、ほらそこ」

ふい、と無造作に悠奈は指を指す。その先に、床の端に座つて雑誌で顔を隠して存在を消そうとしている美奈の姿があつた。

「……」

あれはいったい何をやってるんだろう。この浴衣空間から出来るだけ離れた場所に避難したというか、そんな感じだろうか。そんなに浴衣を着るのが嫌なの？

ともあれ、僕は試しに美奈の元へ近付いてしゃがみ、視線を合わせしてみる。

「もしもし美奈、何読んでるの？」

「……タウンページ」

あつ、ホントだタウンページだったこれ。黄色い表紙がこんなにもアピールしているのに、全然気付かなかつたよ。

どうでもいいけどそんなの読んで面白いのかね。

「美奈、そんなとこでタウンページ読んでないで、浴衣合わせてみなよ」

「……やだ。去年も着なかったし」

「着なよ折角のお祭りなんだからさ。勿体ないじゃん浴衣。何で中学になつてから夏祭りで浴衣着なくなっちゃったの？」

「……うるさい」

美奈の声が雑誌で遮断されてよく聞こえないので、タウンページを取り上げてみると、その後ろに美奈の不機嫌顔が現れた。

見つめてたらそのうちレーザービームでも発射されそうな鋭い睨みだ。

「何でそんな顔するんだよ。どうせ年に一度だけなんだから浴衣着なよ、僕が強くお勧めする」

ちっ、という美奈の舌打ちが聞こえたが、僕がそれを無視すると、美奈はとても嫌々そうながら立ち上がった。

説得というのは分からないが、とにかく立たせることに成功したので、僕はキッチンで鍋を見ている母さんに声をかける。

「母さん、美奈の浴衣合わせてよ」

「……」

……軽くスルーされてしまったので、僕はわざわざキッチンまで歩いて行って母さんの肩を叩いて気付かせる。

大丈夫なんだろうか母さんの聴覚。

「あらかなあに？ ……美奈ちゃんの浴衣？ 分かったわ、悠揮ちょっと鍋見ててね」

そう言い置いて、母さんと美奈はリビングを出て行った。おそらく浴衣が用意されている母さんの部屋辺りへ行ったんだと思う。

「……………」

というか簡単に引き受けちゃったけど、僕鍋見てると言われても何すればいいのかよく分からないんだよね。まさか一休さんみたいにただ観察してるわけにもいかないし、かといって中身混ぜたりしてもいいものかどうか…………。

灰汁とかが出たら取ればいいのか？

ちなみに、蓋を開けて中を確認してみたら、シチューだった。今夜はホワイトシチューらしい。

そんな感じで僕が鍋とにらめっこを開始してから5分くらい経ったとき、リビングのドアが開く音がした。

終わったのか、と思って僕がそちらを振り向いた瞬間

ばしっ。

正体不明の何かが僕の顔面に張り付いてきた。

「ッ！？ えっちよっ何！？」

とりあえず引き剥がそうとして、その張り付いてきた何かが誰かさんの手であることに気付いた。

僕の目元だけをピンポイントで隠すように張り付いてきた、誰かさんの手。

「……………」

「……………」

「……………。……………美奈、ちょっと目隠し外してくれない」

「やだ」

即答来ましたよ。

どんだけ美奈は僕に浴衣姿を見られたくないんですか。あなたに目隠しされているせいで、悠介と悠奈の声からどんな感じかご想像でお楽しみくださいみたいな状態になってるんですけど。

はあ、と僕が目隠しされたまま溜息をつくと、美奈の方から声がかかった。

「……………笑ったら蹴るからね」

「笑わないよ」

「……………からかってきたら、ぶっ殺すからね」

「からかわ……………ないと思うよ」

申し訳ないけど、からかわないって自信持って言える自信はなかった。ごめんね。

一応の約束を交わし、美奈の手がちょっとずつ離れ、僕の視界がゆっくりと開けていく。

そして。

正面に立っている美奈の浴衣姿は、紅と黄の二色で派手に彩られていて、とても綺麗だった。

「……わー……」

何というか、事実綺麗としか言いようがない。僕が言うのも何だけど、美奈は元が可愛いので、どんな服でも大体カバーできるのだが……、これは純粋に合っているという意味で綺麗だ。

赤く派手な色と美奈の茶髪もそんなに対立していなくて、見た目に馴染んでいる。

いやまあ、本当、似合ってると思うよ。

「……わー……」

だが、僕の口から出たのは、色々なものが混ざった結果、ただ「わー」の一言だった。

若干顔の赤い美奈は、僕の言葉に眉を潜める。

「……、わー、ってなに。それが感想？ 馬鹿にしてるの？」

「いやいや違いますから。何で勝手に怒ってんの？ 僕はその浴衣、よく似合ってると思うよ」

「……」

似合ってる、と褒めた途端、美奈はさらに赤くなって黙ってしまった。

兄ちゃんが美奈ちゃん口説いてるーとか騒ぐ外野（悠介と悠奈）がうるせえ。

何で赤くなってるんだってば と言いかけて、僕は気付いた。美奈は恥ずかしいのだ。僕に浴衣姿を見られているというのも理由のひとつかもしれないが、こんな派手で目立つ浴衣で夏祭りに行くということが。美奈は人目を引く服装はあまり好まない。

「……だから嫌だったのに……」

ぼそつと、俯いたまま恥ずかしそうに呟く美奈。

そんな美奈に、僕は思わず、やったらぶっ殺すと宣告されていたのに思わず、こう言ってしまった。

「いいじゃん浴衣なんて目立った方がいいよ。美奈は恥ずかしがり屋だなあ。そんなんだから小学生にもなって綿菓子ひとつすら屋台のおじさんに頼めなかつ

」

バスン！

言葉を遮るように、分厚い雑誌が僕の顔面に直撃した。

「……掘り返すな」

「……痛^いって……。僕さっきタウンページ取り上げたはずなのに、
何で……？」

顔を押しさえてぶつぶつ呻く僕。

しかしながら、悲劇はそこで留まらなかった。

リビングのドア付近で一連のやりとりを眺めていた母さんが、ふ
と僕のことを手招きして言ったのだ。

「美奈ちゃん着たんだから、悠揮もこっち来なさいよ。浴衣合わせ
てあげるから」

………は？

「いや母さん、何言ってるの。僕の浴衣なんて小学5年の時にはも
う無かったじゃん」

「だから今年新しく買ってあげたんじゃない。ふふっ、若草色と黄
土色の組み合わせがすごい綺麗なのよ」

「知らない！ つーか頼んでない！ 僕中学2年だったのに、こん
な歳で浴衣なんか着たらクラスのみんなに何て言われるか……」

「いいじゃない話題作れて」

いいわけがあるかつ！ と、僕は断固拒否の姿勢を貫くつもりで
いたのだが……。

ふと、背筋に何か冷たいものが走るような視線を感じて、その視線の出所を探すと……。

真っ赤な浴衣姿の美奈と、目が合った。

「……………悠揮？」

……………ああもう駄目だこれは怖い。本気で怖い。語尾が上がってる
ところ辺りやばい。

美奈の、『着ないとどうなるか、分かってんだろうな』と言わん
ばかりの表情に、僕は戦慄を禁じえなかった。

……………観念しました。

7 - 2 夏祭り

「あっはっはっはっは！ 何それ！」

……大爆笑された。

出会い頭に、人目を憚らず、腹を抱えて大笑いする作利川。隣の追滝がたしなめるように何かを言ってくれているのだが、一向に笑い止む気配がない。

……これだけで何のことか分かる？

出来れば、僕自身の口からはあまり言いたくないことなんだけど。

僕は、顔が赤く染まっているのを自覚しながら、着ているものの袖を軽く摘む。

「……………そんなに变？」

「いや、だって！」

笑いすぎて死にそうになっている作利川は、笑いのせいでふるふる震える指先で僕の服装全体を指し示し

「なに、そのっ、可愛いゆかた！ あっはははは！」

再び大爆笑を始めた。

今日は8月の12日。

この辺で一番大きな夏のイベント、夏祭りが行われる日だ。

住民みんなが楽しめるよう、盆の帰省なども配慮した上で、ずっと昔からこの日に行われてきた由緒ある夏祭りらしい。僕としては「夏祭り」＝「綿菓子、浴衣、金魚すくい！」みたいなイメージなので、その辺の伝統はよく知らないが、少なくとも歴史があつて、他の地区の夏祭りよりも遥かに大きなスケールのお祭りだということとは理解している。

そしてそんな今年の夏祭りに、友達みんなで行こうという話が夏休み前から決まっていたいて、その集合場所である夏祭り会場の公園端の大樹の下に到着したところ……いきなり作利川に笑われてしまったのだった。

原因はおそらく僕のこの格好だろう。自覚はあるよ。僕も美奈も、浴衣を纏って帯を締め、足には草履という、小学生ばりの格好なんだもん。で、曲がりなりにも女の子である美奈はまだしも、中学生の男の子である僕が着てたら笑っちゃうつてのは、わざわざ言われなくても分かる。

ワライダケ大量摂取が疑われる作利川は、涙が出るほど笑っている。

「やば、稲橋く、稲橋君……その浴衣、可愛すぎる……っ！」

「……仕方ないだろ。無理矢理母さんが着せてきたんだから……」

「いやっ、だってもう、それ、花柄……っ。だめ、稲橋君やめて、こっち見ないで！ あっはははは！」

とうとう我慢出来なくなつた作利川は、腹を押さえてしゃがみ込み、ぜーぜー言い始めた。

ツボにはまりすぎだよ。発作が起きてるとしか思えないんですが。

そこまで笑われると、恥ずかしいを通り越して心配になつてくる。絶対作利川辺りに笑われるだろうとは思っていたものの、死にそうになるまで笑われると、恥ずかしいとか言っていられない。

……まったく、全部母さんのせいだからな。

僕は未だ赤い顔は直らぬまま、笑い死にしそうな作利川を救うべく、声を掛けてみる。

「……あのさ作利川、恥ずかしい中この格好で街を歩いて、そして今日の前で自分の格好を笑われている人間の身にもなつてくれませんか」

「そ、そうだよ楓ちゃん、人の格好を笑うなんて、女の子としてやられたくないことをやっちゃ駄目だよ」

「あんまり、わ、笑うとき、目立つからさ」

同調してくれた古谷とトシ。その気持ちはありがたいんだけど、君らも笑いを堪えてるよね。

笑っちゃうのは分かるけど、そこは友情パワーで耐えて欲しかった。笑わないでいてくれるのは追淹だけだよ。

……美奈も笑わなかったといっっちゃ笑わなかったけど、浴衣合わ

せを披露したとき、物凄く馬鹿にした目で見てきたし。

しばらくして、ようやく笑いの発作が収まってきた作利川は、元の涙を拭いながら僕の浴衣を指さした。

「もう、不意打ちは卑怯なんだからね稲橋君」

「何も打ってないのに勝手に爆笑しておいてよく言う。僕だって散々反抗したんだよ。でもその結果がこれですよ」

腕を広げてアピールする僕。

家を出てから私服に着替えてしまふという手もあったんだけどね。美奈がいるからさ……。

私が浴衣着てるんだから、お前も浴衣着るよとばかりに何かされる気がするんだ。

「でもお前は浴衣もまあまあ似合うからいいじゃん。俺なんか絶対似合わねえよ」

と、トシが僕の浴衣姿を見て言った。

「似合うって言われても……。追滝の方が似合ってるでしょ、どう見ても」

また恥ずかしい思いが込み上げてきた僕は、他の人達の中で唯一浴衣を着ていた追滝に話を振る。

今この集合場所に集まっている、僕と美奈とトシと作利川と追滝と古谷のうち、浴衣を着ているのは僕と美奈と追滝の3名しかないな

いのだった。

女子はみんな、浴衣を着てくるんじゃないかと思ってたんだけどなあ。

唐突に褒められた追滝は、一瞬狼狽うづたえによるタイムラグがあったものの、落ち着いて返してくれる。

「ん、ありがとう。稲橋君も可愛いと思うよ」

「……」

……可愛い、かあ……。

「あつ、ごめん……。えっと、そういう意味じゃなくて、あの、ほら……違つの違つもの、えっと……」

珍しく、今度こそ本当に狼狽する追滝。普段冷静な追滝が、いつもとちよつと違つて見えるのは浴衣のせいだろうか。僕、可愛いとまで言われちゃったし。

「まあいいです。話変えるけど、あと誰か待つ人いるの？ 僕らが最後？」

気を取り直し、待ち合わせメンバーについてみんなに問いかける。僕は作利川に誘われただけで、他に一緒にお祭り回ろつと呼ばれた人について、詳しいことは知らなかったからね。

真つ先に答えてくれたのは作利川だった。

「君らで最後。ほら、坂原君たちと新井君たちってさ、どうせペアで行くんだろつから」

「……あー」

坂原は海内と、新井君は芽寺さんと、ってことか。

ペアでお祭りって、実際のところ相当のことだと思っただけだな。僕も美奈と二人だけで夏祭りに来たことは流石にない。だから何だっけでもないけど、周囲の目とか、気にならないのかな。

少なくとも僕なら気になる。一緒に出かけることと、一緒にお祭り回ることでは、ちよつと違うんだ。

一方、一旦全員を見回してメンバーを確認した作利川は、唐突に声を張り上げた。

「じゃ、そういうことで 全員揃ったんだし、早くお祭り行こー！」

いきなりテンション急上昇。前触れもなしに間欠泉が噴き上がるのと同じくらいだった。いやあ、作利川のこのイベントの時の盛り上がりっぷりはちよつと見習いたいくらいだ。

……最も、作利川の場合はそれが行き過ぎることがよくあるけども。

そして、そんな作利川について行けずに呆れ顔の僕らだったのだが、ふと、古谷が僕の後ろ辺りを眺めて言葉を発した。

「あつ、古館さんも浴衣じゃん。かーわいい」

「……」

しまった、とばかりに僕の真後ろへ引っ込む美奈だが、若干遅い。
古谷の追撃の手は緩まない。

「えっ、何で隠れるの？ 可愛いじゃん、見せてよ」

「……」

美奈は無言だが、かなり動揺しているのが背後からの空気だけで分かった。

ふふん、僕は伊達に長いこと美奈の幼馴染みやつているわけではないのである。空気が共感して一緒に震えてるしね。

ていうか、何でそんなに恥ずかしいんだろう。僕だって恥ずかしいは恥ずかしいけど、見せろって言われたら見せられるくらいには平気なんだけど。

「ちょっとちょっと、何で逃げるの、こっち来てよ古館さん。稲橋君の背後霊みたいになってるよ」

「……」

「ふるだーてさーん。いいじゃん浴衣、可愛いって」

「……」

たぶんこれは、美奈が諦めるまで古谷も諦めないんじゃない？
浴衣姿なんて見せたって何か減るもんじゃないんだから、一時の恥ずかしさくらい乗り越えちゃえば。

そのテレパシーが通じたのか、はたまたただの偶然なのか、乗り

気でないオーラを出しながらも、美奈はおずおずと僕の後ろから出てきた。

その姿に、一人でテンションを上げていた作利川も「おっ」という声を漏らす。

「美奈も浴衣だったんだ」

「……いま気付いたの？」

「だって美奈ずっと稲橋君の後ろに隠れてたじゃん。……いやぁにしても綺麗だねえ美奈。豪華で似合ってるよ、可愛い可愛い」

「……うっさいよ……」

お腹辺りの布地をぎゅっと掴み、顔は伏せて、蚊の鳴くような声で美奈は言った。

「どんだけ恥ずかしがってるんだかって是非とも突っ込みたかったんだけど、ここで言ったら間違ひなく頭突きが来るに違ひない、と予想できる。そして美奈の頭突きは、例えるならお地藏さんがピッチングマシーンから飛んでくるくらい威力なのだ。出来れば食らいたくない。」

このままでは美奈が燃えてしまうので、さっさと行こうという意を込め、僕は美奈の背をぽんぽんと押して促しつつ、他のみんなにも呼びかける。

「ほら、もう行こう。美奈もあんまり赤くなっていると、どこが顔でどこが浴衣だか分からなくなっちゃおうよ」

僕の冗談にこっちを振り返った美奈は、不機嫌そう、かつ赤くなつた顔で僕のことを睨んだ。

「……何で悠揮は平気なの」

「何でって」

僕は別に平気なわけじゃないよ。敢えて言うなら、諦めてるんです。ていうかね、君とか母さんとか悠介悠奈とか、そうした連中に囲まれていると嫌でも諦めるという選択肢が身につくんだって。

……とそのまま言うわけにもいかないのです、僕は適当に質問で返す。

「逆に聞くけど、美奈は何がそんなに恥ずかしいの？ 似合ってるから自信持ちなよ」

「……つるさい花柄浴衣」

「だーからー！ これは僕じゃなくて母さんが、頼んでないのに勝手に選んだんだって！ あとこれは花柄じゃない！ 花っぽく見えるけど風車かほくるまか何かだよー！」

「何必死になつてんの、ばっかみたい」

せつかく浴衣姿が決まつてるのに、言うこと可愛くないなあ美奈は。

でも、ふいっと目を逸らした美奈の様子を見ると、ちょっとは恥

ずかしい気分が薄れてきたのかなあとか、思わなくもないけどね。

夏祭り会場は早くもその盛況ぶりを見せていた。

「……毎回思うけど、人、多っ」

「この辺じゃあ他に夏祭りとかやらないから、仕方ないのかも」

「こんくらい混雑してる方が、夏祭りやってる側としては楽しいのかもしれないけど……あ痛っ、今誰かに足踏まれた」

人の波の間を縫うようにして、まずは何か食べるものでも確保しようとして適当に会場を彷徨く僕ら。

前に行く女子達の会話から分かってもらえるとと思うけど、まだ日が完全には沈みきっていない時間帯ながら、自然公園には沢山の人が集まってきてお祭りを楽しんでいた。

僕はこういう人混みを見ると、こんなに沢山の人間がどこから湧いて出てくるんだろうというも思う。この辺は普段、静かな住宅街なのだ。だからギャップが半端無い。

人の量が凄いいし、別行動でこのお祭りに来たはずの悠介と悠奈は大丈夫かなあとそんなことを心配していた僕は、隣のトシに肩を引っ張られた。

「おい、見るよ悠揮。あっちの方で輪投げやってんの、坂原と海内じゃね？」

「輪投げ？」

言われ、そっちの方向を見てみれば、確かにカップルのような幼馴染み二人組が輪投げ屋台のところにいる。坂原はいつもと同じ私服だが、海内の方は美奈よりもさらに若干派手な赤い浴衣を着ている。

……いや、カップルじゃないな。訂正しよう。小さな女の子とそのお父さんのような幼馴染み二人組が、輪投げ屋台のところで何か言い合いをしている。構図としては、海内が「もう一回！ もう一回！」と坂原に要求して、坂原はそれをうんざりしながら聞き流している感じ。

「何か、坂原も大変そうだな……」

思わず、心の底から気の毒そうな声で呟いてしまう僕。トシも頷きながら言う。

「あいつ絶対、精神年齢俺らの二倍ぐらいあるよな。同い年の女子をまるで娘みたいに面倒見るとか、普通に出来ることじゃねえ」

と、二人して坂原の大变さを思いやり、あの場に「やあ、奇遇だな！」と声を掛けて入っていくべきか考えていた僕らだったのだが……。

「あつ、稲橋君たちがいる！ おーい！」

先に海内に見つかった。

呼ばれたものは仕方がないので僕らが近寄っていくと、海内の視線が外れた隙を突いて、坂原は大きな溜息をついていた。ホントお疲れ様です。

一方そんな坂原のお疲れ具合など知る由もない海内は、にっこにご満面の笑顔で、僕らに浴衣姿を披露する。

「見てこれ。今年新調したんだけど、圭佑と一緒に選んでくれたんだ！」

「こいつが一緒に来いってうるさいからさ……」

坂原が投げやりな口調で付け加える。

「へえ……。まあ、海内らしくていいんじゃない？ そんな浴衣が合うのは海内くらいだと思う」

「えっへへ」

褒めただけで、随分とまあ幸せそうな笑顔になる海内。

超ご機嫌ですね、海内さん。

その機嫌、ちょっと美奈に分けてやってくれないかな。うちの美奈は恥ずかしがるわ不機嫌になるわ、せっかくの浴衣なのに勿体ないんですよ。

海内くらいの上機嫌になられると流石に引くけど、その半分くらいなら喜んだっていいと思うんだけどな……。

とか考えていた僕なのだが、ふと何の気なしに言われた坂原の声で頭の中から戻ってきた。

「でも、稲橋もその浴衣なんか新しいな。似合ってるじゃん」

「うっ」

また浴衣のことに触れられてしまった……。出来ればもうノートツチでお願いしたかったが、坂原と海内には今ここで会ったばかりなんだし、仕方がない。

本当のこと言うと、夏祭り会場を歩いているときもちらちらと僕の浴衣姿に視線を投げかける人がいて、割と気恥ずかしい状態が続いているのだ。

「勝手に母さんが買ってきたやつだけだね。ほとんど無理矢理に着させられた」

「いいじゃねえか浴衣同士で、そうやって並んできるとお前ら二人、まるで江戸時代の夫婦みたいだ」

と言って、何故か僕とトシを指さす坂原。

……。

えっ、海内と僕なら浴衣同士でも通じるけど、トシは浴衣着てないし……。

何より、言われた言葉が、おかしいというか……聞き間違いだったのかな……？

ふうふう？ と顔を見合わせた僕とトシに、坂原の鋭い突っ込みが飛んでくる。

「違いよ何でお前と伊藤なんだ、誰がそっち方向で考えろっつたよ。俺が言ったのは稲橋と古館のこと」

「えっ、美奈？」

「何怪訝な顔してんだって。お前のすぐ横にいるだろ古館」

！？

慌てて振り向き、美奈がそこにいることに気付いた瞬間、僕は心臓が逆上がりするかと思ったほど驚いた。

……どきどきどきどきと、心臓の鼓動がめっちゃくちゃ速くなっているのを自分で感じる。

いや、美奈は作利川達と行動を共にしているんだとばかり……。まさか僕らについてきていたとは思わなかった。びっくりした。びっくりして声も出なかったよ。

「……何？」

何故僕がそんなに驚いているのか理解できない、とばかりに、不機嫌な声色で問い質してきた美奈。

「べつ、別に何でもありませんけど……。美奈って気配消すの上手すぎ」

「……別に消してない」

むすつとして呟く美奈は、何でだか若干萎しぼんだように見えた。

どの部分が不服だったんだろう。今の言葉には特に深い意味はなかったんだけど……。

そんな僕らに、場の空気を読んでない感じの海内が弾んだ声をかけてくる。

「そうだ、三……。お三……。お三人？ ……ねえ圭佑、二人の時ってお二人さんって言うよね。三人の時って何て言うの？」

「知らねえよ。同じ言い方でいいんじゃないの？」

「うん、そつする。お三人さん、さつきこれ輪投げで取ったものだけど、要る？」

そう言っつて海内が僕らに向けて差し出した手のひらの上には、小型の水鉄砲がいくつか。

「さつきから輪投げでこればかり当たっちゃって、いっぱい余っちゃったのね。だから貰ってくれると嬉しいなって」

当たっちゃったんじゃないかって、お前が同じ方向にばかり投げたからだろ……。と後ろで坂原がぶつぶつ呟いていたが、海内には聞かえていないようだ。

「えー……俺は要らねえや。使いどころがない」

「じゃあ僕は2つ貰っとくよ。悠介と悠奈が喜ぶかもしれない」

僕が色の違う水鉄砲を頂くと、海内は「毎度あり！」とどっかずれたことを口走ってから、思いついたように訊ねてきた。

「そういえば稲橋君の弟くん、まだあの上履き使ってくれてる？」

「上履き？ ……ああ、あの青いの？ うん、まだ使ってたよ大事に」

そっかー、と満足そうな態度を見せる海内。それがどうかしたのかと僕が聞く前に、海内は続けて言う。

「あの上履きはねえ、ずっと昔のこのお祭りで、圭佑が輪投げでゲツトした上履きなんだよ」

「へえー。それは面白い偶然だね。何回くらいで取ったの？」

「えっと……何回だっけ？」

振り返って坂原に聞き仰ぐ海内。

話を振られた坂原は、ちょっと難しい顔をして数秒言葉を選んでから、失敗でも打ち明けるかのように呟いた。

「20回くらいかな。つまりだいたい2000円は払った」

「そ、そう……」

高い上履きだな……。

7 - 3 塩焼きそば

坂原達と別れ、僕らは再び人混みの中へ旅立った。

少しの間話^{あいた}していただけのだが、心なしかお祭りに来ている人が増えている気がする。ただでさえ広い公園が祭りの会場になっているというのに、これでは、図らずも別行動となった作利川達を見つけるのは難しいかもしれない。

連絡を取ろうにも、僕は浴衣姿なので携帯は家に置いてきてしまったのだ。トシも今は携帯を持っていないそうなので、連絡する手段は無い。かといって無策のままひたすら探し回るのも疲れるから嫌だ。

というわけで、人の少ない屋台脇の一角にとりあえず落ち着いた僕ら。

どこからともなく焼き鳥の煙の匂いが流れてくるが、今はちょっとのんびり焼き鳥を食べる気分にはならない。

適当なポーズで背を反らし、体のストレッチをしながら僕は言う。

「あー、携帯持ってくればよかったなあ」

「全くだ。悠揮が坂原と海内を見つけたりしなければこんなことは……」

「見つけたのはトシだろ」

冷たい流し目を送ってやると、トシは、煙のせいかそれともただ

の誤魔化しか、分かりやすく咳き込んだ。

そんな誤魔化し通用しないぞと突っ込んでやるうかと思っただが、そう言おうとして口を開いた瞬間、流れてきた煙が気管に入っ
て僕も咽せた。

何だか風向きが変わったのか、近くの焼き鳥屋台から流れってくる
煙が濃くなった感じがする。浴衣の袖をうちわのように振って煙を
追い払う僕の、その袖を引っ張りながら意見する美奈。

「……食べるもの探してたんだから、食べ物屋台を巡れば会えるん
じゃない」

「そうだなあ……。向こうが僕らがないことに気付かないで、焼
きそばでも買おうと列に並んでいることを祈ることにする？」

草履を履いてきたせいで足が涼しく、せめて少しは効き目がある
かと、軽く指先を動かしながら僕は提案してみる。

ぱたぱた動く僕の草履に目を落としながら、トシが言った。

「でも、追滝は屋台に並ぶときになったら流石に俺らがいないこと
に気付くんじゃねえかな。作利川の方は食欲が先になって気付かな
いってことも充分ありえそうだけど」

あー、そういうこと言っちゃって大丈夫なのかな？ 作利川は今
この瞬間にも、僕らの心の中を読心能力で察知しているかもしれない
のよ。

僕の懸念を余所に、トシは遠慮無く続ける。

「どっかその辺でタコ焼きでも食いながら、次はどの屋台を目指すかとかしか考えてないんじゃないの？」

作利川は流石にそこまで食い意地の張った人間じゃないだろ……、と僕がトシの台詞に被せた、その時。

「ほう、じゃあ次はその失敬なキミを喰い殺すとしますか？」

がしっ。

横合いから急に伸びてきた手が、トシの肩をむんずと掴んだ。

「うわーあああ作利川！？ いつ現れた!？」

足を動かしてさえないのに、トシは不自然に足を絡ませて前へつんのめった。振り向きながら叫んだ声に、僕も驚きながら見れば、暗い笑みを浮かべた作利川が立っていた。

後ろには、焼きそばのパック（複数）を重ねて塔みたいにして抱えた追滝と「うわここ煙たっ」とか言ってる古谷もいる。

どうやらその屋台の裏辺りから現れたみたいだけど……。

やっぱな……。やっぱり作利川は言われたことは何でも聞こえる聖徳太子以上の超聴覚を持っているんだ。そうでなければ、こんなにタイミング良く登場できるはずがないもの。

これが偶然なら、作利川はもうそういう種類の超能力者だよ。

「まったく……」

作利川は両手を腰に当てると、モンスターに遭遇してしまった村人みたいな格好のトシに向かって言い放つ。

「人が焼きそば屋台に並んで、みんなの分の食料を入手して、君らがないのに気付いて、あっちこっち探し回ったっていうのに……、何で私が食いしん坊キャラにならなくちゃいけないのかな？ 現実問題、友達より食欲を先にする人間と思われる時点で傷付くんだけど」

「わ、悪い、作利川……。だってお前って、元々小食でもないくせに無理にダイエットしようとしてミニサイズの弁当にして、でも結局腹が減って友達から分けてもらってるような人間だから」

「伊藤君には焼きそばあげない」

ご立腹の表情でトシの言葉を遮り、突き放すように言う作利川。見事な膨れっ面である。

「稲橋君、美奈、これあげる。どっか煙たくない場所で食べよう。で、食べ終わったらさっき面白そうな屋店見つけたから、行ってみるよ」

「おい作利川！ 俺が悪かったからナチュラルに空気扱いしようとするな」

慌てて制止にかかるトシだが、作利川の返事は冷めた横目の一瞥。

つくづく女子の怒りって恐ろしいね。

作利川もそうだし美奈もそうだし追滝も眼力恐いし古谷は爆発するし。

しばらく焼き鳥の煙の中で互いに牽制しあい、動きを止めていた二人だったが……、ふと、作利川が大きな溜息をついてその空気を破った。

「はあ……。まあいいや、今回は許してあげる。伊藤君って食べても美味しくなさそうだし」

「本当に食う気だったのかお前！？ カーニバル相撲じゃねえか！」

「カニバリズム」

トシの突っ込みに、さらに追滝先生による小声の修正が入る。

焼きそばパツクの塔を抱え、大真面目な顔の追滝に「そう、それ」と同調するトシだったが……僕はそのカニなんとかとやらはさっぱり知らないので、解説しようがない。ごめんね。

と、そこで、さつきからひたすら煙たいとばかり言っていた古谷も話に参加してきた。

「で、3人ともいったい何してたの？ さつきまでいたと思ってたのが急にいなくなったから、どこかで小銭でもばらまいちゃったのかと思っただよ」

「それが　　っげほっげほっ」

言いかけてまた煙に咳き込んだトシの代わりに、僕はみんなを煙の来ない場所に移動させながら、あっちの方の輪投げ屋台で坂原と海内に出会ったことをかいつまんで説明した。

屋台裏の、ほんの少しだけ小高くなった草地でいったん僕らは立ち止まり、追滝から焼きそばを受け取って立替金（要は代金）を渡す。僕が貰った焼きそばは、下の方にあっただものだから、プラスチックが潰れてしまっているけど気にしないことにしておこう。

本当は立ち食いは禁止されているのだが、まあいいやということ で立ったまま頂く。

一番最初に焼きそばひとまとまりを口に含んだ古谷が、うえ、という微妙な声を漏らして、次の瞬間に苦い顔になった。

「この焼きそばソース濃いね……。あ、楓ちゃんのはそうでもないのに……。うっわあ、私のだけ焼きそばの表面がぬめって光ってる……。何コレ、ピンポイントで私に対する嫌がらせ？」

ぬめぬめとかべったべたしたものが大の苦手である古谷は嫌そうな顔をする。作利川は、どう考えても流すつもりしかないだろうという声でそれに返した。

「ま、所詮はお祭りの屋台、どっかの家の普通のお父さんが、適当に作ってるものだから仕方ないさ。それより、あとで射的やろうよ射的。私やったことないんだ」

「うーん、精密な狙いをつけられない大雑把な楓ちゃんには難しいと思うよ？ 楓ちゃん、ダーツとか出来ないもんね。あっははー、もし楓ちゃんが東京フレンドパークに出ても、たわしすら取れないんじゃないかなー」

「……味羅、スカートめくるよ」

「やめてっ!」

焼きそばを持ってない方の手で、スカートめくるの何のって攻防を繰り返しているのがあるかと思えば。

「追滝の浴衣ってオーダーメイドか？」

「うっん。どうして？」

「その柄、あんまり見ねえなと思って。ほら、その進入禁止の道路標識みたいな模様、浴衣に合いそうなマークでもないし」

「たぶん厄除けじゃないかな。悪いものが私の体の中に入ってこないように、とか」

「へー……。何かモンスターボールみたいだけどな」

「それは関係ないと思う」

と、焼きそばそっちのけで会話を楽しんでいる人達もいる。

いきなりこんなこと言うと、年寄りじみて思えるかもしれないけど、こうやって騒がしい祭りの最中から出て、焼きそば持ったのんびりできるっていいなあと思う。言ってる意味分かるかな。今一応僕は祭りの会場内にいるんだけど、遠くから祭り会場を眺めて浸っているような、のんびりした気分。今日は悠介も悠奈も別だから、色々世話を焼く必要もない。

いやまあ、祭りのことを抜きにしても、僕はこうして今みたいに、

友達と何でもない話をして平和に過ごせる時が好きなんだ。何しろ家はうるっさくて疲れるからね。

「……などと、黙々とソース焼きそば濃い味を食べながら考えていた僕だったが、半分くらい食べ進めたところで、ふと同じように黙々と焼きそばを食べている美奈の方を見てみた。

「……」

あ、違った。間違えました。美奈は焼きそば食べてなかった。

美奈は、口の中に焼きそばと割り箸の先を一緒くたに含んだ、その状態で固まっていた。まるで口から焼きそばの滝でも流れ落ちていくかのようである。止まってるけど。

しかも目が虚ろになって、どっか別次元を見てるんじゃないかってくらい瞳に力がない。

どうしたんだろう。吸魂鬼ディメンターにでも襲われてしまったのだろうか。

そう思い、とりあえず心配になって声でも掛けてみようと思ったのだが、その前に気がついた。

美奈が焼きそばを食べて固まっていることに。

美奈がかなり濃い味付けの焼きそばを食べてしまって固まっていることに。

「……もしもし、美奈？ 舌は大丈夫？」

僕はげんなりしながら美奈の顔の前で手を振ってみた。

おそらく、自然な味の好きな美奈は、この濃い味の焼きそばにシヨックを受けて固まってしまったんだろう。自然な味っていうのは要は大體薄めの味付けのことで、逆に言えば美奈は濃い味付けや調味料は好きではないのだ。アメリカのお菓子なんて論外なのだ。

僕の声が聞こえたのか、魂の抜け殻みたいだった美奈の瞳が生氣を取り戻し、ちらっと僕の方に視線を寄越した。

「……………」

……………うわー、美奈の目がすごーい困ってる困ってる。よくもまあ物を食べた状態でそんなしかめっ面が出来るよね。

「どうしたの美奈。何で口から焼きそば生やしてんの。ファッション?」

げすっ。

面白かったのでつい口走ったら、脛すねを蹴っ飛ばされた。ついさっきまで魂飛んでても、蹴りの威力は変わらないんですね。凄いです。

僕は少し腰を低くして脛をさすりながら、目だけ懨然としている美奈に向け、溜息と共に言う。

「とりあえず、そこだけ飲み込むなり吐き出すなりしなよ。固まってもいいことないよ」

「……………」

言われて、美奈はしばしの逡巡の後、何とか焼きそばを飲み込んだ。とてつもなく気持ち悪そうな顔をしてたけども、ちゃんと食べたのは偉い偉い。

ほとんど残っている焼きそばのパックと割り箸を僕に押しつけるようにして、口元を押さえ、美奈は焼きそばに悪態をついた。

「……この焼きそば美味しくない。やだ、気持ち悪い。捨てたい」

嫌いすぎだよ。どんだけこの焼きそばに舌をやられたんだ。

「そう言うなって。この麺にも、ソースにも、キャベツにも、紅シヨウガにも、生産者の方達の想いが詰まっっていて、そうやって作られた食べ物も、みんなに美味しく食べてもらいたいって思うことになってるんだから」

「知らない」

「知れよ。一言で片付けちゃってさ……」

恨みがましく僕が美奈を睨みながら呟くと、美奈はついつとそっぽを向いた。

「じゃ、この美奈の分の焼きそばは僕が食べてあげるから、美奈は別の屋台で何か買ってきたら？ さっき塩焼きそばのある屋台もあったし」

「いい。自分で食べるから」

僕の提案をはね除け、一度僕に押しつけた焼きそばをまた奪い返

す美奈。

「いったい何なんだろう。お前に無料で食わせる焼きそばはねえと
いうことなんだろうか。まあいいけど……。」

「食べれんの？ 嫌いなくせに？ 言っとくけど、次に口から焼き
そば生やして固まったときは僕はスルーして関わらないよ」

「……」

じーっと、手の中の焼きそばパックを見つめる美奈。

「……水で洗う」

「やってみなよ。美味しくなくなるよ」

「……」

「あのさ、拗ねることなくない？ こっちは親切で言ってるんだか
ら」

「別に拗ねてない」

「嘘だね。鏡で見てごらん自分の顔。そんな分かりやすい拗ね顔す
る人なんて滅多にいないよ。ていうか美奈って不機嫌になるとすぐ
顔に表れるんだよ、本当に可愛いんだから」

べしっ。

焼きそばパックで頭を叩かれた。それまだ中身入ってるじゃんか。
食べ物粗末に扱ってはいけません。

そう言っただけで焼きそばパックを取り上げてやるうかと思ったのだが、やめた。もし抵抗して中身をぶちまけちゃったりしたらもったいないし、同じ年に説教するのは馬鹿らしいし。

坂原の気持ちがちよっと理解できた気がする。僕もたまに美奈に説教するけど、どうして僕らが親みたいなこと言ってるんだろかね。……まあ、坂原は海内の父親代わりだし、美奈にも事情があるから納得できないことはないんだけど……ね。美奈の方が僕より頭良いはずなんだけどなあ。

僕が、好き嫌いの多い我が子を見るような目で、焼きそばどうするか思案している美奈を眺めていると、急に美奈は顔を上げ、僕に向けて言い放った。

「……………塩焼きそば売ってるどころ、どこ？」

「え？ ああ、うん、そのの屋台を曲がって、スーパーボールすくいの屋台のそこを曲がって、適当に歩いてたら見つかるんじゃない？ 風車屋台かたぐるまのせうだいと生ビール屋台の近くだったよ確か」

「一緒に来て」

「……………」

こいつ……………。僕の説明を返せ。
というより一緒に来て欲しいんだつたら最初に言おうよ。

でも、美奈の方から素直に頼み事をされるなんて、珍しい。もしかしたら、僕が先に言わなければ、美奈は僕に焼きそばを食べてく

れと頼んでいたかもしれない。……それは行き過ぎた推測かなあ。

僕は、了承の代わりにからかいの言葉を返す。

「『一緒に来て』ね……、もしかして美奈はまだ、一人で屋台のおじさんに焼きそばくださいって言えないの？」

どかつ。

「……言えるから。蹴っ飛ばすよ悠揮」

それ、蹴ってから言う台詞じゃないよね。

7 - 4 射的屋台

「……美奈、こっちの焼きそばはどうすんだよー」

「……」

無視。

「自分で食べるんじゃないの？ それともやっぱり僕に食べて欲しいの？ どっちか立場をはっきりさせてくれないと困るんだけど」

「……………」

絶対に聞こえてないはずはなかりうに無視。

何を言っても反応ナシ、塩焼きそばを抱えてすたすたと先を歩いていく美奈に、僕は自然と溜息が漏れた。

僕らはさつき、塩焼きそばを買いにちよつと別行動を取ることを他のみんなに告げ、二人してお祭り客で賑わう公園の通りに出てきた。

他のみんなは焼きそばを食べ終え次第、射的の屋台に向かうと言っていたので、手際よく塩焼きそばを手に入れた僕らは、その射的屋台を目指そうと動いているところなのだ……。。

いつの間にか僕が持たされていた、濃いソース味の方の焼きそばの処理について美奈を問い質しても、何も答えてくれないのである。

この焼きそばを後ろから頭に投げつけたら、美奈はどんな反応するかな。

そんな不穏なことを頭の隅で考えつつ、美奈の後についていくと、美奈は唐突にこの往来で足を止めた。

危うく美奈の背にぶつかりそうになり、僕は慌てて焼きそばを引っ込める。

「……？」

立ち止まって、何か疑問符付きのオーラを発しているので、僕も美奈の肩越しに前を見てみた。

美奈が見ているのは、さっきまで僕らがいて焼きそばを食べ（ていたかどうかは疑問だがとにかく食べようとはし）ていた、けれど今は誰もいない草地。

「……あれ？」

「……あのさあ美奈、人の話聞いてなかったの？」

真顔で『あれ？』とか言うもんだから、僕はもう相当呆れた声になっちゃった。

美奈がこちらを振り返る。

「作利川たちは焼きそばを食べ終わったら射的の屋台に移動するって、さっき僕らが塩焼きそば買ってくるって言ったときに言っただろ」

「……言っていなかった」

「言っていました。少なくとも僕はちゃんと聞いてました。……まったく、何なの？ そんなに塩焼きそばを買うのが楽しみだったわけ？」

「別に」

美奈は決まりの悪そうな顔になり、それを隠す為か、僕の手から濃いソース味の焼きそばをもぎ取った。

手が自由になったので両手をぶらぶらさせていた僕だが、直後に、焼きそばのパックを開かないように止めていた輪ゴムを持たされる。

「持ってた」

「結局ここで両方とも食べるの？ 僕相手に意地張らなくなっちゃったよ、ソース味の方食べてあげるから」

「意地なんか張ってない」

頑なにそう言い、美奈はソース味と塩味、それぞれパックが開いた焼きそば同士を　　ばしん！　と、左右から一気に重ね合わせた。

「えー……」

胡散臭い目で見守る僕の前で、美奈はソース味と塩味の二種類の焼きそばを、出来るだけ綺麗に混ぜるようにぐりぐりと割り箸で回し始める。

「何やってんの……」

「混ぜてる。こうしたら味は薄くなるかと思って」

「そりゃちよつとは薄くなるなるだろうけどさ。飲み物じゃないんだから、濃い味に飲み込まれて塩味が消えて、ただ単に濃い味焼きそばの量が増えるだけなんじゃないの？」

ぐるぐると焼きそばをミキサーしていた割り箸の動きが、段々とスローになって止まった。

「そのソース焼きそば、テカるくらいソースついてるからさ。余分なソースがあるってことでしょ？ だったらその分のソースを塩焼きそばにくつつけちゃっただけだと思うよ。……あーあ、塩焼きそばもったいない」

淡々と思ったことを指摘すると、美奈は焼きそばを持ったまま暗い目で僕を睨んだ。パキパキペキ、という感じの、焼きそばのプラスチックパックが潰されかけるような音が聞こえる。

やだもつこの空気、と身を引く僕に、美奈の低音が襲ってきた。

「……何なの悠揮」

「えっ、僕！？ この話において僕は何も悪いことしてないんじゃないですか!？」

「人がいざ食べようって時に、その決意を壊すようなこと言うから」

「むしろ食べてからの方がその決意の壊れ方はでっかつたんじゃないかって僕は思うんだけど！ 食べてから後悔する前に教えてあ

げたのに、何なのっ？のはこっちの台詞だよ！」

「そうだとっても、何かむかついた」

「何だよ！ そんな理由もなくむかつかれてもこっちは困っちゃ
ますから！」

「悠揮だから」

理由になつてねーよ！ と叫びながら出来るだけ美奈から距離を
置く僕。前にもこんな感じのやりとりをしたような記憶がある。と
いうか、美奈は大抵理不尽だ。

一方美奈は、混ぜかけの焼きそばを見つめ、目に見えて意気消沈
していた。

嫌いなものが約2倍の量に増えてしまったというのだから、気持
ちは分かるけど。

「だから、食べてあげるって散々言っただよ」

僕が遠くから美奈に声を掛けると、次の瞬間、割り箸が恐るべき
速度でまっすぐ飛んできた。

思わず逃げてしまいそうになる体を無理に動かして、僕はギリギ
リでその割り箸を掴み取る。

「うわっ、何だよ！！ 八つ当たりならゲーセン行きなさい！ あ
と資源を無駄にするなって！」

追撃が飛んでこないように、適当に叫んで気を逸らさせようと挑
む僕。これでもし収まらずに焼きそばパックが飛んできたりしたら、

僕は急いで射的屋台まで避難しよう。普段の数倍も理不尽な八つ当たり美奈の相手はちよつとご遠慮したい。

と、かなり逃げ腰のポーズでいた僕だったのだが、美奈はそれ以上何か他のものを投げてはこなかった。

それから数十秒くらい経って、近付いても特に問題は無さそうだなと確信を持つてからやつと、僕は元気を無くした美奈の元に歩いていく。まるで凶暴な野生動物の観察でもしているみたいだ。

僕はナイスキャッチした割り箸を焼きそばパックの上に置き、そつと美奈に話しかけてみた。

「ま、まあ、僕はああ言つたけどさ、実はちゃんと味が相殺されているかもよ？　塩味焼きそばが予想以上にいい仕事をしてくれるかもしれない」

「……そうかもね」

うつわー気のない返事だなー。そんなんだから人の話が耳に入つてこないんだろどうせ。

美奈の返事が何言つても棒読みなので、僕は美奈の手から今や大盛りになった焼きそばパックを取り上げた。

「あ、ちよつ」

「味見してあげるよ。それならまだ許せるでしょ？」

食べてあげるといふ僕の申し出をずつと却下し続けた美奈だが、

このときは何も言い返してこなかった。

駄目だというお言葉は来ないので、僕は素早く一口食べてみる。

「……」

「……んー、何か海の家で出される普通の焼きそばって感じがする。味は薄くもないけど濃くもない……っていつか、ちょっと濃いくらい。これなら美奈もギリギリで食べられるんじゃない？ ほら」

焼きそばを美奈に渡し返す。美奈は何も言わずに、無言で僕の顔を見た。

「何？ 僕の顔に青海苔でもついてる？」

「……違う。何でもない」

「……？ ……あつ、分かった、ありがとっって言いたいけど恥ずかしくて言えないんだね？ いいよ気持ちだけで、美奈にはそういうの要求してないから」

「……ちっ」

普段ならここで「うるさい黙れ馬鹿」などと噛みつかれるし、僕もそう返ってくるだろうなと予想していたのだが、特にそういう言葉浴びせられることはなかった。

ただ、舌打ちと、見事な踵回し蹴りを食らう羽目にはなった。

射的屋台というのは、この大きなお祭りの中でも随分人気のある屋台らしい。

普通の屋台の3倍程か、もしかしたらそれ以上の面積を占拠しているその屋台は、綿菓子や餅子の屋台並みに行列が出来ていた。射的だからそれなりの奥行きが必要なのは分かるが、一番奥の棚に弾届くのかってくらい、申し分ない奥行きがある。

僕と美奈は、その人混みの中に作利川達の姿を見つけ、足を止めた。

僕が足を止めた途端、あんまり美味しくなさそうな顔で焼きそばを食べ始める美奈。

美奈は、歩き食いは駄目だという公共ルールに従って、移動中はバックを抱えたまま一口も食べようとしなかったのだが、美奈の中の公共ルールでは立ち食いはOKらしい。

……どうでもいいけど、もうちょっとその顔を隠したらどうなんだろう。

感情に素直なのは良いことだけど、そんなにあからさまに不味いって顔をしてものを食べては、美味しいものも美味しくなくなるし、可愛いものも可愛くなくなると思うんだけどな。

「やつ、トシ、首尾はどう？」

一番僕から近い位置にいた、トシの肩を叩いてみる。
振り返ったトシは、何だかよく分からない人生ゲームの亜種みたいな箱を持っていた。

「ああ悠揮か、見るよこれ。俺特に欲しいもの無かったんだけど、作利川がやれっつてうるせえからやったら、こんなでかいもの取っちゃったよ。そしたら、取ったら取ったであいつ怒るし、欲しいのかって聞いたら要らないっつて言うし……わけ分かんねえ」

後半が愚痴になっている。トシも迷惑な状況を被って大変だったんだな。

「ふーん……。でも作利川がそう言った理由、何となく分かる気がするよ。自分は何も取れないから怒ってんじゃない？」

「正解」

別の方向から声が聞こえた。

そちらを見れば、追滝が、人混みの間からするりと抜け出てくる場所だった。追滝も、射的の景品だろうが、クマか何かのぬいぐるみを持っている。

「おっと、追滝が狙ってたのってそれなんだ。意外と少女趣味なんだな」

「……意外と」

追滝の持っているぬいぐるみを指さして言うトシ。

その台詞に、追滝が一瞬だけ眼鏡を光らせたので、僕はあの眼力モードが襲ってくるのかと身構えたが追滝はすぐに視線を戻した。

「楓奈はイライラしてるから、戻ってきたときにその話を持ち出さない方がいいよ。痛いところを突かれて余計に怒ると思う」

「でも作利川って負けず嫌いだから、何か取るまでは戻らないんじゃないの？」

「ううん。あれは絶対、当たらない」

僕は言ってみたのだが、追滝は首を振って断言した。

そこまできっぱり言えるほど、作利川の射的の腕は酷いのだろうか。ちょっと気になる。

「まあ、あいつにも出来ないことはあるってことだろうな。悠揮、見納めておくなら早いうちに見ておいて方がいいと思うぞ。後になつてイライラ最高潮の時に見るのが見つかったら、八つ当たりで撃たれかねない」

八つ当たりか……。作利川は美奈とは違って、ちゃんと自制心のある人間だと信じてるよ。

だから、別に怖くなんかはないはずんだけど……。何でだろう、足が人混みの向こう側へ行きたくない。

追滝も口を挟む。

「どっちにしても、とにかく戻ってきたときに、優しさだと思って何も言わないであげて。そうしたら楓奈も、適当に誤魔化すと思う」

から」

「どつちやって？」

「……えつと……、お祭りの活性化に貢献したんだ、とか、実は全部目を瞑って撃つてたからー、とか……あ、ごめんなさい」

あまりに無理な誤魔化し方に真顔になった僕らを見て、何故か追滝は謝った。

「そついえば古館さんは何してるの？」

おそらく話題を変える為だろう、追滝は少し急いだ感じで古館に話しかけた。思わず真顔になっちゃって何かごめんね。

話しかけられた方の美奈は、まだ焼きそばをもぐもぐやっていた。二人分の量だから仕方ないけど、だから食べてあげるよって言ったのに。

美奈は口一杯で話せないようなので、僕が代わりに答える。

「美奈は今、ソース焼きそばと塩焼きそばを混ぜたら美味しいかどうか、研究しているん」

「違う」

不機嫌な声に割り込まれ、黙れという意味の睨みを効かされ、僕は静かにならざるを得なかった。

「ソースが濃いから、塩焼きそばで薄めて食べてる。それだけ」

そう言つて、美奈はまた焼きそばを口に突っ込んで、不味そうな顔になる。

だから何でせっかくの浴衣姿なのにそんな顔をするかねえ。追滝を見習つたら？

「古館さん、味の濃い食べ物嫌いなんだね」

「……うん」

「欧米風の食生活が日常に浸透してくる中で、巷に溢れている濃い味付けを避けて、日本人独自の僅かな味の違いに風情を見出すというのは、今時珍しい、良いことだ」

ちよつ、追滝さん、急に説明書みたいな難しい単語大量に使つて話さないでください。何言つてんのか分からないよ。

見れば、僕だけでなく、トシも美奈もぼかんとした顔で追滝を見ている。

「……つて、家庭科の教科書に書いてあつた」

そう締め括つた追滝だが、僕も美奈もトシも、何のことやらという顔のままだ。

ただひとつだけ言わせてもらつたら、美奈の味の好みに風情とかは特に関係ないと思う。

不機嫌な時の美奈並みにむすつとした顔の作利川が、人混みをか

き分けて出てきたのは、美奈がやっと焼きそばを完食して僕がそのことを幼稚園児にするみたいに褒めて足を踏まれかけているときだった。

「あ、作利川……」

戦果はどうだった？　と思わず聞きかけてから、美奈の足踏み攻撃を華麗に回避した僕は全力で口を閉じた。

さっきの話在即座に思い出したし、今の作利川の顔を見れば聞かなくとも分かることだったしね。

僕らがしていた、全く当たらなくて不機嫌になった作利川の対処法についての話など知る由もない作利川は、いじけた子供みたいに地面を爪先で突いて呟く。

「……完敗した」

「そ、そっか……」

あれっ、ここは誤魔化してくる場面じゃなかったの？　素直に落ち込んでるよこの人、と横目で追滝にメッセージを送ると、追滝の方も予想外だったのか、目をぱちくりしていた。

割と作利川をからかうことが多く、わけ分かんない目に遭って少し作利川に不満があったトシでさえ、どうするべきか思索しているっぽい表情をしている。

そこへ現れたのが、僕らのやりとりなど聞いていなかった古谷。

古谷は、何かのキャラクターのお面を斜めに被り、腕に光るリストバンドをいくつか詰め、いかにもお祭りを楽しんでいそうな格好

だ。

「やつ、みんな！ ほらこれ見て戦利品！ えへっ、ちょっと調子に乗って取り過ぎちゃった……んだけど……」

意気揚々と両手に景品を抱えて人混みを抜け出てきた古谷だったのだが、テンションが低い値で停滞している僕らの空気を前に、段々と言葉が元気を失っていく。

極めつけに、作利川に（ほとんど私怨で）黙れとばかりに睨みつけられ、古谷は小動物のようにびくっと身を縮めた。

こら作利川、古谷に当たるなよ。何も知らないんだから。

睨まれて若干びびったのかもしれないが、それでも健気な古谷は、おずおずと作利川に声をかける。

「……えつと、どしたの楓ちゃん。いつもの元気はどこ行っちゃったの？」

「……味羅。気遣ってくれるのはありがたいけど、出来ればその景品どもを私の見えないところに置いてくれないかな。無性にムカつく」

「ええっ!?!?」

さっぱり理解出来ていないようなので、説明してあげようと思ったのだが、作利川の手前だし正直に言っていないものかな……と悩んでいたなら、僕より先にトシが教えてあげてくれた。

「古谷、今作利川が元気を無くしているのはな、射的のせいだ」

射的のせい、という言葉だけで分かったらしい。古谷は得心した顔になった。

少し前は作利川の射的系のヘタさを槍玉に挙げて笑っていた古谷だが、今はそのような挑発行為はせずに、作利川にそつと話しかける。

「楓ちゃん、じゃあこの中から好きなやつあげるよ。それで機嫌直して」

「否、私はそんな小学生みたいな慰め方をされても嬉しくない。ていうか私のプライドにかけて、他の人の取った景品なんて欲しくない」

それはプライドつつつか、我俣とも言えるんじゃないかな。

どことなく口調まで変な作利川を前にして、互いに顔を見合わせた僕らだったのだが……。

誰よりも早く、美奈が言葉を発した。

「……じゃあ、次、行こう」

「……」

……、もうちょっとだけ、気合いの入ったかけ声であればより望ましかったんだけど、美奈にそんなことを要求するのはね……。それに珍しく場の舵を取ろうとしてくれたんだ、感謝しないと。

美奈の声に背中を押され、古谷がいつもよりちょっぴり明るい声

を出す。

「そ、そうだね、次行こう！ 私さっきみんなのお父さんとかがいる屋台回ってきて、それでこのお面とかも貰ったんだけど、みんなも行ってみようよ。私のお父さんはきつと喜ぶよ。それに楓ちゃんのお父さんも屋台の担当にはなっていないの？」

「確かなってたと思うけど、別に行かなくていいよ。それより、うん、味羅のお父さんの屋台行ってみよう」

古谷の言ってた、みんなのお父さんとかがいる屋台ってのは、ボランティアで屋台をやっている地域のおじさん方のことね。これだけ大きなお祭りだから、割と様々な同級生の親を見かけたりするのだ。主にPTAだけだね。

僕の両親は屋台を担当してはいないけど、トシや追滝の親御さん方は屋台を担当することになってたと思う。

作利川の機嫌がちよっぴり回復したので、みんなはほっとしたようだったが……。

僕は作利川の、『別に行かなくていいよ』という台詞に、ちよっとした引っかけかりを覚えていた。

7・5 本当に怖いのは

がさり、という、どこかで生き物の気配が動いた音がしたような気がした。

その音に、僕は思わず立ち止まったのだが、それっきり何も起りはしない。音もしない。

「……はあ〜」

自分の溜息だけが、やたら大きく聞こえる。

夏祭り会場の真っ只中にいるときは、こっちはばかり煙を流してくるかのように鬱陶しかった風も、全くと言っていいほど感じられない。

あれだけうるさい祭りの喧噪も、さほど離れてはいないはずなのに、どれだけ耳を澄ましても聞こえなくなっている。どんな防音処置が施してあるというのだろうか、ここは。

さっさと終わらせてしまおう、と、さらに一歩、風化した石畳に足を踏み出したとき

僕の浴衣の襟元が、いきなり後ろからぐいっと引っ張られた。

時を遡ること、だいたい10分ほど前。

すっかり夏祭りを満喫し、様々な夏のアイテムを身に着けた僕らは、作利川に連れられて、とあるお寺の境内に忍び込んでいた。

四方をしっかりと樹木に遮られ、まるで周りから切り離された別空間と化しているここは、住職も誰もいない、廃墟のただっ広いお寺である。

もちろん完全に放っておかれているわけではなく、誰かの所有物なんだろう。申し訳程度に草木や建物の管理はされているようだが、落書きがあったり、ゴミが捨てられていたり……。だいたい、お寺自体も塗装が剥げていて建材がささくれ立っている。

僕らが今立っているのは、道路からの入り口から、本堂へと伸びる一本の石畳の道の、すぐ脇だ。道路からの入り口と言っても、外からは見えないように木製の戸があって、その木の戸はしっかりと釘で留められているので、そこからは入れない。僕らは植木や茂みの間を通ったりしながらここまで来たのだ。

「静かだね、ここ」

きよろきよろと辺りを見回していた古谷が、その台詞を自分で意識しているかのような小さな声で言った。

そう、とても静かだ。さっき、その茂みの下をくぐってくるま
では祭りの音が聞こえていたのだが、今はさっぱり聞こえない。虫
の鳴き声もないようだ。結界でも張ってあるのかな。

「ボロつちい寺だなこれ。中まで入ったことなかったから気付かな
かったけど、この辺引つ張ったら取れそうじゃねえ？」

「確か少し前に、小学生がここで花火して、危なく火事になるとこ
ろだったっていうニュースがあったはず。あ、ほらここ、ちよつと
焼けてる」

「あつ、ホントだ……。うわ、煤っばい。触らなきゃ良かった」

そんなやりとりの側で、僕らをここに連れてきた作利川は、しば
らく僕らに背を向けて古ぼけたお寺を見上げていたのだが……。
しばらくして、こちらを振り向いてから話し出した。

「いい、みんな。ここはね……。誰もいなくなって、霊が棲みつく
ようになったお寺なのさ」

「……………」

しーん。

もともとぺちゃくちゃ喋っていたわけでもないが、みんな一斉に
静かになった。

ただでさえ静かなのに、より一層場の静かさが増したように思え
た。青白い月明かりだけが、雲に隠されたり出てきたりして動いて

いる。

その不気味なまでの静かさをさっさと破ったのは、美奈。

「何言ってるの？」

普段の口調に微かに変なものを混ぜて言う美奈に対し、作利川は、何のつもりか知らないが妙に真面目な顔をして言った。

「そのまんまだよ。この寺には、幽霊が出るという噂がある。深夜に誰か小さな子供がお寺の脇で追いかけてっこをしていたとか、賽銭箱から変なものが生えていたとか。お寺の中から物音が聞こえたとか、人影だけが歩いていたらとか、そういう噂話の多い寺なんだ」

それを聞いて、僕は不覚にもぞくつとした感覚が背中に入った。

夏だというのに急に寒くなったような気がして、思わず僕は左右を確認すると、トシも僕と似たような動作をしていた。

一方、追滝なんかは全く気に掛けていない様子で、平然としたまま作利川に続ける。

「うん、聞いたことある。このお寺のどこにもお墓がないのは、こは引き取り手のない遺体が集まる場所で、今は封印された地下にただ放置されていったから、夜な夜なその誰だか分からない人達の霊がそこから出てこようとす……なんていう話もあったよね」

追滝、そういうの真顔で言うのやめてくれませんか。君が言っと何倍も真実味を帯びて怖いんだよ。

言われてみれば、他のクラスでそんな話を聞いたこともあるけど

さ……。

僕はこの寺の敷地内の地面に立っているのが何だか嫌になって、ちよつと移動して石畳の上に立った。

そうして、古くてボロいお寺を眺めてみる。そんな風に言われると、出来ればさっさと帰りたくなるよね。チキンだと笑うなら笑えばいいけど、怖いものは怖いんだから仕方ない。特に、ここからは見えない、お寺の脇を通っていく向こうの方なんか行ってみたいくない。

「そうそう、さっすが絵理はよく知ってるね」

この人も平気なんだろうね、作利川は悪戯っ子のような表情をしている。

霊とか気にしなさそうなの二人以外の僕らは、少しの間押し黙っていたのだが、怖々とした様子ながら、古谷が先を促した。

「え、楓ちゃん……それで？」

「それでね」

そこで一旦言葉を切ると、作利川は堂々と手を腰に当て、にやつと表情を崩した。

「ここで肝試しをしようかなって」

当然、嫌がったに決まっていた。

えー……という不満げな声が、僕とトシと古谷の三人分合わさつて流れる。

僕ら三人は一致団結して反対の声明を述べる。

「いいよ、肝試しなんかしなくなつて」

「話だけ聞いて盛り上がるものなんだよ」

「お祭り楽しかったんだから、普通に家に帰ろうよー」

「……」

だが、作利川はちつとも譲ってくれない。

黙つたまま、胸を張つてこちらを見据える作利川の目を見た僕は、これは何言つても聞いてくれなさそうだな、と早々に諦めかけた。

作利川は幽霊とか平気そうだからいいかもしれないけど……。肝試しなんて好き好んでやることじゃないよ。だいたい、ここに本当に霊がいたとして、その人達が怒つちやつたらどうするんだよ。

と、僕がまた寺を眺めながら不安な心持ちになつたとき、とことん平常心の追滝が口を挟んだ。

「楓奈、流石に、安らかに眠れない死者の話で遊ぶのはよくないと思つよ」

追滝も霊とかそういう類のものは平気なんだろうが、今言つたことに関係してか、僅かに眉を潜めていた。

作利川のことを咎めているつもりなんだろうけど……。何だろつ、微妙に難しい言葉を使って喋るから、追滝もふざけているように聞

こえる。真面目に言ってる追滝には申し訳ないけども。

「私は別に遊んでないよ。肝試しをしようって言ってるだけ」

「誰かが呪われたりしたらどうするの？」

「そしたら私が責任取るよ。その呪い全部貰うから。とにかく肝試しがしたいんです」

「うーん……」

困ったように頬を掻く追滝。とても説得出来そうにないなつてことを悟ったんだろう。

まったく、追滝は正しいんだよ。作利川が強情なだけ。何だよ、呪い全部貰うって。

「……。終わったら、なるべく早く帰ろうよ」

「おっけー、分かった」

仕方ないという感じで妥協した追滝に、作利川は真面目な顔をして頷いた。

この顔だから、死んだ人の霊で遊ぶとかそういう不埒なことは一切考えていないんだろうけど、何だか溜息が出ちゃうな。そんなに肝試しがしたいの？

追滝が諦めちゃったのなら、僕らに対抗する術はない。

出来るだけさっさと終わらせよう、ということ、作利川の肝試しイベントをやむなく承認した。

というわけで、僕はいま肝試しの真つ最中なんです。分かってもらえた？

肝試しのルールは簡単で、作利川がお祭りを取ったヨーヨーを5つ、お寺の外のどこかに隠しておくから、それを寺の向こうで待っている作利川のところへ届ける。挑戦するのは一人ずつで、無事に作利川のところまで来れたら、大声で知らせて次の人の番になるとのことだった。

ルールを説明するが早いか、作利川は颯爽とお寺の脇を通って奥の方へ入っていき、しばらくして恐怖を微塵も感じさせない足取りで戻ってきた。その度胸には心底感嘆したよ。

それで、自分が待っている場所を、地面に大まかな地図のようなものを描いて僕らに教えると、また作利川はさっさと寺の向こう側へ戻っていった。

肝試しに挑む順番はじゃんけんと多少の譲歩で決め、追滝、トシ、古谷、僕、美奈という順で挑戦しようということになり、僕の番が回ってきたので、僕は未だに気が乗らないながらも奥へ進んでみた。

……というのが今までのざっとした流れなんだけど……。

おっとっと、のんびり説明なんかしている場合じゃなかった。僕いま、現在進行形で後ろから首を絞められてるんですよね。

思いつきり潰されてしまった気道を確保するべく、僕は後ろへ引っ張られながらも振り向くという格好で、掴まれた襟元を引っ張り返した。

「うっ、げほっ、ちょっといきなり引っ張んでももらえますかね！」

「……」

僕の後ろで、未だに人の襟元を掴んだまま立っているのは、誰だろう、美奈。

……はあ。僕はもう、引っ張られた時点で誰の仕業か分かったよ。だって、美奈じゃなかったら、幽霊か僕の気のせいということになるんだからね。

僕は喉を押さえつつ、空いているもう片方の手を腰に当てて言う。

「……で、何なの？いきなり人の首元を後ろから引っ張って窒息させかけたという事実には理由があるんですか？」

早口で聞いたのだが、美奈は何も言わなかった。その代わりに、目で何か言っているような気がする。

あくまでも気がするだけで、それだけで何を言っているのか分か

るわけじゃない。美奈とじーっと見つめ合ったって何も分からないし、僕は、この肝試し早く終わらせたいんだから、用件を早く言ってよという意味を込めて促す。

「ほら美奈、早く。僕の番が来てるんだから」

「……ん」

急かされたことで、美奈はちよつとたじろいだ。

美奈はだいたい不機嫌が無表情、せつかく可愛いのに……と僕らが散々残念がるような、そんな顔をしていることが多いのだが、今の美奈の表情は困った表情に見えた。

最近よく困った美奈を見るようになったな……。

美奈は、少し、何かを言おうと逡巡した後、結局僕の浴衣の襟元を掴んでいた手を離す。

「……何でも、なかった」

「そう?」

僕にはよく分からなかったけど、何かを言いかけてやっぱ何も言わない……という実に時間泥棒な行動をとるのは、美奈にはよくあることだ。感心はしないけどね。

だから僕はさして気にせず、早く先へ進もうと美奈に背を向けかけた、のだが。

その時　　美奈が、自分の浴衣の帯をぎゅっと握り締めているのを見て……唐突に思い出した。

美奈は、暗いところとお化けの話が合わさったものが苦手だったんだ。

ここ数年、そんな瞬間は無かったからすっかり忘れていた。

美奈はお化けとか妖怪とか、幽霊とかの話聞くのは別に平気だし、ただ暗いところに行くのも平気だ。だけど、怪談話をするのが暗い部屋だったり、夜に心霊スポットに行くとかなると途端に怖くなってしまふという特殊な性癖があるんだ。っていうか、あつたんだ。

馬鹿なっと思う人は、一度美奈に聞いてみればいい。冗談交じりで。そうしたら、美奈がいかにも本気でそうなってしまふのかわつてことが蹴りの威力で分かるから。

僕がそのことを思い出せたのは、服をぎゅっと掴むという、その美奈の仕草にある。

昔々、まあ小学2年生か3年生くらいの頃かな。美奈と僕ら兄弟^{きょうだい}が、その頃の同級生の友達と一緒に、今年のように夏祭りに来たとき、ふと、とある屋台のイベントで怖い話を聞いた。

その帰り、つい長くお祭りを楽しみすぎて暗くなってしまった帰り道で、美奈はずっと今みたいに浴衣の帯を握り締めていた。美奈がそんな風にガツガチに怖がっていたから、僕らは怖い話を忘れさせる為に、道々うちわ合戦をして遊んで近所のおじさんに怒られたんだ。間違いない。

それらのことを一気に思い出した僕は、お寺の方へ行きかけていた足をぐるりと方向転換させ、急いで捲^{まく}し立てた。

「ごめん美奈、そうだ、思い出した！ 美奈はお化けが出るかもしれない暗いところが苦手だったんだね！」

「ちよつ、うるさい！ 声大きい！」

僕の叫び声に、美奈は瞬時に顔を赤くすると、黙れとばかりに腕を殴ってきた。

それでいて、左手は浴衣の帯をぎゅつと掴んだままだ。

ああもう、そうだった！ そうだったよ！ 何でそのことを忘れていたんだろう。覚えていたら、作利川にそのこと言えたのに。僕としたことが！

自分でも忘れていたのが信じられないくらい、美奈は超が付くほどこの瞬間が駄目なのだ。

悪戯っ子の僕でさえ、幽霊の話をした後に美奈を暗い部屋に閉じ込めるとか、絶対やろうと思わないくらい。それくらい、美奈の苦手分野だった。

思い出して、急に慌て出した僕だったが、同時に疑問も抱いた。何で美奈は言わなかったんだろう。一人だけそんなことを言うのは恥ずかしいから？

「言えば良かったじゃん、作利川に」

「……うん」

美奈は今日何度目だろうか、沈んだ表情で頷いた。

困ったり沈んだり……。今日の美奈は、どこか弱気だ。

ひよっとしたら美奈は、自分の都合でみんなの遊びを取りやめにするのが申し訳ないとか思ったんだろうか。自分は怖さに耐えて？ だとしたら杞憂もいいとこだ。むしろ僕は感謝したかもしれないのに。

僕は俯いて黙っている美奈に、そつと話しかける。

「じゃあさ、僕が作利川に伝えてくるよ。その間一人で待ってるくらいは平気だよな？」

「……。……。平気に決まってる。馬鹿にしないで」

美奈の返事は、少し強めの口調だったけど……。なら、その最初の沈黙は何なのかな。心配なんだけど。

僕は美奈の顔を見たが、困ったような表情ではなくなっていた。

少し迷ったけど、どっちにしても早い方がいいかと思い、僕はお寺の奥を指さそうと振り向く。

その瞬間、同時にこう言っていた。

「怖いって正直に言ったって、僕は美奈のことを見損なったりはしないよ」

どうして咄嗟にこんな言葉が出てきたのかは、自分にも分からなかった。

何か知らないけどしゃっくりみたいに口をついて出てきたんだ。

そうして、僕が古寺の方を向く直前に、美奈のちよつと驚いたよ

うな顔が見えたのだが、その顔は「は？」という不機嫌な声に消されてしまった。

さて、もうなんかちょっと霊にビビるわとか言っていていられないくらい目的意識が働いた僕は、さっさとお寺の縁側みたいなのところに置いてあったヨーヨーを手に取り、作利川に教えられた場所を指摘した。

その場所では、作利川が自分の長い黒髪を前に持ってきて、かの有名な貞子みたいな出で立ちで僕を待ち受けていたのだが、それに対する突っ込みもままならないまま僕は用件を告げる。

「ほら作利川、ヨーヨー持ってきたよ。で、ちょっと言いたいことがあるんだけど、普通の格好に戻って」

髪をかき分けていつも通りの姿になる作利川は、ものすごく何か言いたげだったのだが、僕はそれを無視する。

「他のみんなは？」

「別の場所で待ってもらってるよ。それで言いたいことって何？」

「うん。実は、美奈が、幽霊が出るって噂されているこの寺みたいな、霊とかの話がある場所と、暗いところが一緒になる瞬間がすごい苦手だったんだよね」

一気に言った。

「はい？」

髪を直す手を止め、さっぱり分からないという怪訝な表情で聞き返してきた作利川。

そりゃそうだよ、僕が唐突すぎました。

でも、こっちは今とても怖い思いをしている（かもしれない）美奈の為に、一刻も早くこの肝試しを取り止めにしてもらいたいのです。

僕が二度三度と、似たような説明を作利川に繰り返すと、ようやく僕の言いたいことが分かってきたらしい作利川は、後ろ髪をがしがしと梳きながら訊ねてくる。

「つまり、美奈は肝試しとかできないってこと？」

「うん、できないってというか、厳しいってこと」

「ああそう……」

本当のこと言えば、美奈はきつと肝試しなんてできないだろう。それくらい怖がる。でも、美奈の面子のために、できないとは言わないでおいた。

作利川を説得する為には、できないと思うって正直に言った方が良かったかな？

しばらく、納得いかなげに下の方を見て、何事か考えていた様子の作利川だったが。

ふと、そのことがまるで僕の非であるかのように、じろりと僕を睨めてきた。

「稲橋君……。そういうことは、早く言ってくれないと」

「えっ、僕！？ 僕の責任なの!？」

「そうだよ。ああもう、美奈に悪いことしたなあ……」

申し訳ないと思ってるみたいだけど、何で僕にも責任を渡すかな。どう考えても僕は悪くないでしょうに。こっちが乗ってなくても肝試しやりたがったくせに。

無言で作利川を睨んだ僕に、作利川は睨み返してくる。

「っていつか稲橋君、美奈はどこにいるの?」

「どこって、さっきまで僕らがいる場所で待ってるよ」

「馬鹿じゃないの? 何で一緒に連れてこないの? 稲橋君は、美奈が怖い思いをすることを百も承知で一人で待ってるように言ったの?」

おい、そっちが一人ずつ挑戦しろって言ったんだろ。だから僕はわざわざヨーヨーを取ってくる手間もちゃんとかけてから来たっていうのに。作利川だって僕が切り出す前は貞子の格好だったくせに。何だよこの仕事に難癖を付けてくる理不尽上司を前にしているみたいな感覚は。ちょっと腹立ってきたんですけど。

美奈に可哀想なことをしたからって、僕にまでそういう仕打ちを

することないと思うんだ。

言っておくけど、美奈が大丈夫かどうか心配なのは僕だってそうなんだよ。

流石に馬鹿とまで言えば酷いと、さしもの作利川も気がついたのか、少し険が取れた口調で言い直してきた。

「ごめん、馬鹿は言い過ぎた。考えなしにしておく」

そうじゃないだろ。

ここで論議しても言うことが伝わらなそうなので、僕は作利川にさらに、「ほらさっさと美奈のところに戻れよそれがお前の仕事だろ」的な何かを言われる前に、来た道を引き返す。

言いたいことは伝えたんだし、早く美奈のところに帰ろう。

僕の後を作利川がついてきているようだけど、それを確かめはしない。

いくら暗いところが駄目だって言っただって、美奈はもう小学生じゃないんだから、作利川が心配するほどじゃないはずだ。美奈だって、平気だって言ったんだ。

そう思ってるはずなんだけど、僕は何故か急いでいた。帯をぎゅっと掴んで不安げにしている美奈が思い浮かぶ。

そうだよなあ、僕は美奈がお化け屋敷に入れないことをしよっちゆうからかっていたし……。夜中にトイレ行くのは余裕だったくせに、ちよっとトイレの妖怪の話をしただけで一人じゃ行けなくなる美奈が面白くて……。それだけ美奈の怖がり方は尋常じゃなかったんだ。だから僕は、自分にどう言い聞かせても、別の部分で美奈は

本当に大丈夫なのかって思っちゃうのかもしれない。

作利川の言うことだって、理不尽だけど、その通りだ。後になつてこれだけ心配になるんだから、ヨーヨー拾ってくるとか馬鹿みたいな条件を律儀に守らないで、美奈と一緒に来れば良かったんだ。どのみち美奈には肝試しさせられないってことを伝えるつもりだったんだから。

ああ、あの子の僕は何で美奈を待たせようと思っただろう。

考えれば考えるほど、美奈が本気で幽霊と暗いところという組み合わせが苦手だった、という事実が、沸くようにして思い出されてくる。

美奈の足が竦んじやって動けないから、夜を吹っ飛ばすほど騒ぎながらうちわ合戦をしたとか……運悪く心霊番組を見てしまった日の夜は、部屋の電気を消させてくれなかったりとか……夜にお墓参りをしたときは、僕の手を握ってずっと目を瞑っていたりとか……。それらを思い出すほど不安は増す。

全部取り越しの心配であってほしい。

そんな風に、僕の頭が後悔と心配でいっぱいになったとき、ようやくお寺の脇を抜け、さっきまで僕らがいた、本堂前の広場みたいな場所に出られた。

「……………はあ、はあ……………」

いつの間にか、走るような勢いに変わっていたらしい。後ろを振り返ってみても、作利川はいない。そんなにスピード出たのかな。

そして、石畳の上には、周りの風景と比べ、かなり目立つ赤い人

影がひとつ。美奈の浴衣だ。

息を切らせながら現れた僕を、美奈は、さつきと同じ場所に、同じように立って、奇怪なものでも見るような表情で見ている。

「……どうしたの」

「いや、ちょっとね、作利川に伝えてきて、何で連れてこなかったのかって聞かれたから、美奈がさ、怖くて死にそうになってたらどうしようって、思って心配になって、急いで戻ってきたんだけど……」

驚くほど息が切れている。もう酸欠かもしれない。

大して怖がっていないなさそうな様子の美奈を見て、一気に安堵の気持ち溢れた胸に手を当てて、僕は大きく息を吐く。

「何にしても、平気そうではよかった……」

はあ……と溜息なのか息切れなのか分からない音を漏らす僕。

そんな僕を、ぼかんとした、という表現がギリギリでできるかもしれない顔で見た美奈は、ふいに呆れとも感心ともとれるような目になって言った。

「……悠揮って変なことに一生懸命になるね」

「変なことってさあ……。こっちはそれなりに本気でまじいことをしたなって思ったんだよ。だって小さい頃の美奈、怖がり方すごかったし……」

あそこまで本心から怖がっているように見える人を僕は他に知らないんだ。

と、最後にもうひとつ、安心とか色々混ざった息を吐いたとき。僕の方に歩み寄ってきた美奈が、唐突に、がっ！と僕の腕を掴んだ。

「痛い、えっ……何？」

何で掴まれたのかさっぱり予想ができず、困惑する僕。捻りあげられるのかと思ったが、普段の美奈と比べたらそれほど強くない力で掴まれているだけだ。

美奈は、何なんですかと目で問いかける僕と、意図的に目を合わせないようにして、蚊の鳴くような声で一言、言った。

「……怖かった」

「あ……」

思わず言葉に詰まると、美奈は今度は僕の顔を見て言う。

「……怖かったからその分今から悠揮をぶん殴る」

「は？ いやちよつと！ 殴るなら僕じゃなくて肝試しやろつって言い出した作利川じゃないの！？ 何なんだよ美奈も作利川も僕のせいにして……」

「楓奈は女だし。それに今ここにいないし」

「はっ！？ あいつ、もしかしてこれを見越してどっかいなくなっただのか！？ 待った美奈、そのパンチは作利川に次会うときまでと

つといて！　つていうか痛い痛い！　腕を握る力が強い！　分かった分かりましたよ、ごめんねあなたはよく耐えました偉いね……痛
いって！！」

美奈に腕を砕かれそうになりながら、僕は早いうちに作利川をと
つちめてやろうと決心したよ。

7・0 イカとラーメンの繋がりって何？

皆さん、こんにちは！ それとも、今は暗くなってきたし、こんにちは？

お兄ちゃんの妹の、稲橋悠奈だよ！

あっ、お兄ちゃんじゃないや、稲橋悠揮の妹の、稲橋悠奈だよ！

私はいま悠介と一緒に、夏祭りに来ているんだけど、私たちより早くお祭りに来たはずのお兄ちゃんが、なかなか見つからないんだよなあ。

お兄ちゃんはその浴衣だし、目立つと思うんだけど、どこに行ったのかなー。

私、さっきから屋台の間をきよろきよろしながら動きっぱなし。不審者かも。

「ねえねえ悠介、お兄ちゃんどこにいますか？」

「だからさっきから探してるんだろー。その質問もう2回目だよ」

2回目ならいいじゃん。また聞いただけじゃん。

悠介はすぐ文句つけてくるんだから。やなやつ。

私が腰に手を当てて悠介を睨むと、悠介も馬鹿にした目でこっちを見返してきた。むかつく。

まっ、見つからないなら見つからないでもいいけどね。

お兄ちゃん、今は同級生の友達にいるんだと思うし。私たちが邪

魔したら悪いかもしれないな。

でもどうして悠介と一緒に祭り来なくちゃいけないのかなあ。
私はもう3年生なんだから、一人でだって来られるのに。お兄ちゃんまで、一人だと迷子になるとか私のことを馬鹿にするし。友達と来ればよかったな。

「悠介、ここからは別行動にしようよ」

浴衣の帯を強く引つ張って、私は悠介に気付かせる。

提案した私を、またまた馬鹿にした目で見た悠介は、とんでもない呆れ声で言ってくれた。

「はあ？　じゃあお母さんから貰ったお小遣い、おれにも渡せよ。
初めからずっと思ってたけど、何でお前が独占してるんだ。ずるいぞ」

うっ。

「べ、別にいいでしょ」

「何がいいんだよ馬鹿か悠奈。じゃあそれ全部おれに渡せよ」

「やだよーだ」

「やだよーだじゃねーだろ二人で仲良く使えって言われたのに独り占めしやがってこのチビ」

「チビじゃないもん！　自分だっておっきくなくせに！」

「悠奈よりは背は高いけど」

「く、くうう〜っ！ このお小遣いは絶対あげないから！」

「そうやってお前が言ってるから別行動できないんだろ！」

ぎゃーぎゃー、お祭りの最中にケンカしてる私たち。

だって、さつきから悠介ったら、あれも欲しいこれも欲しいって何でも買いたがるんだもん。私がお財布握ってないと、すぐに中身無くなっちゃうよ。

このお金は、お面買って、わたあめ買って、輪投げやって、ヨーヨーすくいして、スーパースクールすくいして、それから残った分を貯金箱に入れようって昨日決めたのに。

どうして悠介はそれを忘れちゃうのかなあ。馬鹿なの？

ケンカして騒ぎながら歩いていた私たちは、かなりうるさかったと思う。それでも、直接声をかけてくる人はいなかったんだけど、だいぶ歩いて、ついにある屋台の前で呼び止められちゃった。

「この馬鹿！ 悠介の馬鹿！ お仏壇に蚊取り線香供えようとした馬鹿！」

「うるっせ今関係ねーだろそれ！ しかもいつの話だよ！」

「ちよつと君たち、そんな大きな声でケンカしてるとうるさいぞ」

いきなり聞こえた声に、私たちはすぐ静かになって、声がした方を見た。

私たちに咎める声をかけてきたのは、がっしりした体格のヒゲのおじさん。

たぶん私たちのお父さんよりも年上だと思う。

屋台やってるし、誰かのお父さんかな？

低くてよく聞こえる声。私たちは気まずくなって黙る。

知らないおじさんに怒られちゃった。悠介のせいだからね。

それと、おじさんの屋台には、おっきな文字で「ラーメン」って書いてあった。

だからラーメン屋さんかと思ったけど、ラーメンの匂いはしない。何なんだろう。

「おじさん、ここでラーメン売ってるの？」

悠介が聞いた。

あーあ、それは私も思ったけど、今怒られたばかりなのに、何でそうやって敬語も使わないで聞けちゃうの？

怒られても知らないよ？

私は心配になったけど、ラーメンのおじさんは怒んなかった。

というより、普通に笑って悠介に答えてくれた。ちょっとびっくり。

「いやいや、ここで売ってるのはするめいかだよ。君も買っていくか？ 酒にピッタリだ」

この人、私たちみたいなお子供に向かって、お酒にピッタリだって

言ったよ？ どういうこと？

って私は思ったんだけど、悠介は気にならないみたい。

悠介のことだから、気付いていないだけかもしれないけど。

「するめいか？　じゃあ何で屋台にラーメンって書いてあるの？」

「それはな、本当はラーメン屋さんだからだよ。だがここはラーメンを作るにはちと狭すぎるから、するめいかを売ることにしたんだ。しかしするめいかを売るにしても、せつかく屋台を持っているんだからな、借りる手間が省けていいだろう。ラーメン屋のするめいか、どうだ、美味しそうだろう？」

……手間が省けるからって、普通ラーメン屋さんの屋台を持ってくるかな？

うーん……なんか、この人も、ば……ううん、何でもない。

大人に向かってそういうことを言うのは、心の中でも駄目だよ。お兄ちゃんも、年上は敬いなさいって言ってたし。うやまうってどついう意味がよく知らないけど。

私は、屋台について気になったんだけど、適当に笑って聞き流した。

「うん、美味しそう！　聞いたことないけど！」

もう、悠介は馬鹿でいいよ。

私がすっごい冷めた目で悠介を見ていたら、それに気付いた悠介が突っかかってきた。

やめてよね。見てただけなのに。

「悠奈、その目は何だよ」

「別に？ 何でもないもん」

「何でもないなら何でおれのことをそんな冷たい目で見てくるんだ
よ」

「別に？ 理由が分からない悠介はしよせん悠介なんだし。……あの、何で私のこと見て笑ってるんですか？」

最後の部分は、私を見て何だかにこにこしているおじさんに言ったんだよ。

だって本当にこにこしてるんだもん。私は何も面白いことは言っていないのに……。

おじさんは、屋台に肘をついて、よく聞こえる低い声で言った。

「君たち、特に君みたいな子を見ると、小さい頃の娘を思い出してなあ……。あの頃の娘は反抗的で可愛かったんだよ……」

しみじみとした口調で言うおじさん。

……何かこれから娘のことについて語り出しそう。私は別に聞きたいとは思ってないよ、おじさん。

うーん、これがよく言う親馬鹿ってやつなのかな？

あっ、大人の人に向かって馬鹿って言っちゃったよ。たいへん。

あと、反抗的で可愛いとか言ってるけど、お兄ちゃんは今私が反抗

的になつたら絶対今の何倍も苦勞するって言つてたよ。

親馬鹿の子供自慢つて長くなるらしいから、続く前に私は別の話に変えようと思つただけど、無神経つていうか、無頓着つていうか、考えなしの悠介がすぐ食いついちゃった。

「おじさんの娘、今は可愛くないの？」

「今でも可愛いかもしれないけどな、残念なことに、事情があつて口をきいてくれないんだ」

「えっ、おじさん可哀想だね。おれお父さんと口きかないなんてことないよ」

「そうだろうな、小さい頃はみんなそんなもんだよ。で、可哀想なおじさんのするめいか、要るか？」

「うん、いる！」

いらないよ、もう黙つててよ、悠介の馬鹿。

お兄ちゃん、この人たちなんとかして……。

8月12日 晴れ

今日は夏祭りに行った。

悠揮が、浴衣着た方がいいって、お勧めするとか言うから着ていったけど、やっぱり恥ずかしかった。

今度からは、もし着るなら、もっと目立たない浴衣にしてほしい。

それにあんな綺麗な浴衣は、私にはもったいないと思う。

みんなで屋台を回ったとき、古谷さんのお父さんの気前の良さにびっくりした。

次から次に色んなものをくれようとするから、私たちも困ったし、後ろで作業してた人も困ってた。赤字になったらどうするんだろう。

他の屋台では、追滝さんは金魚すくいが上手だっことを知った。

楓奈は射的が凄まじく下手らしいけど、どれくらい下手なのか、ちょっと気になる。私もあまり得意じゃないけど、あそこまで言われる楓奈ほどじゃない、はず。

それから、輪投げ屋台のところでは坂原君と海内さんの二人に会った。

あの二人はずっと前から一緒に来ているのかと思うと、ちょっと羨ましい。悠揮はあまり、私と二人きりでどこかに行きたがらな

いから。

楓奈の独断で肝試しをやることになったときは、ものすごく焦った。

結局、悠揮が気付いてくれた。自分じゃ何も言えなかった。でも、そのことでまた悠揮に心配かけちゃったし……。

私が肝試しなんて平気だったら、悠揮にも迷惑かけなくて済んだのに、情けない。

悠揮は、見損なったりしないって言ってくれたけど、私が気にしてるのはそういうことじゃないよ。

むしろ、悠揮はいつも私のことを助けてくれるから……。

もうあと1ヶ月は焼きそば食べたくない。

『日記』 #7 (後書)

∧.i.24980 | 873 ∧

8 - 1 代金は腕で（前書き）

この小説は約2ヶ月間更新されていません。

…… っっていう感じの表記が嫌いで気になって仕方がないので、もう投下しちやいます。

どうせ次は数週間くらい先になると思うんですけど……。 はぁ……。

これから入学式シーズンへと移り変わっていきますが、この人達は
まだ文化祭もやってない感じでのんびり学校生活してます。 中学校
いいなあ。

そんなわけで、スクリーンセーバーに気をつけて、疲れないように
して読んでくださいな。

8 - 1 代金は腕で

ある平日の夕方のこと。

夕飯間近のこの時刻、母上様から美奈を呼んでこいというご命令を賜った僕は、階段を上って二階へとやってきていた。

我が家の二階の廊下は直線で、階段を上って左が僕ら4人の子供達の部屋の戸が並ぶ廊下、右がベランダとなっている。その廊下の行き止まりにある窓からは、もう少しずつ暗くなり始めた外の景色が見える。

美奈はだいたいリビングにいないで、自分の部屋に引っ込んでいることが多い。リビングにいれば、わざわざ呼びに来ることもないんだけどなあ……とか思いながら、僕は美奈の部屋の前に立った。

コンコン。

と、美奈の部屋の戸を軽くノックする。

僕ら子供の部屋の戸には、それぞれ部屋の主の名前が書かれたネームプレートを掛けているんだけど、美奈のは本当にシンプルで、名前しか書かれていない。僕の方がまだ賑やかだ。一度、可愛くきやぴきやぴにデコレーションしてあげようかって申し出たら舌打ちされたから、それ以来特にこれを話題に出すことはなかったけど、もうちょっと飾ってもいいと思うんだ。女の子なんだから。

「……返事がないな」

廊下につっ立って呟く僕。

ちょっと強めにもう一度ノックしてみるも、やっぱり返事はこない。

ドア下の隙間から漏れてくる光を見るに、部屋の電気はついてい
るみたいだから、中にいるんだろうけど……。何をしているんだろ
う。寝てるのかな。

入るよー、と声を掛け、ドアをゆっくり開いたところで。

「……なに人の部屋に忍び込もうとしてんの」

「っ!?!」

背後から突然聞こえた美奈の声に、僕は驚きのあまり、思わずド
バン! と思いつきり美奈の部屋の戸を閉めてしまってから振り返
った。

いつも通りの格好をした美奈が、壁に腕を組んでもたれかかって、
不法侵入者でも見るような目で僕を見ている。

何してんだお前……という、後光ならぬ後殺気が沸いて出ている
ような気がする。

女の子の部屋に忍び込もうとした変態とか言われたらたまらない
ので、僕は慌てて弁解。

「いや、違うよ美奈。僕は別に美奈の部屋にこっそり入ろうとかそ
ういうことをしようとしてたわけじゃないんだよ」

「……分かってる。コンコンコンコン戸を叩いてたから、そろそろ

夜ご飯なのかなって」

なんだ、見てたのか。

一気に緊張感が抜けた。美奈の後殺気も見えなくなる。

「何だよ。外にいるならいるって教えてくれたらよかったのに」

「面白かったから」

うわあひどいこの人。ばっちり全部見ておいて「……なに人の部屋に忍び込もうとしてんの」とか言うんですよ？ いつもからかわれているからって、よくも僕のことをからかったな。

むすつと（実際にやると気持ち悪いので心の中だけで）膨れた僕を見て、美奈は片手でさつと後ろへ受け流すような動作をすると、自分の部屋の戸を開けて電気を消した。

電気のスイッチに手を掛けたまま、美奈はつと振り向いて、僕に確認を取る。

「それで、夜ご飯？」

「そう。だからわざわざ呼びに来たんだよ、感謝しなさいね」

「……どうせ、悠揮のお母さんに言われたからでしょ」

……うつ、仰る通りです。

図星なので何も言い返せないでいると、ふんつとばかりに方向転換した美奈はさっさと僕の前を通り過ぎ、階段を降りていく。美奈

が開けっぱなしにした部屋の戸を閉め、その後を追って階段を降りる僕。

とんとんと一段ずつ降りていく茶色い頭に、美奈の頭つてホント我が家にはそぐわない見事な茶髪だよなあ……とか思いながら、僕は話しかける。

「美奈は電気つけたまま、部屋出て何してたの？」

「……何でそんなこと気にするの」

「えっ……いや、何となく。特に理由は……、あ、そうか……トイレか。ごめんね変なこと聞いて」

「違う。馬鹿」

断じるように否定された。おまけに馬鹿とまで言われた。

馬鹿は余計じゃない？ と僕は後ろでふて腐れる。僕なりに察したつもりだったのにひどい。違うなら違うって言うてくれればそれで済むじゃないですか。

とはいえ、美奈はよく会話に乗ってくれるようになったと思う。少し前は、興味の無いことで僕が話しかけると、無言かうるさいでしか応えてくれなかったからね。そう考えると、台詞の最後にちよろっと付いてくる『馬鹿』くらい、我慢できるぞ。

……でも、言われっぱなしは癪なので反論。

「あのさ、馬鹿って言った方の方が馬鹿なんだよ。分かってる？ だから美奈も馬鹿なんだよ」

「小学生みたい」

振り返りもしないで美奈に一蹴された。

今の美奈に、マンガのような擬音を重ねて描くなら、間違いなく「っーん」である。

……悪かったね小学生みたいで。現役小学生の弟と妹がしょっちゅうこの文句を口にしてケンカしてるから、耳に残りすぎてるんだよ。

何でか知らないけど、僕らが小学生の頃もよく言ってたよそんなこと。「ぶっいたらブタによく似てる」とか、「バカって言ったらカバと結婚する」とか。一度、美奈に殴られそうになったときに前者の言葉を言ったら、グーに代わって綺麗で強烈なストレートキックをもらったから、あんまりいい思い出はないんだけど。

「……ちょっと、黄昏れていただけ」

「はっ?」

ちょっと過去のことを思い出していたものだから、いきなりそれを遮って聞こえた美奈の声に、僕は怪訝極まりない反応をしてしまった。

その反応がご不満のようで、美奈はちらつとこっちを振り返り、さっきより低めの声で繰り返す。

「だから、黄昏れていただけ」

「たそがれ？ …… ああ、外…… ベランダで？」

「そう」

「へえ、それはまた…… どうしたわけ。この空の向こうにはどんな世界があるのかなあとか、ファンタジックなことでも考えてたの？」

完全に冗談（からかいも混じっている）で言ったのだが、美奈はそれには反応せずに、『ちらっ』よりはちょっと長めの間、振り返って僕を見ると、どこか憂いを感じられるような表情でさりとらった。

「秘密」

「へえ…… 秘密ですか。美奈にしては珍しいこと言うね」

それは、美奈がだいたい黙れとかうるさいとか、答えたくない質問はそういう言葉ではぐらかすから、というだけではなく、僕に対して秘密だと公言することが珍しい、ということでもある。

もともと美奈は考え事を自分の中だけに溜め込むようなタイプだから、今回黄昏れながら考えていたことも、自分の中に収めておけばいいとでも考えたんだと思う。

前に向き直った美奈に、僕は質問をする。

「そういえば、美奈が僕に秘密にしていることって、どれくらいあるの？」

「…… いっぱいあるよ」

いっぱいあるのか。それはそれで、何か複雑だなあ。

「でも、自分であると思っただけで、意外と僕は知ってたりしてね」

「どつという意味」

「例えばさ、美奈、ファーストの文庫本ちよつとずつ揃えてるだろ」

僕の指摘に、美奈の全身がびくつと反応して総毛立った。

そのまま、美奈はバツ！ と突風でも起きそうな勢いで振り返ると、僕の首元をひっ掴んで引き寄せる。

ファーストという言葉が何だか分からない人の為に、いい加減飽き飽きしたかもしれない解説をするけど、ファーストというのは僕ら家族が大好きなあるファンタジー作品の略称だ。本や映画と幅広いから、ハリー・ポッターと似たような感じかな。

階段の途中にいるため、一段上にいる僕は、ちよつと重心が崩れれば美奈ごと落ちこちてしまいそうで冷や冷やしているのにそれに美奈は全く気付かず、ドスの効いた低音と共に僕を睨みつける。

「やっぱり人の部屋にこつそり忍び込んでたな……？」

「ちがつ、違いますから、つーかやつぱりって何！？ 僕はそんなことしないし、美奈の口調が完璧に取り調べの刑事になってるし、それにこの体勢苦しいからちよつと放してくれないかな！」

あと顔赤いよ美奈。

必死の弁解の甲斐あつてか、美奈は渋々ながら僕の首元をひっ掴む手を放してくれたのだが、そのまま両手を腰に当てて仁王立ちしてしまった。どうやらこの階段は今から通行止めらしい。

「……………じゃあ何で知ってるの」

「何でもいいじゃん。千里眼なの。ほら、早く夕飯食べたいんだからそこ空けて」

「いいから言え」

問答無用。美奈さあ、もうちょっと、もうちょっとだけでいいから、女の子らしい喋り方をしてくれないかな。

そんな風に顔を赤らめて怒っていると……………面白いからもっとからかっっちゃうよ？

今は階段の途中にいるし、美奈が暴れたら危ないからやめておくけど。

「美奈は映画見たときから、さんざんさんざん興味ないふりしてたけど……………実はこっそり気に入ってたことくらい、僕にはお見通しだよ。だから映画館で言ったじゃん、『楽しそうな顔してたね』って」

「……………理由になってない」

「いや、だからね。美奈は自分で思ってる以上に、感じたことがそのまま表に出る人なんだってことだよ。少なくとも僕にはそれが分かるから」

「……」

「この前本屋に行ったときは、ファーストの文庫本が目的で行ったんだと思うけど、違う？ 怪しいなとは思ってたけど、ついさっき美奈の部屋のドア開けて中見た一瞬に、机の上にファースト本が置いてあるのを見つけたから」

……ぎりっ。

そのとき突然、調子に乗って喋っていた僕の言葉を突然止めるようにして、僕の左腕を掴んだ美奈。

次の瞬間には、その僕の左腕を思いっきり捻ってきた。

一瞬間が開いて、腕に激痛。

「痛たたたっ！ ちょっと、美奈、分かったよ僕が悪かったです秘密にしときたかったんだね痛い！ つか反則、両手は反則だって雑巾絞ってんじゃないんだからほら痛い痛い、別に馬鹿にしたわけじゃないんだから！」

腕が捻られているので、体全体を同じ向きに傾けつつ、僕は美奈を宥めにかかるのだが、このボキャブラリー貧弱人間は無言のまま僕を腕を締め続ける。

何でそんなに必死なの？ 凄まじい威力なんですが。

「……っ」

「やめてその無言の怒り怖い！ もうバレたのが恥ずかしくて口では何も言い返せないの分かったから痛たっ、だからって暴力で反撃

するのやーめーなーさーいーよっ！」

最後の部分で、僕は必死に美奈の腕をばしばし叩いてギブアップを表明する。

もう、暴力反対です……。だいたい、美奈が理由を言えっ言うから言ったのに、言ったら言っただで責められるってどういうことなんだよ。何か気に障ることも言いましたか僕。

ようやくひとまず落ち着いた美奈は、肩でゼーゼー息をしながら、相変わらず僕を睨みつけていた。

どっただけ興奮したんだって突っ込みたいところだけど、それ言ってもう一回腕捻られたら嫌だから黙っておこう。

あー……。左腕がジンジンする。絶対赤くなってるよ、これ。

「……」

「……」

「……えっと……。美奈？ 納得したら、そこ空けてよ。母さん達待ってるし」

恐る恐る、念のために腕は背中の後ろに隠しながら声を掛けると、美奈はその場をどかずに小さな声で呟く。

「……恥ずかしくは、ないから」

「えっ？ あ……。ああ……。そうですか。分かりました。分かったから、そこ空けて」

再度促すのだが、美奈はまたしても、僕のお願いと脈絡のないことを呟く。

「それに、秘密にもしてない」

「……ああ、そう。もうそういうことでいいから、そこ空けてって」

はいはい、と負けず嫌いな幼い子供を適当にいなすような僕の態度が気に入らなかつたのか、美奈は一瞬、ほんの一瞬だけ悠奈と被るような不機嫌顔になり。

「……ばかっ」

そう吐き捨てると、くるりと踵を返し、急ぎ足でリビングへと歩いていってしまった。

階段にひとり取り残される僕。

「……」

……あれ、何で今、美奈の不機嫌顔が悠奈のそれに似てると感じたんだろう。

美奈が珍しく露骨に負けず嫌いなことを言ってきたからかな？
それとも……。

階段の通行止めは解除されたのだが、僕は左腕をさすりながら、今言われた『馬鹿』を思い出して、今まで美奈に言われてきた『馬鹿』とは違う感じだったなあと、不思議な気分を考えていた。

ちなみに、赤い顔で息切れしているという、どっかで激しく運動してきたかのような様子でリビングに入った美奈が、悠介や悠奈を初めとしたみんなに心配されて対応に困っていたのは内緒の話ね。

8 - 2 登校路

次の日の朝、音質の悪い目覚ましによって起こされた僕は、眠い目を擦りながら、窓を覆うカーテンを開けた。

ついでに窓自体も開けると、朝らしいすっきりした風が吹いてくる。これから秋に向かっていく季節だが、まだ暑さが残るこの頃、朝方が一番過ごしやすい時間だ。

……何というか、今世界のどこから「こいつって1人で起きられるのか」という声が聞こえた気がしたけれども。

今まで僕が誰かに起こされているところしか見てないだろうから、僕がこうして一人で起きているのは意外かもしれないけど、僕は一応、目覚ましのおかげで一人でもちゃんと起きられるんだよ。それでもよく寝坊することは認めるけどね。

「ふあ……あ……」

欠伸をしながら部屋を出て、階段を降りていく。

と、その途中から。

わーわーと朝に不似合いな騒ぎ声が聞こえ、その声は僕の耳を突っついてきた。

朝なのに。まだ外には人気が少なく、声がよく響く時間帯であるというのに何か騒いでる声が階下から聞こえる気がするんですけど。

あーあー、これ目覚めたばかりの僕の幻聴かなあ……とか、ほんやりと思いながりリビングのドアを開けると……。

「ばっか！ ばーっか！ いつもいつもそういことばっか言ってる！」

「お前に言われたくねーよ！ 訳分かんないことですぐ怒鳴りやがってー！」

……やっぱりといえはやっぱりか、悠奈と悠介がパジャマ姿のままでぎゃあぎゃああとケンカしていた。

まったく、朝っぱらから元気な奴らだ。悪い意味で。

「おはよー。……何？ この二人は、今日は何をケンカしてるの？」

ドアから一番近いところにいて、さらに二人のケンカを眺めながらどうしようかと困惑していた美奈に、とりあえず状況を聞いてみる。

ちなみに父さんも母さんも、朝の支度をしながら、我関せずといった感じにいる。たぶん慣れだろう。それを言うなら僕だって慣れちゃっているんだけど、さすがに朝っぱらから大きな声でケンカしている奴らを放っておくのはどうかと思うんだよね。寛容に流さないで、止めておいてくれないかな。

僕に声を掛けられた美奈は、一瞬ほっとしたような表情を見せた（気がした）あと、二人を指し示しながらケンカのわけを教えた。くれた。

「悠介君が、残っていたマーマレードジャム全部使っちゃったから」

「うん」

「それを使ったかった悠奈ちゃんが怒っちゃって、こうなった」

「……」

美奈の説明終わりから約3秒。胡乱な目でテーブルの上を見ると、確かに、みんなの分の朝食の中で、悠奈のトーストにだけ何も無い。

……そうだよ。どーせ、最初っからどーせ、この程度のくだらないことが原因だろうと見当は付けてたよ。

だけどなあ……。改めて聞くと、どうしてこう脱力するんだろう。

まあこんな理由じゃ確かに、止める気が起きなくなるよ。

僕はまだ眠い目をしながらも、二人の間に立って仲裁を開始する。……のだが、二人の間に入った途端、悠奈に怒られた。

「お兄ちゃん、邪魔！」

「……おい。それは違うだろ。もっと別な言葉を言うべきだろ」

「どいてくださいー！」

「そうじゃないよ」

僕は溜息混じりに言いながら、ケンカのせいで熱が上っている悠奈の頭に、ぽんつと軽く手を置く。

これがイライラしているときだったら、手の平で側面をぐりぐり

くらいはやるんだけど、今は何せ眠くて気が座っているので、自分でも驚くほど丸い声が出た。

「マーマレードジャムがそんなに欲しいなら、あとで買ってきてやるから、今日だけはブルーベリーが何かで我慢しろよ」

「ん……」

僕の手の平の下で、目をぱちくりとさせる悠奈。たぶん、いつもと違ってのんびりとした僕の仲裁に戸惑っているんだろう。よかつたな、僕が寝起きで。

ただ、僕は今自分が放った、買ってきてやるからという台詞に、後でめんどくさいことを自分で言ってしまったと後悔することになる。

悠奈の頭をぽんぽんと叩いてから、僕は今度は悠介に向き直る。

「で、悠介……、お前は兄なんだから、『じゃあこれ食べていいよ』くらい言っちゃれよ」

のんびりと言われた悠介は、しばらくむっすり黙り込んだ後、口を尖らせて言う。

「……だってさあ、兄ちゃん、おれは確かにマーマレードジャム全部使ったよ。でもさ、使ったのは悠奈以外の全員なんだぜ。なのに、悠奈は俺だけに文句言うんだ」

「それは悠介が一番たっぷりジャム使ったからでしょー!」

がばつと勢いよく顔を上げ、僕の腰の脇から顔を覗かせるようにして、大きな声で悠奈が反論した。……あーあ、せつかく鎮火したと思ったのに、また発火か。

やれやれと頭を振る僕を挟んで、またまた熱い口喧嘩を始める二人。

「たっぷりなんか使ってねえよ！　せいぜい200gくらいだよ！」

「またそうやってグラムとか言って頭良いみたいなアピールして！」

……もういいや。放っておこう。僕も早く朝食にしよう。

ていうかさあ、200gもジャム使ったら、それだけで一瓶無くなると思うんだよね。悠介は食パン一枚食べるのに、開けたばかりのジャム瓶の中身全部使ったとも言うのか。もしそうだったら怒ってあげるよ。

父さんも母さんも、止めてみたってこれだからほつといたんだろうな。どうせまたケンカを始めるだけだろうから、だったらさっさと自分の準備をした方がいい。今になってやっと、僕はそのことに気付いた。

だが、二人をほつといて欠伸をしながら席に着こうとする僕を、ぐいっと引っ張って引き留める美奈。

親がいるところで自重したからか、そんなに強い引っ張り方ではなかったけど、一瞬首が絞まるかと思いました。ていうか絞まりました。

「……なに？ 美奈。悠介と悠奈のことなら、やっぱりほっといいよ。そのうち勝手に収まるだろうし」

「……でも、私も使ったから……」

はあ、その責任感は立派だけど、そんな細かいことを気にしたってしょうがないよ。申し訳ないと思うんなら、買ってきてやるとか言っちゃった僕の代わりに後でジャム買ってきてくれればいいと思う。

「それでも、どうしても気になるなら、二人の頭ひっぱたいて無理矢理引き離せば終わるよ」

「そんなことできない」

「できるよ、いつも僕のことぶん殴ってるんだから。いくら何でも小学生を相手にビビらなくてもさ」

「悠揮は別だから。あとビビるとかそういうことじゃない」

美奈が僕のことを睨みつけてくるので、僕は溜息の混ざった欠伸をしながら仕方なしに、悠介と悠奈の方を指さしながら言った。

「じゃあ、朝ご飯食べ終わったら止めるよ。それまでは我慢するか、美奈が止めるのに挑戦するかしてください」

それを聞いて、食卓で僕の分の朝食（トーストと目玉焼きとサラダみたいなもの）を用意してくれていた母さんが、ふと顔を上げて僕らの方を見た。

「あら、今日の悠揮はいつもと違って大人の対応ね。いつもならすぐにも悠介と悠奈を引きはがすのに」

「……えー、ケンカをほつとくことが大人の対応？」

「そうよー。子供の頃は好きだけケンカをして取っ組み合うべきよ」

ぎゃーぎゃーわーわーと、小学生二人が口論している声をBGMに、母さんは真面目な顔で自分の教育観を語る。

そういえば、と母さんの言葉から思い返してみるけど、こいつらは取っ組み合いってしないんだよね。悠介の方が絶対に強いから、かもしれない。そうと仮定して考えてみると、フェアじゃないケンカはしないところは偉いと思う。……まあ、そもそもケンカというのは褒められたことじゃないけど。

と、そこで、シャツをびんびんと引っ張ってシワを伸ばしながら、さらにトーストも嚙っている父さんが、僕とそっくりの呆れ口調で口を挟んできた。

「でもな……俺としては、取っ組み合うのはどうかと思うぞ。言葉で伝わらないから実力行使に訴えるというのは、理性を持つ人間として、褒められたことじゃない」

流石は僕の父さん、『褒められたことじゃない』がたった一瞬前の僕と被ってる。

親が話に加わってきたからか、どことなく居心地が悪そうだった美奈をくいくいと引っ張って席に送り、僕も席についてトーストに

ブルーベリージャムを塗り始めたとき、母さんも自分の席に座って反論した。

「そういうことは、大人になるにつれて分かっていけばいいのよ。子供の頃から『殴り合いなんて粗野な方法は理性的じゃないからやめよう』なんて言っている子がいたら、可愛くないわ」

「……まあ、可愛くないと言うのもどうかと思うが……、それで人に迷惑がかからなければな」

そう言って、またトーストを嚙る父さん。

僕は、自分のマーマレードジャムトーストを悠奈に譲ろうかと躊躇っている美奈に、いいからさっさと食べちゃっていいよと急かしてから、ジャムを塗る手を止めずにふと気になったことを言ってみた。

「でも、朝からこんな大音量でケンカしてたら、取っ組み合いじゃなくてももつるさくて近所迷惑にならない？」

「……」
「……」

さらにトーストを一口嚙ろうとしていた父さんと、コーヒーをカップに注ごうとしていた母さんの動きが、ぴたりと同時に停止した。

ん？ と、突然凍った両親を交互に見やる僕と美奈。

二人はそれぞれ、固まったまま独り言のように呟いた。

「……確かにそうね」

「……盲点だったな」

そして、父さんと母さんは今度は二人して悠介と悠奈のケンカを終了させに席を立つ。

ええー、止めたって無駄だから止めてなかったとか、そういう理由があるんじゃないかって、ただ単に止めてなかったっていうだけなんですか？

「……」

……悠介と悠奈のお腹を抱えて強制的にケンカを止めている、その様子を眺めつつ僕は思う。

そんなことを盲点とか言って、大丈夫なのかな、この親達……。

……そんな朝のごたごたも何とか過ぎ去って。

いつも早めに出勤する父さんを送り出してしばらくしてから、登校時間を迎えた僕と美奈は、母さんと悠介と悠奈との行ってらっしゃい、行ってきますのやりとりを終えて、玄関から出てきた。

朝学活の始まる時間、それから家と学校との距離が違ったため、小学生二人は、僕らよりちょっと遅く出て中間に合うのである。ずるいとは思うけど、それが小学校のルールなので仕方がない。

いつまでもそんなことを言っているから悠揮は子供なんだとも言われるけど、そう思っちゃうんだからそれも仕方がない。朝というものは、少しでも遅く家を出たいものなんだ。

で、それじゃあ、今日も元気に学校を目指そう、と僕が道路に一步踏み出そうとしたとき。

いきなり美奈にガシツと腕を掴まれ引き戻されて、僕の一步はやり直しになった。

「えっ、何？ 今度は何？」

困惑しながら振り返ると、美奈は、およそ円筒状の物体を提げて、僕に突きつけている。

「水筒。忘れてる」

「あっ」

突きつけられていたのは僕の水筒だった。

そういえば今朝は、父さんと母さんが引き剥がした悠介と悠奈、を仲直りさせるという作業があつて、水筒を準備していなかった。美奈が気付いてくれたおかげで助かったよ。

母さんにはもともとそういう忘れ物を教えてくれることは期待してないし。

お礼を言っただけで受け取ったから、はたと思い至った僕は受け取った水筒をじーっと眺め……それから視線を美奈に移しておもむろに聞いた。

「この水筒……中に何が入ってるの？」

「何って、お茶」

「本当に？」

「本当に」

「本当に？ ……あのさ、お茶だと思って一気に飲んだら実はコーヒーでしたブハッ、とかなるの絶対嫌だからね」

「……」

「ゴン！」

「いてっ」

返事の代わりに美奈の拳が飛んできた。僕の頭蓋骨の辺りから鈍い音がして、思わず体がのけぞる。

「痛いなあ、何だよおでこ殴ることないだろ」

「悠揮がいつまでも疑ってるから」

むっとした表情で言う美奈。それはごもつともなんだけどさ、美奈がそうやって親切心から僕の水筒を準備してくれることなんてそ

うそでないから、どうしても何か仕掛けてあるんじゃないかって疑
つちゃうんだよね。悪いけど。

そう言うと、美奈はますますむっとした表情になり、ぱっと片手
をこっちに突き出してくる。

「じゃあいい、返せ。私が飲む」

「いやダメですこれは僕のです。冗談だよ冗談、ありがと美奈」

美奈に奪い返されてしまう前に、急いで水筒を鞆の中にしまう。

こんな風に、美奈が僕の不手際に気付いて代わりにやってくれる
こと、例えば……上履きを持って帰ってこいという母さんの指令を
僕が忘れたときとか、体操着を家に忘れたときとか……昔はよくあ
ることで気にかけていなかったけど、あの日以来すっかり珍しいこ
とになったから、何だか嬉しいな。

そしてやつと学校へ向けて歩き出すと、美奈ももういいや別にと
でも思ったのか、鞆を肩に掛け直して後をついてきた。

家の前の道路をしばらく進むと小さな公園に突き当たり、その公
園をぐるりと取り囲むように遊歩道がある。遊歩道は枝分かれして
いて、道によってこの前の夏祭り会場になったイベント公園（また
の名を自然公園）に続いていたり、スーパーとか駅の方に続いてい
たりするのだが、僕らは道路沿いに進んで中学校を目指した。

遊歩道と道路を区切るように植えられた街路樹達は、気の早い奴
はもう少しずつ葉を落として始めている。この辺りは、歩行者に優し
く車に厳しい、ぐねぐねした道が多い住宅地だから、緑が多くて環

境の良いところらしいんだよね。

たまに玄関前を掃き掃除している近所の人に挨拶をしたりしながら、先を歩いていた僕は、ふと、振り返って美奈に訊ねた。

「そういえば美奈、ファーストどの辺まで読んだ？」

本当に何気なく聞いたのだが、その一言で一気に美奈の眼光が鋭くなった。

「……何？ まだ馬鹿にする気なの？」

「えっ！？ いやあ、今はそんなつもり全くなかったんだけど……。というか、それだけ過剰反応するってことは、やっぱり密かにハマってたのがバレて気まずいからじゃ……。」

「黙らないと頭埋める」

恐っ！ 頭埋めるって、どうなるの？ どこに埋めるっていうの？

ちょっと気になったけど、美奈が神経質になっているので、それ以上おちよくるのはやめにして、僕はトークのトーンを元に戻して話を続ける。

「でも、面白いでしょ？ 美奈が素直に認めれば、美奈ともファーストの話ができるんだから。何ていうかさ、自分の好きな作品を知ってる人が周りに増えるって楽しくない？」

「知らない」

「……まあ知らなくてもいいけどさ……それで、美奈はどこまで読んだの？」

「……何か、水の町で橋を直すのを手伝っているところまで」

「へえ、結構進んだとこまで読んでるんだね。それって文庫本だと4巻くらいだったと思うけど……そこまでこっそり読んでるって……いったいいつから文庫本買い始めてたんだか」

「うるさい」

決まり悪そうな顔になると、後ろ向きになって前を歩く僕、の爪先を蹴ってくる美奈。器用だ。

歩みと同時に爪先を蹴られながら僕は思うんだけど、美奈ってこういう細かいテクニックが無駄に多いんだよね。部活とか、僕は特に得意なものも無かったし悠介と悠奈のこともあったから入らなかつたけど、美奈はあれだけ身体能力が高くてテクニックも持っているんだから、何か入れば良かったのに。

まあ、このコミュニケーション能力ゼロの人には難しいかもしれないけどな。

しばらく、歩く度に互いの爪先をぶつけ合うという奇妙極まりない歩き方をしていた僕らだったが、緩い曲がり角のところでは僕は前に向き直り、首だけは後ろを向いておいて肩越しに言った。

「ところで、わざわざ買わなくても、言ってくれたら貸したのに。まだ買ってない分、帰ったら貸そうか？」

言われた美奈は立ち止まり、そっぽを向いて鞆を揺らすと、妙に間を空けて答える。

「……いい」

「その『いい』は、貸さなくていいっていう意味の『いい』?」

「そっ」

「遠慮しなくていいのに」

「遠慮してない。それとも、貸したいの?」

「いや別に、どっちでも。ただ、家族が持つてるのに同じのを買うのってもったいないと思うからさ。DSとかじゃないんだから」

僕だったら借りられるものは借りておく。小遣いなんてホントすぐ無くなっちゃうし。

友達同士でゲームとかマンガとか貸し借りしてもなお、お金って足りなくなるよね。あんまり物欲のない美奈が羨ましい。

その美奈は、しばらくじっと僕のことを見ていたと思ったら、次には「ならいらない」と言うと、僕の横を通り過ぎていった。

「……」

それでいいなら、いいんだけどね。

8 - 3 ラストにはノートへの攻撃

マンガなどでよくあるお決まりの悪戯に、黒板消しトラップというものがある。

教室のドアとサッシの間、ギリギリの上の部分に、粉をたっぷりつけた黒板消しを挟んでおいて、教室に入ろうとドアを開けて踏み込んだ人の頭に黒板消しが落下するという、そういう罠のことだ。

小学生の頃とか、悪戯で仕掛けたことがある人っているんじゃないかな。実際に僕はやってたりかかりたりしたことがある。

普段なら、嫌でも目につくからすぐに気付かれることが多いけど、眠くてぼんやりしていたりするとたまに引っかかる人がいるから面白い。

そういうわけで、ああそういうえば教室のドアを開けるときは注意しなきゃいけなかったんだなということを、間近に迫り来るノートの山を見ながら、僕は再確認したのでした。

「うわっ!」

という、謎の声。

次に、どさどさどさどさっ! と、僕の上半身にノートがくまなくぶつかってくる音がして、極めつけに、ドンッ、と腹の辺りに何か重い物がタツクルをぶちかましてきた。僕は少しのけぞった状態で、停止。

顔の上にノートが乗っかってきているので、何が起こったのかさっぱり分からない。きつと後ろにいる美奈も何事かと思っているだ

ろつ。

あーあ……何か顔面がヒリヒリしてる……。

「痛い……」

「ごっ、ごめん！ 大丈夫だった!？」

そんな声が聞こえてきたので、僕は顔の上で視界を遮っていたノートをどける。

すると真つ先に、教室の床に無様に転倒している海内と、僕の腹の辺りを支えにして床に対して45°になっている作利川の姿が目に入った。教室中のみんながこっちに注目しているとか、そういう些細なことはまず目に入らない。

「……………何やってんの?」

そこらに散らばったノートを眺め、顔をしかめて質問すると、顔を上げた作利川が『あれっ』という表情になった。

「あつ、稲橋君だったのか。おはよう。今日はいい天気だよね」

「……………いい天気だけど、最悪の登校です」

「冗談だよ冗談。大丈夫だった? うわ、それにしても見事にはらまいちゃったなあ……、ちょっとノート拾うの手伝って」

「いや、だから、何で僕はノートをぶっかけられたのか、説明してくれないかな」

教室の戸を開けた瞬間に僕にノートが降りかかってきたことの説明もないままに、散らかったノートを拾い集め始めた作利川。僕の言葉はスルーされたみたいである。

何が起こったのか何も把握していない僕は、ノートを拾うのに忙しい作利川は諦めて、目の前で転倒している海内を助け起こしながら状況を聞いてみる。

「いったい何がどうなったの？」

「あつ、稲橋君……」

僕が差し出した手を握って起き上がる海内は、最初から申し訳なさそうな表情になってスカートの尻をぱんぱんと叩くと、自分の顔を指さした。

「あのね、みんなは悪くないんだよ。私が足下不注意でよく気をつけてなかったから、いきなりずっこけちゃって、そのままの勢いで近くにいた新井君に足払いをかけちゃって」

「新井君？」

違ったワードが飛び出してきたので、改めてよく教室の中を見つめる。

すると、教卓のそばに、うず高く積まれたノートの塔を今にも倒れそうなバランスで持つ新井君と、その新井君の学生服の後ろをむんずと掴んで固定している芽寺さんの姿があった。

まるで新体操の演目みたいだ。新井君のあんな転倒寸前の格好を、

両手とはいえ、微動だにせず引き留めている芽寺さん。見てる分には凄いいけど、そろそろ普通の体勢に戻った方がいいんじゃない？

「……そっちは何やってんの？」

僕が二人に声をかけると、それがきつかけになつて魔法が解けたのか、「おっとっと」と言いながら新井君は一人で何とかノート
の塔のバランスを取り戻し、芽寺さんも新井君から手を放す。

注意深くノートの塔を教卓の上に置き、床に散らばつたノートを拾っている作利川を手伝いながら、さすが学級委員の新井君は僕に事情を説明してくれた。

「いや誰が悪いってわけでもないんだけどさ。このノートを、あつこれ昨日集めた理科と社会のノートなんだけど」

「うん」

ノートを拾うのを僕も手伝いつつ、相槌を打つ。

「昨日出すはずだったんだけど忘れてて、急いで出しに行こうとしたら思ったより量が多くて、二人じゃ手が足りないんだ。特に芽寺の。そしたら作利川が手伝うって言ってくれてさ」

「うん」

「三人ならまだ何とか持つてけるかってことで、いざ行こうと思つたら、海内が俺の目の前でいきなりコケて」

「はあ……」

ちよつとその辺りからおかしくなってきたかと思つただけで、話の流れで海内を見る。海内は、ごめん……とでも言いたげに両手を合わせてきた。坂原が海内の上履きを掴んでいるのを見る限り、また海内が上履きの踵を踏んでスリッパ履きしてたからそうなんだろう。

「まあ稲橋、そんな顔するなよ。で、俺が海内踏んづけないようにしたら海内も同じように俺の足を避けようとして避けて、そしたらたまたま動かした足が俺の足を引っ掛けて今度は俺がコケそうになつて」

「うん……」

……もうなんか説明とかどうでもよくなってきたけど一応聞こう。聞き出したの僕なんだし。

拾い集まったノートをみんなで教卓の上に戻す。いつの間にか美奈も手伝ってくれていて、今度はそのノートを教科別に急いで仕分けしつつ、新井君が続ける。

「俺を支えようとした芽寺が自分のノート全部教卓の上にスライドさせたら、倒れそうになつて、それを押さえようとしてくれた作利川がバランス崩してドアの方に向かって、後はもうドーンってなつたんだ」

「……へえ……」

呆れを通り越して感心する。

凄いなその普通なら絶対起きない連携プレーは。ピタゴラスイッ

チか。

「そんで次はお察しの通り、お前がタイミング悪くドア開けたから……。……まあアレだな、運が悪かったんだ」

「今日は星座占いで2位だったんだけどな……」

「そんなもの当てになるわけないでしょう、稲橋君」

占いが的外れでがっかりな僕の肩をぽんと叩く作利川。

それは事実だけど、悪気はなかったとはいえ僕にノートアタックをぶちかました本人に言われると妙に悔しい。

一方、ノートの仕分けを終えた新井君と芽寺さんは、揃って黒板の上に掛かっている時計を見る。そして新井君が急かすように言った。

「さ、早くこれ下置いてこようぜ。もうすぐ朝学活始まっちゃうから」

「それじゃ急ぐか。私今まで遅刻ゼロだから絶対遅刻したくないんだよね」

「えっ、それは意外だ」

「意外って何だ稲橋君」

ああ、余計な発言をしたら作利川に睨まれた。

作利川はノートを腕の中に抱えつつ、心外だという表情で僕を見

る。

「全然意外じゃないでしょ。私はこんなに真面目で生活態度の良い生徒なんだから」

「あっそう。そういえば作利川、この前の中間テスト最高いくつって言ってたっけ」

「……稲橋君のバカヤロー！」

そんなこと言われても。

と、僕は『わかりませーん』のジェスチャーを返すのだが、作利川はせっつかく腕に抱えたノートタワーをまた教卓の上に戻すと、ピシッと僕に指を突きつけてきた。

新井君と芽寺さんが困ってるよ作利川。気付いてやれよ。っていうか二人とももう行っちゃっていいよ。

僕のアイコンタクトが通じたのか、新井君と芽寺さんの学級委員コンビは作利川を置いて一足先に教室を出て行く。それに全く気付かない作利川は、僕に突きつけた指を上下に振りながら、僕に向かって言い放つ。

「稲橋君、1週間後の期末テストで吠え面かせてやるからなっ！
覚悟しときなよ！」

「おっけー分かった。ところで作利川、中1の最後の期末テストは最高何点だったんだっけ」

「美奈ー！ 美奈も稲橋君に何か言ってやってよ！ この人

ひどい！」

普段作利川にいいように遊ばれているお返しに、僕はめいっぱい作利川をからかってやる。

突然矛先を向けられた美奈は、肩に掛けてきた鞆を降ろしながら一言。

「……何点だったのか、教えてよ」

「同盟結んでんのかお前らはー！ 寄ってたかって女の子リンチするなんて、見損なつたぞ二人とも」

リンチはしてない。っていうか美奈に話振つたの作利川だろ。

そうやって馬鹿話で無駄に時間を消費した作利川は、急にハッと我に返つた。

「いけない、こんなことしてる場合じゃなかった。先生来る前にちよつと、お二人さんもこれ運ぶの手伝つてよ」

「何でさ」

「何でもさ。ほら稲橋君、美奈は手伝つてくれるって言うてるんだから稲橋君だつて手伝つてよ。男でしょ」

「私は手伝つなんて言つてないよ」

「……いい加減その同盟破棄してくんない？」

結局ノートは3人で分担し、僕も運ばされることになった。

「何で僕らまで……」

「ぐちぐち言うな稲橋君。君はお助け委員なんじゃなかったっけ？」

「いつの話をしてるんだよ。ってかトシか？ その変なネーミング作利川に教えたの」

溜息をつきながら聞くと、対照的に作利川は笑った。

元々一人でも運べるような量を3つに分けているんだから、一人分の負担は本当に大したことない。ほとんど人員の無駄だと思うんだけど、作利川はその辺ご理解なさないようだ。

「ご名答。ピッタリな仕事だね」

「嬉しくないんですけど」

もうすぐチャイムが鳴るというのに、ノートを抱えて廊下を歩く影が3人。新井君達は間に合うだろうけど、こっちはどうだろうな。作利川、自分で遅刻が何とか言ってた割に危機感が足りてない。

教室へ向かう、クラスを担当している何人かの先生とすれ違った後、僕らの後ろを歩いていた美奈が、小さな声で切り出した。

「……楓奈」

「ん？」

作利川は返事の後にくるりと振り向き、その拍子に揺れたノート
のバランスを取ってから、そのまま後ろ向きで歩き続ける。

「何かご用でしょうか、お嬢様」

「……………。放課後、ちよつといい？」

「え…………いいけど、何？ 稲橋君と一緒に帰らなくていいの？」

ちらつくと、美奈と作利川が同時に僕のことを見た。

その視線が恥ずかしい。なんで僕を見るのかな。

僕がノーリアクションで黙っていると、美奈はちよつと愉快そ
うな表情になった、気がした。

「悠揮はマーマレードジャムを買いに行く用事があるから」

「あ…………」

そうでした。

マーマレード？ と首を傾げる作利川。我ながら面倒なことを言
ったなあと思はれる。そもそも、母さんにスーパーへ買い物に行く
ことがバレれば、追加注文が来て、ジャムひとつの買い物どころじ
やなくなるのだ。

あのエスパー作利川もジャムのことはよく分からなかったようだが、それでいてなお、ニヤツと人の悪い笑みを浮かべた。僕は思わず半歩ほど作利川から離れる。

幸いにもその笑みは僕に向けられたものではないようで、作利川は美奈に向けて言った。

「なるほどー、稲橋君には用事があるから、何も用事のない美奈は寂しくなって、あたかも私に用があるみたいなのを言うんだね？」

「……違う」

「いや素直になろうよ美奈。そんなところで張り合ってるんで、稲橋君と一緒に買い物行きなよ。新婚夫婦みたいに仲睦まじく夕飯何にしようとかやってればいいさ」

人の話を聞かない作利川トークノンストップ。さっきジャム買いに行くって話だったのに、いつから夕飯何にしようかになったんだよ。そんなこと言うてからかったりしたら美奈が……。

「……違うって言うてるじゃん」

ほら、拗ねちゃった。

……いや、どっちかというと機嫌が悪くなったって言う方が正しいかな。

よく見れば美奈、軽く奥歯を食い縛ってる。変な刺激与えたら吹っ飛びそうだな。僕が。

「違うのか……。それは残念。それじゃ、私に何の用？ 今じゃ駄

目なの？」

そう聞かれた美奈は、ちらつと僕を見ると、また作利川の方へ視線を戻して頷いた。

「そう。今じゃ駄目」

……今、ちらつと僕を見たところから察するに、僕がいるからなんだろうな……。何だろこの寂しい気持ち。

今は時間がないから、とかそういう優しい理由じゃなさそうだ。

何だか拒絶されたような気持ちになり、ちょっと凹んでいる僕を見て、作利川は何かを考えるような仕草をした。

「稲橋君がいるから駄目なのか……。てことはもしかして、恋の相談か？」

バキッ。

辺りに凶悪な音が響き渡った。

まるで奥歯を噛み砕いたかのような音に、思わず美奈の方を見て恐怖してしまう僕なのだが、作利川はちっとも堪えてないようだ。

これだけイラつきMAXの美奈が怖くないなんて、作利川は凄い。腕とかぶるぶる震えてるし、俯いて顔の表情が見えづらくなってるし、いつもの症状が出てしまっている。作利川が『恋の相談か？』なんて言うから。

まったく、どうしてくれるんだよ……。

気休めでも何か声をかけて、気持ちを鎮めさせる努力をするべき

か……と僕が悩んでいると、お怒りの美奈は物凄く低い声で作利川の名前を呼んだ。

「……楓奈……蹴っ飛ばすよ」

僕だったらこれは死刑宣告にも等しいのだが、作利川はけろりとして言った。

「いいよ、どんとこい」

「変態かお前」

思わず出た台詞に、美奈と作利川がまた僕のことを見た。特に美奈はキラリという擬音がよく似合う鋭い眼光で、僕が怒られているわけではないのに身が竦む。

作利川は真面目な表情で、ずいっと僕に近寄ってきた。

「……変態？ 稲橋君、今女の子のことを変態呼ばわりしましたか？」

「いや……、蹴っ飛ばすよって言われて、どんとこいなんて言う奴なんてDMにしか……」

思うままを言うと、作利川は怒ってんだか笑ってんだか分からない顔になった。

つまり、微妙な表情。

「うーん……普段稲橋君がやってることと同じだと思っただけど」

「どこが。そんな変態的な発言、僕したことないですけど。蹴りたいなんて微塵も思っていないし、どんとこいなんて言うわけないだろ……。」

と、僕が思っていると、突然また作利川が、今度は明確に笑っている表情を作った。作利川お得意の、この意地の悪い表情に、僕はさつき近寄られた分作利川から離れる。

作利川は、ニヤニヤ笑いを顔に貼り付けたまま言う。

「……もしかして嫉妬？」

「はい？」

「嫉妬じゃない？ 美奈を取られないようになっていう……そういうことでしょ？」

「……。……はーあ……。」

何言っただらうこの人。さつき教室でドアのところ僕にぶつかったときに頭壊れちゃったのかな。

蹴りどんとこい発言がおかしいよねって指摘したらどうして美奈を取られたくないという嫉妬に繋がるのか、全くもってさっぱり分からない。

あからさまに溜息をついた僕は、作利川を無視して美奈に話しかけた。

「美奈、もう作利川無視してここに置いてこよう」

「……分かった」

さっきまでのイライラは解消していたのか、素直に僕の提案に同意して頷く美奈。

あるいは、イライラの元が作利川だから、だろうか。

僕らが加速したところで、作利川が後ろから声を張り上げる。

「だから同盟組むなって言ってんでしょー！ 置いてくな！」

「うるさい。遅刻するぞ」

遅刻しないわけがなかった。

8 - 4 お昼タイム

お昼の時間である。

授業の終わりとランチタイムの間にある、僅かな休み時間に、僕はそっこーで、借りていた今終わった教科の教科書を他クラスの友達に返しに行った。

前もカミングアウトしたかもしれないけど、僕はそんなに優等生じゃない。比較したら怒られてしまいそうだが、作利川と五十歩百歩の成績であり、それはつまり授業態度が取り立てていいわけではないという理由もある。

例えば教科書を忘れる失態をたまにするとかね。

そんなわけで、僕はいざ教科書を忘れたときに貸してもらい、教科書を忘れた人に貸してあげる、クラスの枠を超えた友達ネットワークの一員として、今回はその恩恵を受ける立場だったというわけです。

「そんなすぐ飛んでかなくても、ゆっくりお弁当食べてから、昼休みに返せばよくない？ 稲橋君」

自分の教室に戻ってくると、複数の机をくつつけて島を作り、もう弁当の包みを広げ始めている古谷にそう言われた。

昼食の時間では、原則として自分の机で食べることになってるんだけど、僕らのクラスではそんなことお構いなしに席を移動して好き勝手な座席配置で弁当を食べている。そもそも担任も結構いい加減な先生だからね。そのせいで僕らもうんざりな目に遭ったりする

けど、代わりにこういったことが黙認されるならそれでもいい。

自分の弁当と水筒を引つ張り出し、さらに適当なところから椅子を引つ張つてくると、机にその二つの品を置きながら僕は古谷に返事をする。

「前にそれで、授業終わってから返すのをすっかり忘れて、僕に借してくれた友達が忘れたことになっちゃったってことがあってさ。それから借りた物はできるだけ早くさっさと返すようにしてるんだよ」

「ふうん。立派だねー」

相槌を打ちながら、ぱこんと弁当箱の蓋を開け、さらに箸を握る古谷。まだランチタイムは始まってないんだけどな。

「そんなにじっくりしてるなら、お前俺が貸したジュース代早く返せよ」

そこで古谷の後に続き、トシが会話に入ってきた。

トシももう弁当箱はオープン済み。僕はちよつとでも早弁しようとする、ルールに厳しい美奈が怒るので開けない。

ちなみに今、同じ机の固まりを囲んでいるメンバーは、僕とトシと美奈と古谷、その4人だけだ。作利川たちは今日は買い弁らしく、授業が終わったと共に教室を出て行っていた。

買い弁はその名の通り、学校で買えるお弁当のこと。

一番買い弁が似合うくせに、予想に反していつもちゃんと家から

弁当持参のトシに、僕は自分の弁当に手をかけながら目を閉じて言い返す。

「借金があるのはトシの方だけど？ 240円分、貸し借り合計して僕が貸してる」

「この前貸しただろ、何かファーストの飲み物買うのに」

「だからそれ差し引いて240円。それより前にカルピスとかお茶とかペットボトルのやつ奢ったよ」

「……何だよ。しっかりしてんじゃねーよドケチが」

「そつちこそ何なんだよ」

くだらない言い合いをしながら弁当箱の蓋を開けようとする時、その蓋を掴んだ僕の手をいきなりガシッと掴む手があった。

何かと思えば、今まで黙っていた美奈が向かいから僕の手を引っ掴んでいる。

「……悠揮」

あつ、何故か無意識のうちに弁当開封作業をしていたんだ僕。しまった、美奈に怒られてしまう。

僕の手が後にも先にも動けないようしっかり掴んで固定しながら、美奈はまるで保母さんのような台詞を、保母さんとは正反対の凄みのある声色で言う。

「時間になるまで蓋開けちゃだめ」

「……別によくないですか。トシも古谷も開けてるよ。何で僕だけ駄目なんだよ」

「……悠揮は蓋を開けると我慢できなくなるから」

「そんなに食い意地張ってません」

掴まれている手にぐっと力を込めてみるのだが、美奈の恐ろしいほどの腕力には通用せず、全く動かない。

ああ、僕は男子で美奈は女子なのに、何でここまで力の差があるんだろうなあ。

押したり引いたり回してみたり、色々な方法を駆使して何とか美奈の枷から抜け出そうと挑戦している僕に、美奈は低い声で言い返してきた。

「……コロッケつまみ食いたくせに」

「それ小3くらいの時の話だと思うんだけど。そんな昔の話を持ち出すんなら、美奈だって僕のお菓子奪ってたよねしょっちゅう。美奈の方がよっぽど食いしん坊なんじゃないの」

「それは悠揮がお菓子見せびらかして自慢するから。悠揮が悪い」

「見せびらかしたって……」

「ごめんなさい、はつきり覚えています。そうだ、悪いのは僕だったから何も言い返せない……」。

言葉に詰まった僕。今のやり取りを傍観していた古谷が笑った。

「二人とも面白いね。幼馴染みなんですよ？　ずっと前からそんなことやってるの？」

「……………やってるかもしれない。ずっと前から美奈は食いしん坊でべちっ。

嘘八百を言いかけた僕の頭に、誰かさんが投げた消しゴムがぶち当たっていい音を鳴らす。目視できないくらい速さだったので、もちろん避けることもできなかった。

「黙れ悠揮」

……………もうさ、片手で僕の手をしっかり固定しておいて、なおかつこの高威力で消しゴムぶん投げるなんて、ターミネーター並みの強さだよな。

黙れと言われてしまったので黙ると、それと同時に、昼食時間開始のチャイムが鳴って教室に響いた。きっちり最後まで鳴り終わったとき、「……………」と無言の美奈がものすごく渋々といった感じで僕の手を放してくれる。

はあ、僕の手また赤くなってるし。美奈は僕に触ったり触られたりするの嫌がってたはずなのに、いつの間にかそうでもなくなつた。思春期通り過ぎたのかな。

ちらつと美奈を見てみるも、美奈は自分の弁当を開けるのに忙しくて、僕の視線に気付く様子がない。

「……」

それでもじーっと凝視していると、やがてふいに美奈が顔を上げて、僕と真正面から目が合った。

「……何？」

「……いや、うーん」

「……私の顔に何か付いてる？」

「え？ ああうん、目とか鼻とか付いてるんじゃない」

べちん！ と、本日二発目の消しゴムが僕に命中した。

そしてちょうどその時、教室のドアがガラガラと引き開けられて、作利川と追滝が戻ってきた。二人ともそれぞれコンビ二弁当のようなプラケース入りの弁当を手に持っている。

作利川はさておき、追滝が買い弁をするというのは珍しい。僕は顔面に張り付いた消しゴムを美奈に返却しながら、二人に場所を示そうとしたのだが……。

「はいまた楓奈は遅刻です。二人ともこっちこっちー」

僕よりも先に、二人に向けて、古谷が笑顔で手を振りながら言い放った。

古谷の「また」というのは、朝に作利川（と僕と美奈も）が遅刻したことを指して言っているんだろう。今のでイラツときたと思わ

れる作利川も古谷の姿を認めると、近寄ってきながら笑顔で言い返してきた。

「そうだね遅刻しちゃったよ、それより昧羅、今日は天気もいいしちよつと暑いね。 スカートをめくるから覚悟しろ」

「やめてよ!」

攻めてくる作利川に、古谷はガタガタと慌てた様子で音を立てて椅子から立ち、スカート戦争を始めた。お昼時に暴れないでほしいものだけど、面倒だから黙ってよう。

馬鹿二人はほつといて、僕は椅子をちよつぴり詰め寄せ、二人分の椅子が入るスペースを空ける。

もう、古谷に何か言われたときは、スカートをネタにしていじり返すというのが定番になりつつあるんだな……と、二人がどたばたしている様を見ながら思った。

「いや、私のがんびりしてたわけじゃなくて、いつも通りに行ったら、買い弁エリアがいつもよりずっと混んでたんだよ」

席に着くなり、未練がましく言い訳をする作利川。だが、懲りない古谷はそこに容赦なく追い打ちをかける。

「それでも遅刻は遅刻です。楓奈って遅刻しない真面目な生徒だったんじゃないかったっけ？」

天然小動物のような笑顔の古谷なのだが、言ってることはどうな

んだろう。朝の教卓付近での会話を聞いていたんだらうが、それを言われた作利川は長い溜息をついた。

「ホントだよ。何で今日はこんなに運がないのかな。今日だけで2回も遅刻するだなんて、私としたことが……」

「楓奈だけじゃないよ。稲橋君も古舘さんも絵理ちゃんも伊藤君も、っていうか私以外みーんな今朝は遅刻だったもんね」

古谷の言う通り、この場において今日遅刻していないのは古谷だけなのである。

僕と美奈と作利川は理由を分かってもらえると思うが、トシはと
いうと。

「……俺の遅刻は姉ちゃんのせいだからな」

と言って、恨みがましい目で弁当のご飯をざくざくやっている。

……あーあー、ご飯粒の神様虐めるなよ。何人の神様がそこに詰まってると思ってるんだ。

僕なんかは、「1粒のご飯には7人の神様がいるんだから、一粒も残さず食べないといけないのよ」なんて言われて育った人間なんだけども、トシは見た限りそうじゃないらしい。

「へえ、伊藤君ってお姉さんいたんだ」

そう反応したのは古谷。古谷はこの学年になってから知り合った子だから知らないのかもしれないが、僕らの間ではトシのお姉さんは有名だった。トシのことが大好きだということだ。

……つまり、かなりのブラコンだということだ。

「……ああ、いるよ。1人」

ものすつごく暗い声で答えるトシは、何を思いだしたのか、元気を失ってご飯をざくざくすることすらもやめてしまった。トシが何故萎れたのか分かる僕や作利川は黙っていたが、理由を知らない古谷は心底不思議そうな顔でつんつんとトシの肩を突く。

「もしもし、伊藤君？　おーい伊藤君？　どうしたの？」

「……古谷。トシのことはそつとしておいてあげてくれる？　この人はきつとまたどうせ、お姉ちゃんの部屋に引きずり込まれたか何かして、遅刻を余儀なくされたんだと思う」

「……正解」

見かねた僕が助け船を出すと、トシが暗い声で応じた。その暗さといったら、鳥の落とし物を頂いたときだってもう少し明るい声が出せると思う。

流石の脳天気な古谷も、そのただならぬオーラを感じ取ったのか、怖々といった感じで話を進める。

「えっ……引きずり込まれて……それで……、……近親相姦？」

「それは違え！　何でそうなるんだよ！」

あ、元気になった。

トシの大声に若干身を竦めた古谷だが、自分が何を言ったかは分かっているからだろう、わたたと両手を振って弁解する。

「だ、だって！ すっごい落ち込んでるし、部屋に引きずり込まれたって言うから……。やつちゃった、みたいな」

「やつちゃったじゃねえよ大問題じゃねえか！ うわもう何かお前ってすげえな！ 近親相姦じゃなくてよかったと思えるようになったよ！」

そうだろうな。実際のところは、今日の下着をどれにしようか選ぶのを手伝われたとか、そんなことだろうと僕は思うよ。

トシと古谷が二人で騒ぎ始めてしまったので、僕はもう一人理由のはっきりしない遅刻をした人である、追滝に話しかけてみる。

追滝は美奈と同じように今までの騒ぎをものともせず、買ってきた日替わり弁当を黙々と食べていた。

「ねえ、追滝」

「……」

「おーい」

「……、？ あ、私？」

目の前で手を振って初めて認識してもらえた。追滝にとっては、思いっきり直視しながら声をかけてきた相手であってこそそれは必ずしも自分に話しかけてるとは限らないらしい。

「何？」

「えっと、何ってほどでもないんだけど。追滝は今日どうして遅刻したの？」

「それは……」

追滝が何かを答えかけたその時。

「ちよつと待ったあ！」

いきなり横から割り込んできた別の声。見れば、もう弁当を空にした作利川が、片手を僕と追滝の間に突き出して、言葉通り僕らが何か言うのを制止するポーズをとっていた。

相変わらず食べるの早いよ。空になった弁当プラケースは、作利川の突き出されていない方の手と机の間に挟まってぐしゃっと潰れている。

「ちよつと待った、絵理」

「え？ え？ ……あ、うん」

いきなり出てくるなよ作利川。追滝が目を白黒させてんじゃないか。僕もびっくりしてるけど。

めいっばい腕を伸ばしていた作利川は、少しだけ元の体勢に戻ると、箸を握ったままの手の指を一本立てて言う。

「クイズしよう。絵理がどうして遅刻したのかその理由を当てるクイズ」

……また面倒な企画を持ってきたなと内心僕は思ったのだが、口に出すと怒られそうなので黙っておいた。作利川の場合はどうせ心読まれてるかもしれないけど、まあいい。

「というわけで、頑張って答え当ててみるから。誰かが正解言うまで答え言っちゃだめだよ」

「う、うん、わかった」

それはもう楽しそうに、作利川は追滝に釘を刺す。別にいいけどさ、ほらもう、追滝が苦笑いしてるじゃん。

あと箸振り回すなよ。

「それじゃあ、何故私は遅刻したと思う？」

僕はただ世間話程度のもりだったのが、急遽そういうクイズをすることになり、優しい追滝はわざわざ言い直してくれた。「稲橋君も考えるんだよ」と作利川が僕に矛先を向けてきたので、弁当を食べる手を止めて少し頭を捻ってみる。

……ただ、人が遅刻する理由なんて、どれだけ考えても一つくらいしか思い浮かばないんだよなあ……。

「……寝坊？」

「違います」

だよなあ。ダメ元で言ってみただけどやっぱりダメだった。

「交通事故」

「違います」

「道に迷った」

「違います」

「じゃ、横断歩道を渡るアヒルの親子を無事に向こう側まで渡すために」

「違います」

……最後まで言わせてください。

しかしこの3つも違つとなると、何が残ってるんだろつ。僕は追滝の弁当をじーっと見ながら考えてみるのだが、特にそれっぽい答えは浮かんでこない。

あと作利川も答えろよ、さっきから僕ばかり答えてる気がするんだけど。

そう思って作利川の方を見ると、まるで僕がそうするタイミングを予期していたかのように、作利川は隣の美奈へと話を振った。

「美奈はどう思う？」

「……」

いきなり話を向けられても、何のことだかさっぱり分からないだろ……と僕は思ったのだが。

美奈は箸を置くと、何のつもりか机の上に置いてある僕の水筒をちらりと見て、それから追滝の方を見て小さな声で答えた。

「……忘れ物を取りに戻った、とか」

しっかり話の流れを理解していた。聞いてたのか。

「正解です」

しかも正解してるし。

昼休みになった。

9月の半ば、期末テストがもうすぐやってくるこの時期は、昼休みを返上してでも先生方に普段は聞き流している勉強の教えを請いに行く人や、教室の机を固めて勉強会を開いている人がちらほらと出てくる。

さらにもう少し経つと、今度は文化祭の準備で、今よりもっと昼休みを返上してあたふたした状態になるんだけど、それはまた別の話だよな。

さて、他のクラスの友達の家へ遊びに行っていた僕が、自分の教室に戻ってくると、人のまばらな教室内のある1つの机に、トシと坂原と新井君の3人が額を寄せ合っているのを発見した。

「何してんの？」

このテスト対策ムードに押され、この人達も勉強会を開いているのかな……。

そう思って僕が声をかけると、新井君の顔がこちらを向いた。

「勉強してるの？」

「いや、まさか。事務室の落とし物の所にあつた雑誌読んでる」

そっか、トシも珍しくテストにやる気を出して、坂原と新井君という頭いい組に教わっているのか。僕ももう少しテストに向けて熱

意を持って勉強して、いい点を取って、美奈に馬鹿にされないようにしないといけないな……って、あれ？

何だか、頭の中で思い描いていたシナリオと違う言葉が聞こえた気がして、僕はもう一度確認を取る。

「勉強してるの？」

「だから、雑誌読んでるんだって言っただろ。青年雑誌」

何を聞き返してるんだよ、とばかりの態度の新井君。

さらに、新井君に続けて、トシも顔を上げて付け加える。

「これすげーよ。グラビアみたいなのも入ってる。マンガ雑誌のくせにそういうページ目的で作られてるんじゃないかねえのかコレ」

とか言いつつトシはまんざらでもなさそうだ。

……おい。勉強どころか、学校で、グラビアページの多い青年雑誌を観賞ですか。僕の感心を返せ。

「雑誌かよ……勉強してるのかと思ったのに」

心底残念に思いながら僕がそう言つと、トシは近くの机に腰掛けてぐつと足を伸ばしながら言い放った。

「何で勉強なんかしなきゃならないんだよ。どうせ俺はやってもらなくても悲しい結果しか取れねえからさ」

そんな悲しいこと言つなよ。

「ていうかさあ、勉強が嫌いでやりたくないやつが、ただテストだからって備えようと急いで頑張ってみたところで、ちよつとは上がるだろうけど、結局大した点は取れないんだよ」

さらに、今までずっと雑誌の懸賞ページを切り取って眺めていた坂原が、トシの言葉に被せるようにして言い放つ。

今慌てて頑張っている人を奈落の底まで突き落とすような台詞だ。これだから頭のいい奴は。

テストの点が60割つたら小遣い半額にするとかってテスト直前に言われて、死に物狂いで頑張る羽目になる人間の気持ちが分かるのか。

呆れ果てた美奈に必死に頼み込んで勉強を見てもらおう人間の気持ちに分かるってのか。ああ？

……おとつと、しまった、ついつつかり熱が入っちゃった。

ここでテストの点について論議を尽くしても仕方がない。それより、もっと重視しなければいけないことが僕の目の前にある。

雑誌だ。こんなものを学校で読んでいいんですか。

そもそも新井君は学級委員でしょうが。クラスをまとめて正しい方向へ導いていく役割のはずの人が、率先して青年雑誌読んでるってどうということなんだよ。

そう指摘すると、新井君はそんなことは何の障害にもならないとばかりに、さらりと言ったのけた。

「いいんだよ別に。この学校には、マンガ雑誌を持ってきてはいけ

ないっていう校則はないからな。まあ学校には必要ないものってことで、先生に見つかったら没収されるけど」

「だめじゃん」

「だめだから見つからないようにするんだよ。だって別にさ、与えられた課題を終わらせられるなら、あとはポテチ食べてたってゲームしてたっていいと思うんだよ、俺はね」

何言ってるのこの人。本当に学級委員？

通称『くじ引きで決まった学級委員』だから、真面目くさった印象はあんまりないけど、それにしたってもう少し学級委員としての自覚を持っていてもいいんじゃないか。

もう一方の学級委員の芽寺さんは、あんなに真面目なものにな……。

そういえば、いつもなら新井君のこんな規則破りを真つ先に咎めるであろう芽寺さんの姿が、教室内にない。あーあ、芽寺さんどこ行っちゃったんだろう。

と、そこで、まるで僕の心の中を読み当てたかのようなタイミングで、新井君が僕に釘を刺す。

「ところで、芽寺にはチクるなよ。あいつに見つかったら、学級委員とは何たるものかってホントうるさいからな。頼むよ」

そう懇願する新井君。文字通り、懇願だ。新井君をそこまでさせるのか、芽寺さんって。

まあ僕もわざわざ言いつけたりはしないけど……。

……うるさい芽寺さんか……。……想像もつかないな。ちょっと気になる。

芽寺さんの声なんて聞いたことないもんなあ。

……そうだ、そういえば二人のことで思い出したけど、新井君と芽寺さんの関係ってどうなったんだろう。

確か7月の終わり頃のことだ。美奈が本屋で万引きをした（人を捕まえた）事件の時、僕は火種を投入しただけで、事情があつて後はほつたらかしにしてしまったから、顛末を知らないのだ。

あのとき、僕の余計な一言で、芽寺さんが真っ赤になってテンパってしまったのをよく覚えている。あの反応はもう何というか、アしなんだと思うけど……。

作利川なら知っていそうだが、聞いて確かめるようなことでもないし。

傍目に見てる分には、二人とも以前と変わらないし……。どうもなっていないのかなあ。

「ほら、悠揮も見てみるよ」

ふいに、僕の考え事の隙間を縫って、トシからかかった声が聞こえた。

その声に、僕は新井君達についての考え事を一旦止める。

トシは僕を呼んでいた。僕はトシの指し示す雑誌を見たが、少し悩んでから、名残惜しいけど遠慮しておくことにする。

「いやいいよ、やめとく。君らも見つかる前にやめておいた方がい

いんじゃない」

「お？ 何だよ、真面目ぶりやがって。優等生のフリしてもテストの点は上がらねえぞ」

「テスト関係ないだろ。真面目ぶってんじゃないでさ、美奈に見つかったら制裁を食らいそうだからやめとくって言ってるんだよ」

「……お前将来、絶対嫁の尻に潰されるな」

呆れと哀れみが混ざった眼差しで僕を見るトシ。ほっとけよ。ていうか尻に潰されるって何？ 僕のお嫁さんは巨人族か何か？

トシの言った『尻に潰される』というショッキング極まりないシーンを想像してしまい、僕は思わず身震いする。そんな人生の幕の閉じ方だけはしたくない。

「古館は今教室にいないから、大丈夫なんじゃねえの」

そこで坂原が、どんな魅力的なことが書いてあるというのだろう、まだ懸賞ページをじっくり眺めながら、何の気なしに言った。

「え……」

その言葉につられて、僕も教室をぐるっと見渡してみる。

なるほど、改めて探してみれば、元々少ない人影の中に美奈の姿はなかった。

ここには美奈はいない、ということとは……制裁を食らう羽目にならなくて済むかもしれない。

……。

ここで、僕の脳内ではいきなりの天使対悪魔戦争が始まった。

雑誌に興味がない、と言えば嘘になる。いや、しかし、だけど…

…。

ここで誘惑に負けるか？ でも、誘惑というほど大逸れたことではないし……。でも、僕は小遣いをやりくりするのが大変だから雑誌なんてそうそう買えない……。

そして、内心の葛藤は数瞬で、結局僕の中の天使は負けてしまった。

……ちらつくと、最後にもう一度周りの様子を窺ってから、僕は一歩、彼らのいる机へと近付く。

その時。

ぼん。

と、肩に手が置かれ

「うわっ、すいませんでしたああ！！ 変な気を起こしてごめんなさい！ っていうかやっぱり現れた！」

悲鳴に近い声で僕は即座に謝ったよ。

そうだよ！ だからやめておくべきだったんだ！ 賢明に離れていくべきだったのに！

すぐに後悔した僕だったが、もう遅い。

肩に置かれた手から、物凄い矯正エネルギーが溢れ出ている錯覚がする。手を置く力はそんなに強くないけれど、これはきつと裏返しの優しさだ。ボルテージが限界を突破した故だ。ああどうしよう、怖くて振り返れない！

急に叫び声を上げた僕を、マンガ雑誌を読んでいた3人も含め、クラス中のみんなが奇怪なものを見るような目で見た。

だが、僕はそんなことをいちいち気にして構っている場合じゃない。何とか延命を請い願うため、ゆっくりと振り向くと……。

そこにいたのは古谷だった。

僕の肩に置いた手を中途半端に引っ込めて、引きつった笑顔で僕を見ていたのは、僕が恐れていた美奈ではなく、古谷だった。

「あれ……？」

つい、間抜けな声を漏らす。

いや、あれ？ とか言ってる場合じゃないのは分かってる。古谷からしてみれば、ただ肩に手をぼんと置いただけで、いきなり謝られ、やっぱり現れたとか何とか叫ばれたのだ。

あれ？ と言いたいのは古谷の方だというのはよく分かる。

でも、僕も言わずにはいられない。

古谷は、所在なさげに宙に伸ばしていた右手をちよつとずつ引つ込めていきながら、引きつった笑顔のままに引きつった声を出す。

「ど……どうしたの？ 稲橋君。……あの……、私、何か変なことした？」

囁くような古谷の声に、僕はハッと我に返ると、一気に赤くなりながらも慌てて誤魔化した。

「いやっ、全然！ 全然、何でもない！ ちよつと思ひ込んだだけっていうかね！」

「……え……？ 何を」

「そっ、それよりさ！ 古谷こそどうしたの、僕に何か用？」

クラスメイトの、「あいつ何で叫んだんだ……？」という訝しみの視線を跳ね返すべく、僕は無駄にいつもより元気な声を出す。微妙に虚しく響く気もするが気にしない。

僕の切羽詰まった剣幕に押されたのか、彼女には申し訳ないことの連続だけど、古谷はぎこちないながらもすぐさま手をくいくいと振って僕を呼ぶ仕草をする。

「あ……あのね、楓ちゃんが呼んでたよ。何だかよく分からないけど、稲橋君呼んでこいって、楓ちゃんが」

「わかった行くよ」

案内してくれるという古谷の後に続き、刺し貫くような視線の充

満する教室から逃げるように、僕は早足で教室を出た。

8 - 6 隠れんぼ

古谷に連れてこられたのは、1階の上り階段の裏側にあるスペース、モップや箒などの清掃道具とか何が入っているのか分からないダンボールとかが置かれている、人目につかない場所だった。

校内で隠れんぼをすると、誰か一人は必ずここに隠れる、というくらいには見つからない場所だ。

そんなことはさておき、件の階段裏では、作利川と美奈がいて何故か僕を待っていた。

作利川は、埃が積もっているというのにダンボールの上にどさつと腰掛けていて、美奈はというと壁際で腕組みをして立っている。一見すると不良が集会をしているようで、あまり近付きたくない雰囲気だった。

「待ってたよ、稲橋君」

いち早く僕に気づき、作利川が立ち上がる。

その声に釣られてか美奈も僕の方を見たが、すぐにまた目を逸らした。

先頭に立って僕を案内してくれた古谷は、すつと横に退いて言う。

「稲橋君呼んできたよ、楓ちゃん。褒めてほしいな」

「よくできましたご苦労さん。よく躡られていて、利口なわんちゃんですね」

「わんちゃんじゃないよっ、普通に褒めて!」

「うん、ありがとう味羅。もう用はないから帰っていいよ」

「ひ、ひどっ!」

「冗談だよ泣くなよ」

「あのさあ」

作利川と古谷が僕をほっという漫才を始めてしまったので、二人の間に割って入る。

こんな場所に呼び出されて、僕がいったい何かしたというのだろうか。

結局トシ達が呼んでいた雑誌をチラ見することもできなかったし、こうして美奈が別の場所にいたことを確認してしまうと、微妙に未練が残るよなあ……。

いいや、過ぎてしまったことは仕方がない。僕は二人を交互に見ながら聞いた。

「呼び出してまで、僕に何の用なの?」

「そうそう、そうなんだよ稲橋君。こんなやり取りしてる場合じゃなかった」

作利川は古谷との漫才をあっさり切り上げると、一瞬で真面目な表情へと切り替える。

そして、作利川は後ろを振り向き、壁際でじっとしていた美奈を

手招いて呼んだ。

「美奈ちよつとこつち来て」

「……」

無言で腕組みを解きながら美奈が寄ってくる。そのとき僕は、さつきまでは見えなかった手紙のようなものが、美奈の手に握られていることに気付いた。

何だろう。この美奈の黙り方は何か怖いぞ。

そんな失礼なことを考えながら次を待っていると、作利川は美奈の腕を軽く叩いて促す。

「ほら美奈、それ稲橋君に見せて」

「……」

黙ったままで、美奈は僕を見つめ。

黙ったままで、手に持っていた手紙らしきものを僕の方へ突き出してきた。

何の言葉もなしに突き出されるなんて、印象はすこぶる悪いが、美奈だし仕方ないか。

これを分かりやすいように翻訳すれば、受け取れ、ということなんだろう。

「……これ、開けていいの？」

とりあえず爆発物の可能性もあるし、慎重に受け取ってから、僕

は美奈にそう訊ねる。美奈はやはり一言も発しないままで頷く。

美奈の違和感のある黙り具合に、微かな不穏さを感じながらも、僕は受け取った紙を開いてみた。

手紙のように見えたが、それはノートの用紙を手紙の形に折り曲げたものだった。奇妙に凝っているその紙を開くと、その瞬間に僕の目に飛び込んできたのは

『あなたのことが好きです。付き合ってください』

「ぶっ!？」

思わず吹いた。

「……?」

「えっ、ちよっ、何なんだよこれ!? どういう意味!？」

付き合ってくださいとか書いてあるんですけど!？」

腕をめいっぱい伸ばして片手で紙を持ち、もう片手でその紙を指さしながら、錯乱気味に叫ぶ僕。あまりにその一文のインパクトが強すぎて、他にも何か書いてあるということに気づけない。

作利川も美奈も古谷もみんな一瞬ぼかんとしていたが、察しの早い作利川がすぐに気付いた。

「あっ、違う違う稲橋君! それ美奈からのラブレターとかじゃないから! 差出人よく見て!」

混乱状態に陥りつつ、言われるがままに下の方を見ると、汚いながら丁寧な字で、あまり見覚えのない男子の名前が。ただし、全く知らないというわけではなく、たぶんこの学年の誰かだろう。

「それね、美奈が今日貰ったやつなんだよ。貰ったっていつでも、直接渡されたわけじゃないんだけど……」

本人に代わって作利川が説明する声が聞こえたので、僕は顔を上げる。

……そういうことか。ようやく状況が掴めた。

いやあ、一瞬本気で焦っちゃったよ。美奈が僕に告白の手紙を書いたのかと思って。

この今の僕の誤認に、古谷は爆笑し、美奈は茹でダコみたいに顔を真っ赤にしていた。

……。……はあ。

……今の短い時間で心拍数跳ね上がったんだろうな。心臓がばくばく鳴ってるのが分かる。

「びっくりした……。ドッキリかけるなよ」

「ごめんごめん。先に言うのを忘れてた」

片手を立てて詫げる作利川。古谷は笑いすぎて涙まで出ている。美奈はというと、勘違いに怒っているのか、今すぐにも「悠揮の馬鹿」とか言い出しそうな目で僕を睨んでいる。

「あのね、稲橋君への用事ってのはこのことなんだけど」

ツボってしまった古谷の背中をさすってやりながら、作利川は話を続けた。

「その手紙、歴とした告白の手紙みたいでさ。美奈の机の中に入れてたんだって」

「へえ……」

相槌を打ちながら、ちらりと美奈を見る。美奈はちっとも嬉しくなさそう、というかむしろ恥ずかしさ全開な表情で余所を向いていた。まだ顔がかなり赤い。

「美奈が私にどうしたらいいかって見せてきたから、これは稲橋君に言うべきだろうと思ってね。だから呼んだ」

ちなみに情報網で探ってみたけど、どうもそれはイタズラじゃなくて本物みたいだね、と付け加える作利川。

さらっと言ってるけど、いったいどんな情報網を使えば告白の真偽が分かるんだろうか。疑問には思うけど、恐ろしいから聞きたくないな。

と思つたら、それで説明は終わりのようで、作利川は僕の言葉を待つように僕を見る。

やっと笑いが収まった古谷にも、真っ赤な顔をしたままの美奈にも、僕は3人に揃って見つめられた。

「……」

……えっと。

そんなにじーつと見つめられても、特に大したことは言えないんですが。

「……僕に何を言えと？」

弱々しくそう言うと、作利川はずっこけ、古谷は「ええーっ!?!」という表情になった。

古谷は愕然の表情そのままに、僕に向かってまくし立てる。

「稲橋君、古舘さんが告白されたんだよ！何か思うこととかないの!?! たとえば、『美奈は渡さない!』みたいなやつとか!」

何だよそれ。恋愛ドラマの気の強い彼氏じゃん。僕がそんなタイプに見える？

「いや、別に……」

「おっ、思わないの!?! マジで!?!」

古谷が物凄いテンションになっていることに若干引きつつ、そしてそのお陰でどんどん冷静になっていく僕は、淡々と言い切る。

「だって、告白されたのは美奈でしょ？僕がどうこつ思ったって、仕方がないことだし。美奈に付き合う気があるなら付き合えばいいし、ないなら付き合わなければいい。それだけだと思っけど」

……っ。

……あれ？

何か今、自分で言ってる奇妙な感覚が胸を過ぎった。

僕の言葉に、しん……と水を打ったように辺りが静かになる。熱くなっていた古谷も作利川も、見事に冷えて固まっていた。そんなに効果のある言葉だったかと思うくらいに。

ただ、美奈は違った。美奈は固まっているのではなく、何も言っていないだけだった。

何も言わずに……適切な表現をしてみると……僕を見ていた。単純すぎる表現だが、それ以外に言い方がない。

「……美奈は」

僕は口を開く。美奈は目を逸らさないでいてくれた。

「この人から手紙貰ってこうして告白されて、付き合いたいと思っただ？」

「……思わなかった」

単刀直入に聞くと、飾り気のない言葉が返ってきた。

美奈はきつとそう言うだろう。何故かは知らないが、そんな気がしていた。そんな気がしていたのだが、こうして美奈の口から聞くと、不思議とほっとする。

「じゃあ、断ればいいんじゃない？　今までだって美奈はバツサリ切り捨ててたような気がするけど。今回は何か事情でもあるの？」

誰もが上玉だと認めるくらいには美少女である美奈（ただし見た

目だけの話だけどもは、かつて何度か告白されたことがあった。そしてその度に、時間をくださいとかすら言わずに断っていた。

そんな美奈が、告白されたことを誰かに相談するのは珍しい。手紙だから？ 今までされたことのない方法だから？ ……だなんて、そんなことあるわけないし。

「……事情なんか、ない」

ぼそりと呟くように言った美奈は、その後僕を睨みつけてきた。

「けど。悠揮が、家族だって言ったから……」

「なに？」

「……そういうこと、相談した方がいいのかと思って……」

「なんだって？」

美奈の声は人に聞かせる大きさじゃなくて、独り言に近く、僕にはよく聞こえない。

しかし、僕が聞き返してみても、美奈は二度と繰り返してはくれなかった。

代わりに、言葉に言葉を被せ直して、訊ねてくる。

「……悠揮は、私が誰と付き合っても、どうでもいい？」

ぶっきらぼうな聞き方だったが、僕はそれを聞いた途端にまた胸の上をたわしが走っていくような奇妙すぎる感覚がした。

僕は我ながらどうしたんだ。お昼に弁当食べ過ぎちゃったのかな。

まあ、得体の知れない感覚のことは今は置いて、美奈の質問に返事をするのが先だ。

「まさか」

私が誰と付き合ってもどうでもいい？

そう訊ねてきた美奈を見て、僕は笑って否定する。

「どうでもいいわけないよ。すごく気になる」

「……」

「だけど、美奈が誰と付き合いたいか、そう思ったのを邪魔したくはないからさ。僕は何も言わないよ。言ったら余計なお世話じゃないかな」

美奈は黙りこくって、それ以上何かを聞いてくることはなかった。言うことがなくなった僕も次いで黙る。僕らの間を、^{たんま}黙りが支配するようになって……。

……そこまできてやっと、僕らは二人だけの世界から、元いた学校の階段裏へと戻ってきた。

僕の発言を受けて固まっていたはずの作利川と古谷が、いつの間にか動いている。

「いやー、美奈……」

「いやあ、稲橋君……」

揃いも揃って似たようなことを言いながら、二人はそれぞれ呼んだ人の肩に手を置いた。

僕の肩に手を乗つけた古谷は、一呼吸おいて、まるで作利川の魂が乗り移ったのかと思うほどの人の悪い笑みで、僕を見上げる。

「……なんだよ、古谷」

「稲橋君、ホントに古館さんに優しいこと言ってたけど。ちよつと周り見てごらん?」

言われた一瞬は、どういうことだか分からなかった。

だが、周りという嫌な言葉を理解した途端、自分の後頭部の辺からさあつと血の気が引くのを自覚しつつ、その場を振り向く、と。

何かいっぱい人がいた。

こんな偏狭な場所だというのに、見物客が集まっていた。下は下級生から上は先生まで、実に幅広い人達が、皆一様に僕らのやりとりを黙って聞いていたようだ。それぞれ昼休みに用事があつた途中なのだろうが、わざわざその手を止めての見物である。

「さっきのやりとり……みんなに聞かれちゃったみたいだよ」

僕は古谷の言葉を最後まで聞きちゃいなかった。

ひそひそひそひそ。

ギヤラリーの壁から漏れ聞こえてくる内緒話に、耳を傾けてみれば。

「……今なに？ なにしてんの？」

「……稲橋と古館が向かい合ってるよ」

「……きつとあれだよ、告白タイムじゃないかな」

「……おおっ！ ついに往年の幼馴染みの仲が決着するのか!？」

「ちっがーう!！」

好き勝手に囁かれる誤解を広まらせないようにするために、僕は精一杯の大声を張り上げた。

8 - 0 俺はわざといたわけじゃないんだよ

今は放課後。

まあ、放課後つつつても、各クラスの掃除が終わったくらいの時間ではないわけだけでも、俺は、自分の教室（2 - 1組）を目標して廊下を急いでいた。

理由は、いつも部活の時に着るユニフォームを教室に忘れてしまったからだ。

「あんの馬鹿姉のせいだ……」

俺は、校庭から聞こえてくる、着替えの早いサッカー部の奴らの準備をする声を聞きながら、奥歯の辺りを噛みつつ呷く。

いつもなら部室に置いてくるんだけど、今日は運悪く、洗濯しに一度家に持って帰った日の、次の登校日だった。さらにその場合でも、普段なら朝練の時に着るから部室に置いてくるし、朝練がなくても朝のうちに部室に置いてくる時間があるというのに、今日に限って俺の馬鹿な姉のせいで遅刻してしまい、教室に持って来ないわけにはいかなかったわけだ。

……教室に忘れたのは完璧に俺だけが悪いんだけどな。

その点は譲歩するとしても、やっぱり遅刻したのが元々の原因であり、さらにその元を辿ればやっぱり俺の姉に責任がある。あのブラコン野郎。

人がもう学校に行く時間だって散々言ってるのに、それを無視して付き合わせやがって。

そんな何歳も変わらないってのに、俺のことをまるで自分の子供みたく思ってる節があるんだよな……。

俺はお前の息子じゃねえよって何回も言い放ってるんだけど。聞こえてないのかね？

かと思えば、俺の携帯チエックしてたりするしさ。

もううんざりするよ。そんなに気になるならフィルタリングでもかけときゃいいよ。

と、俺が頭の中で姉への不満を爆発させていて、これ以上広がると口から出てくるぞという具合になったとき、ようやく教室へと辿り着いた。

(顧問に目をつけられる前にさっさと着替えねえと)

教室のドアに手をかけ、そのまま引き開けようとしたのだが……。

ふと。

教室の中から誰かの話し声が聞こえるような気がして、俺は自分の手に停止命令を送った。

その状態のまま、固まって耳を澄ますと、確かに話し声がする。

「……居残らせてごめんね」

「いいっていいって気にしなさんな。今日はたまたま部活無いし、どうせ家には帰りたくないんだし」

……思いつきり聞き覚えのある声だった。古館と作利川だ。

自分のクラスなんだから、この教室に残っていたって何の不思議もないが、掃除も終わった時間なのに何をしているんだろうか。

まあ俺の知ったことではないし、さつさとユニフォームを取らせていただいたて、さつさと退場することにしよう　と、俺は教室のドアを開けかけたのだが、さらに飛んできた言葉が俺の手をまた止めさせた。

「で？　何？　稲橋君についての相談？」

「……うん」

相談かよ。ただのおしゃべりじゃないのかよ。くそっ、何か知らないけど入りづらいぞ。

いや、ここに黙って突っ立って、その話を聞いていることの方がずっとまずいのは分かってるけどさ。こいつらの口調から感じる雰囲気、妙に真剣な気がするんだよ。そんなところに、お邪魔しますと入っていく勇気が湧かねえ。……そういや、悠揮についての相談って言ってたな……って、洒落とか考えている場合でもないわ。

結局どうにも動くことができず、ドアに手をかけた状態で固まるしかない俺。

あいつらは俺に気付くことなく会話を始めてしまうので、俺なりに聞かないように頭の中でサッカーについて考えてみたりするのだが、どうしても耳に言葉が入ってくる。

「そっか、稲橋君か。……じゃあ、恋？ 恋の悩みなのか古館君。さっきも告白してたもんねえ」

「してない！」

「おっとびっくり」

「……してない。……それはまた、別」

「ふーん、まあいいけど。何か気になることでもあるの？ 1年の頃から比べると、最近一番、稲橋君と美奈の仲良いじゃん」

「それは、そうだけど……」

言いづらそうに黙る古館。んー？ と首を傾げる作利川。

……おい、何で俺は見ていないのに、シーンが頭の中にこんなくつきり浮かぶんだ。おかしいだろ。

「……悠揮が私に優しくしてくれる度に、申し訳なくて」

「どうして？」

「だって、私は悠揮のこと、蹴っ飛ばしてばかりいて、それで……私は悠揮のために何もしてない。なのに、……ありがとうだって、ちゃんと言えないのに」

「それって、どうしてだと思っ？」

「……え？」

「どうして美奈は稲橋君のこと、すぐに蹴っ飛ばしちゃうのか。どうして稲橋君にありがととかが言えないのか。美奈はそういうこと、考えたことある？」

いつもテツキトーに笑っている作利川が、真面目な声を発している。

これは真面目な相談だ。やべえ。

あーあ、聞こえない聞こえない。俺には何も聞こえない。

「……………」

「……………これはねえ、私の想像なんだけど。美奈はね、稲橋君でストレスを発散しているんだよ」

「してない」

「いやいやいや、美奈を責めているんじゃない。何も言わずに聞いて。稲橋君はさあ、どんなことがあっても、美奈の味方でいてくれるでしょう？ 美奈はそれを知っている。稲橋君が美奈の味方でありたいと思っっていることも分かっているから、美奈は安心してるんだと思うんだ」

……………作利川が何か語り始めてるよ。真剣な表情が目には浮かぶようだ。

何言っているのかは俺には分からないし、聞き流しているつもりだから分からなくていいのだが、悠揮と古館の関係についての話であることは嫌でも分かる。

ああもう、聞きたくねえんだけどな。離れてしまおうか。でも、ここで離れたら、いつこの相談が終わるか分かんねえし……。ちょっと一息休憩、みたいなことをしてくれれば、これ幸いと入っていただけるんだが……。

聞きたくない、だが早く部活に行きたい。どっちつかずに揺れている俺を置いて、二人の話が進んでしまう。

「安心して、暴力……」

「そう、それが問題なんだよね。美奈は自分で思っている以上に、強いストレスを持っているんじゃないかな。そして、そのストレスを打ち明けられる相手が稲橋君しかいないから、強烈な形で稲橋君に向かっちゃうとか。そう私は考えているんだけど」

「……違う。私は、悠揮に何か言われたら、すぐカッとなっちゃうだけ」

「……じゃあ……、それは、稲橋君の言葉をきっかけにして、溜まってるものが出てきているんじゃない？ ……いや、凄いな稲橋君は。ただ美奈をからかっているだけだと思っていたら、無意識のうちにそんな風にして美奈のストレスを解いてあげていたのかも……」

「ちょっと、楓奈」

「ああ、ごめんごめん。だからね、美奈は、稲橋君にすぐ手を上げる自分が嫌なら、っていうか嫌だから私に相談してるんだと思うけど、私たちにも、そうやってちょっとずつ、自分の中に溜め込んでいることをぶつけてくれればいいんだよ」

「……………」

沈黙の帳が降りて、場の空気が止まった。

耳を塞いで、できるだけ聞かないようにしていたのだが、それでも話の内容は聞こえてきた。もしかしたら俺は、心のどこかで興味があるのかもしれない。……………そうだとしたら、我ながら最低な奴。

古館のことは、別段話したりすることもないからよくは知らないが、悠揮をぶっ飛ばしている場面を何度も見てきた。悠揮はそのまま気にしてなかったみたいだし、悠揮が平気なら俺らはどうする必要もないと思ってきたが……………。

悠揮にそういう接し方をしてきたこと、こいつはかなり気にしてるんだな。

まあ、それは俺としてはどうでもよくて。早く終わってくれと祈るばかりだ。

その祈りが通じたのか、場の空気は再び動き出した。

「でも、迷惑……………」

「美奈」

何か言いかけた古館を、作利川が遮る。少し強い口調だ。

「美奈はそうやって、すぐ迷惑だと思ひ込む。そんなこと心配しなくても、私はね、迷惑なことは迷惑だっけすぐに言うから」

「……………」

「本当は美奈、怖いんじゃない？ 人を信頼することが。信じた人に裏切られるのが怖いから、素直にならないでいる。殻を用意して、自分の全部を出さないでいる。何せ美奈は経験があるわけだからね。もう二度と傷付きたくないわけだ」

「……」

「……ねえ、私たちのこと信じてる？ 稲橋君にしたって、本当に心から信じてると言え」

ドカンッ！！

作利川を無理矢理黙らせるように、作利川の言葉を遮って、物凄い音量の打撃音が響いた。

その凄まじい音たるや、教室に隕石が降ってきたのかと思うくらい、どでかいものだった。もう少しで俺は声を上げるところだった。ていつか心臓が跳ね上がったしな。

俺がドキドキしている間、しばらく教室は静かだったのだが、静かな空気の間を縫って、古館がポツリと言った言葉が聞こえてきた。

「そういうことは、言わないで」

「イラつくから？ まあ、狙ったからね。でもやっぱ、美奈は私のことは怒鳴りも殴りもしてくれないな。これが稲橋君なら、机じゃなくて本人殴ってるでしょ？ 私たちにも素直に怒っていいんだよ？」

「……「じめん」

うわ、今の隕石落下みたいな音は、古館の仕業だったのか。相変わらず人間離れた威力してるよ。

しかも「殴ってくれない」とか、作利川のやつ、マゾにでも目覚めちまったんだらうか。

……しかし今はマジでびっくりした。もしこの辺に誰かがいたら、俺と同じように飛び上がってるだらうな。

作利川が、静かな声で話し出す。

「……稲橋君のことは信頼してるんだね？」

「……うん。　ずっと昔に、約束してくれたから」

「それなら、その信頼が無くならないように、稲橋君に言っとかなくっちゃな。あと、これは中1のときの……初めて相談受けたときにも言っただけど、美奈ってさ、自分を低く評価しすぎなところがあるよ。美奈が本当に迷惑極まりない嫌な奴だったら、誰も関わろうとしない。でも実際は違うでしょ？　だから気にしないでいいんだよ」

「……うん……」

その言葉を最後にして、ぷつりと会話は途切れた。

おや、これはそろそろ終わりの兆候か？　と、呑気にそんなことを考えていた俺だったが……。

「……ところで、さっきから教室のドアの前立っているのは誰なのかな？」

……。

……うわあああやっべえええバレているうう……！

あいつは何で分かるんだよ！ 俺の体はすっかりこのドアで隠されているというのに！

っーか俺別に聞きたくて聞いてたわけじゃないのに！

はあ……おそらく何言っても勘弁してもらえないだろうな……。

教室の中から、このドアに向けて歩いてくる足音が聞こえる。その足音が、暗い中に響く時計の音のように、やたらと恐怖を煽り……気がつけば、俺の足下から得体の知れないがくがくという震えが迫り上がってきていた。

……俺は今日、部活どころじゃなくなるかもしれねえ……。

9月6日 晴れ

朝から忙しかった。

悠介君と悠奈ちゃん、よく毎日あやってケンカばかりしていられるなって思う。

そういえば、私はケンカしたことってあまりない。

悠揮とも。悠揮は優しいから、絶対私を負かそうとはしないし。私が一方的にふて腐れてばかりいる気がする。

今日はまた、久しぶりに告白された。

手紙で言われたから、手紙でごめんなさいって、断っておいた。みんな、私の何がいいのかな。

私には好きになれるところなんてないと思う。

そういえば、手紙を見せたときに勘違いして慌てる悠揮は面白かった。それもそれで、恥ずかしかったけど。

私が告白されたらどうでもよくない、って言ってくれたのが嬉しかった。でも何も言わないって言われたのは、あんまり……。

悠揮が私に遠慮してくれること、あまり嬉しくないって思うのは、家族だから？

……でも、私ができることじゃないよね。

マーマレードジャムを買ったついでに、悠揮が私に白桃ゼリーを買ってきてくれた。

やっぱりありがとうって言えなかった。何も言わないで受け取ってごめん。

『日記』 # 8 (後書)

∧.i.2.4.9.8.1 | 8.7.3.∧

9 - 1 ペンキは飲めない(前書き)

僕は高校に入ってから、初めてクラスで出し物をする文化祭というものを知りました。

この時期からもう文化祭に向けて下準備をするんですね。

中学校では合唱コンクールという形でしか文化祭に参加していなかった僕ですが、今年は部活も含めて、今までより少しは大きな文化祭の構成要素になれそうです。

……と、更新が滞っていることから話を逸らそうと喋ってみました。

ええと、チャプター9は文化祭のお話にする予定です。

ちなみに次の話を投稿する日は未定です……。

ごめんなさい、夏休みを活かして一生懸命書きますので、まずはこの話から。

熱中症に気をつけて、疲れないようにして読んでくださいね。

9 - 1 ペンキは飲めない

文化祭の醍醐味といえば、何だろう。

最近僕は、そんなことを考えずにはいられない。

よく聞くのは、『本番は本番で楽しいけど、文化祭に向けた準備こそが最大の楽しむポイントであり青春だ』なんて意見だ。それは確かに、僕の中1時代におけるわずか1回の文化祭経験でも、本番は予期せぬトラブルやら忙しさやらで楽しんでいる余裕なんてなかったりして、当てはまるっちゃ当てはまる。

しかしだ。

準備の段階からトラブルが起きまくり、忙しくて目が回っている状態では、楽しむどころではないんじゃないだろうか。

多少なりとも準備には大変な思いをすることになる、それは僕だって分かってはいるけど……。

「……………おっ……………もてえ〜！ 誰だよ看板にこんなでかい板用意したやつ……………！」

流石に、僕一人で一畳より遙かに大きくずっしりと重い板を運ばなくちゃいけないほどのどたばた加減って、ひどいと思うんだよなあ……………。

このどたばたは、文化祭数日前だからこそのものなのだろうか。

「うあゝ……」

放課後、重い板をよいしょよいしょと運搬し、やっとのことで教室へと到着した僕は、フルマラソンを完走したかのような気分になって思わず疲れた声を漏らしていた。

万が一にも板を落として割ったりしてしまつては大変だから、深々とおじぎをして背中に板を乗せるような体勢で教室まで頑張つたんだ僕は。

これがまた辛い。ただの床を歩くだけならまだしも、階段を上るのはきつかった。腰の曲がつたご老人がどんな苦勞をしているか、身に染みて分かつたよ。

教室のドアの前で、板の一边を慎重に床に降ろし、ふう……と汗を拭つ。

ここで配達の人として仕事を終えられたら楽なんだけど、残念ながらどたばた状態の今、そんな悠長な展開にはならないんだよね。

ドアを開けると、ちょうど目の前では追滝がペンキ缶の準備を終えたところのようだった。

机とイスを寄せて広げた床にブルーシートを引き、窓を全開にし、必要なペンキだけを揃え……と、ハード度合いで言えば僕に負けず劣らず忙しく働いていた追滝に、僕は軽く声を掛ける。

「ただいまー」

「あつ、おかえり、お疲れ様。……大丈夫？」

板を持つだけで汗だらけになっていた僕を見て、自分を柵に上げて追滝が心配してくれた。

が、僕は全然問題ないと強がってみせ、踏ん張りながら板を教室へ運び込む。

問題はあるけど。

クラスの企画であるところの準備であるところのこの板運びを、手伝ってくれる余裕のある人がいない状況こそ問題だけ。

でも、同じくらいは仕事をしている追滝を前に不満など言っていられない。

追滝は優しいことに、さっき自分も一緒に運ぼうかと申し出てくれた。しかしながら、これがいくら重くても女子に手伝わせるわけにはいかないしね……。作利川とか美奈ならまだしも。

その代わりに手伝いを頼んでみた男子の面々は、それぞれ部活での準備や各自の作業があつて、誰一人暇な奴がいなかったため、結局僕は一人で踏ん張る羽目になったのだ。

中には、内容を聞いて「俺やだ」と思ったから断ったやつも絶対何人かいただろうけどな！

ビニールシートの上に板を横たえると、僕はようやく大きな息を吐いて床に座り込んだ。

「あー……疲れたー」

「ありがとね、稲橋君。そういえばさっき先生が、他のクラスには内緒だぞって言って自動販売機の飲み物をいくつか持ってきてくれ

「ただど……飲む？」

そう言って追滝が僕にペンキの缶を差し出してくる。

……『ペンキの』缶である。こんな太い缶、しかも思いっきりペンキというラベルの貼られた斬新なデザインの缶が売っている自動販売機なんかがこの辺にあるとは思えない。

ので、僕は目を細める。

「……追滝さん、それは」

「冗談だからね、稲橋君。そんな目をしなくても。一人で飲むにはちよつと量が多すぎるもんね」

「誰がサイズの話をしました？」

「えっと、はい。このスポーツドリンクでいい？」

「さんきゅ。それにしても追滝って冗談とか言つようになったんだ」

「たぶん稲橋君のせいかな」

うん？ 何で僕のせいなんだよ。

内心の疑問がその通りに表情に出ていたのか、追滝は僕の顔を見てくすつと笑った。

「だって稲橋君達といると、ふざけたことばかり起こるんだから。私だって影響されるよ。……あ、板の下書きは私がやるから、稲橋君は少し休憩していいよ」

言い置いて、予想図片手に早速鉛筆で板に下書きを始める追滝。

ふざけたことばかり起こるって……言い方が望まれない感じなんですよ……。

追滝の言葉を聞いてちょっと微妙な心持ちになった僕なのだが、追滝の顔を見る限り、ふざけたといってもそれは楽しい意味でのふざけたことらしい。

僕としては、ふざけたことを起こしているつもりなんてこれっぽちもないんだけどなあ……。

僕のせいじゃなくて、周りにいる愉快な人達がみんなしてふざけたことを起こすんだよ。

それはともかく、一仕事を終えてしばし暇を頂いた僕は、ポカ何とかのスポーツドリンク缶をさっさと飲み干して、教室内をぐるっと見渡してみる。

教室で作業をしているのは、ざっと10人足らずってところだろう。他の人達は、家で作業できる人は家に持ち帰っているし、部活でも出し物がある人は部活の方へ行っている。その他、会計担当と料理担当などは例のスーパーへ行つて材料を見ていたりするし、それはもう休憩中の奴が言うのも何だけど忙しいのだ。

言い忘れたけど、僕らのクラスは文化祭でハンバーガー&ホットドッグ店をやることになった。

先生が言うには「お前ら去年文化祭やったから大変さも知ってるだろうが、二種類もやるなんて相当だぞ？」とのことだったけど、クラスのほぼ半数ずつでハンバーガー派とホットドッグ派に分かれてしまっていた僕らは、歩み寄りの手段として両方出そうというこ

とに決定したわけである。

それが安直な判断だったとはまだ思っちゃいないけど、やっぱりこれは大変だ。

人事ひとつにしても、ハンバーガーとホットドッグにそれぞれ料理担当が必要なわけだし。準備の段階でだって、その分材料と費用は多くなるわ、自分の部活との兼ね合いとで大変だわ、あくせくしまくりである。部活に入っていない僕はまだいい方なんだよ。

そう、今教室にいる人達は、ほとんどが部活に入っていないか、部活での出し物がないか、そのどちらかの人達だ。僕なんか基本的に接客メインの係のはずだったのに、屋台作りの人手が足りないってことでこうして放課後の作業に加わっている。

足りないのは人手だけじゃなくて場所もだしね。本来ペンキ塗りなんてものは外でやった方が安全なんだろうけど、外もどたばたして僕らが入るスペースがない。それでこうやって狭い教室で作業しているのだ。

「……こんなものかな。それじゃあ稲橋君、始めよう」

と、つらつらつらつらと考え事をしていた僕の前に、ひょっこりと追滝が戻ってきた。

もういくら先が磨り減った鉛筆を筆箱にしまっ追滝の様子を見つつ、ちらりと看板予定の板を窺ってみると、まさしく瞬間技とも言えるような驚くべき速さで下書きが終わっていた。

流石は追滝。作業の効率が、僕も含めた他の生徒の比じゃない。

「早いね」

「……ん、まあ……、稲橋君は思ったより手早く持ってきてくれたから、私も負けていられないなと思って」

「……」

変なところで対抗心を抱かれていた。

手早く持っただけか、自分では甚だ疑問なだけ。

何にしても次は色塗りだなと思って板の方へ近寄ると、追滝はぱぱと動いて、予め用意していたらしいペンキ缶をひとつ、僕に手渡してくる。

「それじゃあ稲橋君、まずはベースとなる背景から塗ります。鉛筆の線から内側には、あんまりはみ出さないようにして。あと床に垂らさないように気をつけて。気持ち薄めでお願いなね」

「あ……はい」

こういうとき、テキパキと指示を出せる追滝は本当にしっかりした人だと思う。

少なくとも新井君よりは学級委員に向いてるんじゃないかと思わなくもない。ちょっと人見知りをするところはあるけども、それを言ったら芽寺さんなんかもう、人見知りってレベルじゃないし。

僕はペンキ缶を受け取って、追滝に言われた通りに、鉛筆で粹取りされた屋台名や模様の部分に注意して避けながら、気持ち薄めに塗る。

ペンキだから薄いも何もあったもんじゃないけど、まあ追滝の言うように、気持ちだ。

何度か刷毛をペンキ缶に突っ込んだ後、僕はふとあることを思った。

「ところでさ、美術部ってうちのクラスにいなかったっけ？ よくよく考えたら、こういう作業を男子の僕がやるのは変な気がするんだけど」

「稲橋君、それは男女差別だよ」

こういった描く作業は女子の方が得意なんじゃないか、そして描くのが得意な女子は美術部に多いんじゃないかと、そう思ってたの僕の発言。

愚痴というほどの陰気な呟きではなかったが、追滝に大真面目な顔で諭されてしまった。

「男子でも色塗りが上手な人はいるし、女子でも美術のセンスが壊滅的な人はいるよ」

……………。

……ああ、誰のことを言わんとしているのかは何となく分かったよ。

あれだろ、黒髪ロングの、人の恋愛が大好きな、特技は読心術って奴のことでしょ？

あれはなあ……僕も最近までそれほど実感があつたわけじゃないけど、一般的な女子という枠に入れておくには少し足りないという

か飛び出ているというか。決して不器用なわけじゃないんだけど何か図画工作や技術家庭科系は苦手そうな、そんな感じ。

でも、壊滅的とまで言っちゃうのもどうなのかな。可哀想というか凄い剣幕で怒られそうだ。

「美術部の人もうちのクラスにはいるけど、ほら、美術部って文化部だから、まず部の出し物を完成させなくちゃいけないんだと思うよ。文化祭のときはその作品が美術室に展示してあるよね、毎回」

「そうなんだ。授業以外で美術室なんか行ったことないや」

「勿体ないなあ。美術部の人達の作品って、とっても上手だよ？今年は見に行ってみたら？」

「んー……そうしてみようかな。っていうか追滝、僕追滝に対して美術部っぽいイメージあるけど美術部じゃなかったっけ？」

「うん、私バドミントン部」

「ああ、それって何だっけ、正月にやるやつだっけ」

「それは羽根突き」

すばーんと竹を割るようにきっぱり言われた。僕真っ二つ。

これは想像に過ぎないけど、その即答ぶりから想像するに、もしかしたらよく間違われるのかもしれない。

……そうだとしたら、何かごめん。

でもほら、似てるじゃん。羽の生えたブルーベリーみたいな球をさ、落とさないようにラケットを使って打ち合うスポーツだよね？
僕みたいにその辺興味ない人間には敢えて区別する機会もないんだって。

特に咎められたわけじゃないのに僕が一人で言い訳を考えていると、追滝は手を休ませることなく素晴らしいペースと正確さで色を塗りながら、新たに話題を持ち込んできた。

「ときに稲橋君、古館さんはどうしたの？」

「美奈？」

僕はきょとんとして聞き返した。

「知らないよ。帰り学活終わってすぐこの作業に引きずり込まれたんだから。もしかしたら帰っちゃったかも……いや、あの美奈のことだし、みんなが頑張ってるときにそれはしないな」

「ふうん」

「でも美奈って係はあれだし……、基本的に受け持った仕事は少ないはずだから、一旦家に帰って作業してるかも」

「そっか」

追滝は相槌を打ちながらも手を止めない。それを見ると、本当に何の意味もなく聞いてきたような気がするが、まさか追滝ともあるう人が自分から話を振っておいてそれに何の意味も持たせないなんてことはないだろう。

……と、僕は勝手に思ってみたのだが。

「美奈がどうかした？ 何か用事とか伝言があるんだったら、僕が受けるけど」

「うっん、そういうことじゃない。ただ、稲橋君引き留めちゃって、古館さんには悪いことしたかなって」

「……？」

しみじみとした口調で言った追滝だったが、僕は含意がよく分からなくて首を傾げた。

僕が放課後に残って作業していたら美奈に何の悪影響が？

僕別に美奈の荷物運びをやらされたりとかしてないから、美奈に不便はないよ？

とまあ、きつと何も分かっていないような顔で考えながら板を塗っていた僕を見て、追滝は一瞬　その眼鏡をキラリと光らせた。

ような気がした。

「えっ、なっ、何？」

なまじ眼力モードを発動してしまった追滝にいい思い出などひとつもないため、つい反射的に構えてしまったのだけど、それ以降の追撃はなかった。

そもそも、追撃以前の初撃と呼べるものも特になかったけど。

今眼鏡が光ったのは錯覚かと、僕の気持ちを微妙にもやもやさせながら、追滝自身は何事もなかったかのように話を続ける。

「まあ、いいの。何でもない。もし待ってたら、って思ったただけだから。……それはそうとして、古館さんって、絵とか上手かな？」

「絵？ 絵は……たぶん、僕と同じか、僕より上手いか、そのくらいだと思うけど？ 僕の妹のお絵かきに時々付き合ってくれたよ」

「そっか。じゃあ古館さんにも手伝ってもらえばよかったかも」

一人、何か考えでもあるかのように呟く追滝。

さっきからやたら美奈のことに拘っているけど、どうしたんだろ
うか。

「でも美奈なら力仕事の方がよっぽど役に立つと思うけど。知ってる？ 美奈って更衣室のベンチ片手で投げられるんだよ。片手だけ？ この板なら一気に5枚くらい一人で持ってこられそうだよ」

「そ……そんなことは……」

すると、僕の言ったことに対し、珍しく追滝が言い淀んだ。

よく見れば刷毛を動かす手を止め、その表情も心なしに焦っているように感じる。

何だ？ 僕変なこと言った？

それとも、5枚じゃなくて10枚くらいは持てるんじゃないかって？

「どうかしたの？」

「ん……稲橋君、さつき私は男女差別がどうとか偉そうに言ったけど、ごめんね、ええっと、あのね、ほら、古舘さんも女の子なんだから、力じゃ稲橋君に敵わないんじゃないかな……」

目に見えてわたわたしているわけじゃないけど、これだけ言葉を右往左往させるとは、追滝にしては本当に珍しい慌てっぷりだ。

自分で言ったことを撤回するほどだし。

大体さ。大体だよ？

美奈に力勝負でこの僕が勝てるわけないじゃん。言ってる恥ずかしいし悔しいけどもそれが事実。

僕が美奈に勝てるバトルなんてどれくらいあるか……せいぜい舌戦くらいのもだろう。

いい加減不思議に思えてきたので、どうかしたの？ ともう一度、今度は声に出さずに目で聞いてみる。

そうしたら、追滝は一瞬だけ表情を強張らせた。

「……」

観念したように一度目を閉じ、目を開けてその目で後ろを振り向くように僕を促してくる。

不思議に思う気持ちは消えぬまま、促される通りに後ろを向くと、今の話題の張本人が立っていた。

「……」

「……」

僕なんか1発で何も吹っ飛ばせる拳を握って、美奈は、教室の入り口に突っ立っていたのだった。

9 - 2 そんな顔しないで

「……」

「……」

帰り道は無言だった。

「……」

「……」

僕と美奈と二人、決してケンカをしているわけでもない、一応普段と同じと言える状態……ではあるのだが、今は影法師が並んで歩いているかのようにずっと無言だった。

学校を出てから今に至るまでずっと黙ってるんだよね。

ペンキで看板を塗る作業は、背景を塗り潰したところで一旦やめた。文字とかを塗るには背景は乾いていた方がやりやすいだろうとの追滝の意見だった。それから、乾かすにしても、陽がよく照っているうちに乾かす方がいらしいとのこと、塗料の知識なんかない僕は素直にそれに従った。

なので、背景だけ塗った看板を（今度は追滝と美奈にも手伝ってもらって3人で）運び出し、外の日当たりのいい場所に無理矢理スペースを作ってもらって、安置した。

邪魔にならない場所というのは軒並み取られているから、一畳分

のスペースとはいえ見つけるのに苦労したけど、何とか看板をねじ込んで、念の為に立てる坊主を近くに置いて、それで作業は明日へ持ち越し今日は解散になったわけだ。

後始末にもちよつとかかったけど。

うん。

……………。

「……………」

「……………」

…………… ああ、そうそう、解散といっても明日まで何もしくなくていいというわけじゃない。

今の僕は、両手に大きなダンボール箱を抱えている。この箱の中に入っているのは、立て看板メニューとして使う用の板だ。こんなものにまでペンキで色々書いていたら流石に骨が折れるから、メニュー自体は厚紙に書いて板に貼るといふ形にするみたいだけど、その厚紙の方は追滝が担当してくれた。

だから僕と美奈の仕事は、このダンボール箱に入った何枚かの板を組み合わせて、ときどき洒落た専門レストランとかの前に置いてあるような看板の形を作ることだ。これはまあ、ちゃちゃっと終えられるんじゃないかと思う。板をAの形で固定すればいいだけだし。

僕らは『屋台を作る』ということに関連した分野を担当しているが、ハンバーガー&ホットドッグ店を出すにはもちろん屋台を作るだけでは足りないし、料理担当、宣伝担当、接客担当、他のみんな

もそれぞれ各自の作業を頑張ってくれているのだ。

……まあぶっちゃけると僕も美奈も本来は接客担当なんだけどね。
うん。

……。

「……」

「……」

……さて、そろそろ一人語りをする話題もなくなつて、この沈黙が辛いものになつてくる頃合いなんだけど、どうしようかな。

ちらりと美奈の方を窺つたが、美奈は気付かないのか、気付かないフリを決め込んでいるのかのどっちかだった。要するに無反応つてことだ。

んー……本当にどうしよう……。

僕はダンボール箱を抱えて歩きながら、空を仰ぐ。

この沈黙の気まずさは、僕が勝手に醸し出しているだけなのかもしれない。

もともと美奈が自分から何か話し出すことはそうそうないわけだし、普段美奈を相手にするときはよく喋っている僕が黙つたままから、勝手にこんな気分になっているのかもしれない。

しかし、あの軽口。

美奈ならこんな板は5枚くらい一気に持っていけるんじゃないかみたいなことを言つて、それが本人に聞かれちゃったわけだが、そのことが気まずいんじゃない。

それを聞いたと思われる美奈の表情が、一瞬すつと沈んでいたから、それが……。

一瞬のことだったから、追滝は気付いていなかったと思う。でも僕は見逃さなかつたし、僕らの関係上、見逃せなかつた。

あの程度の軽口なら今まで何度も言ってきたし、それから美奈はもうそんな素振りは見せなかつたが、僕はもう気になって気になつて仕方がなくて、それでこの空気を作り出してしまったのだ。

つまり原因は全部僕にある。

僕の言葉で美奈の表情を沈ませたんだから、僕は謝らないといけないと思うのだが、美奈があまりにもすぐに普通に戻つたし、今までどんな風にからかつてもあんな表情をすることはなかつたから、正直僕の見間違いだつたのではないかとも思つたのだ。

分かりやすく怒つて手を上げてくるならいつもの美奈だつた。

「……ねえ、美奈」

意を決して声をかけてみると、

「なに」

一人で色々と気まづくなつて考えていたのが馬鹿みたいなほど即座に美奈の声が返つてきた。

だが、……………切り出しにくい話題だなあ。
何で僕にああ言われて表情沈ませてたの？ とは聞けないよ。

声をかけたはいいものの、続く話が見つからずに困りつつ言葉を探していた僕だったが、意外にも、美奈はそんな僕よりも先に言葉を続けた。

「……………それ、持ってあげようか」

「はっ？」

突然の申し出に目を瞪る僕に、美奈は僕の抱えているダンボール箱を指さした。

それというのはこのダンボール箱で、つまり私が持ってあげるといふ額面通りの意味だろう。

……………そんなことを言ってくれたのは、僕がさっきからちんたら歩いているから、だろうか。

「いやでも、これ重いよ？ 何枚も板入ってるし」

「平気。私は更衣室のベンチ片手で持ち上げるくらいの怪力だから」

「……………」

うわあ、と声を上げかけたところを、僕はすんでのところで押さえつけて留めた。

……………やっぱり、根に持っていていらっしやっただけ……。

美奈の声がいつにもまして硬い。

……そうだよなあ。見間違いじゃなかったんだなあ。

ということは間違いなく、美奈は僕のあの発言によってあんな表情をしたということになる。何で表情沈ませたかはともかく、もうこれは、謝らないわけにいかない。

「……ごめん、美奈……あんなこと言って。傷付いた？」

「別に」

超が付くほどそっけない美奈の返事。

「傷付いてない」

「……でもさ。顔暗くしたよね、美奈」

「……それは」

何かを言いかけて、美奈は途中で言葉を飲み込んだようだった。

口調から感じ取る限り、美奈の「別に傷付いてない」というのはあながち嘘ではなさそうなのだが、それでは、何であんな表情を見せたのかが分からない。

こんな時、人の心中を読み取れる作利川が羨ましいよ。

今から数秒間だけでいいから、そのスキルを僕に貸してほしい。

僕が黙って待っていても美奈はもう何も続けようとしないので、

僕はとりあえず、美奈の申し出に対する返事をした。

「じゃああの、話戻すけど、女の子に荷物運びさせるわけにはいかないから僕が持つてるよ」

「……………」

「聞いてる？」

「……………聞いてた。あつそ」

僕は遠慮して　それに自然と遠慮しなければならぬ失点もあつて…………というかどのみち自分より美奈に多くの荷物を持たせたりすることは例えどの並行世界の僕でもしなくとも思いつけども辞退したのだが、それを聞いた美奈は「あつそ」の一言で済ませた。

これも普段なら気にならないような台詞だが、今の僕は後ろめたさで胸がちくちくする。

重ねて謝ろうか、でもそんなことしたら美奈は余計気分悪くしそうだし、と次のアクションについて悩んでいたところ、またも美奈は自分から僕に話を振ってきた。

「悠揮、腕相撲って何回したことがある？」

「うでずもつ？」

何の脈絡もない話に、僕は怪訝な声を上げずにはいらなかったが、美奈に睨まれる前に急いで続きを紡ぐ。

「そんな、今までやった腕相撲の回数なんか覚えてないよ」

「そうじゃない。私と」

「はあ……？ 小学生の時に2〜3回やって遊んだ程度でしょ？」

言つて、今までやった腕相撲の回数を覚えていない割に、小学生の時におよそ何回くらい美奈と腕相撲したかは覚えている自分自身に、僕は我ながらびっくりした。

何だこの記憶の優先順位。

そしてまあ回数そのものが何回であるかはそこまで重要でもなかったのだろう、美奈は軽く頷いて、ぼそりと付け加えるようにして言った。

「私は悠揮に勝ったことない」

「え？ そうだっけ？」

小学生とはいえ、既に僕なんか腕相撲を通り越して組み伏せられるほどの力量差があったんじゃないかと思つたのだが、美奈ははっきりと頷いて肯定した。

それを覚えている美奈の記憶の優先順位も何なんだ。

「へえ……てつきり美奈に負けっぱなしなのかと……。で、それがどうしたの？」

何の気なしに聞くと、美奈は少しの間だけ言葉を詰まらせた。

「……だから、私はそれが悔しくて、力持ちになりたかった」

けれども、美奈は即座に言葉を見つけて言い切ってみせたようだった。

……ってちよつと待て、その言い草だと、美奈が今みたいな馬鹿力を発揮するまでに至った要因は、大元を辿れば僕にあるってことか！？

それって自分で自分をボコボコにする機械を自ら開発したみたいなものじゃないか！

凹みかけた僕だが、今は状況が悪かったので我慢した。

告げられた言葉は、裏に意味がありそうなオーラをばんばん辺りに放出している。

が、生憎と僕にはその意味までは分からなかった。ここで責任転嫁みたいなことを言うのは僕も悪いとは思うが、美奈はトークが下手なのだ。何が言いたいんだろう。

「そんで、望み通り力持ちになったよね、美奈は。もう腕相撲するのも恐いくらい」

話を先へ進めようと、僕は口を挟む。ついでに言う後半は紛れもない本心だった。

だって下手したらコンクリートとも渡り合えるような腕力を持ってるんだよ？ これを相手にノリノリで腕相撲をやるつという気分にはちよつとならないでしょう。

……と、ここで、僕ははたと思い当たる。
もしかして、美奈の顔を曇らせた理由はそれだろうか。

僕が無責任に美奈が力持ちであることを揶揄したから、ということか。

今まで美奈は考えたこともなかったのだろうけど、一般的な女の子とはあまりにもかけ離れた体力というのは、コンプレックスになりうる。そして美奈はそれを意識するようになったということだろうか。

だとしたら、僕は最低もいいとこなことを言ったわけだ。

これは一にも二にも謝ろうと、僕が口を開きかけたとき、丁度のタイミングで美奈が口を開いた。

「……それで、なったのはいいんだけど」

「……」

……いいのかよ。

あつれえ？ と僕は首を捻る。

ここまで僕を申し訳ない気持ちにさせておいて、その救い方は何ですか。

しかし、また元通りに真相の分からない状態になってしまった以上、僕は何も言わずに美奈の言葉を待った。

美奈はしばらく言い出しづらそうに逡巡してから、最後に何故か、僕をちらりと見た。

「……板は、悠揮が一人で運んだから……」

「うん、まあ、運んだね」

それが何、と聞く前に、美奈は続ける。

「私は何もしてなくて」

最後の台詞、美奈にしては随分ときっぱりした物言いだっただが、僕はそれでやっと察した。

察したというか、解った。

美奈は自分の体力がどうのなんかでいちいち律儀に表情を暗くしていたんじゃない。

自分が役に立たなかったことを気に病んで、それであるとき、顔を曇らせたんだろう。

落ち着いて考えたらそういう奴だよ美奈は。そもそもことは僕だけじゃなくて、追滝にも絡んでいたんだ。同じ作業だったんだから。僕が勝手に、美奈なら力仕事のときにいてくれたら、みたいなことを言ったから、美奈は余計な気を遣って申し訳なく思ってあんな顔をしたんだ。

もともと美奈がやらなきゃいけない仕事じゃないってことなんて、完全に忘れてるんだろうな。

僕は日々素に近い美奈に接しているから意識の外にやりがちになるが、美奈は人にはそういう、異常とも言えるくらいの気回しと遠慮をする。

だからだ。……美奈のトークは言葉足らずでやっぱり分かりにく

くて何だか遠回りをしていたが、言いたいことは分かった。美奈はあくまで自分に対して暗い顔をしたのだ。

それと。

今までの僕は、今までの美奈のこんな一瞬の表情に、きっと気付いていなかった。

今までもこんなシーン、何度もあったわけだし、美奈はその度に一瞬だけ分かりやすい表情をしたんじゃないだろうか。

だって今回したんだから。

……はあ……、みんなから鈍い呼ばわりされるわけだな。

作利川に、美奈のことよく見てると諭される理由もそつだ。

僕はなんて恥ずかしいんだろう。

とどめに今回、美奈にあんな表情をさせたのは、やっぱり僕の一言が原因なんだ。

「はあ……」

僕がついつい、溜息を声に出すと、美奈は不思議そうな横目で僕を見た。

長つたらしく考え事をしていた間に、結構な距離を歩いてきている。少しだけ重く感じていたダンボール箱の重さも忘れていたほどだった。

「……美奈、ごめん」

「は？」

素直な口調を心がけたつもりだが、それが僕にしては元氣のない声に聞こえたのだろう、美奈は露骨に怪訝な顔になった。あれだけ考え事で時間を空けたのだし、ごめんの意味はたぶん分かっている。

もう、それでいいや。

僕はそれで口を閉ざして歩き続けたが、少しばかり頑なに前を向き続けたせいで、美奈の目が段々鋭くなっていくことに気づけなかった。

「……もしかして」

美奈の、ひつくい声で僕はそちらを向く。

「えっ？　ね、ちょっと美奈、いきなり雰囲気恐くなってますよ？」

「私のことで何か、した？」

僕の質問は華麗にひらりと避け、美奈は恐ろしいゆっくり低音で聞いてきた。

僕は知らず舌が震えているのを感じた。

やばい、しまった。美奈は誤解を起こしかけている。

「な、何かってどういうこと？」

「私に謝らなきゃいけないようなこと」

「……」

ここで黙ってしまったのは、稲橋悠揮一生の不覚だった。何せ、謝らなきゃいけないようなことは現実にあるのだ。今美奈が視線を鋭くして想像しているようなこととは違うとしても。

だから僕はつい、「あー……」と納得の混じった感情を抱いてしまい、それが美奈の疑惑を確信に変えてしまったようだった。

「何かしたんだ」

「してなっ、してません」

思わず嚙んで敬語に言い間違えた。

それくらい美奈が問い詰めるモード入っている。

……もう嫌だ。追滝の追い詰めるモードとか美奈の問い詰めるモードとか！

恐いだけじゃないかっつーの！

心の中だけで叫んでも、テレパシーじゃないからそれが相手側に届くことはない。

気付けば、じりっ、と美奈が一步僕の方に足を踏み出してきた。

背の高さで言えば僕の方が若干高いのに、端から見れば美奈の身長が何倍かに膨れ上がっているように錯覚したんじゃないかと思う。当事者の僕ならなおさらだ。

美奈は低い、ひくーい声で端的に言う。

「言え」

「ちょっと待って、誤解を解いて！ 美奈が考えてるようなこと、ほら、美奈の分のお菓子食べたとかそういう話じゃないんだって！」

「……」

無言でにじり寄る美奈。無言プレッシャー方面に路線を変更したらしい。

「待つ、ストップ！ 僕この通り両手塞がってますから、こっち寄ってこないでください！ 美奈、待ってって、両手が塞がってる人に迫るなんて変態行為以外の何物でもな」

バゴンッ！

「いってえ！」

美奈の上段蹴りが、見事にダンボール箱には当たらない軌道で僕の上半身へヒットした音だった。

分かりやすく怒って手を上げてくるからいつもの美奈だった。

9 - 3 準備万端？

文化祭前日。

今日だけは運動部が軒並み引き払った校庭で、僕らは借り物のシンプルなテントに手作りの看板や広告をぶら下げ、長机を並べて、屋台の形を作ってみた。

校庭にテントを出す他のクラスやグループも会場設営を進める中、一足先に屋台を組み上げた2 - 1の僕らは、完成品を見上げて感嘆の息を吐く。

明日はこの屋台を文化祭最前線として戦うのだ。

「おー……」

「なかなかだねー」

そんな声がお互いにこぼれる。

これだけのものを自分たちの手で形にするということは、この歳で何度も経験するようなことじゃないし、僕としてもちよっぴり感慨深いものがあった。

ま、上出来なのは追滝の采配の賜物なんだろうけど。

そう思って振り向くと、後ろにいた追滝は小さく笑う。

僕が思ったことを察して、ありがと、という意味で笑ったように見えた。それから、やったね、という意味でも。

今この場にいる、2・1の中でも特に屋台作りに尽力した10人
ちよつとのクラスメイトは皆、一様に達成感溢れる顔をしていた。

と、そこで。

「よし！ それじゃあ打ち上げだ！」

……ああ、何かアホなこと言ってるやつがいる。
まだ文化祭が終わったわけじゃないのに。

僕は追滝と目を合わせてめいめい苦笑顔で目を閉じ、今までは序
章でこれから本編に突入するんだろ？が何で今からエピソードなん
だよ……と思いつながら声のした方に顔を向けてみると、案の定とい
うか、アホなことを言った人である作利川が、拳を突き上げた妙な
ポーズでいたのだった。

……もちろん分かってたよ。

こんな時にこんな変なテンションを持つてくるのは作利川しかい
ない。

基本は屋台係ではない彼女がここにいる理由は、ひとえに、看板
を持ち上げて設置したりした今回の作業には欠かせなかった力仕事
要員としてである。

女子なのに。

ていうかこれは突っ込んであげるべきなのかな、そのポーズどう
見ても自由の女神だよ。

「おい、作利川」

そこで、僕が指摘するより先に、総監督の学級委員である新井君が、明らかな皮肉を投げる。

「これから最後の計画詰めなんだから、打ち上がりたい人は一人で打ち上がってください」

それに反応して、作利川はぶーたれた。

「んだよー。まったく、ノリ悪いなあ学級委員。打ち上げはみんなでやらないと意味ないでしょう。明日に向けて士気を高める建前でさ」

建前って自分で言っちゃってるし。

対する新井君は、軽くうんうんと頷いてから言った。

「そうだな、じゃあ明日に向けての計画と役割疎通を全部俺の代わりに作利川がやってくれるんなら打ち上げやっても」

「よしみんな、気を抜かずに明日の最終計画に移ろうか！」

……そして、あっさりと手のひらを返した作利川であった。

この一連のやりとりは、もはや定番のギャグみたいなものだ。従って誰も真に受けたりせず、みんなして笑っていた。

「……」

……美奈以外はね。

近くにいたのでちらつと見てみたが、不機嫌でもなければくすりと笑っていない。この人は本当に笑わないな。

「……」

すつと視線が合いそうになって慌てて戻すと、「いやいや作利川、遠慮しないでやってくれないんだぜ。俺だつてやらなくていいならこんな面倒なことしたくないし。楽したい」なんて本音を漏らした新井君が芽寺さんに無言の矯正を食らっているところだった。

「それじゃあ明日の成功を祈って！」

新井君が最後にそう締めて、残っていただけのクラスメイトを全員集めた文化祭前日の最終計画詰めは終わった。

明日も打ち合わせはするけど、朝にそれほど時間はないのだから、みんなで打ち合わせができるのは実質これが最後である。

みんなそれぞれ、自分の与えられた役割を噛み締めて、闘志を漲らせているところだろう。

僕も、最終確認した店番（つまり接客）担当の時間割を手に、やる気というか、高揚感というか、そんな感じの気分が心に湧いて出ているのを感じていた。

その横で。

「……………はぁ……………」

同じく、クラスの半数ほどが割り振られた店番担当の時間割を握って、沈鬱な溜息をついているのは、美奈だ。

こちらはやる気が湧くどころか、精気まで担当時間割という名の紙に吸い取られているようだった。

もうね、すごい落ち込んでる。

休日だったはずの日に仕事が入ってしまった父さん並みの落ち込みっぷり。

「美奈、大丈夫？」

「大丈夫なわけない」

「ですよー」。

そっと声をかけてみれば、切ない声音で返ってきた。

美奈の落ち込みは、本来、美奈は料理・運搬担当を希望していたのに、どうしてか接客担当になってしまったことに原因がある。

人との対話を苦手とする無愛想な美奈は、接客とか宣伝客引きという、必ず人の注目を浴びる担当には到底不釣り合いだと自他共に分かっていた……はずなのだが、何故か、接客担当の役目を引き受ける羽目になってしまったのだ。

これは学級委員の新井君の頭をも悩ませてしまったようで、最終的に美奈の扱いに一番慣れている（ということにされた）僕を美奈と同じ時間帯に入れることで何とかフォローしようという形になった。

まあ、ハンバーガーとホットドッグの二種を売るといっても屋台は一つなんだし、お客さんの相手は僕が積極的にすればそこまでの問題にはならないと思うんだけど……。

「……………はあ……………」

……………美奈は店員として人前に出ることからもう気後れするらしい。

「元気出しなよ美奈、溜息ばかり吐いてると辛気臭いよ」

「……………うっさい」

「うっさくない。ほら、話すのは僕がやるからさ、美奈はにっこり笑っていらっしやいませーくらいは言えるようになってくれないと」

「……………気持ち悪い……………」

それは僕の言動が気持ち悪いの！？ それともにつこり笑顔でいらっしやいませを言ってる自分の想像図が気持ち悪いの！？ ねえ！

確かに、につこり笑顔の美奈というのも想像したら気持ち悪いの対象に入りそうだけでもさあ。

はあ、ともう一度溜息を吐いた美奈は、くしゃっと手の中の担当時間割を握って皺しわにした。

「文化祭ずる休みしたい……」

「うわ、美奈らしからぬ発言だなそれ」

いつもなら僕がずる休みしたいとか言つと脳天陥没させにくるくせに。

そして動けなくなったところを学校まで引き摺っていくんだよね。

ただ、それくらい美奈が接客担当に気分が乗らないことは僕はとつくに分かっていた。

それに口で何と言おうと、美奈が絶対に担当をサボったりしないことも。

例え何らかのアクシデントのせいで自分一人だけで接客をするこ
とになっても、美奈なりに精一杯訥々と応対するに違いないのだ。

……うん、そんなテンパった美奈を見たい気もちよーっただけす
るけど。

なんて他人事感に満ちた考えを抱いていたら。

「やつほーお二人さん」

「なんか、見たところモチベーションの差が激しいね……」

と、そんなことを言いながら、僕らとは少し色の違う紙を持った作利川と古谷が僕らを見つけて近付いてきた。

美奈が暗雲たる心情をもって突っ伏している場所に登場するには不釣り合いな陽気さだ。

たぶん、僕と同じで二人とも文化祭に向けてやる気が漲る肌の間だろう。

そしてそれが普通じゃないかと思うんだけど……。

まったく、美奈には僕らからやる気を分けてあげたいよ。

底辺テンションでリアクションのない美奈の分まで、僕は軽く手を振って合図を返す。

「いったい古館さんはどうしちゃったの？」

美奈が彼女にしては珍しい、くたつとした姿勢でいるのを見て、古谷が曖昧に笑いながら訊ねてきた。

作利川も古谷も、二人ともいかにも接客向きの性格をしているから接客担当はもちろんのこと、ついでに広報も、半分ずつ受け持つ形で引き受けている。

そんな、いわば天性の第三次産業従事者である二人に、美奈は何とも言えない視線を向けた。

「……………」

「んん？ 美奈、どうしたのさ」

早速その視線に気付くのは作利川。

一見すると人の好い笑みを浮かべながら美奈に問いかけた。

ただ、この笑みは……あれだな。

明らかに作利川は美奈が何で落ち込んでいるか分かっている。

だってさ、作利川つてば一瞬ちらつと美奈の持っている紙を見て、次に自分の持っている紙を見て、それから笑ったんだもん。

美奈が握っているのは、もちろん担当時間割。

絶対だ。そうだ。

訂正しよう。人の好い笑みじゃなくて、人の悪い笑みだった。

「……………どうもしてないよ」

美奈もそんな作利川の表情にしつかり気付いているんだろう、無難に流して反対を向く。

唯一分かっているのは、さっき素直に訊ねてきた古谷だ。

「どうもしてないようには見えないよ？ 古館さん、いつも姿勢いいの？」

「……………」

改めて話しかけてくる古谷。

だが美奈は、むーっ……と黙ったまま何も応えない。

「ねえ、古館さん、何か嫌なことでもあったの？」

「……………」

話しかけているのが僕だったら、そろそろここでうるさい黙れの一発ぐらいくる場面なのだが、相手は古谷ということで美奈も遠慮して黙りを貫いていた。

遠慮っていうのも変な言い方だけど……実際そうだからなあ。

この遠慮を取っ払うと拳で応えてくれるようになってしまっわけ
で。

古谷は何にも応えてくれない美奈に、とても分かりやすく困った
顔をする。

「どうしたの、古館さんってばあ。もしかして生理前でイライラ
し」

「古谷あー！」

「そこでストップ！」

何かとんでもないことを言いかけた古谷の言葉を、僕と作
利川は同時に声を上げて掻き消した。

急に大声を出した僕らに、古谷はびっくりして目をぱちくりさせ
る。

ふう……。
危ない危ない。

作利川と目配せを交わして、僕は額の汗を拭う動作をした。

まったくもう、男子の前で軽々しく生理の話とか口に出すなよ。
そりゃ男女共に気にしない人だって大勢いるだろうけどさ……。
ああ、こっちが驚いた。

「……えと」

自身の言葉を掻き消されてしまった古谷は、ほとんど困り果てたように僕を見る。

その目は……何とか、見事なまでの小動物だった。
古谷には悪いが、やるべきことが分からなくて困って飼い主を見上げる小型ペットみたいな印象。

本人に言うとは失礼かもしれないので感じたことは言わないでおくとして、僕は先程からそっぽを向きっぱなしの美奈をちらりと見て言った。

「あのね古谷、美奈は基本的にいつもイライラしてるから気にしないで大丈夫」

ぐにっ。

……見えない角度で、足を踏まれた。間違いなく美奈だ。

「……そ」

そうなのかなあ、と微妙な返事の古谷。

まあその気持ちは分からなくもない。いつもイライラしているから大丈夫だよと言われて、その何が大丈夫なんだよと思う気持ちは分からなくもないよ。

ていうかよく分かります。

でだ。

しかし、不自然に話を逸らして気まで逸れちゃうほど古谷は簡単な人ではない。最終的に僕は、美奈が美奈らしくない脱力ぶりで落ち込んでいる理由をこっそりトーンで二人（主に古谷）に向けて暴露した。

「美奈が落ち込んでるのは接客担当だからだよ」

「えっ？ どういうこと？」

「つまり、慣れない接客担当になっちゃって、自分がお客さんの前に立って注文を聞いてお金のやり取りをするだけのことか不安で仕方ないんだよ。それで落ち込んでんの」

言った瞬間。

ぐりぐりっ。

（痛っ！）

美奈は僕がバラしたことがご立腹のようで、その制裁に、作利川

と古谷には気付かれないような位置関係で、踵で僕の足先をぐりぐり磨り潰すように踏んできた。

これが痛いなのって、ホントに足の先の方が粉末加工されたんじゃないかというくらい痛い。

「……………」

今は地味に効いた。僕ちょっと涙目になりかけているかもしれない。

上履きの踵がこんなに高い攻撃力を持っているなんて初めて知ったよ。

足先の痛みを表情に出さないよう努力する僕の前で、古谷は納得したように頷いた。

「そっかあ、古館さんは物静かなタイプだもんね」

「……………」

物静かなタイプ、ねえ。

美奈は物騒なタイプじゃないかな？ 今だってこの人、僕の足先を踏みしだいたよ。

まあ、確かにお喋りじゃないから物静かと言っても間違いじゃないけど……………ものは言い様だな。

古館さんは物静かなタイプだもんね、の一文だけ抜き取れば、誰も茶髪で凄まじい戦闘力を持つ美奈を思い浮かべることなんてできないだろう。

「なるほど、つまり美奈は、店働き慣れしてないから不安なんだ」

そこで、今まで人の悪い笑みを浮かべていただけだった作利川が、唐突に言い出した。

みんなして作利川を見ると、いつの間にか人の悪い笑みは引っ込んでいる。代わりに、思案を巡らせたときのような、難しい表情のあとが少しだけ残っていた。

……ひよつとして、しばらく黙っていたのは、何か考えていたからなのかな。

なんて思いながら作利川を見ていたら、作利川は指を一本立てて続ける。

「それじゃあ接客担当になった美奈に、私からひとつ提案があるんだけど」

「……なに？」

「店番やってみる？」

さらっとそんな提案をして、作利川は惚れ惚れするほど上手に片目を瞑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834j/>

幼馴染みと約束を

2011年10月1日13時38分発行